トランマンゼロ The Another Tale LYRICAL FORCE ZERO

UFZK

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウルトラマンゼロ The Another Tale L
YRICAL FORCE ZERO

【Nコード】

N0918W

【作者名】

UFZK

【あらすじ】

再び復活したヤプールの手によって、ウルトラマンゼロら若き巨人たちによって結成された宇宙警備チーム『ウルティメイトフォースゼロ』の面々は未知の世界に飛ばされた。

そして、海鳴という日本のとある都市で、巨人たちと少女たちは出会う。

『魔法』という強大な力が存在するその世界で、彼ら、彼女らは何を見るのか？

これは…ありえたかもしれない…巨人たちと少女たちの…もう一つの物語"Another tale"……

LYRICAL FORCE ZERO - リリカルフォースゼロ
-、始まります。

作者の処女作です。

なぜ最初の作品がウルトラマンとリリカルなのはクロスオーバーなのか・・・
どっちも好きだからです。

英語だけだどつつつきにくいと思って、またタイトル変更しました
m (——) m。
タイトルこそウルトラマンゼロと付いてますが、どちらかといえは
主役複数の群像劇よりです。

第一部完結しました。

地道に更新しつつ、気が付けばPV4万アクセス突破……万越えさせて頂きありがとうございます。

Prologue へ To the New World へ

プロローグへ新たな次元へへ

どこまでも…どこまでも…どこまでも…

本当は果てがあるはずなのに、それが無いと錯覚させられてしま
うくらい……

星々が輝きを放ちながら、点在している広大な宇宙。

その宇宙の中の、とある無人の惑星にで…

一つの激しい戦いが、行われていた。

巨人たちと、異形の怪物との死闘だ。

地球の人々とも馴染みは深い、巨人族の戦士。

『ウルトラマン』

その中で、特に偉大な称号を与えられた歴戦の勇者たち。

『ウルトラ兄弟』

ウルトラ兄弟の一人、ウルトラセブンの息子である若きウルトラ戦
士。

ウルトラマンゼロ。

彼が別宇宙で出会い、絆を育んだ仲間たち。

鏡の騎士、

ミラーナイト。

炎の戦士。

グレンファイヤー。

鋼鉄の武人。

ジャンボット。

彼ら4人で結成されたのが若き精鋭チーム。

ウルティメイトフォースゼロ。

そんな勇猛な戦士たちと激闘を繰り広げているのは…

『おのれ…ウルトラ兄弟…そして…ウルティメイトフォースゼロ』

ウルトラマンたちの前に何度も、現れ、立ちはだかる異次元人。ヤプールの怨念が作りだした。

かつては、地球、日本の都市の一つ、神戸を恐怖のどん底に突き落とした最強の超獣で再び復活した。

Uキラーザウルスだ。

巨人たちと、彼らが小さく見えてしまうほどの巨体を持つ超獣との死闘。

その戦況は、次第に巨人側に傾きつつあった。

「シルバアアア クロオオス！」

ミラーナイトから、いくつもの十文字の光刃が放たれ。

「燃えるマグマのファイヤアアアアアア フラアアアアツシュ

！」

グレンファイヤーの炎の如意棒、ファイヤースティックが火を噴き。

「必殺！風車」

ジャンボットが巨大斧、バトルアックスで嵐のように舞い。

さらに…

「ゼロ！合体光線だ！」

「いつでもいいぜ親父！！」

父ウルトラセブンの掛け声を合図に。

長兄ゾフィーの、
M87光線が。

ウルトラマンの、
「ダアア！」
スペシウム光線が。

ウルトラセブンの、
「ジュア！」
ワイドショットが。

ウルトラマンジャックの、
「ヘエア！」
シネラマショットが。

ウルトラマンAの、
メタルウム光線が。

ウルトラマンタロウの。
「ストリウム光線！」が。

ゼロの師である。
レオとアストラ兄弟の合体技。
ウルトラダブルフラッシャーが。

ウルトラマン80の、
サクシウム光線が。

ウルトラマンメビウスの、

「セエア！」
メビウムシユートが。

ウルトラマンヒカリの、
ナイトシユートが。

そしてウルトラマンゼロが、
「くらいやがれええええー！！！！」
ゼロツインシユートを発射。

鮮やかな光線群が一つとなり。

極太の光が、Uキラーザウルスに大ダメージを与えた。

「お前ら！行くぜ！」

「はい！」

「ああ！」

「おう！」

そしてゼロは、仲間とともに、エネルギーを集め。

4人の戦士は、光の球となった。

そのままUキラーザウルスに突撃。

4つの流星たちは一つに纏まり。

4人の力が合わさった究極技。

『ウルティメイトフォースゼロアタック』が炸裂。

流星の体当たりを受けた超獣は、断末魔を上げながら青い光に包まれていくが、ヤプールは…

「貴様らだけでも……道連れにしてやる！」

その捨て台詞が吐かれた瞬間、急激に超獣の光が強まり、周辺の

空間が歪んでいく。

「不味い！4人とも早く離れろ！」

ゾフィーの警告も空しく。

時空を超えて巡り会った若き4人の戦士たちは、視界が真っ白に染まるほどの閃光に巻き込まれ、光の中へと消えていった。

物語は……それから11年後。

ウルトラマンが存在する世界とは、別の次元に平行して存在する地球から………始まる。

Prologue ～To the New World～（後書き）

UFZKです。

のつけから、クライマックス（笑）

ご存じの方もいると思いますが、プロローグは児童雑誌で掲載されていた

「ウルティメイトフォースゼロ・アナザースペースアドベンチャー」を参考にしていきます。

ゼロたちが、またしても復活したヤプールと戦うストーリーと、決めてになった必殺技は元と同じですが、ウルトラ兄弟との共闘はオリジナルです。

なんでウルトラ兄弟を全員出したのだったの？

もうどうせならみんな出しちゃえ！なんていう単純な発想です（笑）。

合体光線もしっかり…

あと公式でゼロはいつでもウルティメイトゼロになれるドチート仕様ですが、本作では条件付きです。

ノアも自分のドチートな力を分け与えるんならさ、ちゃんと制約をつけようよ…

その分登場した時は、ガイア・スプリームヴァージョン並みの負けなしな活躍をさせます。

あとリリナのキャラクターの年齢などの設定も変更しています。設定変更反対！な方には申し訳ありませんがご了承下さい。

ではまた。

Episode 1 - ENCOUNTER ～邂逅～ (前書き)

UFZKです。

舞台はいきなり海鳴へ…

色々飛ばしすぎた…

9/20あとまたサブタイ変えてしまった。

Episode 1 - ENCOUNTER（邂逅）

とある世界からは、第97管理外世界と呼称される宇宙のとある惑星。

私たちには『地球』と呼んだ方が馴染みがあるだろう。

その星の極東に位置する日本という国のとある地方都市のとあるビルの屋上に、その『異世界』から来た人影が二つあった。

「第97管理外世界、現地名称地球、国名日本」

一人はまだあどけない、10〜11歳ほどの少女

金色の髪をツインテールにまとめ、ともすれば水着に見えそうな袖なしの黒い着衣とピンクのミニスカートの上に魔法使いを連想させる黒いマントを纏っている。その右手に握っているのは、魔法の杖だろう。

ただ大方の人間がイメージするのは違い、それは円形の宝石らしものが埋め込まれた、持ち手が彼女の背に匹敵するほどの長さを持った

漆黒の斧だった。

もう一人の人物はオレンジがかった長髪の10代半ばの少女。

だが彼女には普通の人間なら見られない特徴がある。

犬を連想させる耳と尻尾と犬歯、そして額には赤く丸い光沢が彼女にはあった。

「本当にここなんだね？フェイト、『あの人』が欲しいものがあるのは……」

獣と人が交わった女性がフェイトと呼ばれた少女に尋ねる。

「うん、そうだねアルフ……」

アルフと呼ばれた女性からの言葉に応じた直後、何かを感じ、山の方に目を向けた。

「あつちの山に一つ……っ！………魔力反応!？」

夜、それはほぼ全ての生物が明日の夜明けまで眠りにつく、静寂につつまれた時間、だがその静寂を破る者が一頭と一人いた。

一頭の方が熊だろうか？

だがその姿は明らかに日本、否地球に生息するものと異なり、10メートル近くもある体躯、黒く禍々しい表皮と長い爪と牙、怪しく光る両目そして額には蒼く輝く菱形の宝石が埋め込まれていた。

「たく………よりによってここに落ちてきやがって」

一人の方が愚痴た。

180近くある背丈、やや吊りあがった目つきと群青色の瞳、黒髪は肩辺りまで伸ばし、丁度耳当たりの高さでポニーテールでまと

め、黒いインナーの上にこげ茶色ジャケット、深い色あいのジーパンを着た少年。

目つきがやや鋭く吊り目で、ともすれば無愛想で近寄りがたい雰囲気醸し出しているが、その顔つきは「イケメン」「ハンサム」という表現では無粋と感じられるほど整われ、凜とした佇まいさえ感じられる。

やや細身ながらバランス良く鍛えられた体つきで男性だと直ぐ分かるが、顔だけ見せられれば、確実に性別が判別できないくらい、長髪が良く似合う容貌である。

『愚痴を言っても始まりません、零牙を使用しますか？』

一つ訂正する。この場にはもう一人いる。エコーがかかった成人女性の声をしたその『もう一人』が愚痴る少年に語りかける。

「まだいいぜ？リンク？、こいつ程度なら素手で充分だ」
拳をバキバキと鳴らしながら答える少年。

『了解』

異形の熊が体格に似合わぬ速さで少年に襲いかかった、普通の熊でさえ、人間よりも速いスピードとパワーを持っている。ましてやこの怪物の前では人の体は、一瞬で肉塊と肉片に果てるだろう。

だが少年はその相手の連続で繰り出される爪の攻撃を最小限の動きで回避する。

「いっつー！」

そして、カウンターの要領で放たれた手刀は、怪物の凶器の爪を粉々に砕いた。

もう一度言う。

手刀でだ。

ただならぬ威力をこめた『ただの手刀』で彼は怪物を圧倒したのである。

怪物は悲鳴をあげながらも、もう片方の爪で襲いかかるが少年は回避しながら、怪物の鳩尾に重い正拳突きをぶつける。

さらに、人間ではワイヤーを使わなければ不可能なジャンプ力で飛び上がり、空中からの回し蹴りを怪物に当てた。

それでも一度地に伏せられた怪物は、態勢を立て直し、少年を威嚇する。

「ふっ……結構やるじゃねーか……」

少年は動じることも無く、不敵に笑いながら親指で鼻をこすった。怪物が正面から突貫してきた。

少年も走り出す。

ほぼ同タイミングでジャンプする両者。

怪物は、残った爪で、少年を捉えようとするが…

「でえええええあああ!!!」

その前に少年の飛び蹴りが、相手の胸部に炸裂。

もろにくらった怪物は10メートルほど吹っ飛ばされた。

「零牙、ガンモード」

降り立った少年は左手を前に翳してそう呟くと、左腕にはめられた腕輪から、眩い青緑色にそまった光の粒子が溢れだした。

粒子は少年の周りを何周かすると、少年の右手に集まり、一瞬の発光の後に粒子はリボルバーに似ているが、地球で生産されているものより大型で無骨、銃身も長くて分厚く、シリンダーの代わりに

青く光る角が丸みを帯びた菱形の青緑色の光を照らす輝石が付けられた、単発中折れ式型の漆黒の拳銃へと姿を変えていた。

「リンク、カートリッジを」

『了解』

腕輪から、USBにも見える掌に置けるサイズの長方形型のカートリッジが出現。

それを中折れした拳銃に装填。

『カートリッジロード』

銃口を怪物に向け、構える少年。

『マグナムシユート』

『もう一人』の声と同時に少年の足元に、文字が書かれた青緑に輝く円陣が現れ、拳銃の銃口に光が球状に集まっていく。

「とどめだ…ジュエルシード封印!!」

少年は静かに、だがはつきりとそう発して、引き金を引いた。

銃口から飛び出した、光と言う名の弾丸は、正確に怪物の額に命中。止めの一撃を受けた怪物は仰向けに転倒すると同時に苦しげに声を上げると、額を中心に閃光が走った。

視界を奪う白銀の光が消えると、怪物がいたところには幼い小熊が、あわててその場から逃亡し、小熊を怪物に変えた元凶であるその宝石は、枯葉が溢れる地面に転がっていた。

「災難だったな…」

先程まで怪物にされて暴れていた小熊を案じつつ、宝石を拾う少年。

「リンク」

『了解、Internalize No.4』

宝石が拳銃を出現させた腕輪へと吸い込まれた。

『お見事です。マスター勇夜』

「どつつてことねえよ」

『ですが…並の魔導師なら、返り討ちに遭う相手でした』

「ならそいつは、一撃で俺にノックアウトされるな」

少年を褒め称える『この場にいたもう一人』である、彼の左手にはめられているリンクと呼ばれた腕輪に対し、勇夜と呼ばれた少年は謙遜しつつも皮肉げに返した。

「残りの20個も、全部ここらに落ちたのか？」

『はい、正確な位置までは把握できませんが、この『XX県海鳴市』付近一帯で間違いありません』

「まあ、バラバラに落ちてもらうよりはいいけどさ、先に来たっていうスクライアの坊主君は明日探すとして、今日はもう…」

帰るか　　と言おうとした時、彼は咄嗟に左腕を横に伸ばし、手を広げ翳した。

彼に向け稲妻を纏った光の矢が、少年を襲おうとするが、左手の掌から発生した半透明の光の壁に阻まれる。

そのまま矢は四方に拡散し消滅。

少年　　勇夜は矢が放たれた方角に、目を向けた。

そこには。

「渡してくれませんか、今あなたが手にしたものを…」

光の矢を放ったのは、あのフェイトと呼ばれた少女だった。

さっきの怪物から発する波動と、少年が拳銃越しに放った、彼女が『魔力』と称したエネルギーを察知して、ここに来たのである。アルフと呼ばれた、あの半獣半人の少女も一緒だ。

「誰だあんたら？管理局の連中……じゃねえよな」

管理局なら、この場で昔の日本の侍みたいに堂々と名乗り上げるからな。

侍と違って、あいつらの名乗りはどこか滑稽だけど。

内心そんなことを考えながら、彼は少女に問う。

「今手にした『ジュエルシールド』を、私たちに」

「へえ……それが何なのか知ってる上で、欲しがってるのか？」

「どうしてもそれが必要なんです……さもないと」

「……………もし……………嫌だ』と言ったら？」

「力づくでも奪います、バルディッシュ！」

フェイトは静かに、それでいて確かな意志の籠った真紅の瞳で少年を見据えると、バルディッシュと呼んだ杖を正眼に構え。

『サイズフォーム』

杖から発せられたエコーがかかる男性の低音の発声と共に、バルディッシュの斧の刃が15度展開し、金色の光の刃を発生させ、彼女の魔法の杖は、斧から巨大な鎌となった。

黒く染まった装飾とマントと相まって、その姿は正に死神だ。

刃を向けられた意思を持つ腕輪リンクから勇夜と呼ばれた少年も、何かを悟ったのか。

「零牙…ブレイドモード」

右手の拳銃が先程の光の粒子になり、やがてそれは、一振りの日本刀？らしき？漆黒の鞘に入った剣へと変わった。

らしきと付け加えたのは、日本人がイメージする刀と微妙に異なるからだ。

柄と呼ばれる持ち手は、彼が着用しているこげ茶色のジャケットと同じ色をした木の紋様とまるでオートマチックの拳銃の木製グリップのような手にフィットする形状を形作り、鏢と呼ばれる部分は黒色でやや太めで厚みがあり、峰のある側には見る角度によって三日月にも見える青白い光沢が埋め込まれている。

それでも、鞘に納められて今は隠れている反りの入った刃は、間違いなく刀そのものだった。

それを居合の態勢で構える、刀と同じカラーリングの衣装を着た少年。

二人は、お互いを注視し、武器を構えたまま微動だにしない。

「フェイト…気をつけて」

アルフが彼女に忠告する。

「…大丈夫」

この時の彼女たちは勝算があると踏んでいた。確かに相手から発せられる気迫と魔力は尋常じゃない。

でも相手は剣を鞘に収めたままだ。

そして、彼女　　死神のスピードをもってすれば。

瞬間、さきほどの『ジュエルシールド』と呼ばれた宝石で凶暴化した小熊の比にならないスピードでフェイトは少年に踏み込み、

相手の少年に金色の魔力の鎌の一撃を……
振るう……..
……..
はずだった。

少年を捕らえるはずだった杖はいつ抜いたか、全く視認できないほど、彼女のスピードよりのさらに速く抜刀した、青空を連想させる雲のような模様と青みがあった光を放つ彼の刀の刃で、彼女の魔

Episode 1 - ENCOUNTER ～邂逅～ (後書き)

ウルトラマンを見に来たのにこのキャラ誰？

フェイトを瞬殺！？チート過ぎるだろ！

てな方は落ち着いてください。

実は彼が『彼』です。紛らわしい表現ですがWWW
鼻こすってる時点で分かる人は分かるでしょうが…

なんかキャラ違わない？と感じた方は、この『彼』は作者なりの解
釈で成長した『彼』を描いています。

一話の時点ではまだ明かしません。

フェイトの安否含めて、気になる人は次話へGO。

Episode 2 - 零と雷光

ここは？

ふと、眼を覚ました。

最初に視界に映るのは天井。

地球での潜伏先として提供されたマンションの一室。
自分は今、そのベットに横たわっていた

でも何故…

私はあの時、『あの人』に斬りかかろうとして、バルディッシュ
じゅ…

「フェイト！」

彼女の身を案じる半獣半人の少女が、フェイトの視界に入った。

「アルフ…私…どうして…」

自分のスピードよりも速く、鞘から抜いた相手の刃で腹を切られ
たはずである。

なのに自分の手を腹においても傷がない、治癒魔法をかけられた
形跡すらない。

「バルディッシュ…」

『GET SET』

片手に握られていた、彼女の愛機の魔法の杖、バルディッシュも

激情が溢れる相手と対照的に、少年は務めて冷静さを保っていた。

「よおおくもおおおフェイトをおおおおおお!!!」

獣を連想させるほど殺気立った眼と牙と、獣の唸り声の混じった叫び声ともに再び少年へと突っ込んでいく。

とても女性が振るっているとは思えないほど、重い一撃が何度も振るわれる。

だが少年は何事でもないように、巧みに手で相手の勢いを流し、躲していく。

アルフの拳動を、目で追える余裕さえあった。

「くっそ！」

アルフは毒づいた。

先程の戦闘で彼は、ほぼ素手だけで『ジュエルシールド』と呼称された宝石によって、巨大化、凶暴化した熊を倒したのである。

相当の実力を持った手練れだということは容易に窺えたが、それでもアルフは、フェイトは負けないと確信していた。

フェイトも優秀な魔導師　魔法使いだし、何より彼女のスピードについて来られる魔導師はいない。

彼女は『魔法』が普及している世界では、右に並ぶ者はいないと断言できるほどの、スピードと機動性と、それを存分に生かせる魔力も力量も持っている。

それは確かに事実だった。

それがただの、鞘から抜いた刀の一振りだけで、あっけなく打ち碎かれた。

魔道師が、魔法を使わなかった相手に、駆逐されるという事実と

ともこ…

「少しは落ちつけ」

「何!？」

そこから一連の出来事は一瞬だった。

防御と回避に専念していた少年は、アルフの鳩尾に拳を叩きつけ、左手で彼女の右手を掴み、強烈な腕力で捻り同時に左足で相手の右膝を蹴りつけ、一連の攻撃で苦痛に歪んだアルフを背負い投げた。受け身もとれずに地面に叩きつけられるアルフ。

全身に衝撃が走る。

「頭…冷えたか？」

「てめえ！」

「ご主人さまなら無事だ」

「え？」

アルフは面喰った。

「そもそも、主に何かありゃ、こうして元気に殴り込めないだろ？
使い魔さん」

「ああ…」

殺気も、闘争本能も、頭に登っていた血の気も、一気に引いていった。

使い魔とは魔導師が死亡したあるいは寸前の動物に人工的に生み出した魂を憑依させる事で造り出した、魔導師をサポートする生命体。

パートナーである魔導師の魔力を供給されることによって生存しているため、もしそのパートナーのフェイトに何かあれば、例えば死亡するようなことがあれば、当然アルフも今頃は主と共に昇天している。

「フェイトと言ったか？今は気を失ってるだけだ」

少年の言葉が真実かどうか確かめるためにアルフはフェイトの許へ駆け寄った。

確かに全身には今付けられた『外傷』は何一つない。その前につけられた傷跡と痣を除いて…

「斬ったのはこの子の相棒 デバイス だけだぜ、ご本人から言うのもなんだが、リカバリーできるか？バルディッシュ」

『Yes . sir』

上官に対応する軍人のような口調で、バルディッシュは答え。

少年は真つ二つにされたバルディッシュの柄の切断面を付けると。

『recovery』

彼に付けられた傷は瞬時に修復され、

『モードリリース』

同時に逆三角形の掌サイズになった。

「あんだ…いつたい？」

「そつちがその気だったから、相応の返しをただただだぜ」

「じゃあ…さっきの『嫌だ』ってのは」

「『もし嫌だと言ったら』と言っただけで……『渡さない』とは一言も言っただけで、はやとちりが」

『そちらさまを煽ったことは事実ですが』

内容に反してあつげらかんと答える少年と彼のデバイスらしき腕輪に、アルフは脱力して、その場にへたりこんでしまった。

自分たちは完全に、この少年たちに踊らされていたのだ。

「とりあえず、ずっとここで寝かせておくのもなんだな、あんたらの家は」

「この近くの…マンション…」

正直に答えるしかなかった。自分たちではこの人に絶対に勝てない。

悔しいけど認めるしかない。

フェイトの愛機　バルディッシュが素直に主以外の人間の指示を聞いたことから、自分たちを陥れようなんて魂胆は無いようだけど。

「よし、じゃあ案内してくれ」

「てなことがあって」

アルフは苦笑しつつ、経緯をフェイトに話していた。

「それで、どうしてあの人がエプロンを着て料理を？」

「それが…」

二人がこの地球に来て食べたのが、インスタント（とドックフー

ド」と聞いた勇夜が、律儀にも閉店ギリギリのスーパーから材料を買って調理し始めた。

「そちらさんの相棒を斬ったお詫び」と本人は言っていたそうだが…

「でも…どうして斬られたって思ったんだろ」

あの時、確かにそう感じた、血だつて見えた。

意識が薄れていく中で、その痛みさえリアルという表現では物足りないほどの現実感を持って、痛みが彼女の精神まで容赦なく叩きのめしたのに。

あの時の経験は、あまりに鮮烈過ぎて、悪寒さえ感じるのに。
精神的^{トラウマ}外傷になるに至っていないのも奇跡的だ。

「あいつによると、幻覚…らしいんだけど」

「幻術魔法？」

一応相手に幻覚を見せる類の魔法はあるのだが、燃費が悪いので取得する人は稀である。

「いや…本人はレアスキルみたいなもんって言ってたけど…」

『正確には、相手に殺気を込めた眼光をぶつけることで、『斬られた』と一種の暗示をかけたのです』

料理を運んできた少年の左手中指に今ははめられているリンクが、本人に代わって答えた。

淡々と言うリンクだが、言ってしまうえばこの少年は、睨んだだけで相手を倒せるということになる。

もし彼に明確な殺意があれば、フェイトたちは今頃あの世行きだっただろう。

「ただこの『暗示掛け』にも弱点があんだよ、受けた殺気と同等以上の気迫で返せばいいし、それにその気になりゃ、戦い慣れた奴なら誰だって使えるぞこれ」

「そう…なんですか…」

うなづくしかなかった。

「簡単に作ったもんしかないけど、食べてくれ」

テーブルには白ご飯と味噌汁と野菜炒めがあった。

恐る恐る慣れない箸で食しようとするが、手を止めてしまうフェイト。

「あの…」

「どうした？」

「どうして…私たちをここまで」

フェイトはまだ勇夜への警戒心を解けなかった。

「返り討ちにあったが、先に仕掛けたのはフェイトたちだ。」

「正当性なら相手にある。」

「なのにここまでしてくれと、却って裏で何かあるのでは？と勘繰りたくなるのも仕方なかった。」

「質問したいことが幾つかあったからな…まあそつちも聞きたいことはあるだろ？」

「はい…」

「言ってみる」

「あなたは『管理局』の人間ですか？」

正式名称、時空管理局。

噛み砕いて説明すれば、『魔法』が普及されている世界のほぼ全てを治安維持するために存在している組織だ。

「……………囑託魔導師の肩書持っている以上、間違ってはいねえよな」

そして囑託魔導師は正式な管理局の組織の一員ではないが、局からの仕事を請け負う民間の魔法使いもこと。

彼は左手を前に出すと、ホログラムでその囑託魔導師であることを証明するIDカードを見せた。

周辺の空気が緊張感に染められる。

「本当？」

あれだけの実力があるのにもかかわらず、囑託止まりなことに驚いた。

あの組織は、彼と同じぐらいの年齢なら、かなり高官に身を置いている者もいる。

それは置いといて、どっちにしても局と繋がりを持つ人間と接触してしまったのはまずい。

地球なら、警察官に出くわしてしまった状況だ。

そしてフェイトたちが、『警察官』から見てどうという立場なのかは、聞くまでもない。

「なんで嘘ついてまで、『俺は局員です』とか言う必要があんだ？正直言うとあの組織のことはあまり好かねえし、囑託に就いてんの

も、局員でもある親代わりの人たちの勧めと、無いよりはましだと思っただけから、それに捕まえる気なら、おたくらを拘束もしないで、のこのこ出ていくわけないし、その使い魔さんだって、その間に君を連れて逃げてるだろ」

「アルフ、本当なの？」

「うん…私も今の話をさっき聞いた。管理局に連絡するつもりも無かったし、そんなに悪い奴でも無さそうだったし」

「じゃあ今度はこっちから質問だ、子どものお使いにしては物騒な代物を探してるようだが……何が目的だ？」

いきなり核心を突かれた、アルフも緊張した面持ちで冷や汗が流している。

なんとかこの場をごまかそうと思ったが……

「こんな危ない綱渡りをさせるなんて『碌な人間じゃなさそうだな』君の親は」

「っ！……母さんを悪く言わないで……！」

「フェイト！……落ちつきな……！」

彼の今の発言に、頭に血が上り、思わず叫んでしまった。

一見して大人しめな女の子が、いきなり激情に駆られた姿に相手も戸惑っている様子だった。

フェイトを宥めるアルフ、だがフェイトと違って彼女は少年の言

葉に反論できなかった。

アルフから見ればフェイトの母はその『碌でもない人間』に該当する、『フェイトを悲しませる』人物だったからだ。

「どうやら……ホントみてえだな」

「えっ？」

寒気が走った…。

鎌をかけられたの？今

どうしよう…。

これでどういう目的でジュエルシードを集めているか知られてしまった。

彼が嘘をついているようには見えない、わざわざ身分証も提示したから囑託魔導師であることは間違いないだろう、なら自分たちがロストロギアを勝手に探し回っている以上、野放しにはされない。

このままじゃ母さんの願いを叶えられない。母さんを喜ばせてあげられない…

「ロストロギアを欲しがってるのは、君のお袋さんで、君とアルフには、それを悪用するつもりはないんだな？」

少年は、ただでさえその吊り目で平常時からきつい印象を与えているのに、感情を感じさせない淡々な調子で言葉を発している。

その眼光は、この上なく鋭利で…怖い…

「はい」

頷くしかない、先程の戦闘で先手を打っておきながら、返り討ちにあつた以上、自分のスピードを持ってしてもこの状況では振り切れないかもしれない。

大げさかもしれないけど、最悪今度こそ斬られるかも…

冷たい目つきで、剣を振るう、相手の姿を思わず想像してしまう。

完全に八方詰まりだった。

だが…

「ならいいさ」

「えっ？」

「どうしてもお袋さんに渡してえんだろ？」

あっけらかんとした口調で、彼が次に口から出した言葉は…

「……………本当に…良いんですか？」

予想外のものだった。

「但し、条件がある」

だがやはりただでは返さないようだ。

「今俺が持つてる一個は、俺に管理させることと、『俺をお袋さんに会わせること』…だ」

前者の条件はともかく後者の方はこれもまた予想外だった。

「これを呑んでくれて、もしそのお袋さんが、お前の言う通り『悪い』人じゃないのなら、これから君の力で手に入れたジュエルシードは全部くれてやってもいい、ただしな、少しでもお袋さんが悪用する素振りを見せたら、そんな時は全部渡してもらっ、力づくでもな……呑めないなら、悪いがお縄を頂戴するぞ」

フェイトたちに、捕えようと思えばいつでもできると意思表示を

し、眼光の鋭さを増しながら条件を提示する少年。

でも承諾できないものでもない、ジュエルシードを渡せば母さんはきつと言んでくれるし、悪い人じゃないって証明すれば彼も認められるだろう。

悪い条件では無かった。

「それと、手伝いもしないからな、俺も君の願いを無下にするほど外道じゃないが、犯罪者に堕ちるつもりも無い」

「分かりました……ありがとうございます」

「あとはな……リンク」

『了解』

リンクから、ジュエルシードを取り出してフェイトたちに見せる少年。

「こいつは、願いを叶えてくれるって謳い文句を持つてるが、碌でもない形でしか叶えてくれない欠陥品だ、たとえ願った人がどんなに人畜無害な野郎でも、最悪次元震を起こして、この星を含んだ次元世界ごと消し飛ばすことになっちまう、今自分がやるうとしていないことも含めて、自覚して探してんだろ？」

「はい……」

上げられたと思ったら落とされた。でも自分のしていることがなんなのか分かってるし、反論もできない。

「でも……その代わり、もし君が君の魔法をもつてしても、どうにならない状況になった時は……必ず君を助ける」

「それって……どういう？」

「？俺の力？はそのためにあるからな」

フェイトにはその意味がよくわからなかった。

でも……なんでだろ？…口調はぶっきらぼうだし、目つきもちよつときついし、自分の目的をばらされてしまったし、こっちから仕掛けて詫びを入れられたとは言え、リニスが精魂込めて作ってくれたバルディッシュを切ったし、何より、まだ名前もちゃんと聞いてないのに…

どうしてこの人の言葉はこんなに安心するんだらう…

暖かいと感じるんだらう…

「まあまず無えだらうけどな君の腕っ節なら……ぶちのめした俺が言っても説得力はないかもしれねえが…」

と彼は自嘲気味に答えた。

「アルフも異論は無いよな」

「ああ…私はフェイトが笑ってくれるならそれでいいし…その『どうにもならない状況』には絶対しないから」

意気揚々と答えるアルフ。

「じゃあ、交渉成立だ」

彼は、ジュエルシードをリンクにしまった。

「あの…そう言えば、名前をまだ…」

「そうだったな、悪い、俺は諸星勇夜、ユウヤでいい、こいつは相棒のリンク」

『以後お見知りおきを』

勇夜は自分の相棒を二人に見せた。

「君の方は？」

「何がですか？」

「フルネームだ」

「そうでしたね、フェイト・テストロッサと言います」

「テスト… ロツサ？」

その名字を聞いた勇夜は眉をしかめる。

「どうしたの？ユウヤ」

「なんでもない」

「そう…」

一瞬さつきとはまた違う怖い眼をしたが、すぐに穏やかな表情に変わった。

その直後、腹から鳴るあの鈍い音が響いた。

「／／／／／／／／」

誰のか聞くのはよそう。

「あ／／／／／あの／／／／／」

「フェイト、ここ数日まともに食べてないんだろ？」

「どうしてそれを」

「アルフから聞いた…それにさつきお前が倒れたのは、飲まず食わずで、体に無理させたのも原因なんだ、体調管理もできない奴は、どんなに素質あってもド三流だ、今度からはちゃんと食べるよ」

「はい／／／／／」

頬を染めながら食するフェイト。さつきは勇夜への警戒心もあり、口にできなかつたが…今は

「おいしいです」

正直な感想を述べた。

この料理は相手そのものだ、一見荒っぽく調理されているが、味はとても温かみがある。

「な、なら…良かった…」

当人にとって思わぬ返しだったようで勇夜は少し、鼻をこすりながら照れ気味に返した。

と、
勇夜は、自分の作った夕食をフェイトが食べ終わるのを見届ける

「飯ならまたいつでも作ってやるよ」

そう言っただけで彼女の部屋から出て行った。

それからしばらく経った後。

「フェイト…もう寝た？」

「まだだけど…どうしたの？」

「今…思い出したんだけどね、勇夜って……あの噂の『魔導殺し』じゃ…ないかなって」

？魔導殺し？

最初に言っておくが、魔導師を殺しまわる殺人鬼という意味合いでは無い。

魔導師にとって天敵を意味する言葉だ。

本人も相当の実力を持った魔導師でありながら、魔法を使用する

ことは稀で、徒手空拳と剣術とレアスキルで、魔導師や魔法生物を打ちのめしてしまうことからつけられた。

管理局に管理された世界にとって、『魔法』は最もポピュラーかつ絶対的な力で、それに敵う力はないというのがもっぱらの常識とされている。

それを勇夜は、容易く覆してしまった。

魔法が普及されている世界の住人にとってそれは、例えるなら、戦車やヘリをハンドガン一本で、壊してしまうくらいの衝撃。

そのため彼は、ある者からは『畏敬の念』を、ある者からは『屈辱の念』の意味合いから『魔導殺し』と呼ばれるようになった……

……フェイトたちが聞いた噂ではそうらしい。

とりあえず言えることは、その噂の信憑性は100%であることであつた。

現に魔法を使わずに、二人を打ちのめしたのだから。

「別にあいつを疑ってるわけじゃないんだ、勇夜がああ妥協してくれなきゃ、今頃私たちは牢屋行きだろうし……、チャンスをくれたつてことみは、感謝してるんだけどさ……」

アルフは勇夜の言葉を思い出していた。

彼は自分たちが集めようとしているジュエルシードのことを、

『どんなに人畜無害な野郎にも、碌でもない形でしか叶えてくれな
い欠陥品』

と評していた。

ジュエルシードは、以前から存在は確認されていたが、各世界を転々としつつ、遺跡発掘を生業とする部族、スクライア一族が初めて実物を発見したロストロギアの種類。

ロストロギアとは、もう滅びてしまった文明が残ってしまった、傍迷惑な置き土産のこと。

その置きの土産一つである宝石は、全部で21個発見され、管理局

へ輸送する途中に、原因不明の事故が起き、全てがこの地球の日本、海鳴市周辺に落ちてきたのである。

これは言ってしまうえば『願いを叶える石』なのだが、膨大なエネルギーをかなり不安定な形で保持し、使用者を求めて、人や動植物にとりつき（とりつかれた生物は異相体と呼称される）、暴走して暴れたり、一歩間違えば、次元振とよばれる災害を引き起こしかねない、ロストロギアと認定されるには、十分過ぎる危険性を秘めた代物。

それを含めて、以前からロストロギアをフェイトに回収させようとする、彼女の母に対し、使い魔のアルフはその不信を日に日に強めていた。

使い魔には言ってしまうえば使い捨ての消耗品という一面がある。主人である魔導師に特定の行為を行使する契約を結び、それが完了すれば使い魔は消滅する運命にある。

なまじ命を生みだしながら用が無くなれば捨てる非人道的なシステムのため、現在は使い魔の生成は、法律で規制されている。

だが、フェイトとアルフの契約内容は特殊なもので…

それは…

『生涯をともにすること』

『フェイトが死ぬまで一生一緒にいること』だった。

アルフのいわゆる前世は狼の子だったが、怪我を負ったことで群れから見捨てられ、それをフェイトに助けられ、仮契約を経て、この内容で正式に契約を結んだのである。

これらの経緯からフェイトを守り、案じ、力になりたいという気持ちは誰よりも強い。

「フェイトがあんなに無理してるのに、あの女は一度もそれに応えてくれたことないじゃないか、それこそ勇夜が『欠陥品』って呼んだ、あのロストロギアみたいだ…」

それだけにフェイトに何度も危ない買い物させておきながら、感謝も愛情も示さず。

代わりに『痛み』を強いる彼女の母親が許せなかった。

彼女を案じる言葉をかけても本人は『大丈夫』というものの、アルフは漠然とした形ながらも、彼女の感情を感じ取れるので、無理をしていることは分かっている。

そのため、ジュエルシードを集めることも内心では乗り気では無かった。

たとえ集めて、あいつに持って行っても勇夜のいうとおり『碌でもない形』でしか叶えてくれないだろう。

いっそのこと彼女をあいつから引き離して、二人で逃げられたらどれだけ楽か…

でも…

「ごめんねアルフ、でもジュエルシードさえ集めれば…母さんだつて」

『あいつ』のフェイトへの日頃の態度に反して、彼女は頑なに母の願いに報いようとしていた。

勇夜もそれを薄々察したのだろう。

だからあのような条件を出して、容認してくれたのかもしれない。

さつきだつて、囑託魔導師であることを明かしておきながら買出しに出ようとした勇夜に、

「あたしたちを放っておいていいのか？」

と聞いたたら、

「捕まえる気ならとっくにやってるさ、でもなんとなく、そのやり方じゃこの子を救えない気がすんだよ」

と答えたのである。

その言葉に、逃げようとする気が、すっかり失せてしまった。

自分もさつきは勇夜に虚勢を張ったけど、本当のところ、彼女を救いにならない状況にもどかしい。

自分がやるべきことは分かっている。彼女の傍にいて支えてやること。

でも本当に願いが叶うなら、彼女を助けてほしい、そう思わずにはいられなかった。

勇夜は今、夜の街を歩きつつ、物思いに耽っていた。

こっちの次元世界に来て11年、今は囑託魔導師の身で、時間が許す限り、世界のあちこちを巡っている。

散り散りになってしまった仲間を探したためだ。

時々、世話になったナカジマ家に帰ったりはしている。ちょっと前に二人の女の子を引き取って、今は自分を含めて5人家族。

その引き取った子たちには相当懐かれており、特に下の子からは帰ってくる度に突撃されることが風物詩になっていた。

迷い込んだばかりの時に、どういう訳か4歳児に縮んでしまった体も、今はほとんど成人に近い姿になっている。

『本来の姿』に戻ることも支障は無い。

だが、事前に情報を集め、時に現地に赴いて世界を廻ったものの、肝心の仲間の手掛かりが一切無く、このところ完全に手詰まりになっていた。

最後の賭けとして管理外世界を廻ることにし、最初の目的地としてこの地球に着いた際、ジュエルシードを運んでいた輸送船が事故に遭い、こっちに落ちていった事を知り、当初の目的を変更し、独自に回収作業に入ろうとして彼女たちと出くわしたのである。

特にあの金髪赤眼で、まだ幼く細い容姿と似合わないようで、この上なく似合う、漆黒の斧を持った少女。

確かに彼女たちが警戒したように、管理局に引き渡そうとも思えなかった。

途中までそのつもりだった。

むしろフェイトから、危ない買い物強い野郎を聞き出して、そいつをブツ飛ばしてやろうとさえ考えていた。

だけど……

彼女の体にあつた、昨日今日つけられたものじゃないその代物を見た時、

嫌な予感がした。

そして鎌かけた時の反応から、確信へと変わった。

彼女の抱えている問題は、かなりデリケートで生々しい。

腕っ節で解決できる代物じゃない。

必死で孝行する女の子の邪魔をして傷つけるような真似なんてできるわけではない。

でもかといって、彼女たちの行動を容認するわけにもいかなかった。

ロストロギアは、然るべき手続きを受けなければ、持つだけで違法なのである。あの時はなんとかああいふ形で一時的に収集をつけた。

課題は……山積みではあるが……

フェイトのお袋さんに会ってどうするか、管理局が捜査に乗り出した時にどう説明するか……等々……。

自分で言うのもなんだが、親子ぐるみの問題には弱いよな、俺って……

でも……家族がすぐ近くにいるのに、分かり合えないってのは……

……悲しいからな……

どうしたらあの子たちを救えるか……

今は具体的な解決策が思いつかない。

それでも、今自分がやれることをしよう。

あの子を助けるといふことを…

ジュエルシードが引き起こす厄災からみんなを守ることを…

諸星勇夜こと、M78星雲光の国のウルトラ戦士。

零の名を冠した光の巨人。

『ウルトラマンゼロ』

は、そう自分に言い聞かせるのだった。

Episode 2 - 零と雷光（後書き）

UZFKです。

諸星勇夜、それが本作でのゼロの人間体です。

名前の由来は、個人的に響きが良かったから、というのもあります
が、キャラ紹介の回で詳しく書きます。

でもちゃんとゼロになっているのか心配：

ちなみにリンクというキャラクターはかの『バラージの盾』です。

イメージCVは甲斐田裕子さん（ガンダムUCのマリーダさんなど）

か、芳野美樹さん（Z・O・Eシリーズの主人公機に搭載されたA

I、ADAエイタの中の人。

どちらの声でも、まんまマリーダさんかつ、ADAですね…

それを言うならゼロも刹那っぽいしwww

なぜ自我を持ったのかは、リリなのクロスオーバーによくある現象ということでwww（例：クロス作品がガンダムの場合、MSがデバイス化）

あとデバイスのセリフは『』付きで英語と日本語混合で書いていきます。

今回はなのはとユーノと「あの人」が登場します。

キーワードは「体育座り」

Episode 3 - もう一つの不思議な出会い (前書き)

9/27:少々加筆してます、
つーかTOP見ても分かる通りほぼ
全話修正してるんですけどね

Episode 3 - もう一つの不思議な出会い

これは、諸星勇夜ことウルトラマンゼロと、フェイト・テストロ
ッサの邂逅から数日遡った話である。

少女は夢を見ていた。

荒唐無稽な光景ながらも妙に現実的な変な夢だった。

どこかの森と池がある公園に少年が一人立っている。

年齢は12・3歳くらいだろうか？

地球のものとは違う民族衣装らしき装束とマントを着たその少年
は、何かを警戒し、張りつめた雰囲気を漂わせている。

そんな少年に一つの影が迫っていた。

その影は赤く光る眼以外は、どんな姿か判別がつかない、しいて
言うのなら、某アニメで神様が呪いによって祟りをまき散らす悪魔に
なったものと言うべきか…

「お前は、こんな所にいちゃいけないんだ」

その影を目にとめた少年はルビー色の球体を取り出し、影に向け
て構えた。

すると球体から、円と正方形を幾重に重ね、何かの文字が書かれ
た光の陣形が球体を中心に出現する。

対象の影も少年を視認すると敵であることを悟ったかのように突
進してきた。

「妙なる響き、光となれ、許されざるモノを封印の輪に！」

例えるなら、魔法使いが魔法を使う時に詠唱する呪文のような言葉の羅列を少年は唱え、叫ぶ。

「ジュエルシード！封印！」

それとともに、円陣と突進してきた影が衝突し、眩い赤い光が煌めいた。

影はその際生じた衝撃で宙に舞い、地面に叩きつけられる。相当消耗したらしく、ぎこちない動きで地面に体を引きづりながら、影はその場から逃げようとする。

後を追おうとする少年。

しかし、疲労困憊であるのは少年も同じ、むしろ消耗の度合いは怪物以上だ。

「逃がし…ちゃった…追いかけ…ないと…」

膝をつき、うつ伏せに倒れ、そのまま彼は力尽きてしまう。

「どうか…僕の声聞いて…お願い…力を貸して…」

夢はそこで終わりをづけ、少女は深い眠りについていった。

その翌朝、

春休みに買ってもらったばかりな、目覚まし時計の代わりに使っている少女の携帯のアラームがベッドの中で響いた、眠気と格闘しつつ、手に取るうとするが、うっかり、床に落としてしまう。

なんとか手探りで携帯を取り、アラームを解除した。

「なんか…変な夢見ちゃった…」

栗色の髪をした少女は、その夜見た夢の感想を述べた。

なんで、あんなファンタジックな夢を見たんだろ？

しかし、そんな疑問も眩い朝日と背伸びの前に一気に吹き飛んでいった。

わたしは高町なのは、私立聖称大付属小学校の5年生。

この高町家においては四人兄妹の末っ子さんです。

パジャマから制服に着替え、洗面所で髪をツインテールで纏めたわたしは、ダイニングへ向かって。

「おはよう」

「あつ、なのは、おはよう」

「おはよう、なのは」

台所で朝食の準備をしている私と同じ亜麻色の髪をした女性と、テーブルで朝刊を呼んでいる男性にあいさつします。

この二人が私の父と母であり、高町家が経営する喫茶緑屋のマスターとお菓子職人である高町士郎、桃子夫妻です。

「はいこれ、お願いね」

なのはに家族全員分のコップを乗せたお盆を渡す桃子。

なのははそれをテーブルに運ぶ。

「今日はちゃんと一人で起きたな、偉いぞ」

士郎は早起してきたなのはを褒めた。

わたしは寝ぼすけなところがあり、こうして今朝のように自力で起きることは稀です。

でも、小5にもなってそんな風に褒められるのは正直複雑です。

ちなみに喫茶緑屋はこの海鳴市の駅前商店街に位置し、ケーキと

シュークリームと自家焙煎コーヒーが自慢で特に学校帰りの女子や近所の奥様方に人気がある店です。

「お兄ちゃんたちとお姉ちゃんは？」

「ああ…今道場で朝練」

高町家の自宅には剣道の道場があります。高町家には昔から伝わる特殊な流派を受け継いでいるらしんだけど…

「お兄ちゃん、光兄、お姉ちゃん、おはよう」

わたしには兄が二人と姉が一人います。

「今日の朝練はここまでだ、美由希、光」

大学生で二人の指南役でもある高町恭也

「じゃあ続きは学校が終わってからね」

高校二年生の高町美由紀

そして、

「今日は一人で起きれましたね、寝ぼすけさん」

中学三年生の高町 光、ヒカリと書いてリヒトと呼びます。

念のために言いますと、どちらも『光』を意味しているそうです。

「私だつて自力で起きるぐらいできるよ光兄」

「いつもは僕に起こしてもらっているのにですか？」

「もー光兄ったら」

この二人目の兄である光は、実は高町家の養子で義理の家族ではあるのだが、

兄弟仲は全員良好である。

しかしこの光と言う人物、血が繋がっていないにも関わらず、何故か恭也と同じ声をしていた。光は普段から誰に対しても敬語口調なので、付き合いが長い人には聞き分けは容易ではあるが、聞き慣れない者はどちらなのか分からなくなるだろう。

そんな些細なことはいちいち気にしないおおらかなで傍から見ると羨ましいけど、ちょっと空気が甘ったるくなるほど仲が良い家族だった。

例えば、朝食の食卓ではと言うと、

「今朝もおいしいな、特にこのスクランブルエッグが」

「ホント トッピングのトマトとチーズとバジルが隠し味なの」

「みんなあれだぞ、こんな料理上手なお母さんがいるのは幸せなことなんだぞ、分かってるのか？」

「分かっていますよ、ですよね、なのは」

「うん」

子どもが四人で、特に上の子は大学生な年頃ですが、二人は未だに新婚ほやほやに負けず劣らずの仲の良さで…

「美由希、リボンが曲がってる」

「本当？」

「ほら貸してみる」

で、恭也兄ちゃんと美由希お姉ちゃんもとっても仲良しです…

わたしは、愛されていることは自覚しているが、時々この一家の中では自分は微妙に浮いているのではと感ずることがあります。

ですがわたしには光兄みつあにという、血は繋がらなくても大好きなもう一人の兄がいます。

光兄と呼ばないとしっくりこないくらい。

さっきみたいにからかわれても笑って済ませるくらいに。

どうしてそこまで光兄が好きかと言われると。

絵本に出てくる騎士さんみたいに、穏やかだけど強い……こともあるけど。」

やっぱり……あのことが…

場所は変わってなのはの通学風景、彼女の学校は遠めなので、行きはバスで登校している。

「おはようございます」

「なのはちゃん」

「なのは、こつちこつち」

バスに乗ると最高後部席に座る同年代の女の子二人に呼ばれた。

「すずかちゃん、アリサちゃん、おはよう」

金髪で一部の髪を縛っている勝気そうな女の子は

アリサ・バニングス

紫の長髪でカチューシャを着けた物腰が柔らかそうな女の子は

月村すずか

なのはと二人は小3の頃からの親友である。

こうして三人で談笑しながら通学するのが三人の日課だ。

このようなのはは色んな幸せに囲まれてごくごく（？）普通に暮らしている女の子ではあったが…

その日のお昼、

仲良し三人組は校舎の屋上でお昼をとっていた。
普通の小学校と違い小中高大一貫校で制服の着用が義務付けられ、
お昼は持参型だ。

「将来か…」

ぼつりとなのはが呟いた。今三人は授業でも話題になった『将来』
について話をしている。

「普通の小5なんて、未来の夢なんかまだ漠然としたものよ」

「でもアリサちゃんとすずかちゃんって。もう結構決まってるんで
しょっ?」

「うちはお父さんもお母さんも会社経営だし、あたしはそれを継げ
たら良いと思ってるけど」

「私は機械系が好きだから、工学系で専門職がいいかなって」

何気に小学生の会話じゃないような気もするが…

「そっか…二人ともすごいよね…」

なのははと言つと

「でもなのはは喫茶緑屋の二代目じゃないの?」

「うーん…でも…」

なのはは一応翠屋を継ぐこともまんざらではないが、実際どうか
と聞かれても、分からないとしか言えない。

逆に二人のようにこの年齢で具体的なビジョンがあることの方が
異端なのでは?

「やりたいことは何かあるような気もするんだけど…まだそれがな
んなのかはつきりしないんだ」

だが自分の『やりたいこと』が見つからないのはにとって…

「あたし…みんなと光兄と違って、特技も取り柄も特にないし…」

「バカちゃん！」

自嘲気味に呟いたなのは頬に、アリサの叱咤とともに彼女の弁当にあつたレモンが飛んできた

「自分からそういうことを言うんじゃないの！光さんにも失礼ですよ！」

「そうだよ…なのはちゃんにしかできないこと、きつとあるよ…」

「だいたいあんた！理数の成績はこのあたしより良いじゃない！それで取り柄が無いとはどの口が言うーんだああああ！」

アリサの叱咤は一方的なイチャモンに変わり、お仕置きとばかり、なのはの口を引っ張り出した。

「だあ〜てえなのはあく〜うごにがあてえだし〜たあいいくもおにがあてだあし〜」

ほほを引っ張られ、涙目になりながらも、自分の苦手科目を述べるなのは。

「二人とも、ダメだよ…」

そんな状況におろおろするすずか。

三人のお昼の会話はこんなコント気味な結末に終わったが、実はなのはの悩みは想像以上に深刻で、親しい人と一緒にいるのはとてもかく……

一人でいる時は…

家族がいるのに…
友達もいるのに…
とても幸せな時間で、寂しくなる理由なんて…

どこにもない…無いはずなのに…

悲しくなって…

苦しくなって…

言いようのない不安と行き場のない気持ちと言つ淀みが体から抜
けずに体の中を巡り。

「なにかをしなくちゃ」

「自分にしかできないことを見つけなきゃ」

「何もできない、守られてばかりな自分を変えなきゃ」

という強迫観念がこみ上げるが…

それを向ける行き先が、見つからない。

なまじ優しく、痛みを内に抱え込んでしまつゆえに、父にも…母
にも…兄にも姉にも…

そして光にも言ったことが無い苦悩と痛み。

その痛みのために何度、一人の時に涙を流して叫んだことか…

「自分にできること」を明確に理解し、それを為そうとする

なのははそれを見つけれられずにいた…

それを見つけるきっかけとなる出来事が、直ぐそこまで迫ってい

ることを知らずに。

その日の夕方

「ねえ今日のすずかのドッチボールすごかったね」

「カッコよかったよね」

「そんなこと／＼／＼／＼」

三人は一緒に通っている塾へと向かっていた。

「ほら、こつちこつちここを通ると塾に行くのに近道なんだ」

「そうなの？」

アリスの示した近道は、若干深い森で囲まれた園道だった。

「ちよつと道が悪いけどね」

確かに生い茂る草木が太陽光を阻み薄暗く、子どもが通るには抵抗を感じる道ではある。

そんな道を通っていると、なのはは昨夜見た夢を思い出した。

「（ここ…タベ夢で見た場所…）」

確かに夢での一連の出来事があった場所とここは酷似していた

「どうしたの？」

「なのは？」

「あ、うん何でもない、ゴメンゴメン」

「じゃあ行こう」

再び歩き出す三人

まさか、ここで起きた出来事を夢にみるなんて…

「（助けて…）」

そう思った矢先、なのはの耳、いや頭か…自分の脳内に声が響いてきた。

「なのは？」

「今なにか聞こえなかった？」

「なにか？」

「何か…声みたいな…」

「別に…」

「聞こえなかったかな…」

二人はそう言うものの…

なのはには『助けを求める』悲痛な声が、確かに何度も何度も響いた。

気がつくと、なのははその場を走り出していた。

「なのはちゃん」

なんでだろう？

なんとなくこの先を行けば声の主がいると言う確信がなのはにあった。

声のした方と思われる方角を走っていくと、

道の真ん中で小さな動物が倒れていた。

その動物の前にしゃがむと、こちらに気づいたように目を開けてこちらを見ている。

その小さな動物の首には赤い球体を着けたペンダントが下げられていた。

「どうしたのなのは！急に走り出して！」
「あつ見て、動物？怪我してるみたい…」
その動物は怪我をして衰弱していた。
「あ…うん…どうしよう…」
「？どうしよう？って…とりあえず病院？」
「獣医さんだよ…」
「この近くに獣医さんっていたっけ…？」

幸い近くに動物病院があったので、動物はそこで治療を受けることになった。

「怪我はそんなにたいしたことはないけど、随分衰弱しているみたいね、きつとずっと一人ぼっちだったんじゃないかな」

「委員長先生、ありがとうございます」

「ありがとうございます」

まだ会ったばかりの動物に代わり、礼を言う三人。

「どういたしまして」

「先生…これってフェレットですよね？」

フェレットとは、ヨーロッパパケナガイタチを家畜化した、イタチの仲間。

「どこかのペットなんでしょうか？」

「変わった種類だけど…この首輪に付いているのは…宝石なのかな」
獣医さんが宝石に触れようとすると、フェレットは眼を覚ました。

あちこち周囲に視線を向けて、なのはに目を止めると、そのままじっとなのはを見つめ出した。

「なのは見られてる」

「えっ？あっ…えっと…」

恐る恐るフェレットに手を差し伸べると、なのはの人差し指を舐めた。

「……はあ……／＼／＼／＼／」

三人が思わず声を上げるほどの愛らしさだった。
だがすぐにそのまま眠り込んでしまう。

「とりあえず明日までことらで預かっておこうか？」

「……はい、お願いします」「」

とここで、三人は当初の目的を思い出す。

「あーやばー！塾の時間」

「ほんとだ！」

「じゃあ委員長先生、また明日来ます」

フェレットのことを気にしつ三人は動物病院を後にした。

なのははその後、塾の授業中でもフェレットのことで頭が一杯で、講師に名指しされた時は親友のフォローでなんとかその場をしのぐ有様だった。

その夜の高町家の食卓。

「で……そのフェレットさんを暫くうちであずかれないかなって…」

「フェレットか………」

なのはは例のフェレットのことを家族に切り出した。

「ところでなんだ？フェレットって？」

思わぬ父のカウンターボケに家族一同はズッコケそうになった。なのはに至っては、顔をテーブルにぶつける始末。

「イタチの仲間ですよ、父さん」

「だいぶ前からペットとして人気なんだよ」

光と美由希が説明した。

「しばらく預かるだけなら、カゴに入れておけて、なのはがちゃんとお世話できるならいいけど」

母桃子に、言い方こそ穏やかだが、やはり命を預けるのである、ちゃんと責任をもって預かれるかと問われた。

もちろんなのはも、軽い気持ちで世話をするつもりじゃないけど。

「三人はどう？」

「俺は特に依存はないけど」

「あたしも」

「僕もです」

「だ、そうだ」

「よかったわね、なのは」

「うん！ありがとう」

幸い全員から了承を得ることができた。

明日にはフェレット君を迎えに行こう。

就寝前に、アリサとすすかにフェレットを自分の家で預かること

をメールで連絡し、眠りにつこうとしたが…

「（聞こえますか？僕の声が）」

夕方に聞こえたあの声が再び頭に響いた。

また…なんなの…

「（聞いてください、僕の声が聞こえるなら、お願いです、僕に少しだけ力を貸して下さい）」

その声の主は助けを求めている。

「（危険がもう）」

途中で声が千切れるとともに一瞬目眩がし、ベットに倒れるのは。

何事なのか把握はできていない。

でも自分の心が訴えてくる。

？行かなきゃ！行って助けなきゃ？

その心のままに、直ぐに私服に着替え家を飛び出して行った。

行き先はあのフェレット君のいる動物病院、どうしてもかは分からない、

でも本能のような感覚で、そこに『行けば分かる』ような気がした。。

目的地であろう榎原動物病院に着くのは。

今まで無我夢中に走って気がつかなかったが、やはり夜の夜道は
気味が悪い。

暗闇から、何かが出たらどうしようと考えてしまう。

突然声がした。

今の声って…

今ここには自分と変な怪物とフェレットだけ。

ということは…まさかこの子が

「しゃっ！しゃべった!？」

だが状況は驚く暇さえ与えてくれない、影は自分たちに明らかな敵意を向けて、こっちを見ている。

フェレットを抱えたままなのはその場を走り出した。

「その…何がなんだがよく分かんないんだけど……いたいなんなの…聞きたいことは一杯あったが、あの影のことをフェレットに聞いてみた。」

「何が起きてるの?」

「君には資質がある、僕に少しだけ力を貸して」

どういうこと?ますます分からない。

ししつって?それに力ってどういうこと?

運動だって、音痴レベルなのに…

フェレットの言葉は逆になのはを混乱させた。

「僕はある探し物のために、ここでは無い世界から来ました、でも僕一人の力ではどうにもできなかつた、だから迷惑だったことは承知しています、あなたのような資質を持った人に協力してほしい、お礼はします、必ずします、だから僕の『魔法の力』を」

「魔法?」

昨日の夢から魔法っぽいと思っていたが…まさか…

すると空からあの『影』がいきなり落ちてきた。

なんとか直撃を避けて、電柱に身を隠す。

「お礼は必ずしますから…」

「お礼とかそういう場合じゃないでしょ」

影は容赦なく追ってくる以上、こうして話してる時間も無い。

「どうすればいいの？」

フレット君の説明の大半は正直チンプンカンプンだが、少なくともその

「魔法」を使って、あれと戦ってほしいということは何となく理解できた。

でもどうやって？本当に私にできるの？

こうして逃げるだけで手一杯。

非常識な状況に、恐怖を押し込めながら、何とか耐えている。

そんな自分が、怪物を戦えるとはこの時のなには思えなかった。

「これを」

フレットが差し出したのは、あの宝石をつけたペンダント。

今それは赤く発光していた。

手にとってみると、まるで人の手に触れたような温かさを感じる。

「あなたに管理者権限を譲渡します、それを手に、目を閉じて、心を澄ませて、僕の言う通りに繰り返して」

正直、まだ今何がどうなっているのか分からない…でもやるしかない…このままでは自分もこの子も危ない…どこまでできるか分からないけど…

「行くよ」

「うん」

意を決して、彼の言う通り、目を閉じ、ペンダントを握りしめた。

「我、使命を受けし者なり」

「我…使命を…受けし者なり…」

「契約の許、その力を突き放て」

宝石は断続的に点滅する。

「えと…契約の許…その力を解き放て…」

「風は空に、星は天に」

「風は…空に…星は天に…」

「…そして不屈の心は…」

なんでだろう？最後に唱える言葉がその時脳内に浮かんできた。

「…この胸に、この手に魔法を…」

宝石を天にかざし

「…レイジングハート！SET UP！」

『Standby REDEY SET UP』

最後の言葉と共に赤い光が空の彼方まで溢れ光の柱が現れる。

「なんて魔力だ…」

初めて会った時から、素質があるとは思っていたけど、予想以上のものだった。

「落ち着いてイメージして、君の魔法を『杖』の姿を、そして君の身を守る強い『衣服』を」

「そんな急に言われても…」

『はじめまして、新たなマスター』

どこからエコーがかかった女性の声が出た、もしかしてこの宝石？

「えっ、あ、はじめまして」

『あなたの魔力資質を確認しました』

フェレットが話をしだしたという魔法もの全開な展開もびっくりしたけど、魔法の杖まで喋るなんて…

『デバイスの形状はこちらが自動選択しますが、防護服はあなたのイメージを元に最適なものを形成します、よろしいですか？』

つまり杖のデザインは『杖自身』がするが、防護用の服のデザインは、なのはの想像を元に作ります…という意味合いであった。

「えーと……とりあえず、はい！」

本音を言えば、この球体の言葉はフェレット以上に難解な単語のオンパレードで理解できているとは言い難い。

でも……わたしはこの魔法の杖を信じることにした。

ぶつつけで大雑把だけど、なのはは『服』を脳内に浮かべた。
『了解：Stand by Ready．バリアジャケット，
Set up．』

瞬間、眩いまでの閃光が宝石から発って、周りが白く染まった。

その光を視認しているのは、なのはとフェレットと影だけ……
……では無かった。

その光を目に止めた者が、この街でもう一人。

「あの光…まさか！」

「成功だ…」

「にゃあ！ふえっ！ええええ！嘘…なんなのこれ？」

光が収まった瞬間、なのはは自分が置かれた状況に驚愕した。

何となく咄嗟にイメージしたのが、聖祥付属小の制服なのだけれど、これがフェレット君の言ってた『杖』と『服』なの？

服装は胸部に真紅のリボンが付いた彼女の学校の制服をモチーフに青色とライン、華奢なのはの両腕は小手に覆われ、ロングなスカートはギザギザが付いている。

さらに左手には、先端にアルファベットのG状を模して、中央に赤い球体がはめられた杖を持っていた。

でもそこからどうしたら良いの？
呪文とか、どうすれば使えるの？

「来ます！」

相手は考える余裕も与えてくれない。

影はこちらに視線を据えた。

明らかになのは狙っている。

怖い…

異形の赤い目は、少女を金縛りにするには充分すぎる殺気を秘めていた。

なのに、体は恐怖でくすんで固まってしまっている。

目じりは涙目で、立っているのもやっとだ。

それでも理性を保っている辺り、十分な胆力を彼女は持っている。

が、それは同時に、それだけしかできないとも言えた。

影は空高く飛び上がると不気味な赤い眼をなのに向け落下してきた。

「危ない！」

反射的に屈めるなのは、その影がなのはを押しつぶそうと迫った時、

杖の赤い宝石部分が突然光り出し、手り剣状の凶形と六角形が重なった形をした紋章が現れる。

「あの…紋章は？……………なっ！？」

紋章から人が出てきた、正確には人の姿をした何かか？
その全容は光に包まれてよく見えない。

「はぁ！」

光の人は影を蹴りつけ、もろに受けた相手は放物線を描いて落下する。

「こ、今度は何？」

今杖から人が？助けてくれたの？

光の人は着地し、こちらに目を向けると全身を覆ってた光が収まり、

その全貌を現した。

銀色のスラリとしたボディに緑色に染まった、肩と腕、胸と手の甲には黄色い光沢が、そして顔には人間に相当するパーツが無く、代わりに漢数字の10にも見えなくない形をした、黄色い光を放っていた。

「君は？」

「あなたは？」

二人はほぼ同タイミングで尋ねていた。

「なんとか間に合いましたね」

その光の人は、騎士を連想させる落ち着いた口調で言葉を発した。

そう、間違いなく彼は、かつてはエスメラルダ星の騎士で、今はウルトラマンゼロが結成した宇宙警備チーム。

『ウルティメイトフォースゼロ』のメンバー

鏡の騎士…

『ミラーナイト』

その人だった。

Episode 3 - もつ一つの不思議な出会い (後書き)

映画の冒頭と今話のラストで颯爽登場したミラーナイト。

本作では「ミラーナイト」という名はいわゆるコードネーム的(例えるなら中の人繋がりでヒロとか)なものとして設定し、本名を別で用意しています。

なのはは原作より、学年を上げました。

少しでも「その年齢で言うセリフじゃねえ感」を抑えるためです。

バリアジャケットのデザインは無印と劇場版を折衷し、レイジングハートは劇場版仕様です。

ユーノも同い年から年上に変えています。

ストーリーも無印と映画とコミックの要素を混ぜながら展開していきます。

ではまた次回。

Episode 4 - MIRROR KNIGHT and WITCH

UFZKです。

やっぱり戦闘シーンって難しい…

描写は脳内でいくらでも浮かぶのにいざ文章にしよつとすると…

特にミラーナイトとなのはを均等に活躍させよつと欲張って余計骨が折れました。

追記：サブタイトル変えました。

それから…グレンとジャンのファンな方々には申し訳ありませんが、二人が出てくるのは、A・s編からになります。すみません…

9/27：戦闘シーンを少し書き直しました。

フェレット君にとって、なのはに備わる魔法の素質は想像以上だったが、それ以上に予想外な事態が起きた。

彼の持っていた魔法行使のアイテム、デバイス、今は実質持ち主になったなのはが持っている魔法の杖。

『レイジングハート』

から光と共に人が現れて、異相体の巨体に踏み潰されそうになったなのはを間一髪助けたのだ。

「なんとか間に合いましたね」

「君は」

「あなたは」

二人とも思わず呟いていた。

「話は後です、そのフェレット君」

「は、はい！」

「あの怪物をどうにか沈める方法は、あるのですね？」

「あ…はい」

「なら…僕が奴を引き寄せ、時間を稼ぎます」

「あ！待って！」

騎士は影へと向かい戦闘になった。

影から触手のようなものが飛び出し、騎士を襲うが、手と足を巧みに使い、振り払う。

「ミラーナイフ！」

騎士の手から光の矢が放たれ、影をけん制する。

影はその矢を受けてたじろぐが直ぐに狙いを定めて突進してきた。だが光の騎士はその攻撃も難なく躲し、空に飛び上がった。怪物も空に上がり、空中線が繰り広げられる。

あの騎士が何者か分からないけど、このチャンスを生かさないと。

「君！これからその杖の指示をしっかりと聞いて」

「はっはい！」

『マスター、魔法についての知識は』

「全然！まったくありません！」

『では全て教えます、私の指示通りに』

初心者を通り越して、魔法に関しても、戦うという行為に対しても素人なのは、精々知つていふことと言えば武道の心得ぐらいだ。おまけにさつきまで未知の怪物への畏怖で委縮していた有様、今は助つ人のお陰で大分落ち着けるまでになった。

「はい！」

『まず、飛びます』

「えっ？ああ！」

いきなり両足に桜色の翼が現れたかと思うと、なのはの体は宙に舞った。

幸いデバイスのサポートもあり、動きはぎこちないがなんとか空中に静止できていた。

「あの黒い生き物みたいなものは何？」

『生き物ではありません、ロストロギアの異相体です』

説明を聞いたなのだが、小学生には難しい単語の羅列であり内容を把握できずじまい。

「あなたから出てきた人は」

なのは自分を助けてくれた騎士のことを質問する。

『私にも分かりません、何らかの方法で瞬間移動してきたとしか』

あのフェレット君も知らなかったみたいだし、どうして私を…

なのはの視線の先では異相体と呼ばれた影と騎士の戦闘が続いている、どちらも譲らない、互角の勝負。

やや騎士の方が防戦気味だが、積極的に攻撃しないだけで、攻勢に転じれば圧倒できる余力があった。

「あなたの魔力があれば、あれを止められます、 レイジングハートと一緒に封印を！！」

「よくわからないけど…どうすれば」

『異相体を封印するためには、接近して封印魔法を発動するか、遠距離からの砲撃魔法が必要です』

つまり選択肢は二つ、近づいて攻撃し、封印するか、遠くから封印するためのエネルギーを直接放つか。

『あなたの思い描く強力な一撃をイメージして下さい』

「そんな…急に言われても…」

『両腕で私を持ち、胸の奥の熱い魂を両手に集めて集中して下さい』

魂？

その時だ。

騎士と戦っていた異相体が二つに分かれ、内一体がこちらに向かって来る。

異相体の意図に気づいた騎士は、なのはのもとに向かおうとするが一方に邪魔される。

そして一方が突進してきた時、反射的になのはは利き手を伸ばした。

すると手から桜色の光が放たれ、異相体に命中。

四方にバラバラに飛散した。

だがすぐに集まり一つの影に戻っていく。

そう言えば、前に見たアニメで、体の中にある『気』ってエネルギーを両手に集めて、発射する場面があったっけ…

「今の光、もつと強いのを出せない？」

『あなたがそれを望むなら』

なのははそれを参考にデバイスの指示通りにやってみた。彼女の体は桜色に発光し、その光は両手に集中して行く。

『Mode change , Cannon mode .』

同時にデバイスの赤い球体の周りにCの形を取った、金色の部品が、

音叉のような形に変わり、持ち手の真ん中にトリガーが現れ、槍と

キャノン砲の特徴を掛け合わせた形態となった。

『構えてください、』直射砲形態』で発射します』

ここまでいけばなのはも理解できた。

「あの影を、魔法で撃って封印すればいいだね」

『そうです』

「あの子…砲撃型…」

上空から砲撃魔法を使おうとするのはにフェレットは驚く、素人でそこまでできるなんて…あの子はいつたい？

『標的のロックオンは私が行います、合図とともにトリガーを引いて下さい』

「はい！」

レイジングハートになのはの足し生えてきたものと同形の光の翼が出現し、その先端には桜色のエネルギーが集束、光の球体を形作る。

だが異相体は果敢なく宙を動き回り、中々ロックできそうにない。

そんな時。

「デیفエンスミラー！！！」

騎士がそう叫ぶと、かざした両腕から半透明の十字架に酷似したクリスタルがいくつも出てきた。

十字架の群れは異相体の周りに密集し、球体となって閉じ込めた。異相体は体当たりをして、光の牢獄を抜けようと試みるが、牢は頑強でびくともしない。

「ミラー！ウエイト！！！」

光の騎士は今度はそう叫ぶと、閉じ込められた異相体の周りに、同じ形状の十字架が4つ出現。

同時にバリアを解除した。

「えっ!？」

なのはとフェレットは、当初騎士の意図が分からなかったが直ぐに理解できた。

異相体は、見えないロープに縛られたかのように動きを封じられている。

「今の内に封印を！」

「はい！」

『A t a r g e t , l o c k o n 』

杖のターゲットマークが異相体を捕える。

『今です!』

杖の指示通り、引き金を引くのは、レイジングハートからすさまじい桜色のエネルギーが発せられ。

「シルバーアアアアーークロス！」

同時に騎士は両腕を×字に構え、水平に広げると十字型の光の刃を発した。

桜色の奔流と黄色い光刃は地上の異相体へと正確に命中し。

閃光とともに影は消滅していった。

『Nice, a shot』

排熱筒らしきところから煙を排しながら、なのはを褒めるレイン
グハート。

『降りられますか?』

「あっ…はい」

浮遊状態からゆっくり降りて、地面と着地するなのはと騎士。

「あ…あの…助けくれてありがとうございます」

「こちらこそ、わたしだけでは、ここまで穩便にことを済ませられ
ませんでしたから」

騎士は紳士のような佇まいで片手を胸に置いた。

なのはは、彼の発する声と言いまわしに、聞き覚えがあった。

どこかで聞いたことがあるんだけど…まさか…

「僕からも協力に感謝します、ですがあなたはいつたい?」

「やっぱりフェレット君も誰か知らないんだ。」

すると騎士は突如光り輝いた。

その光が収まると、そこにいたのは、なのはにとって、馴染みあ
るどころではない人物だった。

「ひー光兄っ!」

「その…光兄って何者なの？あの姿って」
「なのは先に、彼が変身した『鏡の騎士』のことを聞いた。」

「僕が高町家の養子だったことは、知っていますよね？」

「うん」

「僕は、地球とは違う、別の世界から来ました」

「この子と同じ？」

「いえ…そのフレット君とレイジングハートと呼ばれた魔法の杖のいた世界とも違うところからです、実はさっきの姿が、僕の本来の姿で…本当の名前はリヒト・シュピーゲル、騎士名はミラーナイトと言います、この姿の時はいつもの呼び方でいいですよ」

「どうして…その…地球に来たの？」

「僕はかつて、宇宙を守るとある防衛チームのメンバーとして活動していました、しかし1年前に、詳しく言うと長くなりますが、時空の歪みに巻き込まれ、仲間とも散り散りになり、偶然この地球の、なのはが生まれたばかりの頃の高町家の庭に迷い込み、その際彼らに助けられ、そのまま一家の養子として暮らすことになったのです」

「にゃはは…そうなんだ…」

「なんともアメモコミやら、特撮番組やらで、出てきそうな絵空事ではあるが、あの姿といい、空を飛んだことといい、手裏剣みたいな光線技といい、それらを直に見ている以上、本当のことだと信じられた。」

「他にも色々聞きたいことがあったが、光兄の言う通り、長くなりそうなので、次の機会に聞くことにした。」

「気がつかれたようですよ」
「えっ？」

光兄の言う通り膝に目を向けると眠っていたフェレット君が起きていた。

「すみません……」

「怪我……痛くない？」

「平気です……もうほとんど治っているから……」

フェレット君は体を揺ると、包帯が解かれ、地面に落ちた、確かにあちこちあった傷がほぼ無くなっている。

「ほんとだ」

「それも『魔法』で直したのですか？」

「はい」

「ねっ、自己紹介してもいい？私、高町なのは、なのはでいいよ、えーとこの人はわたしのお兄さんで」

「ミラーナイト……今は高町 光リヒトと言います、光と呼んでください」

「僕はユーノ・スクライア、ユーノが名前です」

「ユーノ君か……かわいい名前だね」

「すみません……あなた方を巻き込んで……」

「そうですね………僕はともかく、妹を巻き込んだ罪は重いです……」

「ひ……光兄？」

あ……あれ？なんでだろ？いつもより光兄の声のトーンが低いよう
な……ひよっとして怒ってる？

なんか……光兄の体から黒いオーラを感じるの………気のせいでしょうか？

今まで、怒りのいの字も見たことが無かったのに……

「さて……どう償ってもらいましょうか……」

髪に隠れて表情は見えないが、なのはの懸念は当たっていた。

光はユーノをなのはから取り上げると彼の体を驚掴みにした、相
当きつく縛っているのか、ユーノは必死でもがいているがほどかせ
てくれない。

「フェレットって……どう調理すればおいしく食べられるでしょうか
？」

さりげに物騒なことを呟いた。

「まっ！待って下さい！キュウ！キュウ！」

「光兄！落ちついて！」

「止めないでくださいなのは！こいつはなのはを誑かそうとする悪
徳セールスマンです！陰湿な外道です！淫乱な獣です！災厄を起こ
し、なのはに絶望を与えるインキュベーターです！今のうちに始末
していかねば！」

今違う某魔法少女モノのアニメの営業マンが出てきた気もするが

……スルースルー

「く……苦しい……」

「私のことはいいから、ユーノ君を許してあげて！」

ミラーナイトからシスコンナイトになって暴走する光の凶行を、
なんとか阻止したなのは。

とりあえず今日は家に帰り、ユーノから話はその後聞くことにした。

こんな遅くに外出したから皆心配しているだろうな…
なのはの予想通り、案の定家に帰ってみると…

「おかえり」

恭也が玄関前で待っていた。

流石にその表情は険しい。

「二人ともこんな時間にどこへお出かけだ？」

「あ…その、えーと」

声が聞こえて、なんとなく声がして病院に行ったら、色々起きて…
…どうしよう…どう説明したら。

「今日なのはがフェレットを助けたって話したでしょう？なのは、
この子のが心配で様子を見に出かけたんですよね？で、僕はそ
のなのはが心配だったので後をつけて、こうして二人で帰ってきた
んです」

言い分が思いつかずにくらぶところを、光兄が助け舟を出してくれ
た。

「気持ちは分からなくてもないが、だからと言って内緒に行くのはい
ただけない」

「その…内緒で出かけて、心配掛けて…ごめんなさい」

「僕からも謝ります、無断で出かけたことは一緒ですから」

「まあいいさ、二人とも上がりなさい」

「はい」

こうして第一関門はクリアした。

問題は第二関門である、特にユーノにとっては災難な試練だ。それは何故かと言うと…

「かゝわいい ほんとにかわいいわね」

「お母さん！ほどほどに！」

母桃子のかわいいもの嗜好症は想像以上で、その愛でっぷりも予想以上だった。

今何歳だと思っているのだろう、だが歳を想像するだけであの世行きが決定しそうなので詮索はやめておこう。

『ペット禁止』と言われるよりはまだ…いいですよね？

「ずいぶん賢そうな『イタチ』だな」

父士郎の本日二度目のボケが来た。

「フェレットだよ…お父さん」

訂正する美由希、実際フェレットはイタチの仲間なのでイタチと呼んでも間違っではないが…

「何か芸とかするのかな？ほれ」

士郎は自分の掌をお手の要領でユーノに差し出すと。

当然中の人（？）は人間なので、士郎の意図を理解したユーノはお手をした。

「ほんと賢いわね」

結局その夜は色々どたばたして、事情を聴くことができず。明日に持ち越しになってしまった。

そして光＝ミラーナイトはと言うと……

「あんな醜い姿を………なのはに見せてしまっなんて………」

その後、妹にブラコンという名の醜態を見せてしまったことを後悔し。

「なんて…愚かしい…」

自分の部屋で体育座りになって、かつて故郷の星の海の中で披露した、あのおなじみの

『引きこもりモード』

になって落ち込んでいた。

E p i s o d e 4 - M I R R O R K N I G H T a n d W I T C H

次回はキャラクター紹介になります。

〔キャラ紹介 part1〕 修正版（前書き）

注意：本作では、ウルトラマンゼロにフルネームを付けたりと、作者独自の設定が多いです。

初代マンに限らず、ウルトラマンって本名不明な人が多いんだよね…
メビウスだって、彼の人間体であるヒビノ・ミライのモデルになった人物がメビウスをそう呼んだために、本人がそう名乗るようになったって設定だし。

「キャラ紹介 part1」 修正版

? 諸星勇夜 (本名:ゼロユウヤ・ヴェアリースター、ZERO
ユウヤ・VARYSTAR)

身長:178cm (無印、A・S編)

容姿:ポニテをした両儀式、ややきつめな吊り目、群青色の瞳、黒髪、ゼロの時のように強固さと柔軟さを兼ね備え、鍛え上げられた体躯 (ガンダムW エンドレスワルツのトロワくらい鍛えてる)。

魔力光:青緑色

CV:宮野真守

概要:ウルトラマンゼロの本二次創作においての変身体。

本作での人間態の名前はゼロの本名 (オリ設定) のミドルネームを漢字表記にし、セブンの代から使っている諸星も、その名字を日本語に訳した設定 (VARYSTARユウヤ STAR 諸々の星 諸星)。

ヤプールの起こした次元振で、ミットチルダに飛ばされ、その際4歳児に肉体が退行、助けてもらったナカジマ家に引き取られる。

ゲンヤ・クイント夫妻とスバル・ギンガ姉妹との仲は良好 (クイントは母さんと呼んでいるが、ゲンヤのことは実父のセブンが御存命なのでおっさんと呼んで慕っている)。

『ある事件』でクイントが管理局員を引退し、専業主婦になるまでは勇夜が義妹たちの面倒を見ていたので、料理含めた家事能力は『主夫』並。

退行の影響で一時はゼロへの変身もできなくなったが、無印編の頃には問題なく変身できる。ミットチルダでの戸籍上は15歳だが

実年齢は3000歳ほど、ミットチルダに飛ばされて以降も鍛錬を怠らなかつたので並みの魔導士なら複数相手でも徒手空拳だけで圧倒でき、その身体能力は全身義体のサイボーグ並。

魔法を使わずとも、魔導師を倒してしまうことから、『魔導殺し』という異名を付けられている（本人は特に呼ばれることに抵抗は無い）。

ポニーテールの位置はリンディヤシグナムより下（一番髪型のイメージに近いのはコナンの主題歌をよく担当するユニット『GARNET CROW』のボーカル、中村由利が『スパイラル』というシングルのジャケット写でしている髪型）、ちなみにポニーテールにしている理由は、「親父（セブン）と同じ髪型だから」。

意外に策士なところもある（カマをかけて、フェイトからロストロギアを集める目的を聞き出したりとか）。

ナカジマ家での生活を経て、相手によっては敬語を使うなど、不良時代から比較してかなり性格が丸くなり、普段はクールに振る舞っているが荒っぽさとその内に秘める優しさと意外にシャイなところと啖呵を切る熱血漢な一面は健在。

オリジナル設定として、K76星での修行時代にレオから剣術のノウハウも叩きこまれているので、日本刀を使った剣の腕前も達人級。

管理局員であるナカジマ一家や一部の人間を除いて管理局とは距離をとるスタンスをとっている。これはかつて力を渴望するあまり身を滅ぼしかけた経験から、『どんな力にも危険性と隣り合わせ、その使い手もまたしかり』という持論を持ち、魔法を『クリーンな力』と称し、それ以外の兵器、能力に排他的な管理世界の価値観に懐疑的、彼曰く魔法は『BB弾と実弾をスイッチ一つで切り替えられる拳銃 and 使い手そのものを大量破壊兵器に変える力』。

そのためその気になれば執務官などの高官に出世できるだけの実力があり、資格も多数持ちながら囑託止まり。

人間体での戦闘は、主に体術による肉弾戦と刀などに変形させた

零牙による近接戦闘がメインだがテレキネシス（ウルトラ念力）などによるウルトラ戦士の能力や遠距離魔法を状況に応じて使用するオールラウンダー。

日頃の鍛錬の賜物か、念力と透視とテレパシー以外にも、ある程度ディフレーターエネルギーを（DBの気的要領で）使えるようになる。ただしウルトラマンの時ほどの大規模、大火力な光線等の遠距離攻撃は使えず、ベルカ式を彷彿とさせるような、己の肉体や得物にエネルギーを纏わせ攻撃力を向上させての使用とバリアくらしいが使えない、それをカバーするために魔法を取得している。発動までのタイムラグが魔法より遙かに短い、当然非殺傷といった設定はできないので人体への使用は禁じている。

バリアジャケットは黒こげ茶色のジャケットと黒インナー、ジーパンと簡素で、ドラマに出てくる型破りな私服刑事風な出で立ち、魔力フィールドは消費量を軽減させるため、フェイト以上に薄めで、被弾直前に瞬時にフィールドの強度を強めるよう設定（強度の調節はリンクが行っている）しているが、時にジャケットを形成せずにその時着ている服に魔力フィールドを貼るだけの時もある。

私服は、刹那がの劇場版で着ていた私服を明るめの色にしたもの（パーカーが白だったり）や、クウガの五代雄介、555のたっくん寄り。

なんか心身ともに、公式以上に刹那っぽくなってしまったが、そこはご愛敬。

?ウルトラマンゼロ

身長：ミクロ〜49m

体重：3万5千トン

概要：諸星勇夜がウルトラゼロアイで変身する。ご存じウルトラゼブンの息子で、ウルティメイトフォースゼロのリーダー。

本作ではダン（セブン）とアンヌの間に生まれた（封印したU

キラークザウルスを見張るために神戸に滞在していた頃に結婚しゼロを出産している）設定。

本名のゼロ「ユウヤは、ダンとアンヌからそれぞれ付けられた（ゼロはダンから、ユウヤはアンヌから）。

地球人の血を受け継ぐゆえか、平成ウルトラマンではお馴染みだが、基本体色が赤あるいは青の単色が多いM78星雲出身のウルトラマンでは珍しく2色のカラーラインを有し、他の光の国生まれのウルトラマンより地球での活動時間は長い。それでも地球圏内では50mサイズの形態を長時間維持できないことに変わりない。

ゼロと師匠のレオが取得している『宇宙拳法』は本作では一種の総合武術であることになっている。公式のゼロも、剣と弓矢の腕前が高いので。

ウルトラマンノアからバラージの盾（リンク）を授けられた際、彼の光を浴びたことで一部ノアの間形態であるネクサスの技も使用できるようになった。

リンクのサポートで、次元の壁を超えられるが、行きたい先の世界がどこにあるか予め特定、把握していないと、その目的地には行けない、現状光の国に帰れないのはこのため。

ちなみに体内で生成されたディフレーターエネルギーと魔力は一定以上の量になると互いを相殺してしまうので、結界魔法（主に周辺の被害防止の処置として、メタフィールドの代わりに使う）などの一部を除いて魔法の使用ができなくなる。

【ウルトラマンゼロ技一覧（一部オリ技、名称アレンジ有り）】

ゼロツインシールド

ゼロスラッガーを胸部に装着することで、スラッガーに蓄積されているエネルギーを光線に変化、自らのエネルギーと相乗してカラー

タイマーとゼロスラッガーから広範囲に照射する必殺光線。

ウルトラゼロキック

右足に全エネルギーを集中させて赤く燃え上がらせ、敵に飛び蹴りを叩き込む。

エメリウムスラッシュ

額のビームランプから発射する光線。ピンポイント射撃に有効。

ワイドゼロショット

し字を組んだ右腕から放たれる強力光線。発射の際、師匠のウルトラマンレオのように左腕を横に伸ばすポーズをとってエネルギーをチャージする。

サイクロンストリーム（サイクロン光線）

左手をカラータイマーに翳し、エネルギーチャージして、竜巻状の光線を発射する技。

ブレイズスパーク（ハナビ光線、ファイヤースパーク）

両腕に光球を作り、着弾時に花火のように鮮やかな拡散爆発を起こして敵を巻込ませるビームを幾つも放つ技。

ゼロスラッガー

頭部に装着している二つの宇宙ブーメラン。ウルトラ念力でコントロールする。飛ばすと緑色に発光、高速回転して敵を切りさく、接近戦ではナイフとして逆手に持って使用する。

ブレイドスラッガー

ゼロスラッガーを、鏢無しの刀の柄に変形させ、メビウムブレードのように光刃を形成させたオリジナル形態。メビウスやヒカリの

ものと違って、日本刀を模した片刃。

アークスラッガー

ゼロスラッガーを弓に変形させた形態、矢の形状に圧縮させた太陽エネルギーを発射する。初期設定を再利用したオリジナル形態。

ゼロツインソード

ゼロスラッガーが三日月状の剣 に変形した大剣。公式と違って、刃の長さが異なる左右非対称。

長い方の刀身は『ギルティクラウン』の主人公が特殊能力でヒロインから取りだした大剣をイメージ。

プラズマスパークスラッシュ

ゼロ最大の必殺技で、プラズマスパークの光のエネルギーで敵を一刀両断。

ノックスピンスラッガー (ウルトラキック戦法)

空中にゼロスラッガーを静止させ、そこにスピッキクを放つことで加速させ、相手を切断する技。

ゼロフィストアロー

オリジナル技、手先から発射する矢尻型光弾。威力は低いが連射可能

ビームゼロスパイク

手先から放つ、電撃を発生する光弾。

シューティングゼロ

手先から放つ光線。主に牽制に使用される。元はセブンのシューティングビーム

ウルトラゼロスラッシュ
ゼロ版「八つ裂き後輪」

バーティカルサイクラー
胸のプロテクターのエネルギーを光の刃に変えて、両腕を伸ばして発射する本作オリジナルの切断技。

ナツクルゼロショット
オリジナル技、掌から破壊光弾。

スパイラルゼロビーム
腕から発射する、リング状に伸びる光線。

ミラージュゼロ
全身から発する光で敵の動きを止める、ノア（ネクサス）から受け継いだ技。

マツハムーブ
体を光らせて高速移動する。前述と同じ。

セービングビュート
敵に絡ませたり、人質を助けることに使う光の帯。前述と同じ。

メディカルパワー
生命力を活性化させる光線。勇夜の姿でも治癒魔法の代わりによく使う。

ゼロボディスパーク
全身からエネルギーを放出し、自分を捕らえている敵を痺れさせてふりほどく。

ゼロブリザード

ゼロが両手から発射する冷凍光線。

ウルトラゼロレクター

カイザーベリアルの洗脳ウイルスに冒されたミラーナイトなど、何らかの作用で洗脳された生命体を浄化させる全身発光現象。

ウルトラゼロディフェンサー

巨大な光のバリアを作り出す防御技。円形や四角形など形状も大きさも自在に変えられる。

クロスゼロバリアー

両腕を交差させて、敵の攻撃を防ぐ。防御範囲はゼロディフェンサーより狭いが、その分省エネ。

アクセレートスラッガー（ゼロスラッガーアタック）

ゼロスラッガーを構え、マッシュムーブで敵陣に突入し、周囲の敵を一掃する。

ウルトラゼロパワー

両腕で相手を頭上に持ち上げて、地面に叩きつける荒技。またバリエーション技として、怪力で相手を運搬する「ウルトラゼロリフティング」もある。

ゼロボディアタック

跳躍して繰り出す体当たり技。他にも飛行中の状態から繰り出す同種の体当たり技「ゼロフライングアタック」もある。

ゼロドライバー

相手を空中に放り投げプロレス技のパイルドライバーの体勢でキヤツチ、急降下して敵を頭から地上に叩きつける。グレンファイヤーの「グレンドライバー」を元に編み出した。

ゼロパンチ

接近戦で繰り出すパンチ技。敵の弱点を見定めて打ち込む。

ゼロナツクル

エネルギーを集中させた拳で打ち出す強化パンチ。

ゼロキック

ストリートキック、回し蹴り、ハイキック、両足キック等。

ゼロチョップ

接近戦で繰り出すチョップ技。敵の皮膚を切り裂く威力を持っているとされる。

ゼロスピンキック

空中でもみ回転しながら急降下する回転キックでレオの「錐揉みキック」をアレンジしたもの。

ゼロニードルキック

ジャンプして相手に膝蹴りを浴びせる。片足を使うタイプと両足使用のタイプがある（片足verはダークロブスゼロに、両足verは銀河伝説で披露したもの）。

ゼロヒールハンマー

オリジナル技、空中からの踵落とし、ウルトラゼロキックのバリエーション技。

ハンドゼロスライサー
エネルギーを集中して叩きつけるチョップ。

ビッグバンゼロ

自らの拳に炎を発生させ、そのまま相手に手刀を打ちこむ。ハンドゼロスライサーの強化版。

ビックウエーブゼロ

オリジナルの手刀技。両手にエネルギーを集中させ、流れるように素早く幾度も両手手刀を振るう。ビッグバンゼロのバリエーション技。

ウルトラゼロスウィング

怪獣や尻尾や宇宙人の足を両手で抱え、何度も振り回して遠方へ投げ飛ばす技。

トウインクルウェイ

光り輝くワームホールの道を作り出し、何万光年も離れた場所を一瞬で移動する技。リンクの補助を借りることで、次元の壁を抜けることもできる。

?リンク (ウルティメイトブレスレット)

イメージCV: 芳野美樹 (Z・O・EシリーズのADAエイダの中の人)
or 甲斐田裕子、読者の好みでお読みください。

概要: ウルティメイトブレスレットが次元振動の影響で、自我が目覚め、デバイスの機能を宿したアイテム、勇夜により『リンク』と命名される。

本二次創作では、ウルトラゼロブレスレット (映画の劇中では

予備エネルギーを全て使い果たした時に消滅したが、本作では単に機能停止しただけ）と融合した設定。

特に性別は無いが、声と口調は女性寄り。

普段はスタンバイモードに相当する指輪サイズで勇夜の左手中指にはめられているが、戦闘時にはゼロの時と同じく、ブレスレットサイズになって左腕にはめられる。

常に勇夜を気遣いサポートする冷静沈着な性格だが、ウルトラマンノアの記憶をある程度受け継ぎ（いつノアが誕生したのかは、当のノア本人もリンクも覚えていないらしい）、良くも悪くも世界の白い一面も黒い一面も灰色な一面も、甘味も苦みも知るゆえか、毒舌を吐いて勇夜に突っ込まれる一面も。また、ゼロの影響を少なからず受けており、冷静さは保ちつつもゼロ顔負けの啖呵を切ることがある。

同じノアから生まれた分身同士で、写し鏡的な存在であるダーグザギのこともあり、マスターと呼んでいる勇夜にゼロ以外に使われることは断固拒否する姿勢をとる。

表向けはインテリジェントデバイスと見なされているが実際は光の国のオーバーテクノロジーとノアの神秘の力が合わさった、管理局からロストロギアに指定されてもおかしくない代物。デバイスと同じく所謂4次元ポケットに似た機能も持ちウルトラゼロアイと予備の太陽エネルギー、零牙、旅道具など色々保管している。

保管できる容量は、通常のデバイスより多い。

普段は彼女でも外せないリミッターがかけられており、ゼロがウルティメイトゼロになるためには、ジャック（帰マン、新マン）の変身方法よろしく、ウルトラマンの力をもつてしてもどうにもならない状況にならなければ解除されない仕組み。

本作で一番、作者の趣味が反映した結果、マリーダさん成分が入ったADAエイダになってしまった。だってADAは作者が初めてAI萌えしたキャラなので。

【零牙】

勇夜が自ら設計した、非人格型アームドデバイス。音声機能もつけていない。

様々な形態をとれる一方、AIを搭載させないことで、構造の複雑化による脆弱化を避けている。

スタンバイモードはウルティメイトイージスの胸部部分を（中央の青い発光体を除く）黒く染めたものをイメージ。ウルトラゼロアイと同様に普段はリンクが保管し、必要時に直接デバイスモードとして出現させるので、余りスタンバイモードはお目にかかれない。通常はストレンジデバイスのように勇夜の意志で魔法を発動するが、リンクの意識と直結させているので、彼女の意志でも発動可能。ある意味リンクとは二つで一つのデバイスと言える。

全形態共通の特徴として、カラーリングは黒がメイン、持ち手部分は木製グリップ、カラータイマーによく似た光沢がある。

新型のカートリッジ、名称『カートリッジシステム（ベータ）』を採用。

考案者は勇夜とリンク。

今までのカートリッジが高圧縮された魔力を込めた弾丸を単体、あるいはマガジンに入れて使用していたが、このタイプは長方形型の魔力を溜めたバッテリー（形状はUSBに似ている）を使用している。それまでのカートリッジよりも多量の魔力を蓄積でき、搭載デバイスの機構の複雑化（弾丸の排莖システム等）も避けられ、充電式電池と同じ、何度でも使用できるというメリットもあるが、弾数制限が無いので扱いもより難しく、現状このシステムを搭載しているのは零牙のみとなっている。守護騎士たちのデバイスと違い、フルドライブ形態のガンソードモード以外はカートリッジを消費しなくとも形態を変えられる。

・ブレイドモード

日本刀タイプの零牙の基本形態、勇夜の戦闘センスと相まって、魔力などのエネルギーを刀身に込めなくてもデバイスを切断できる切れ味を誇る（劇中ではバルディッシュがその洗礼を受けた）。

・ダガーモード

零牙を二振りのナイフに変形させた形態、刀身が短くなった分小回りが利き、ゼロスラッガーのように逆手に持ち、同様にウルトラ念力でブーメランの様に投擲してコントロールできる。

・ガンモード

ハンドガンの形をした射撃形態、魔力を弾丸状にして発射する。取り回しと連射性は後述アローモードより高い。銃の形はXライダーのライドルガン（テレビ本編では未登場）をFate/Zeroの衛宮切嗣が使用するコンストリクターと同じ、中折れ単発式にしたもの。

・アローモード

弓型形態、魔力を高圧縮した矢を発射する。ガンモードより強力な遠距離攻撃ができ、貫通力も高く、射程距離は長いが、連射性は劣る。

・ガンソードモード

ゼロスラッガーのゼロツインソードに相当する大型の銃剣。フルドライブ形態。バルディッシュのザンバーフォームと同じく無詠唱での結界破壊効果がつくなど、一振りだけでも絶大な威力を誇るが、その分消費量が激しく、この形態を使う際はウルトラマンへの変身を断念せざるを得なくなる。

? フェイト・テストロッサ

CV: 水樹奈々

概要: 後に高町なのはの親友となる魔道師の少女。

変更点として、外見年齢は小5くらいと原作より2歳繰り上げ。

勇夜とは、最初敵対したが、彼の『魔導殺し』として洗礼を受け、停戦協定に近い関係からスタートする。

雷の魔力変換資質、機動力を生かした接近戦がメイン、アリシア・テスタロツサのクローンで、母のプレシア・テスタロツサから虐待を受けながら、母が指定するロストロギアの収集を違法で行っている点は原作と同じだが、本作では勇夜、なのはと母の板挟みになる余り、情緒不安定になる一面もある（A's編の頃には改善済み）。

バリアジャケットのインナーやスカートは無印のものだがマントは劇場版仕様。

最初こそ初めての異性で、かつ完敗を喫されたこともあり、勇夜を警戒していたが、次第に惹かれ、彼がウルトラマンだと知ってもなお、それでも彼の力になりたいと思うようになる。

というかベタ惚れ、女の子が恋して何が悪い！

原作より泣いている回数が多くなりそう。

？バルディッシュ

概要：フェイトの乳母兼家庭教師でプレシアの使い魔であるリニスが開発した、彼女の愛機。

デザインと形態は劇場版準拠だが、口調は無印寄り。

原作でも幾度か壊れる展開が多かったが、本作ではのっけから、勇夜と零牙によって一刀両断されてしまう。

？アルフ

CV：桑谷夏子

概要：フェイトの使い魔、狼が素体で、病気で群れから見捨てられたところをフェイトに救われ、「一生一緒にいる」という内容で契

約を結んだところは同じ。

フェイトとは姉妹のような仲だが、感情を押し殺して戦う主に無力さを感じている。

格闘戦には自信があつたが、勇夜に完膚なきまで打ちのめされて未熟さを痛感、無理を承知で彼に指南を頼み。勇夜（ゼロ）から父セブンと師レオ譲りのスパルタ特訓を受けさせられることになる（さすがにジープで追いかけられたりはしない）。

そんなこともあり、無印終了時点での実力は、原作より高めで、一番心身共に成長度合いが高くなるキャラ。

A's 編に先駆けて、子犬フォームを登場予定。

?高町光（本名：リヒト・シュピーゲル）

身長：175cm

容姿：顔と髪型はテイルズ オブ エクシリアのジュード・マティスにイメージ。体格はミラーナイトの時と同じく細身でスマート。瞳の色はエメラルドグリーン。

魔力光：黄緑色

CV：緑川光

概要：本作でのミラーナイトの人間態。光はひかりと書いてリヒトと呼ぶ、どちらも『光』を意味している。シュピーゲルは「鏡」を意味する。

彼が人間態になれるのは、地球人に酷似したエスメラルダ人の血を受け継いでいるから。

独自設定としてご先祖は、かの二次元人と地球人のハーフである

ミラーマンこと鏡京太郎。惑星間ネットワークを開く夢を持っていたのは、先祖の故郷に行ってみたいという願望もあったから。

エスメラルダ人の母は、彼を生んだ時に無理がたたって帰らぬ人となり。彼はエスメラルダの騎士でもあった父（ベリアル軍の侵攻で殉職）に男で一つで育てられ、彼も父に憧れ騎士となり、『ミラーナイト』という騎士名を王族から承れる。ただし、自分を生まれたことで母を死なせてしまった罪悪感を一時期抱えており、父に対しては『騎士』としては尊敬していたが、『親』としては反抗的な態度をとり、複雑な感情を抱いていた。

ヤプールの次元振で地球に飛ばされ、ゼロと同様に幼児退行、自分の正体を話したうえで高町家の養子となる。なのはだけは当時赤ん坊だったので、彼がミラーナイトであることを知らなかった。

生来の性格もあるが、騎士としての生活が長かったので、普段から敬語混じりの口調（デイケイドの夏ミカンみたいに）。

末っ子のなのはとは兄妹仲が強く、彼女が抱える孤独も、自分より他人を優先する危うさも感じとっており、時にはシスコンと言われるほどの身の身を案じている。ぶっちゃけキャラ崩壊レベル（シスコンナイトモードになった彼の主な被害者はユーノ）。

御神流を習得しているので剣の技量も高く、奥儀の神速も使える。身体能力も勇夜に負けず劣らず。

人間体の時に使える二次元人の能力は現状ワープ能力のみ。

魔法はフェイト以上に斬撃タイプが主流で、戦闘スタイルも二刀流の接近戦がメインとなる。

落ち込んでいる時はやっぱり体育座り（笑）。

バリアジャケットは、銀と緑と黄色いラインが入ったジャケットに明るめの色のジーパン。

?ミラーナイト

身長：47m（人間サイズにもなれる）

体重：3万5千トン

概要：高町光が、二次元人の紋章が形作られたペンダント『ミラー
ジュアイズ』を使い、ミラーマンと同じく「ミラースパーク」と叫
んで変身する。変身アイテムのおかげで本家のように鏡、鏡面が無
い場所でも変身可能。

ウルトラマンティガ・スカイタイプと同じく、俊敏性を生かした
柔の戦闘が得意なので、パワーでは他のメンバーに後れをとるが、
そこはテクニクでカバーするトリックスター。

ゼロと同様、二次元人の能力を最大限発揮できるが、この姿での
魔法の使用はほとんどできなくなる。本作での魔力エネルギーは
非殺傷設定などのメリットと引き換えに、他のエネルギーとは犬猿
の仲、水と油で我儘な代物。

【ミラーナイト技一覧】

ミラーナイフ

指先から発射する手裏剣状の光線。連射が可能で主に牽制で使用す
る。

ディフェンスミラー

十文字の形をした半透明のバリア。大きさも形状も自在に変えられ
る。オリジナル設定で、ミラーマンのようにパントマイムの要領で
中空をなぞるバージョンもある。

シルバークロス

両腕を交差して、巨大な十文字の光の刃を発射する必殺技。

ミラームーバー

鏡、それに準ずる物体の間を瞬時にレポートする。劇中ではこの
能力でレイジングハートから出現し、なのはを助けた。

ナイトムーバー

自分以外の人間、生き物、物体をテレポートさせる。公式ではエメラナ姫をジャンバードに転移させた。

ミラーハレーション

鏡面を使わないテレポート。エネルギーの消費量がミラームーバーより多いので余り使用しない。元ネタはミラーマンの技。

ミラーウエイト

オリジナル技、特殊な重力波を放出する見た目はディフェンスミラーによく似た十字の光で相手の動きを封じる。

ミラーエッジ

オリジナル技、手の甲から、光の剣を形成して切れく。みためは天使こと立華奏のハンドソニック。

ミラーセイバー

ミラーエッジから直角状（ミラーマンのシルバークロスをイメージ）の光刃を放出するオリジナル技。

ミラーエナジー

オリジナル技、とっ組み合いになった相手にエネルギーを流し込んで怯ませる技。

ミラーズリング

切断技、ウルトラマンの八つ裂き光輪を元にミラーナイトが編み出したという設定。

ミラーデコイ

鏡で自分や味方の姿を映した囷を作り出す技。相手が破壊するまで気づかれないほど周囲に擬態する。

ベリアルも観客も、かくいう作者も騙された。

？高町なのは

CV：田村ゆかり

概要：本シリーズの主役。

基本的な性格と戦闘スタイルは、アニメ版と大差無いが、年齢はフェイトと同じく2歳繰り上げで、言動はより歳相応で、とら八なのはみたく感情を荒げる場面もある（多少その年齢で言うセリフじゃない感は抑えられるかと）。

スタンスもウルトラマンコスモス寄りになる（最後まで話し合いを求め、どうしても断念せざる得ない時に武器を取る………あれ？あんま変わって無い？……でも2期のように「話を聞いて」と言いながら砲撃をぶつ放してヴィータをブチ切れさせる事態にはさせない）

幼い頃から何もできずに守られてばかりいた自分にコンプレックスを感じており、魔法との出会いは正に転機となる。

自分の孤独を最初に知ってくれたため、光を光兄ひかりあにと呼んで慕っている。

できるだけ、「悪魔化」、「魔王化」、「頭冷やそう化」の運命を回避させるつもりです。

スターライトブレイカ を使ったなのはに、勇夜と光が「やり過ぎ」と断じ、ボロクソと言いたい放題言われて、義兄直伝の体育座り（笑）を披露するとか…やっぱりなのはストッパーになってくれる人がいなかったことが前述の俗称を付けられる要因になったと思いますので…

ゼロの父であるセブンが三期前のなのはと同じ「無茶をし過ぎて能力を一度失った」境遇を持っているので撃墜フラグも避ける予定じゃあ三期はどうなんのって？それを必死で思案中。

バリアジャケットは基本劇場版仕様だが、本作ではテレビシリー

ズにはあつた赤いリボンが付いている。

? レイジングハート

概要：なのはの愛機となるインテリジェントデバイス。

形状と形態が劇場版仕様な以外は、特に変更点無し。

無印では、バリアジャケットと形態はなのはのイメージから、劇場版ではレイジングハート自身が作り上げたが、本作ではバリアジャケットはなのはが思い浮かんだ学校の制服を元に生成し、自身のデバイスの形態はなのはの魔力資質に最適な形態を自ら選択した設定。TVと映画がごっちゃになっているのはこのため。

原作ほどパートナーの無茶を助長させる行為はしないよう心がける予定。

翻訳機能で、なのはには基本日本語で喋っている。

? ユーノ・スクライア

CV：水橋かおり

概要：シリーズファンの間で淫獣という不遇な名前を付けられた、結界魔導師の少年。

なのはたちと同じく、歳を繰り上げて本作では13歳の設定。

責任を感じて、独自に地球にばら撒かれたジュエルシードを回収しようとして失敗し、なのはにレイジングハートを譲る展開は同じ物心つくまえに両親は発掘作業の時の落盤事故で帰らぬ人となっている（公式では両親がどうなったのか明言されていないので）。

ゼロ ミラーナイト 勇夜や光からも淫獣、フェレット・イタチもどきと呼ばれたり、扱われ方が雑なところは健在。でも終盤に近づくにつれて活躍できるようにします。

〔キャラ紹介 part1〕 修正版（後書き）

ゼロもミラーナイトも、人間体でもとんだチートになっちゃったな…

最近、Z・O・Eシリーズの動画を見て自分の中のADA熱とAI萌え熱が再発、イメージCV選択制という暴挙に出てしまいました。だってADA、クーデレで乙女で照れ屋で、突っ込み気質もユーモアある作者にどストライクなキャラだから。

次は本編再開です。

Episode 5 - 来訪者たち

なのはが、異世界から来た人々と出会い、魔法使いをデビューして初陣を飾り。

高町光が久しぶりに本来の姿である『ミラーナイト』になり、義妹を助けるべくその姿を晒した。

その翌日。

今なのはの部屋では、なのはと異世界から来た義兄の光、光のとも違う世界から来たフェレット「ユーノ」があり、今ユーノが地球に来て、なのはに拾われるまでの経緯を話していた。

それをざっくり光が…

「つまり、君の一族は、世界を回りながら遺跡発掘をする部族で、そのジュエルシードと言う発掘品を運ぶ途中事故にあい21個全部がこっちに落ちてきてしまい、責任を感じた君は回収しようとしたが失敗、まだ傷が癒えない中怪物になったジュエルシードに襲われ、やむを得ず、魔法の素質がある人に片っ端から呼び掛けたら、昨夜の事態になった……」と言っことですね」

要約した。昨夜ほどの暴走はどこへやらな冷静さだが、その落ち着いた言動にはまだ棘がある。

「その通りです…」

「でもちよっと待って、そのジュエルシードがバラまいちゃったのって、全然ユーノ君のせいじゃないんじゃない…」

ジュエルシードは発掘したのはユーノではあるが、その輸送には直接かかわってない、輸送事故に関して言えばユーノに落ち度は無かった。

「だけど…あれを見つけてしまったのは僕だから、全部みつけて、ちゃんとあるべき場所に返さないとダメだから…」

「責任を感じるのとは分かりますが、それで一人で突っ走ってしまっただことは問題ですね」

「光兄、まだ怒ってる？」

「当たり前です。彼のやったことは例えるなら、警察官が凶器を持った犯罪者を追いかけている時に、たまたま通りかかった民間人に捕まえてほしいと頼む様なものです」

光も攻めたくてユーノを攻めてるわけではないのだが、家族が巻き込まれてしまったことと、こういうことの為に自分の力があるのに巻き込んでしまったことへの責任からどうしても言葉がきつくなる。

「本当にすみません」

「反省しているようですし、もういいです」

「が、いつまでもねちねちと攻める気もない。」

「では今度は僕が話す番ですね、私はこことは別の宇宙の鏡の向こうにある世界に住む、二次元の民と呼ばれる種族の父とエスメラルダと呼ばれる惑星の地球人によく似た容姿を持つ、エスメラルダ人の母との間に生まれました」

「そんな世界、今まで聞いたことが無いのですが」

「それは僕の世界がこちらの次元世界とも違う別の次元世界、平行世界に存在していたからでしょう」

「あ……その平行世界の原理なら僕も分かります」

一人話しについていけない人物をよそに、光は話を続けていく。

その後成長したミラーナイトは、王国であるエスメラルダを守護する騎士として勤めていたが、別の宇宙から来て帝国を築き、各地に侵略を始めたカイザーベリアル軍に星を襲われ、王家の姫君の一人を、逃がし、命がけて王宮を守り抜いたが、カイザーベリアルによって彼の操り人形となるウィルスを注入され、自分の力が悪用されないように、二次元の世界で自らを封印したが、ベリアルと同じく、別の宇宙から来た戦士、『ウルトラマンゼロ』によってそのウィルスは浄化され、ゼロと、彼の心意気に、心動かされたものたちが団結したレジスタンス軍と協力しベリアル軍と交戦、その結末によって二次元の世界で封印されていた伝説の『バラージの盾』が復活、ベリアルとの戦闘で瀕死寸前まで追い込まれたゼロに力を与え、最後にはゼロと宇宙海賊の用心棒グレンファイヤー、エスメラルダ家に代々使えてきたロボットジャンボットと協力し、ついにベリアルを倒したのである。

そしてバラージの盾を受け継いだことで時空を自在に移動できるようになったゼロからのスカウトと、自らの力をもっと広い場で生かすために、ベリアルとの最終決戦に集った戦士たちと新たな宇宙警備隊。

『ウルティメイトフォースゼロ』を結成。

その活動としてのパトロールの途中、ウルトラマンとの因縁が深い異次元人ヤプールに怨念で誕生した『ウキラーザウルス』が復活、これと交戦。

ウルトラ兄弟とも協力して、なんとか倒したものの、倒した際、

ヤプールが最後の足掻きで次元振を発生、4人は時空の歪みに取り込まれ、仲間とはぐれてしまい、自分はこの地球に迷い込んだのである。

「その際、無理がたたったのか僕の体は、地球人で言うなら4歳児ほどまで幼児退行してしまい、高町家に拾われて、こうして今に至ったわけです」

「ごめん…よくわかんなかったんだけど…その…お兄ちゃんがミラーナイトさんだっことは家族みんな知っているの？」

「はい…高町家の皆さまには今言っていたいきさつを話した上で養子にしてもらいました、なのはに隠していたことは申し訳ありません、私が来た時にはなのはは生まれたばかりでしたので」

「にやはは…そうなんだ…」

内容が想像以上に神話の類と呼べるくらい壮大だったので、自分だけ彼の正体を知らなかったことに関しては、何も攻める気になれなかった。

それにしても外国を通り越して別の世界から来たという人間を養子にするとは高町家…恐るべし…

「あの一つ聞きたいのですが、レイジングハートから出てきたあの現象はいつたい」

「僕たち二次元の民は、鏡がそれに準ずるもの、例えばガラスや水面といったものがあればどこへでも瞬時にワープすることができま

す」

なるほど、確かにレイジングハートの赤いコア部分もそのワープを可能にする鏡面があった。

「ユーノ、僕からも質問があります、あなたの世界では、時空管理

局と言う組織が、この地球を含めた一部を除いて、多くの世界を管理していると言いましたね」

「はい…」

「なら11年前に、そちらの世界に漂流してきた人物がいたという記録を調べてもらえますか？」

「やってみます…レイジングハート、お願いできる」

『了解しました』

レイジングハートはユーノの指示通りネットワークにアクセスし調べら始めた。

「どういうこと？光兄」

「その世界の中に僕の仲間がいるかもしれない」

『アクセス完了』

「わかったの？」

『はい…11年前、ミットチルダで光様と同じ並行世界から来た次元漂流者が一人、保護された記録がありました』

「名前は？」

『ユウヤ・モロボシ、15歳、時空管理局嘱託魔導師』

「そうですか…」

「でも…その人が光兄の仲間かどうかは」

「いや、彼が私の仲間である『ウルトラマンゼロ』である可能性は高い」

「どういうことですか？」

「実は僕らの並行世界にも地球があり、彼の父は『モロボシダン』という名前で地球に滞在していた経験があると聞いたのです、それと同じ姓名を名乗ってるならひょっとすると……彼はいまどこに」

『現在、各地の次元世界を転々しているとあります』

「じゃあ、光兄を探してるってこと」

光は地球人として暮らしている今の生活に不満は無いが、ミラーナイトには時空を超える能力はないため、元の世界に戻るのには絶望

的と思っていた。

だがその能力を持ったゼロが、この次元世界にいるなら希望が見えてきた。

「レイジングハート、他にも光兄のお仲間さんが来たって記録は」

『残念ながら、他に該当する記録はありません』

「すみません、お力になれなくて」

ユーノは謝罪した。本当に真面目な子である。

「いえ…一人だけ行方がわかっただけでも、十分な収穫です」

内心なのは巻き込まれたことはチャラにしてもいいと光は考えていた。

となると残った問題は、

「それでユーノ君…これからどうするの？」

「僕の魔力が戻るまでの間、ほんの少し休ませてもらえたら、それだけでいいんです、一週間…いや5日もあれば、魔力が戻るからそれまで…」

「やはり、責任は自分で果たすということですね」

「はい…」

いくらしっかりしてようがまだこの子は幼い、さすがにこのまま、子ども一人、危ない橋を渡らせるわけにはいかないか…

光は自分も協力すると言おうとしたが…

「それ、わたしにも手伝わせて」

その前に、なのはが先起してきた。

「なのは!?!」

「なのはさん!?!」

「なのはって呼んで!」

「な…なのは…」

「本気なのですか?」

「学校と塾の時間は無理だけど、それ以外の時間なら…」

「なのは…気持ちはありがたいですが、これは遊びじゃないんですよ、昨日だって、一歩間違えば…」

「でも放っておけないでしょ、お父さんだっていつも言ってるじゃない、『困ってる人がいて、助けてあげられる力があるなら、その時は迷っちゃいけない』って」

確かになのはにはその『力』がある、レイジングハートのサポートがあるにしても、初陣であそこまで出来たのだ、訓練を積みめば、稀代の魔法使いになれるかもしれない。

「だがこれ以上なのはを危険に…」

「それなら光兄だって危ないじゃない、私と同じこと考えていたんでしょ!」

ずばり凶星であった。

この高町家の末っ子はこのように一度決めたら、絶対曲げない真っ直ぐさ（悪く言うなら頑固さ）を持っていた。

あの気の強い親友のアリサが『突撃ロケット』と評するくらいである。

「光兄は確かに『危ないこと』には何度もしたかもしれないよ、でもだからって、ユーノ君と光兄だけにそんな危ないこと押しつけた

くないの!」
「なのは…」

こうなってしまうと、絶対なのは折れようとしないうし、誰も彼女を止められなかった。この状況を終息させるにはもう…こちらが折れるしか…

「あの、お取り込み中申し訳ないんですが…」

「「あ…」」

二人はようやくユーノを置いてきぼりにして口論していたことに気づいた。

「光さんの言う通りです、一人でなんとかしなきゃと思い詰めた僕が浅はかでした、でも…その上で、僕に力を貸してください…お願いします!」

「ユーノ…頭を上げて下さい」

「え?」

「僕もなのはもそのつもりです」

どの道、自分もなのはも状況の一部になりつつあるのだ、ならやることは一つしかない…

「わたしも出来る限り頑張るからユーノ君」

「ありがとうございます…僕も出来る限りサポートしますから、魔法の使い方も、ある程度は教えられます」

「そうですね…ユーノには先生としてみっちりなのはを指導してもらわないと」

「にやはは…ごめんねユーノ君、厳しいお兄ちゃんで」

昨夜の再現のようによく響く、なのはの絶叫だった。

この小説を書き始めて、最初にぶち当たった壁が、実はなのはでした。

書くまでは正直、「なのはってどんな子？」と言われても、分からないとしか、答えられなかったかもしれない。

主人公なのに原作では余り本筋に関わっていなかったし…都築さん本人もなのはというキャラクター扱いづらいと考えているのかもかもしれません（劇場版では尺の都合があるにしても、なのは側の描写が薄くなってましたし）

「ベリアル銀河帝国」のメガホンを取ったアベ・ユーイチ監督がゼロのキャラクターを中々掴めない中、手探りで撮影していったように、小生も手探りで自分なりの解釈を入れながら、なのはと向き合って、書いています。

次は無印編では、初めて『魔砲』を披露したあの回です。前後編でお送りします。

Episode 6 - ある休日の交錯（前書き）

注意：ミラーナイトが若干キャラ崩壊してます。

え？映画で出た時からネタキャラじゃないかって…

そりゃそうだけどwww

9/29：6、7話のタイトルが変わってますが、内容に変化はありません。

変えた理由は、前のがオーズっぽかったので…

Episode 6 - ある休日の交錯

第三海鳴公園、

海鳴市に点在する公園の一つ、

アリサ・バニングスが見つけた塾への近道であり、

ユーノがジュエルシードの異相体と戦闘を繰り広げ、なのはとユーノが巡り合った場所である。

正確にはユーノと異相体が戦闘を行ったのは、この公園内のボート場がある池で、そこそこスペースもある。

当然今は、その戦闘による爪跡が大きく、立ち入り禁止の看板も立てられ、だれも遊びに来る人はいない、

が、それ以外の理由で来ている人物が一人いた。伸ばした黒髪を後ろで纏めた、切れ長の吊り目で、中世的な顔つきながら、ぶっきらぼうそうな印象を与える少年。

ウルトラマンゼロの人間態。

諸星勇夜だった。

「ここか？リンク」

『はいマスター、微かな量ですが、魔力とジュエルシードのエネルギーが残留しています』

「まあ如何にも一歩乱ありましたって、感じだけだな」

正直なところ、一々魔力の形跡を確認しなくても分かるぐらいの荒れっぷりだった。

建物やボートの損壊は激しく、地面はところどころ抉られた跡があり、倒れている木々も少なくない、ある程度見栄え良く作られたはずの池も、水は泥で濁り、散々な有様だった。

「だが魔力がほとんど残って無いとなりや、こっから足跡を辿るのは無理か…」

『ですが、何か引きずられたあとから見て、ここで異相体を封印することは失敗したようです』

数日前、ジユエルシードを運搬していた輸送船の事故が起きた後、それを発見したスクライア一族の少年が搜索のため、こっちに渡航したらしい。

この地球のようにいわゆる魔法文化が無く、管理世界とも交流が無い、他の世界を渡るだけの技術がないとみなされた世界のことを『管理外世界』と言うのだが、基本不可侵と法律で決められているのでそこに行くには手続きが多数必要である。

魔法の使用にも許可があるなど、正直言うとかなりめんどい。

零牙はともかく『リンク』は、他のデバイスとは一線を画す代物なんで、色々誤魔化してなんとか持ちこめるようこぎ着けた。

元々別の目的で行くつもりだったが、特にこの地球で、管理世界の厄介事を被らせるわけにもいかなかったので、ロストロギア搜索に変更したのである。

「あの動物病院であった事故の現場には行けるか？」

『まだ現場ではマスゴミと警察と野次馬でこった返しています、迂闊に近づかない方が得策かと』

先日、とある動物病院周辺で謎の破損事故が起きたらしく、ジユエルシード関連ではと思ったが、今自分は言ってしまうえば密入国している身である。

あまり地元の人と接触するわけにはいかなかった。

ん？

そういやリンクの奴マスメディアのこと今なんて言った。

「今ネットスラング使わなかったか？」

『やらせと偏向と欺瞞虚構塗れの組織には、相応しい言葉だと思いませんが？』

相棒はそうドヤ顔で宣言した。

彼女に顔があればの話だが…

「はは……それには同感だけど……」

某バーローのような響きで、苦笑いする勇夜。

まあ…いっかな…

「ジュエルシールドが誰かの願いに目をつけるまで…待つしかねえってことか」

後手に回ってしまうのは嫌だが、『連中』もそう簡単に見つからせてくれないだろう…スクライアの坊主君を見つけるには、それが一番手っ取り早い方法でもあった。

確か…名前はユーノとか言ったか…

『あの子との約束』上、あまり大っぴらに集められないんだが、ジュエルシールドが引き起こす災害は最低でも最小限に留め、最高で事前に阻止したかった。

『どうでしょう…気晴らしに街を散策してみても』

リンクの言う通り、下手にこんなところに行ろついでるより、通

行人に紛れた方が目立たないだろう。

「そうだな…調査ばかりじゃ面白味もねえし、折角地球に来たんだからな」

そう…パラレルワールドだとしても、ここは親父たち『ウルトラ兄弟』が必死になって守ろうとした、ウルトラ一族とも馴染み深い星である。

トラブルを起こさない程度には楽しませてもらうか。

でも彼にはその前に行っておきたいところがあった。

図書館である。

えっ？……

なん…だと…

かつて不良街道真つ盛りだったあのゼロが読書？

何を冗談だつて？

ジョークではありません。

彼は確かに素行不良でしたが、同時に勤勉家で努力家でした。

でなきゃ、プラズマスパークタワーに手を出すという、光の国では大罪中の大罪を犯しておいて、処分はテクターギアを装着されてはいたが、辺境の星で更生訓練を受けるだけ、しかもその相手は格闘の鬼ウルトラマンレオ、メビウスが『無限の可能性を秘めた戦士』と評し、初代マンが怪獣の凶暴化が頻繁になった時期にゼロを呼び

戻すことを提案し、修行中に長老キングが直々に視察し、修行を終えた直後とは言え、エネルギーコアがゼロに力を与え、そしてあのウルトラマンノアが自分の分身ともいえる『バラージの盾』を彼に授けたりしないでしょう。

それはさておき、今勇夜は海鳴市の市立図書館のとある読書に耽っていた。

地球のことはある程度、父や師匠、光の国の図書館で知ってはいたが、ここは別の世界の地球な上、故郷で記された文献でもやはり外国映画に出てくる勘違い日本のように、ところどころ変に脚色されていることもあるからだ、

既に歴史関連の本を中心に、彼の横には何冊もの紙の束が置かれている。

とりあえずわかったことと言えば、やはりこの地球には（年代的にはメビウスの兄貴が駐在していたところに近い）『怪獣』に相当する巨大生物は実在せず、せいぜいフィクションか、台風や地震などの災害が、昔は怪物の仕業だと思われていたぐらいだ。

それ以外は特に大差は無いと言いたいが、やはり『怪獣』と『侵略異星人』といった万国共通の脅威が無い分、惑星内で紛争や内戦が多い、どっちにしても人間不信に陥りたくなるほどの所業が繰り返され、中々平和と言える環境に達していないという点に関しては同じなのかもしれない。

それでも管理世界と比べりゃ、この国は平和な国家だけどさ。

さて…このあたりにしておこ…ってこんなに俺読んだのかよ…

夢中になりすぎて、積み木のように重なった本の数々を、一冊ず

つ丁寧に片づける勇夜、意外と律儀なツンデレウルトラマンである。

最後の一冊を棚に入れようとした時、ふと目に入った。

車いすに乗った、ショートカットの茶髪にバツテン印の髪留めを着けた、ちょうどフェイトと同じ年ぐらいの女の子が、本を取ろうとしているが、目的の本のある棚がギリギリ手の届かない高さなので、四苦八苦していた。

「これか？読みたいのは」

代わりに取り出して、彼女に渡す勇夜。

「あっ…おおきにな」

ん？今ありがとっつて言ったのか？

ニュアンスはそれぽかったけど…確か同じ国に住んでも住んでる地域によって、言い方が違うんだっただよな、訛りだったか？方言だったか？

「お兄さん、どないしたんですか？」

「いや、こんなところで関西弁を聞くとは思わなくてさ…」

やべ…とっさに言ったけど、この子の方言、関西弁で良かったっけ？

額からいわゆる冷や汗つてやつが流れた…戦闘でもここまで焦ったことねえのに…

「今はここに住んどるけど、生まれは大阪なんよ」

良かった…どうやら正解だったみたいだ。

「お兄さん、よくここに来るん？」

「いや…最近こっちに引越してばかりでさ、街中散策ってやつさ…」

ふと彼女の顔を見て気がついた。

なんか、俺の顔になんかついてるのか？

笑ってる？

「何がおかしい？」

「ごめん…なんか私の兄によつ似とつてな…でも兄の方が三枚目が…」

「顔がか？」

「いや、なんて言うか、雰囲気かな？」

……………ん？

なんでだ？

今一瞬？あの火頭？を思い浮かべた…確かに喧嘩っ早いところとか、口調が粗野なところが似ていることに自覚はあるし、ある意味あいつとは肉体言語で語り合った仲だしな。

だけど…あいつがここに飛ばされたんなら、一悶着と言うか一騒ぎありそうなもんだけどな。

身を隠して暮らすイメージがどうしても思い浮かべねえ。

あの姿のまま、街を堂々と歩きそうだ。

そもそもあいつって、人間の姿に変身できたか？

まあいい…

「他に読みたい本はあるか？」

「あ、ならあの茶色のと朱色のを」

勇夜は指定された本を棚から出して少女に渡した。

「おおきにな」

俺はできるだけ、彼女の足については言わないようにした。健全者から見れば障害があることは、可哀そうに思われるかもしれない。（馬鹿にする人でなしもいるけどな）。

だが当人たちにはそのハンデを受け入れた上で、この健全者になりふれた世の中を生きてるのだ。むしろこうして普通に、対等に接した方がいいのだと、聞いたことがある。

それを言うなら、俺だって正体を隠しているというハンデを背負ってるんだし。

「じゃあな」

「あの」

「何だ？」

「わたし、名前は八神はやとと言います、お兄さんは？」

「勇夜、諸星勇夜だ」

そうして自己紹介した俺は、八神はやとと名乗った、関西弁の女の子と別れた。また会えたらいいなと思って、名前を言ったのかも

しれない…

ずっとここにいるわけじゃないし、立場上そう度々地球には来れないんだが、俺もなんとなくそうであつたらいいなと、ふと思った。

彼女に課せられた、重さと痛みと宿命を、後に思い知ることになるとも知らずに…

一方、ユーノと協力することになった高町家の子たちは、ジュエルシード収集に関して、なのはの強い希望で光、なのは、ユーノの三人で行うことになった。

ただし義兄である、光ことミラーナイトからは自分より前に出たの戦闘はご法度との条件である。

ちなみにユーノが人間に戻った後どうなったかと言うと。

「ゆっ！ユーノ君って！ユーノ君って！……その！……何！？」
その時のなのははかなりテンパっていた。

「えーと、光さん、これってどういう？」

「君がフェレットに化けた人間だってことをなのはは知らなかった、ということですよ」

「ええ！？……なのは、初めて会った時って、僕この姿だったよね？」

「違う違う！最初からフェレットだったよ！」

あれ…なんでごつも主張が食い違っただろ？

ユーノは改めて、その日の状況を思い出してみる。

えーと、異相体と戦闘になって…封印しようとして…失敗して…

その後は…

ぼん…ぼん…ぼん…ぼん…ぼん…ぼん…ぼん…ぼん…

……………コオオオオ……………

ーン

「あー…そうだったゴメンゴメン！みせてなかった」

「だよーね!？」

「……………まさかユーノ……………人間であることを隠して妹を取り入ろうと考えていたのですか？」

光の周りから、カイザーベリアルに洗脳された時よりもどす黒いオーラが漂う。

「光さん…それは…」

「そうですね……………ただの喋るフェレットなら……………なのはと堂々と添い寝もできますし、妹のあんなことや、こんなことまで、いくらでも

」

「そ、そんな…誤解です、僕は本当に…」

「……………言い訳は無用ですこの淫獣!!!!」

理不尽とは正にこのこと。

ユーノの言い分は、全く光に届いていない。

「……………少し…頭冷やしましょうか？」

「光兄！ストップストップ!!!!なんか色んな意味でストップだ

よー!」

なぜかなのはの脳裏に、他者を見下ろす冷たい目つきで同じセリフを呟く、未来の自分が映った。

内心そのことでテンパりつつ、細腕でどうにか兄を後ろから抑える。

「ユーノ・スクライア……………お前を殺す」

「光兄！キャラが壊れてきてるよ！光兄から頭冷やして！」

こんな一騒動の後の相談の結果、光が斬り込み隊長、なのはが遠距離から援護と封印、ユーノなのはの講師をやりつつ実戦では二人のサポートとポジションが決められたわけである。

「魔導師たちの胸の奥には、リンカーコアっていう魔力の生成器官があります、空気中にある魔力素を集めて、固めるようなイメージで、呼吸してみてください」

光も、参考にと言う名目でユーノの魔法講義に参加していた。なのはが心配だつてことが大半だろうが：戦略の幅を広げたいのも事実だった。

デバイスが無いので、せいぜい簡単なものしか試せなかったが：

それからここ数日はジュエルシードを一回発見して、異相体と戦闘。

それ以外の日は、専ら講義と実習ばかりが続いた。

決してそれが無駄だったわけではない。

なんせ才能があると言っても、まだなのはは、魔法使いとして駆け出した。

その日の教習が終わる頃には魔力を消費したことによる体力の消耗で、へとへとになることが多く、度々光に背負ってもらって帰宅

言うまでもない。

そしてとある休日の午後…

なのはは自分部屋に入ると、そのままベッドに倒れ込んだ。
その日、何をやってたのかと言うと。

父の士郎が監督を務める少年サッカーチームの試合にユーノを連れつつ、アリサとすずかと一緒に観戦したぐらいだ。

特に激しい運動はしていない。

それでも日頃の魔力の行使による疲労は、そうそう取れなかった。
魔法を習いたてなビギナーの宿命とも言えるだろう。

「なのは…寝るなら着替えてからでないか…」

なのはは眠気で重い体をおこし、ぼーとした表情のままパジャマに着替え始める。

ユーノの目の前で…

「はあ！／＼／＼／＼／＼／＼／」

何度も言おう、『ユーノの目の前』である。

顔を真っ赤にしつつ慌てて背を向けて、なのはが着替え終わるのを待つユーノ。

光が外出していたのは、不幸中の幸いであった。

「ユーノ君も一休みしといたほうがいいよ…なのはは晩御飯までおやすみなさい…」

着替え終えるとともになのははそのままぐたたと眠り込んでしま

った。

その寝顔には疲労が溜まっている様子だ。

「（やっぱり慣れない魔法は、疲労が溜まるんだらうな）」

彼女の魔法に対する才能は、予想以上だった。

デバイスのサポートによる賜物もあるいは、初戦で魔法に精通している者でも取得が難しい、飛行魔法と砲撃魔法をやったのけたのである。

とは言え、光「ミラーナイトの言う通り、それ以外は普通の女の子だ。

本当なら、やっぱり自分一人だけでなんとかしたかった。

だが魔力が本調子に戻ったとしても、異相体と化したジュエルシードを封印できるのか…と言われると。

十中八九、この前の二の舞になるだろう、それこそ光さんの言う通り、浅はかな考えだ。

でも、なのはやミラーナイトという心強い味方がいると言っても甘えてばかりではいられない、もっと僕もしっかりしないと…

それに…

ユーノには気がかりなことがもう一つあった。

それは、一見すると些細な、でも後で引っかかりを感じる出来事だった。

話は河川敷でのサッカーの試合の観戦中に遡る。

なのはの父、高町士郎が監督の翠屋JFCも相手チームも一步も引かない、一進一退の攻防が続いているが、着実に翠屋JFCは点を稼いでいる。

「（ユーノ君の世界ではこういうスポーツはあるの？）」

「（あるよ、僕は研究と発掘であんまりやってなかったけど…）」
ちよつと寂しい、幼少時代だった。

見方を変えれば彼にとつて、その『研究と発掘』がやりがいのあるスポーツであるとも言えるが。

翠屋JFCが2　0でリードのまま、試合は進み、終了のホイッスルが鳴り

響くが同時に選手の一人がボールを場外へ蹴り飛ばしてしまう。

その先には10代後半の少年が歩いていて、彼の背後にボールが迫る、今にも頭にも当たりそうになったが…

彼は当たる直前、まるで感じていたかのように振り向き、胸でボールを受け止めると垂直に蹴り上げ。

そして視線の先にあるゴールネットに向けて、落ちてくるボールをタイミング良く一回転した勢いで蹴りつけた。

鮮やかな手際だった。

ほとんどタイムラグを起こさず、蹴った瞬間ボールはネットに放り込まれていた。選手は誰もその一撃に見惚れ、かつ反応できず、一拍置いて、一度たりとも入らなかった翠屋JFCのネットにボー

ルが入りこまれたことに気づいた。流石に某サッカー漫画の金字塔のように、ネットは破れはしなかったが。

だが『彼』なら、その気になれば本当に突き破ってしまうかもしれない。

「悪い！今はノーカウントにしてくれ！」

その少年は詫びると、そのまま悠然と立ち去ってしまった。

無論観客も、その通りすがりが決めたシュートに釘付けになっていた。

なのはたちも、その後の昼食での話題は、もっぱら彼のことで持ち切りであった。

そしてユーノも…

だが彼が気になったのは他のことだ。

無論あんな芸当はサッカー歴が長い経験者やプロでも、そうそうできないだろうが。

どこかで見たことあるんだよな…あの人。

長く伸ばした漆黒の髪を後ろで縛った、美しさと実用性を兼ね備えた刀のような鋭さを秘めた顔つきの少年。

だが見たことがあるだけで、

いつ

どこで会って。

名前はなんであったか……まではこの時思い出せなかった。

Episode 6 - ある休日の交錯（後書き）

次回、ようやく勇夜がゼロに変身します。

Episode 7 - 光の巨人

ここは海鳴市にある海鳴タワーの展望台。

大概是家族か友人連れで、海鳴市を一望するために来ているだろうが、一人だけ違う目的で来た例外がいた。

物腰の穏やかそうな顔を真剣そうな表情に染め、市内を一望している少年。

高町光ことミラーナイトである。

今彼は広域探索と呼ばれる魔法でジュエルシードを探知できないか試していた。

戦士としては充分経験も実力も付けている彼が、なのはと一緒に年下であるユーノに魔法を習っていたのはこのため。

やはり…デバイスが無いと厳しいですね…

物語に出てくる魔法使いのほとんどが、効率良く魔法を運用するために『杖』を使用するように、魔導師もまたデバイスが無いと、どんな使い手でも使いこなすのは難しい。

一応こちらが妥協する形で、なのはにも魔導師としてジュエルシードの収集にあたらせることを許したが、内心は複雑な思いを彼は抱えている。

なのはは昔からそうだった。

一度決めたことはどんな障害が待ってようともやり遂げようとする。

どんなに止めようとしても絶対に引き下がらない。

今でこそ親友のアリサやすずかと違って、ぶつかりあって友情を築いた。

正確には、アリサがすずかを苛めていたところを鉄拳制裁込みで止めようとし、喧嘩になった。

今だって、普段は笑っていても…

何かをしたい。

自分にしかできないことを見つけない。

だけど、それが見つからない。

そんなジレンマを彼女が抱えていることを気づいていた。

魔法との出会いはそんな彼女にとって好機だっただろう。

なのはが求めてやまなかった『自分だけの取り柄』が手に入ったのだから…

でもまさか、あんな目にあっても尚、積極的に関わろうとすることは思わなかった。

魔法には『非殺傷設定』という相手に物理的損傷を与えないようにできるらしい。

だが相手はそんな都合なんて通用しない、願いを貪り食って襲って来る怪物だ。

怪我では済まない事態だってありえる。

それでも彼女は『手伝う』ことを頑として譲らなかった。

それは彼女の強さでもあり、同時に危うさでもある。

ユーノと同じよう気持ちを彼もまた抱えていた。

自分がすっかりしないと…
そんな時だ。
広域探査に反応が…

あれは！

光が見たのは都市の真ん中に突然現れ、どんどん巨大化していく
樹木だった。
そして…

もう一つ反応！？

光の現在位置からは、それほど離れていない…

どうするべきか…選択を迫られた。

同時刻…

海鳴市図書館の出入り口

今ロビーから出てきたばかりの勇夜にも

『ジュエルシードの反応を確認』

この規模からすると…

人の願いに食いつきやがったな…

勇夜がいる位置からも、例の樹木を確認できた。

これ以上被害を出す訳には！

「リンク！封時結界だ！」

『了解』

封時結界とは特殊な空間を生み出し、特定の物体や人物を現実世界から遮断する魔法である。

勇夜の周囲から結界が構築され、まわりの光景はそのままに、現実とは異なる色合いをした空間が形成された。

『ターゲットを取りこむことには成功しましたが、一部の民間人が対象に捕縛され、取り残されているようです』

「しまった……」

『民間人の避難補助の優先を提案します』

「そうだな、どの道このままじゃまともに戦えねえ！」

勇夜は急いで現場へと向かった。

一方でなのはとユーノも、発動を感知し現場へと向かっていた。

突如、巨大化が進行している巨木が姿を消す。

「消えた？」

「誰かが結界を張ったんだ」

でも誰が？他に魔導師がいるとでも。

直後、別のジュエルシールドが発動を感じる二人。

「こんな時に……」

「（なのは！ユーノ！）」

「光兄！」

「光さん！」

「（別のポイントで起きたジュエルシードは僕がなんとかします、二人はそっちを！）」

「わかりました…なのは、これから結界内にワープする、内部に入ったらレイジングハートを」

「はい！」

緑色の魔法陣がなのはの足元に出現すると、二人は消失した。

幸い、結界に残された民間人はそれほど多くなく、異相体の本体からある程度離れていたため、記憶処理の魔法をかけつつ、結界外に転移させた。

「残った人間は」

『魔力反応が二つ、恐らく魔導師です』

「フェイトたちのじゃない……………っ！……………あれか？」

ビルの屋上に人影を一つ見つけた。

子どもだって？

歳はフェイトと同じくらいか…

その子に向けて、異相体の触手が今まさに迫り…

「リンク！」

『イエスマイマスター』

間に合うか！？

いや…間に合わせてみせる！

勇夜は左手を前に翳すと、腕輪形態のリンクから、光が発せられ、赤と青と銀に彩られ、黄色いレンズをしたサングラスらしきアイテムが出現する。

彼の持つ力を、最大限に発揮できる形態へと変身させるアイテム。

ウルトラゼロアイ。

「デュア！」

勇夜はそれを目に付けると、ゼロアイを中心に光が発せられ…

「ひどい…」

結界内に入ったなのはの第一発声はそれだった。

巨木はビル群を覆い隠しつつ、枝は建物を貫き、アスファルトの道路には巨大な根で破壊された箇所は多数。

まさに災害と呼べる惨状だった。

「たぶん、人の願いに反応したんだ」

人の願い…

やっぱりあの時、感じたのは…

そう、なのはたちが翠屋で昼食をとっていた際、

ほんの一瞬だが、ジュエルシードの波動を感じ取ったのである。あまりに些細で微弱だったので気のせいではと思ったこともあり、結局そのまま放っておいてしまったのである。

もしあの時…ちゃんとしていたら…

ジュエルシードを回収していれば、こんなことにならなかった。光兄やユーノ君にはあんな偉そうに言っておいて…肝心な時に…わたし…

「なのは!」

「え?」

そう自分を悔いていたために気づけなかった。

自分に迫る枝の触手による一撃に…

「いやっ!」

触手がなのはを捕らえようとしたその時。

上空から緑色に発行した光線が触手を破壊した。

「なんだ!?!」

爆風が収まったあと、ミラーナイトかと思っ二人は空を見上げる。

空から何かが降りてきた。

着地の衝撃で地響きと粉塵が舞う。

降り立った、金色の光を放つそれは、いや、巨大な人は、光が消えて行くとともにゆっくり立ち上がる。

そこにいたのは青と赤に染められたボディ

胸にはプロテクターが散りばめられ、中央には蒼く光るドーム状の球体。

銀色の厳つい顔と黄色に光る眼。

頭部にはナイフらしき刃を二つ付けた。

光の巨人だった。

「あ…あの巨人って…」

「ユーノ君、あの巨人さんのこと知ってるの？」

「あ…ちよつとね…」

その巨人は、なのはたちに目を向けると。

「バカ野郎！ぼーとしてんじゃね！」

いきなり念話らしきもので怒声を上げてきた。

「にゃあ!？」

突然、声をあげられて驚く二人。

なのはにいたっては思わず変な声を上げていた。

ただでさえ巨体かつ強面で威圧感があるのに、いきなりテレパシ
ーで怒声が直接脳内で響いたら、こんなリアクションをとってしま
うのは当然か…

「俺が人質を救出するまで手を出すなよ、いいな!」

「はい……」

いきなりすることに思わず同時に頷いて了承する二人であった。

ウルトラゼロアイから発する光に包まれた勇夜は、
本来の姿である、M78星雲光の国のウルトラ戦士。

『ウルトラマンゼロ』

に変身し間一髪、額のビームランプから発射する光線。

『エメリウムスラッシュ』で彼女たちを助けたのである。

ゼロは茶髪をツインテールで縛り、白と青を基調としたバリアジヤケットを纏い、赤い球体を金色のパーツがCの形で囲んだ杖を持った女の子に見覚えがあった。

さつき河川敷でサッカーの試合を観戦していた女の子の一人か？
よく見ると彼女の肩にフェレットが乗っている。

もう一つの魔力反応はそれか…

だが今は詮索している暇は無い。

ゼロは、戦闘前に癖としてよくする鼻をこする動作をし。

「デエア！」

異相体に向けて、構えをとった。
それを敵対行為と見なしたのか、
複数の触手の枝による攻撃がゼロを襲う。

ゼロは冷静に手と足で振り払う。
だが内心。

結界の中とは言え、戦いにくい…

と愚痴っていた。

それは相手が人質を取っているからだけではない。

ゼロは不良時代から一目置かれていただけあり戦闘センスは高いが、彼にとって市街地での本格的な戦闘は、これが初めてであった。いたるところに密集した建物の中では、下手に動けば大惨事。

一回歩くだけでも被害が出る。

ウルトラマンが地球での戦闘でピンチに陥ることが多いのは、エネルギーの消耗が激しいこともあるが、50Mもある巨人にとって人間サイズ的环境下では余りに戦いにくい。

結界内なので、多少周辺への配慮は無視したいところだが、ここには敵と自分しかいないわけではなかった。

「ちっ！」

異相体の鞭がゼロの右腕を捉えた。

さらに残りの四肢全てに鞭が絡みつく。

そのまま為すがまま引つ張られ、態勢を崩すゼロ。

その勢いのまま、異相体はゼロをビル群に次々と叩きつけられた。ビルの破片の山に埋もれるゼロ。

反撃する時間を与えないとばかり、枝の触手が、投げ槍のように

鋭く、破片の山々に襲いかかる

だがそんなことでへこたれる彼ではない。

突然ゼロを縛り付けていた異相体の鞭にエネルギーが流れ、粉々になる。

奇声を挙げながらも、触手はゼロに肉薄するが、ビルの破片から、粉と鞭を払いながら立ちあがったゼロは、エネルギーを込めた手刀、『ハンドゼロスライサー』で迎撃した。

彼は全身から、エネルギーを放出する技。

『ゼロボデイスパーク』

で、自分の体に絡みつく触手を破壊したのだ。

ゼロの反撃にひるんだ巨木にゼロは、正拳突きをした拳から、青色の光弾『ナツクルゼロショット』を放ちダメージを与え。

「シユア！」

新たな鞭が彼を捉える寸前に上空へと飛んだ。

どこだ、どこにいる？

異相体に取り込まれた人間は…

果断無く来る触手を巧みに空中で回避しつつ、透視能力で対象を探すゼロ。

そして、枝の合間ある光を見つける。

その中にジャージを着た少年と少女が、抱き合って眠っている。

それこそ子宮で眠る胎児のように。

あれか！

ゼロは両手を頭に翳すと、

「行け！」

頭部の宇宙ブーメラン、『ゼロスラッガー』を飛ばし。

さらに両腕を横に重ねて広げると、光の刃を飛ばす切断技『パ―テイクルサイクラー』を計4つ発射。

ゼロのウルトラ念力で正確にコントロールされた刃の数々は異相体の触手たちを反撃も許さないまま正確に切り裂いていく。

その隙をつき、ゼロは音速の速さで突っ込み。

「その子たちを離せ！」

右腕から、ロープのような光の帯を閉じ込められた二人に向けて放った。

ゼロは以前、ウルトラマンノアからリンク（ウルティメイトイ―ジス）を授けられた際、彼の光を浴びたことでノアの間形態、ウルトラマンネクサスの技を一部使用できるようになった。

これはその技の一つ。

『セービングシュート』

光の帯は二人を包むと、ゼロに手に戻ってくる。

ジュエルシールドまでは取れなかったか…

しぶてえ野郎だ。

ゼロは異相体から離れた位置にある公園に降り、救出した二人を降ろし、結界外へとワープさせた。

だがこれで心おきなく…

「シユア！」

再び異相体へ向けて飛び立っていった。

「すごい…」

ハモる程、一人と一匹(?)は、その巨体同士の戦闘に目が点になっっていた。

「実は、僕の世界ではあれぐらいの異相体が出現したり、魔法生物が暴れたりした時にあの巨人がよく現れたんだ」

「そうなの？」

「僕たちはそれを『光の巨人』って呼んでた、事態を收拾させるとすぐどこかへ飛んで行くから、正体は分かってないけど」

「ユーノ君、ひよつとしてあの巨人さんが光兄が言ってたお仲間さんなんじゃ」

「そうかもしれない…」

「おい！その魔導師とイタチ野郎」

人質を助けた後、再び戻ってきた巨人は二人を呼び掛けた。

「イタチって……僕のこと…」

『フェレットもどき』と呼んだ光に続いて、今度は彼から『イタチ野郎』と言われてしまった。

フェレットもイタチなので間違っではないないけど…なんか…複雑…

「お前以外に誰がいんだ？」

表情は変わらないのに、ドヤ顔で言われた気がした。

「ですよね……」

苦笑いで返すしかない。

巨人は右手の指を頭につけると、二人に向けた。

すると、二人の脳内に突然映像が浮かぶ、

それはジュエルシードが取り込まれた正確な位置を示したビジョンだった。

ゼロがテレパシーで、自らの視覚情報を送ったのである。

「先に撃つて弱らせる、その隙に撃て！」

「は……はい！」

「シユア！」

飛び上がる巨人。

とりあえず何者であれ、協力してくれる以上はありがたかった。

「なのは、でもこの距離からじゃ、あそこまで！」

「大丈夫！レイジングハート、お願い！」

『了解、キャノンモード』

なのははレイジングハートをキャノンモードへ変形させる。

『デイベインバスター』

魔法陣がしかれ、チャージの為の桜色のエネルギーが杖に集まっ
ていく。

その光は、取り込まれたジュエルシードに正確に命中。
『シーリング』

同時に封印処理が施され、異相体は眩い光に包まれた。
巨体を維持するエネルギーを失った巨木は、粉々に崩れ落ちながら、消えていった。

『Internalize No.10』

ジュエルシードをレイジングハートに取り込むのは

「ありがとう、レイジングハート」

レイジングハート待機モードにし、バリアジャケットも解除した。

すると目の前にあの巨人が降りてきた。

50メートルはあるだろうか。

「あなたも助けてくれて、ありがとうございます…私のせいでこんなことになったのに」

「なのは？」

「私、気づいてたんだ…あの子が持っていたこと…」

翠屋でお父さんのチームの男の子から確かに感じたのに…

ちゃんとこの力で…やり遂げるって…決めたのに……

「なのに…気のせいだと思って…」

「なのは…もとはと言えば僕がジュエルシードを」

「でもユーノ君は、みんなを迷惑かけないように頑張ってたじゃない…」

ユーノはフォローの言葉をかけようとするが、なのはの激情に遮られる。

気がつくと、なのはのその眼に涙が溜まっていた。

「わたしのせいで…みんな…死んじゃうところだったんだよ…あの子たちを『人殺し』にするところだったんだよ…」

悔しかった。

魔法使いになれたのに、結局何もできず、誰も助けられなかった自分。

許せなかった。

自分にしかできないことを、見つけたからって、いい気になって、我儘を押し付けた自分に。

「なのは……」

ユーノは何も言えなかった。

この結界を貼ったのは、目の前にいる巨人で間違いない。

彼が手を施してくれなければ、その巨木によって多数の死傷者を出し、原因を作った二人に『殺戮』という罪を被せていたかもしれない。

いや…実際そうだ。

紛れも無く、この状況は人の願いが生んだ

『人災』

であることは否定しようがないし、なのはたちは、その兆候を見逃してしまったのも事実だった。

そんな二人に見かねたのか、

「おい」

今まで聞き手に徹していた巨人が呼び掛けてきた。
見上げるなのはとユーノ。

「二人ともな、責任を感じるなどは言わねえが…あまり思い詰めるなよ、まあ結界で街に被害ほとんど出て無えから安心しろ、あと話の続きだが……………どっちも一理あるってことにしておけ…あと一つだけ言わせてもらう」

巨人は一拍置くと

「半端に関わって、半端に悔やむなんてことは…………絶対すんじゃねえぞ」

顔は無表情で強面で、口調は荒いながらも、二人を気にかけて、励ましていることはよくわかった。

「じゃあな」

「あ！あの！」

飛び去ろうとした巨人を呼びとめるのは。

「私、高町なのは、この子はユーノ君と言います、あなたの名前は」

「……………俺はゼロ……………ウルトラマンゼロだ」

「「え…………？」」

「てことは…………やっぱり…………この人は光兄の…」

「シユア！」

「待って！」

疑問を確かめようとする暇も与えないまま、ウルトラマンゼロと名乗った巨人はそのまま、飛び立って行ってしまった。

その姿が見えなくなると同時に結界が解除され、

夕陽が街を照らした。

ゼロの言う通り、街は元の光景を取り戻していた。

結界越しに、彼の超能力で、損壊を修復させていたのである。

明日の新聞で、『謎の超常現象』とかもろもろの記事にはなるだろうが、国民の血税で直さなければならぬ事態になるよりは……
良いだろう。

「ウルトラマン……ゼロ……」

友達が地球にいること、光兄に言った方が良いよね……

そんなことを思いつつ、涙を拭いながら……

自分を叱りつつ、励ましてくれた彼に対して

「ありがとう……」

の言葉を送るのであった。

Episode 8 - 出会いの前夜

ちよつと……カッコつけすぎたかな…

いつもなら、用が済めばさっさと何も言わずに飛んで退散するんだが、どうもあの二人を見てると、何か言わなきゃ気が済まなかった。そんなことを考えつつ、ゼロから人間態に戻った勇夜はスーパ―の中で買い出しをしていた。

あの二人の会話から察するに、あのイタチもといフェレットがユー・スクライアだろう。彼女もそう言っていたし。

『（責任を感じて、地球に来たものの、フェレットに変身しなければならぬほど消耗し、仕方なく、あの少女に協力を仰いだと言うところでしょう）』

リンクが簡潔にまとめてくれた。

『（大方そうだろうな）』
ただ、それならどうして、成り行きで『魔法使い』になったあのなのはって子が協力しているのか、分からない。

だがそれよりも問題になるのは…
『（フェイトたちと、ロストロギアをめぐるって戦闘になることは…避けられないでしょうね）』

あの子たちの目的からして、ジュエルシードは全て集め次第、管理局に渡すだろう、となると、違う目的で集めているフェイトたちとは、確実に争奪戦になる。

そうなった時、どうするべきか…

とりあえず、ユーノ・スクライアの行方が分かったし、
フェイトのお袋さんに会うまでは、静観するしかないか。

たく…あんなこと言っておいて、現状では一番自分が半端な立場
だ。

俺も人のことが言えない。

フェイトたちに加担なんてできないし…かと言ってあの約束がて
ら、目的が近いとあいつらともつるめない。

『（ややこしい選択をしてしまいましたね）』

ほんと…そうだな。

だがずっと引きずってもいられない。

無慈悲な宝石が引き起こす災厄を止めることも

あの子を助けることも

同時にやり遂げてやるって

そう決めたんだから…

もし、彼女たちがどうにもならなくなったその時は、

『ウルトラマンゼロ』として助けるまでだ。

「ゼロに会ったですって？」

高町光ことミラーナイトは驚いた。

なんせその日現れた、異相体の一体を離れ離れだった仲間と義妹
が一緒に倒したというのだから、当然である。

「はい、すぐに飛び去ってしまったんですけど…」
「それで、そのゼロさん、ユーノ君の世界でも、ちよくちよく現れているらしくて」

ユーノの話では、ここ数年、ロストロギアによって生まれた異相体や凶暴化した魔法生物など、それこそ怪獣クラスの災害が起き、魔導師の力を持ってしても対処しきれない絶望的な状況下に陥った際、どこからともなく現れ、收拾をつけるところどこへとも無く去っていくそうで…

ユーノたちはそのゼロのことを『光の巨人』と呼んでいた、それとは別に管理局ではその巨大さから

『マウンテンガリバー』

と呼称されているらしいが…

「どうしてそれを教えてくれなかったんですか！」

思わぬサッカーパンチに光はユーノを、相手の襟もとを掴む要領で振り回した。

「すみません…まさか…あなたの仲間があんな巨人だと思わなかったので」

「あ…」

そう言えば、二人に地球に来るまでのいきさつは話したが、自分たちが50Mクラスもある巨人だとは言ってなかった。

初めてミラーナイトとして姿を現した時も、人間サイズであったし、

「申し訳ない…また取り乱してしまいました…」

「いいですよ、あとそれと…そのゼロかもしれない…モロボシユウヤって人のことなんですけど」

モロボシユウヤ。

光とほぼ同じ時期にミッドチルダという世界に迷い込んだ（向こうは次元漂流者と呼んでいるらしい）人物。

「実は僕は会ったこと無いんですけど、仲間の発掘調査に何度か彼が護衛として同行したことがあって」

それから、そのユウヤの管理世界での経歴の話になった。

9歳で囑託魔導師と呼ばれる資格をとり、ここ数年は、実質フリーランスの立場で様々な世界を廻っている。

一見当り障りは無いし、輝かしいとも言えない。

しかし、彼は色んな面で異端だった。

8歳の時、管理局員である保護責任者の連れで管理局を見学した際、局員との模擬戦を志願した。

子どもの遊びだろうと高を括り、軽い気持ちで局員の1人が相手になったがそれがいけなかった。

彼は、あらかじめ借用された訓練用のデバイスを使わず、徒手空拳で相手を打ちのめしたのである。

本人曰く手加減したと言い、相手をした局員も怪我はなかったが、大の大人が、子どもに腕っ節で負けたのである。

その子どもは魔導師としての素質が充分にあると見なされたにも拘わらずだ。

管理世界にとっては天地もひっくりかえる出来事だった。

が、それだけでは終わらなかった。

囑託魔導師の資格取得の為の試験。

筆記も難なくクリアし、実技に移る。

その実技試験は二つある。

まずは特定のターゲットを破壊することだった。

彼はそれを魔法による一撃で破壊した。

それだけでもまだ凄いが、予想範囲内である。

問題は次だった。

最後は魔導師同士の試合だった。

相手は、彼より年上で局内屈指の武道派であった。

試合は互いに互角、どちらも譲らない、

だが勝敗は、

ユウヤが魔力をこめずにデバイスの剣から振るわれた神速と呼ぶべき剣撃で相手のデバイスを切り刻んだことで決した。

ここでも彼は（最後の止めのみとは言え）魔法を使わずに、相手に勝利したのである。

そうして彼は囑託魔導師の資格を得た…

その後も着実に成果を上げていった。

状況によっては魔法を使いつつも

大概は己の肉体と刀とレアスキルらしき能力で、

魔法を使わずに魔導師を駆逐する。

常識外れな事象をやつてのける時空漂流者。

だが彼はそこまでの実力を持ちながら、資格は取る一方で頑なに囑託以上の地位を拒み、出世コースに入ろうとしなかった。

そうして彼は良い意味でも、悪い意味でもこう呼ばれるようになる。

『魔導師殺し』と…

「その護衛任務の時もそうでした、ある時、発掘したロストロギアを輸送中、ある犯罪組織の襲撃にあつたらしいんですが」

中には管理世界では禁止されている質量兵器（銃などの実弾兵器）を使用する者もいたが、彼は物怖じすることなく、刀と拳と、ブーメランのように飛ばした短刀で、全員を殺さずに戦闘不能にした。

無論無傷ではないし、デバイスと質量兵器も徹底的にジャンクヤードにされた………とのこと。

その一連のを聞いた光の第一印象は…

確かに『ゼロ』ならやりかねないな、だった。

元々、組織の厳しい規律に大人しく従う性格ではないし、ウルトラマンであることを隠しつつ、

自分自身の能力を使うには、むしろフリーの立場の方が動きやすい。

世界を回っているのも、自分たちを探していると考えれば納得が行く。

これでモロボシ・ユウヤ＝ウルトラマンゼロ説は強まった。

「で、そのモロボシ＝ユウヤと今日会ったんですね」

「何故分かったんですか？」

「わざわざその人の経歴を詳細に述べているあたり、そうだと思いませんして」

「どうやら、たまたま今日のサッカー試合観戦に通りがかったらしい、

選手が偶然自分に向かって蹴り上げたボールを、蹴り返してシュートするという名プレーをしたそうだが、

ゼロがこの世界に今いるとよく分かった。

となるとジュエルシールドが発動した時に、彼と接触できる可能性は高い。

ただどう確かめたものか…

「ところで…もう一つの異相体はどうしたんですか？」

そうだった…まだそのことを話してなかった。

もう一つのジュエルシールドとはある市民プールで起きた。

すぐに現場へ向かった光だが、ここでも既に何者かが結界を貼っていた。

だがゼロが張ったものと思われるのと違い、かなり嚴重でまだ魔法に慣れていないこともあり侵入できず。仕方が無く、人気のない、かつ鏡面が存在するところを探し、ミラーナイトに変身。

内部に入りこんだが、その頃にはもう封印されていた。

？ 黒衣にバリアジャケットを纏い、鎌のようなデバイス持った、死神を連想させる金髪の少女に？

「その管理局の人間でも無かったようですし、直ぐに消えてしまっ

たんですが……」

「僕たちの他に……ジュエルシードを集めている人が」

積極的に共闘してくれたゼロと違い…

少なくともユーノとは違う目的で、その少女は青い宝石を集めていることは間違いない…

そうならば、彼女と戦闘になることも…

ここに来て思わぬハードルである。

勝敗云々よりも、問題はロストロギアを集めて何をするかだ、

世界の一個や二個、簡単に消し飛べる基地外なアイテムをである。

彼女が『願うこと』で世界に風穴を上げることにならないことと…

これ以上ジュエルシードに関連する事態が、そのハードルを上げることがないように願うしかなかった。

ところ変わってここはその金髪の魔導師「フェイト・テストロツサが住むマンション」。

今ここではウルトラマンゼロと諸星勇夜が相棒のデバイスであるリンクの要望通り、「にくじゃが」を調理し、

それをフェイトとアルフと食しているところだった。

勇夜は積極的にフェイト達に力を貸せない代わりに、毎日飯を作ると約束していた。

当初フェイトはそこまでしなくても良いと言ったが、

彼曰く『食事を返上してまで体を酷使して、お陀仏になりそうだから』との理由で却下され、『体調管理出来ない奴はどんなに素質あってもド三流』と突きつけられてしまった。

実際彼女は早くジュエルシードを探さなきゃと精神的に余裕が無く、食事も寝る間も惜しむに集めようとはしていたので、凶星を指され反論できなかった。

このところ彼に一本を取られてばかりな気がする。ちなみにここでのアルフの普段の主食はドックフードなのだが、

『人型形態でドッグフードを貪り食わないでくれ』

と勇夜の要望で夕食は同じメニューにしていた。

「あたしたちの他にもアレを集めてるやつがいるのかい？」

「ああ…内一人はアレを発掘した張本人、もう一人は地元の女の子だった」

何の目的で集めてるんだと二人は気になったが、勇夜の言葉から一人はちゃんと回収して管理局に引き渡すが理由であることは分かった。

なぜ魔法の無い世界に住むその女の子が、協力しているのかはフイトたちにも謎ではあったが…

「私も、今日妙な人を見たの」

「誰だ？」

「その…人と同じ体型だけど、人じゃないって言うか…」
どうも相手は説明しづらい容姿をしているらしい。

「見た目は銀色と緑の体で、ガラスからいきなり出てきたの…その人」

緑と銀…

ガラス…から…

出てきた…だつて？

「勇夜？」

「なんでもない…とりあえず、アレを探してる連中が複数いるってのは分かったか」

あいつしかいないよな、あいつと同じことができる『二次元の民』は大勢いるが、それを踏まえても…

勇夜^{セロ}にとつて

『鏡から鏡へ瞬時に移動する』

そんな芸当を可能にする人物に心当たりがあるのは一人しかいない。

問題はあいつが彼女たちと繋がりがあるかだ。

地球人として、暮らしてるのはまず間違いないだろう。

もしあの二人と共同戦線を組んでいるなら、フェイトたちには不利だ。

数の面でも、技量面でも…

あのなのはって言った、まだ魔導師なりたての子ならフェイトは負けることは無いだろう、けどあいつと真っ向から戦えば…

あのベリアルの大軍団から王宮とエメラナの家族と避難した市民を最後まで守り抜いた、紛れもない勇者だからな…

案外早く実行することになりそうだな…あの約束を…

「勇夜、今日の献立ってさ、リンクの要望なんだよね？」

「そうだが、それがどうした？」

「羨ましいよね、フェイトのバルディッシュなんてさ、こつ事務的
って言うの、無口で一言二言しか喋らなくてさ、同じ？インテリジ
エントデバイス？なのになんでこつも違うんだろつ」

「そんなこと言わないのアルフ、作ってくれたリニスに失礼でしょ」
正確にはリンクはインテリジエントデバイスとはちと違うんだけ
どな、

と内心そう訂正した。

さきほど自分が一番半端な立場と自虐した勇夜だが、
なんの考えも無しにそうしている訳ではないし、
彼女を助けたいという感情だけで今の立場にいるわけではない。

初めて、フェイトに会った時から、彼女に危ない『お使い』をさ
せている黒幕がいると踏んでいた。

『テストロッサ』という名字に心当たりがあったので、該当する
人物はすぐに見つかった…

そいつの名は

『プレシア・テストロッサ』

かつては『アレクトロ社』という企業の技術開発チームの主任で
あった。

だが20年以上前に、開発中だったとある試作段階の魔導炉のテ
スト運行の際、暴走事故が起き、彼女はその責任の全てを負わされ、
会社から解雇され、以来行方知れずになっていた。

俺がこの世界に来る前に起きた話だったが、その事故の被害の大
きさと妙な臭さを感じて、今でもその事故の内容を覚えていた。

本題はプレシアがどういう目的で、娘である彼女に、あんな物を探させているのか……だ。

フェイトに聞いても、

「研究に必要なだから」

としか言わない。

はぐらかしているとも言える。

いや…本当にそれぐらいしか、聞かされていないんだろう。

実際、母親の話を上げても、あまり彼女は答えてくれない。

かわりに彼女の目がより寂しくなることと、アルフが悔しそうな表情をするくらいだった。

こんな調子で、今フェイトたちを捕らえても、母親の居場所は話さないだろうし、

あちらさんだっけ見つからないように細心の注意を払っているはずだ。

次元航行艦クラスのレーダーでもなきやアジトは探せないだろう。

となりや奴のもとに行くには、彼女に奴がいる場所へ連れて行ってもらうほかない。

そのため、これ以上事態がややこしくなっただけ、ハードルが上がるのは好ましくなかった。

ただでさえ、嫌な予感がするっつのに。

それがなんなのか、まだはつきりしていない…

だが…当面のたんごぶはやはり…

ミラーナイトだ。

もしあのなのはとユーノと繋がりがああるなら、俺と会ったことはもう知っているだろう。

チャンスは、次のジュエルシードが現れる時。

分の悪い賭けだが、今の頑ななフェイトよりは話は通じるはずだ。

ここはフェイトが隠れ住むマンションの屋上。

かなりの高層でこの辺りのビル群の中ではトップクラスの高さだった。

夕飯のあと、アルフに話があると言われた。

今はここで星を眺めている。

都市部での夜空は街の灯りで、あまり見えないんだが、地球人より俺は目が良いので、はっきり見える。

ふと無意識に、ある一点を見つめていたことに気づいた、こっから300万光年先にあるM78星雲がある位置へ…

もちろんこの宇宙には光の国は無い、それにこの世界にもM78とついた星雲は実在するがこっちでは地球から1600光年先にあるのである。

これだけでも今住む宇宙が、元の世界と似てはいるが、違うと言う事実を俺に突きつける。

まだミラーナイトの行方しか分かってないのに、親父や先輩たちや仲間がいる光の国に帰れるのはいつごろになるか。

時空を超えるすべは持っている。

ウルトラマンノアから、このリンクを授かったことで、ノアの持っていた時空を自在に超える力もあの時身に付けた。

だがこの世界がいくつも存在する並行世界のどこに位置するか、ここから元の世界まで、どれぐらい距離があるか、まだ判明していない。

端的に言えば、帰るための船も燃料も食糧があっても、目的地までのルートが分からない、地図も無い状態なのだ。

「勇夜……」

呼ばれたので振り返ると、アルフが立っている。
そのまま俺の横に座った。

「で、話ってなんだよ」「話をこちらから切り出す。

「あたしに……稽古つけてほしいんだ」

思わぬ内容だった。

「おい、本気で言ってるのか？」

アルフはこちらを見据えてうなづいた。
本気らしい。

打ちのめしておいてなんだが、あの二人は充分に強い。

あの時はほぼ一瞬で勝ったが、フェイトが正面から攻撃をしかけたことと、アルフの激情にかられ、攻撃が単調になり、動きが読みやすかったために、こっちにとって好条件が重なり、ああ言った形になっただけである。

特にフェイトの飛行スピードは、ゼロの時はともかく、人間態の

自分を遙かに上回る。

そのアドバンテージのお陰で、彼女と互角に戦える魔導師はそういないだろう。

とはいえ、真剣な『その眼』で見られると無下にもできなかった。昔の自分も、そんな眼をしていた……強さを渴望していた、その眼……

だからこそ、その前に確認しておきたいことがある。

「それはフェイトを守りたいから、頼んでるんだよな……」

再び頷くアルフ。

やはりそうか……

「わかったよ」

「勇夜……」

「だがその前に忠告がある……」

「?……何だい?」

「力を得ることを『目的』にするな」

「え……どういうこと?」

己を高めること、それ自体に罪は無い。

しかし、それが余りに強すぎると……

「つまり、フェイトを守るって言う目的の為の手段として力を求めて、使えってことだ、絶対に力を求めるために強くなりたいなんて考えるなよ」

アルフが勇夜に指南を求めたのは、

ひとえに勇夜が言葉にしたことが理由だ。

彼女との正式な契約をする際、アルフはフェイトの傍にいて支え、

力となり、災厄から彼女を守ると言うことだった。

が、実状は、その契約内容をまともに実行できていない上、勇夜の戦闘で心身ともに未熟であることを痛感させられた。

勇夜は約束上、ジユエルシード収集に手出しはしないが、手助けもできないことも分かってる。

無理かもしれないと思ったが了承してくれた。

だけどその後の彼の発言がよく分からなかった。

「もし強くなることが目的になっちまったら、昔の俺みたいになる」「それって?」

「俺は昔、ある大罪を犯して、故郷から追放されたことがあんだよ、強くなることを、過剰に求め過ぎちまったためにな、お前にはそうなってほしくない」

「何を…やっつたんだい?」

「……………太陽を…独り占めにしようとした」

太陽を…ますます分からなくなった。

そもそも彼が保護されたのは4歳の時らしいし、その後の経歴からも大罪と呼ばれるようなことはしていない。

「それじゃ…」

勇夜の言う『大罪』が気になるアルフをよそに、彼は立ちあがり、結界を張るとアルフに立つよう促し、初めて戦った時と同じ構えをとった。

空気が変わった気がした。

事実そうかおしれない。

勇夜はどちらの姿でも、目つきは鋭い方だが、今の彼の眼は言う

なれば…

『刃』だ。

並の人間なら、その眼を見ただけで戦意を喪失し、絶対に敵わないと痛感させられるだろう。

それがたとえ、魔導師でも。

『魔導殺し』の異名は伊達じゃなかった。

「いつでも来な…」

E p i s o d e 9 - T h e F i r s t C o n t a c t A n d S

やっとなのはとフェイトの初対面の回…
今回は劇場版メインの話になります。

ジュエルシードと言うロストロギアは、ある意味生き物と言えるかもしれない。

それが人間であれ、動物であれ何であれ、願いに食らいつく生物。

海鳴神社と呼ばれる神社の裏の森。

そのジュエルシードは自分を見つけた猫に憑り付いた。

さつきは生き物と言ったが。寧ろジュエルシードは、寄生虫と言った方が正確だ。

憑りつかれた猫は、ライオンよりも大きい黒い体躯に虎のような模様をつけ。

サーベルタイガーのような鋭い犬歯を持った。

異形の異相体となった。

異相体は、同胞であるはずの子猫たちに殺気を剥き出しにし。

今にも、その凶刃と凶牙が子猫たちを襲おうとした時。

金色の魔法陣がその一撃を食い止めた。

「バルディッシュユ！」

フェイトである。

『GET SET』

彼女は異相体の攻撃をシールドで食い止めつつ、攻撃魔法を發動。

地面に魔力で構成された稲妻が走り、もろに受けた異相体は吹き

飛ばされた。

その頃、海鳴神社のある方向へ走る少女が一人、
なのはである。

ジュエルシードの発動を感知したなのはは今現場へと向かってい
た。

ふと突然、現場への方角から黄色い光の柱が走った。

この時の彼女は知る由もないが、フェイトによるデバイスの『S
ET UP』の光である。

「（なのは！ダメだよ、僕と光さんが行くまで待って！）」
ユーノが念話で呼び掛けてくる。

「待てない！人や生き物が巻き込まれちゃうかもしれない」

なのはの言う通り、現にジュエルシードは生き物を憑りこんで暴
れている。

放っておけば、近くの住宅街に住む住民を襲いかねなかった。

先日の自分のミスで、危うく大災害になり、本来自分がやるべき
だった後始末も、ウルトラマンゼロにほとんど押しつけてしまった。
あの時ゼロが言ってくれたように、もう『中途半端』にはしない。

神社への階段を全て上り切ったなのは。

まだ異相体まで距離があったが、森から発せられる爆音や、雷が
事態の深刻さを物語る。

「レイジングハート、お願い！」

『了解、STANDBY、READY、SET、UP』
「レイジングハート！SET UP！」

そして今現在この森で、フェイトと異相体との戦闘が行われている。

戦況ではフェイトが押していた。

不利であることを悟ったのだろうか。

異相体の背中から蝙蝠のような翼が生え、その場を逃走しようとする。

しかし飛べるのは相手も同じだ。

そしてスピードにおいては彼女の方がはるかに上、あつという間に追いつき、バルディッシュの刃で、上空から唐竹の要領で振りおろし、相手の左翼を切り裂いた。

だが異相体の左翼は直ぐに再生。

すぐに態勢を立て直す。

斧を振りおろした勢いで一旦地面に降りたフェイトは追跡を続行しようとするが、切られた翼が、かの生物に寄生して成長する完全生命体の幼年体のような物体に4つ分裂し、彼女に襲いかかる。

が、フェイトは冷静に食いつこうとした物体を電撃を込めたバルディッシュの一撃で消滅させた。

もはや逃げられないと思ったのか、空から異相体が突っ込んでくる。

それに対処しようとするフェイト。

だが反対方向から、異相体へ桜色の光が突進。

思わぬ不意打ちに異相体はそのまま地面へ激突した。

桜色の光は魔力を纏って、空から体当たりを敢行したなのは、今の攻撃で深手を負った異相体を足で押さえつけ、キャンオンモードのレイジングハートを向ける。

しかしそれにしても、魔力を全身に纏い、体当たりを仕掛けるとは、なんとも滅茶苦茶な戦法である。

もっとも、ウルトラマンもこうして空から体当たりをよく仕掛けているんだけどね。

「ジユエルシード！封印！」

封印処理を施した砲撃を放とうとするのはだが、異相体は最後のあがきで振り払い、飛び上がった。

その逃走を許さない黒い影が迫る。
フェイトだ。

『Scythe Form』

バルディッシュから魔力刃を形成し、

「ジユエルシード…封印！」

死神のごとき一閃が、異相体を襲い、異形の生命体は為す術もなく爆発した。

あれが…光兄の言っていた女の子…

上空を浮遊する、黒いバリアジャケットとマントをはおり、自分よりも長い金髪をツインテールで縛り。

明らかに細い体格とは似合わない
似合う無骨な斧の形をしたデバイス。

はずなのに、彼女によく

そして綺麗な容姿をしながら……

どこか………寂しい眼をしている。

歳は…私と同じくらいかな？

その女の子は目の前に浮いているジュエルシードを取ろうとする。

「あの…待って」

なのはも空へ飛び、彼女の正面へ止まり、滞空状態を取る。

「それはユーノ君が見つけて、この街の人たちに迷惑をかけないよ
うに必死に……」

すると少女は。なのはに視線を移すと、稲妻を纏った魔力弾を生
成する、

明らかにやる気だった。

「……あなたも…それを探してるの？」

それでも相手の真意を確かめようと、話を試みるなのは。

「それ以上近づかないで……」

「お…お話したいだけなの…あなたも魔法使いなの？とか…なんで
ジュエルシードを？とか……」

『FIRE』

相手は返答がわりに魔力弾を発射した。

かろうじて回避するなのは。

しかし、その瞬間、少女はなのはの背後に回り込み、

魔力の刃をなのはに一閃する。

それもなんとか上昇して躲した。
だが予断を許さず、正面から閃光のようなスピードでなのは迫る少女。

「待って！私…戦うつもりなんてない！」

相手の一撃をレイジングハートで受け止め、杖での鏝迫り合いの状態になりつつもなお、話し合いに持ち込もうとするのは。

集める対象が同じなら、争う必要は無いのではと、なのはは考える。

が、だからと言って素直に協力まで…

「だったら、私とジュエルシードに関わらないで！」

いかなかった…

「だからそのジュエルシードはユーノ君が！」

発掘した本人を差し置いて集めて、何をする気なの？

膠着状態が続くと判断した二人は一旦後退。

フェイトはチャンスとばかり。

『Arc Saber』

バルディッシュから生成した魔力刃をブーメランのように飛ばす。

『protection』

なのははシールドを張り、防ごうとするが、

『Saber Explooad』

三日月状の魔力刃はシールドに接触すると、魔力拡散を起こし、暴発した。

爆風を受けたなのは態勢を立て直せないまま、地面へと落ちていく、

そして止めとばかり、魔力弾を生成した少女は、

小さく、だがはっきりと…

「……ごめんね…」

詫びを入れ、魔力弾を放った。

高速で発射された雷の弾丸は、落下するなのはに迫り、彼女の意識は飛んだ。

フェイトのフォトンランサーは正確に、なのはを捉えたはずだった。

「あの光？」

レイジングハートから、光が発し、魔力弾を受け止めると、なのはの体はゆっくりと地面に降りていく。

やがて光は人の姿を形作り、彼女を横たわらせた。彼を纏っていた光が消える。

フェイトは驚いた。

先日、なのはとウルトラマンゼロが倒した巨木の異相体の出現と同時に、市民プールで発動したジュエルシードを回収した際、建物のガラスからいきなり現れた。

謎の鏡の騎士。

勇夜から、白い魔導師の子がまだ魔導師になりたての地元の子であることは知っていた。

だがこの騎士は…あの子とどう言う関わりが…

騎士は両腕を×字に組む、独特のファインディングスタイルでフェイトを見据える。

フェイトも愛機を構えた。

対峙する両者。

突然騎士の姿が光を発して消えた。

どこに…

フェイトは辺りを見回す。

後ろ！

反射的に、横に回避。

いきなり現れた騎士の蹴りは宙を舞った。

速い…

魔法とは違う方法で、ワープしたのも脅威だが、スピードに関しても、フェイトと五分五分。

「ミラー！ナイフ！」

騎士の手先から、無数の矢が飛んでくる。
飛行でかわしつつ、バルディッシュの魔力刃で迎撃し。

『Arc Saber』

魔力刃を投げつけた。

三日月の刃は、正確に相手に当たった…のだが…

「えっ？」

当たったのは、騎士ではなく、鏡だった。

真つ二つに切裂かれ、破片となって散っていく鏡。

少なくとも、^{デコイ}囷であることはフェイトでも理解できる。

なら…相手はどこに？

「ミラー！キック」

上空から、本体が急降下してきた。

回避に間に合わない！

『ラウンドシールド』

愛機が障壁を張るが…

「きゃっ！」

その衝撃に、態勢を崩したフェイトは、地面に叩きつけられた。
バリアジャケットの恩恵で、外傷はほとんどない。

追い打ちをかけられる前に、立て直そうとしたが…

突然、フェイトは体が重くなったかのような感覚にとらわれる。自分の周りの引力だけが強くなったかのようにだった。その重力を前に、空を飛ぶことも、魔力を生成することも、立ちあがることさえ、ままならない。

周りを見ると…

光でできた4つの十字架が、彼女を囲んでいた。

鏡の騎士、ミラーナイトの技の一つ。

『ミラーウエイト』

特殊な重力波を生み出す光の十字架で、対象の動きを封じる技だった。

なのはの初陣の時に、異相体の動きを封じたのもこの技だ。

ゆっくり地面に降り立つミラーナイト。

当分フェイトは動けない。

その間に、彼は彼女に聞こうとした。

彼女がジュエルシードを集める……その理由と…

？自分の友？と思わしき人物と、何らかの関わりがあるのか？

ということ。

「いくつか。君に聞きたいことが…」

と言おうとしたが…

「はっ！」

気配を感じ、空を見上げると。

ミラーナイトに向かって、光の球体が急接近。

あの光は…まさか…

それを思案する前に、ミラーナイトは光に包まれた。

その数分前：

森の中を走る少年が一人。

諸星勇夜だ。

もう戦闘が始まっているのか：

茂みで向うがどうなっているかは分からないが、爆音と雷鳴でフ
ェイトが戦っていることは理解できた。

フェイトとの約束があるため、うかつに介入はできない。

とは言え、何もできないわけじゃないし、それを何もしない言い
訳にもしない。

せめて戦闘の火の粉を、海鳴の人たちにかからないようにしない
と。

その足で現場へ向かおうとしたその時。

彼の体に、『見えない流れ』が染みわたる。

空気中に漂うエネルギーの流れ。

そしてこの波動の持ち主がだれか、直ぐいきついた。

ミラーナイト

リヒトか？

やはりあいつはあの子 高町なのはと何かしら繋がりがあある。

今頃フェイトと戦闘を行っているだろう。

あいつの技量は、実際戦ったこともあるからよく知ってる。

確実にフェイトの方が分が悪い。

となると…

「リンク」

『了解』

リンクから、ウルトラゼロアイが出現。

約束は、約束だ。

ちゃんと果たすさ。

「デュア！」

ゼロアイの光が勇夜を包み、光体は、フェイトとミラーナイトの元へと飛んだ。

「ここは？」

ホワイトアウトした視界が元に戻り、ミラーナイトは今、どこかの森にいた。

さつきフェイトとの戦闘があった位置とは、そんなに離れていない。

だが、外にいるのに、室内にいるような、この独特な圧迫感は…

「結界の……中か…」

それを確認した時だった。

背後に気配を感じ、振り向くと。

「……………ゼロ……………」

自分の戦友であり盟友である。

ウルトラマンゼロが……そこにいた。

この結界を張っている主も彼だろう。

今は、お互いの立場上…戦うしかないようですね。

彼は覚悟を決め、両手を交差させた構えをとる。

ゼロは、その様子に一瞬戸惑いを見せたが…

彼も意を決し、片手を前に突き出し構え、戦闘の意志を表明する。

対峙する両者。

こうして舞台を、平行世界の地球に移し、二人の戦士の再戦が始まった。

人と同じ体格をしながら、人を超えた力を宿す巨人たち、

たとえ今、大きさが人間と同じサイズでも、

その戦いの苛烈さは凄まじい。

お互い、武器を持たない、素手でのストリートファイト。

だが彼らに掛かれれば、それだけで。魅了かつ壮絶な決闘となった。

走るだけで地面が抉れ、

拳を振るうだけで、突風が起き、
蹴りが舞うだけで木々は倒れた。

並の人間ならその戦闘の余波さえ、致命傷となる嵐の渦中。

ミラーナイトの蹴りの連撃が、ゼロを襲う。

美麗で、かつ鋭く無駄が無い。

それでいて、細身な体躯からは考えられないほど重い。

だがその連舞をゼロは、最小限の動きで回避しつつ、相手の足を
掴み、そのまま投げ回した。

だが相手も態勢を立て直し、倒立の勢いで反撃の蹴りを見舞う。
それを両腕で防御し後退しつつ、頭部のゼロスラッガーを投擲す
る。

ナイトに迫る刃は彼の手刀で弾かれるが、その隙を狙い、ゼロの
額のランプから緑の光線、エメリウムスラッシュが放たれる。

それを間一髪、両手で掲げて形成されたバリア。

『ディフェンスミラー』

で防ぐミラーナイト。

追い打ちとばかりゼロは、ナイトに向けて飛び上がり、袈裟がけの手刀が下される。

ナイトはそれを上空へ飛びあがり回避した。

「シユア！」

ゼロも続いて飛び上がる。

空中で再び対峙する格好となる二人。

既に森は嵐か竜巻が来た後のように荒れていた。

結界の中だからこそ、二人はここまで戦えたと言える。

互いに譲らない互角の勝負。

死線を潜り抜けてきた戦士だからこそできる。

戦闘と言つ名の円舞。

ミラーナイトは手の甲を重ねると

「ミラーエッジ」

甲に位置する光沢から、光の刃が伸びた。

対してゼロも、頭部のゼロスラッガーを手に取り、逆手に構えた。

武器と持ち方は異なれど、二刀流と二刀流。

ゼロとミラーナイトはこの時、不謹慎であることは理解しつつも、

二人は、互いの技量に…

感嘆し。

驚嘆し。

別れて久しい友は、今でもその腕を衰えさせていないことに歓喜していた。

やはりこの二人も、根っからの文字通りの戦士である。
数秒の間の後。

第二ラウンドが開始された。

奇しくも、なのはとフェイトの初戦と同じく空中戦。
だがその凄絶さは、比べ物にならない。
いくらなんらかの能力の補助を得ても、人間の体は音速を超えられない。
そういう作りになっていない。

だが彼らの場合、そんな常識は通用しない。

音速を遥かに超えたスピード光点と光点が交差し、シザース軌道を描きながら、刃と刃が交わり、激しいスパークが幾つも起きる。

まさに………超音速の大決闘。

刃を振るうスピードも、もはやまともに視認できない。
刃を交わしたのがこれで何十回となるだろうか？
そのまま膠着状態が続くと思われたが、状況は動いた。

ミラーナイトの刃がゼロのゼロスラッガーを弾かせ、彼の手元から離れさせた。

後退しようとするゼロにミラーナイトは決めてとばかり、一気に踏み込み、両手の光の刃を突きだす。

勝敗は決まったと思われた。

が、ミラーナイトの刃と刃がクロスし、ゼロの体を捉える寸前。

ゼロは刃を両手で挟み込んだ。

真剣白羽取り。

相手にそれを理解する暇さえ与えず。

強烈なストレートキックがゼロから炸裂。

腹部へもろに受けたナイトは、その勢いを逆に利用して距離を取りろうとするが、彼の背後に迫る物体が、

ゼロスラッガーだ。

間一髪振り払うナイトだが、ゼロへ向き直ると、炎を纏ったゼロの右手が迫っていた。

ゼロが師匠から受け継いだ、エネルギーを纏った手で繰り出す手
刀技。

『ハンドゼロスライサー』の強化版。

『ビックバンゼロ』

回避は不可避と悟ったミラーナイトは×字に構えて受け止めようとする。

「デエヤア！」

紅蓮の手刀が、ミラーエッジと衝突した瞬間。

光の刃は砕け散った。

だがナイトはその衝撃を利用してゼロから離れ、腕を×字に組み、エネルギーチャージ。

対してゼロも左腕を横に広げ、体内のパワーを両腕に集束。

「シルバアアアー！クロス！」

「デエア！」

ナイトからは十文字の光刃、シルバークロス。

ゼロからは光の粒子の奔流、ワイドゼロショット。

二人の必殺技が炸裂。

光刃と光線は衝突すると、凄まじいスパークによる対消滅とともに爆発が起きた。

その爆発を見止めると、手合わせは終わったとばかり、二人は同時に地面に降り立ち、そして同時に変身を解き、人間態へと戻った。

「腕は鈍っていないようですね、ゼロ」

「たく…グレンならともかく、お前まで拳で伝えにくとは思わなかったぜ…」

実はこの二人、拳や足にテレパシーを込め、この世界に来てから
のことを報告し合いつつ、攻撃していたのである、
文字通り、拳と拳の語り合いであった。

ただ、それを理論的に実行したのは、後にも先にもこの二人だけ
だろう。

「まあまあ、その拳から、あの子とは今停戦しているだけ、という
ことはよく伝わりましたから」
「ならいいさ、そろそろ外の状況を確認したいから、結界解くぞ」

勇夜は結界を解く。

竜巻に遭遇した後にも窺える荒れた惨状の森は、戦闘前の元の光
景に戻って行く。

結界のおかげで、外界には被害の欠片も無い。

この時勇夜は、改めて魔法を覚えておいて良かったと、内心呟い
ていた。

リンクが持っているウルトラマンノアの記憶によれば、ノアが弱
体化、あるいは力をセーブした形態であるネクサスは、地球では3
分だけ外界と遮断できる異空間『メタフィールド』を形成できる能
力を持っているとのこと。

生憎ゼロには、その能力は受け継がれなかった。

その代わりが封時結界である。

ゼロの姿の時は、ウルトラマンの力を最大限発揮できるが、魔法
は『殆ど使えなくなる』。

幸い結界はその『殆ど』から除外されていた。

「でも良かったのか？義妹いせむすめさんだけに戦わせて」

「非殺傷を持たないミラーナイトとしての僕では、ロストロギアに
は迂闊に手は出せませんからね…破壊はともかく、封印するとなる

と、今の僕では門外漢ですから」

今のところ、光はデバイスを持っていないこともあって補助魔法ぐらいしか使えないし、デバイスを持ってないと攻撃魔法を非殺傷に設定もできない。

それに…

あの一件以来、よりジュエルシード収集に乗り気になったなのは。

次は自分にやらせてほしいと言ってきた。

当初は反対したが、それでもなのは譲らなかった。

現状でジュエルシードを確実に封印できるのは、デバイスを持つ彼女だけ。

ならいっそ、ちゃんと実戦を経験させた方が良いと判断した。

危険への対処法は教えることはできても、『危険』がどれだけ危険なのかは、結局のところ、実際危険に遭遇しないと分からないのだ。

籠に閉じ込めてばかりでは、いつまでもそれを身に付けられない。過保護過ぎる教育では、良い結果を生まないのだ。

「（光さん！直ぐに来て下さい！）」

とその時ユーノが念話で呼びかけてきた。

光のみへの念話だったが、勇夜は光の表情から事態を把握し。

「行ってやれ」

行ってあげるよう促した。

「はい」

光はなのはたちの許へ走っていった。

「広域サーチ、第四区画終了と」

その日の夜、アルフは街の上空で、魔法陣を足場に立ち、ジュエルシードの探索を行っていた。

『アルフ、お疲れ様』

そこにフェイトから通信が入った。

「あ、フェイト」

『そっちはどう?』

「発動前のやつを一個見つけたよ」

一方のフェイトは、噴水のある公園にいた。

「私は、夕方に封印した一つだけ…」

『そっ…』

ジュエルシードは、相当かくれんぼが上手なようで、二人がこの数日で得た収穫は3個だけ…

早く…母さんのところへ、持って行きたいのに…

焦りを抑えながら、フェイトは今日交戦した二人のことをアルフに話した。

『やつぱり…あの白い子と鏡から出てきたあいつは、グルみたいだね』

「うん……勇夜の言う通り、女の子の方は素人だったけど……あの鏡の戦士は強かった、手加減されたのに、負けそうになったし……」
『本当かい！？怪我とかは……』

「大丈夫………多分………勇夜が………」

『助けてくれたってこと？』

「分からない、いきなり光が来て、一緒に消えちゃったから………」

けど………何でだろ？

勇夜が助けてくれたって……絶対そうだって………確証はないのに
確信が………フェイトにはあった。

その頬も自身が気づかないほど、無意識のうちに緩んでいた。

目を覚ますと、見知った天井が目に入る。

まどろみを残しつつ、なのはの意識と思考能力が少しずつ覚醒して行く。

そうだ…

海鳴神社の境内の森に現れた、異相体のジュエルシードを巡って、あの女の子と話したいと思っただけど、攻撃されて…

負けちゃったんだった。

『ごめんね……』

とどめの一撃を受ける直前、あの時確かに聞こえた。

あの子の謝罪。

「なのは……」

ユーノ君が、心配の眼差しでこっちを見ていた。

「光兄は……」

「念の為につて、見回りに行った」

「そうなんだ……あと、憑りこまれちゃった動物さんは……」

「無事に元に戻ったよ」

「……………良かった」

「あと……光さんが、今日はもう休みなさいって」

本当なら、直ぐにでも収集に出たいけど、言う通りにするしかないよね、もう夜だし、気を失ったんだし、休める時は休めって恭也兄ちゃんも良く言っていたし。

「うん……………分かった……」

でも……あの子って……いつたい……

なのはは無意識の内にあの『金髪の魔法使い』のことで頭が一杯になっていった。

フェイトがこの世界での隠れ家的なマンションがあるのと同じく、諸星勇夜ことウルトラマンゼロも、この地球での住居を借りている。

彼が借りたのは、レオパレス21のマンション。

家具家電が予め付いてきて、敷金礼金0、短期間での契約も可能だったので、ゼロにとって都合が良かった。

ちなみに戸籍とか言った個人情報はどうしたのかと言うと、裏技を色々使ったとしか今は言えない。

そして今ここには、

「CMの通り、本当に一通り揃ってるんですね」

高町光ことミラーナイトが訪問していた。

「レオパレスに感心するために、来たわけじゃないだろ？」

「そうでしたね」

勇夜は現状で分かった情報の交換と今後の対策を組むために、彼を呼んだのである。

「まずこつちから話すな、一応……フェイトがなんであれを集めているのかは、目星が付いてる」

「本当ですか？」

「ああ、あいつのお袋さんから頼まれた『お使い』らしい」

「……………やけに物騒な『お使い』ですね……」

今までジュエルシードが引き起こした事故、事件を反芻するだけでも、アレの危険性は身にしみて理解できたし、次元振が起きていないのが奇跡的とさえ考えてしまう。

「お袋さんの名はプレシア・テストロツサ、あちらの世界^{ミットチルダ}じゃ、名の知れた技術者で魔導師……………魔法使いだったんだが……」

勇夜はフェイトの母が、ある事故をきっかけに失踪したこと、以

前からフェイトにロストロギアを集めさせているなどを・・・大まかに話した。

「しかし…そうまでして彼女は何を…」

「そこなんだよ…一番わかんねえのは…ただ…」

「ただ？」

「ちょっと引つかかることがあってな、リンク、モニターを」

『了解』

勇夜の目の前に長方形の3Dモニターが現れる。

「プレシアはあの事故の時、娘さんを一人亡くしてるんだ」

「あのフェイトって子の…姉、ということですか？」

「……………とりあえず、これを見てくれ」

怪訝そうな顔で、ある程度モニターに入力操作をすると、彼は画面を光に向けた。

ディスプレイに表示された写真を見た時、光はそれから目が離せなくなった。

「本当に……………この写真の子は、そのアリシアなんですか？」

「ああ……………」

そこに写っていたのは…

どう見ても…

にしか……………見えなかったのだから。

Episode 9 - The First Contact And So

ゼロとミラーナイトの戦闘が、もろサーヴァントになっちゃった！
でも超人で、二人とも日頃から鍛えてる設定で、結果内だからいい
かな…

だってフィクションとはいえ、Fate/zeroの綺礼だって、
あんなだけのチートだし。

Episode 10 - すれ違い

分かってたつもりだった。

今組み手をしている相手とは力量差があるって、

格闘には自信があったけど、上には上がいたって、

でも…想像以上だ。

息が苦しい。

短いサイクルで呼吸が繰り返される。

仰向けに地に倒れた体が、疲労で重い。

起き上がりたいのに、起きあがらない。

まるで、腹筋したいのに一回もまともに起き上がれない運動音痴
みたいに

なのに…

「おい…大丈夫か？」

今自分とやり合ってた相手は息一つ乱してない。

こっちは全速力で走っていたのに、彼は軽い散歩をしてきたようにけるっとしている。

どんだけタフなんだよ……

失礼な言い方かもしれないし、使い魔のあたしがいうのもなんだけど本当に人間なの？

あたしたちの世界では『魔導殺し』と呼ばれ、

相手によるけど腕っ節だけで、魔導師とやりあって勝ってしまっ。そんだけの武道派で剣士としても魔導師としても名高いのに、未だに囑託魔導師のまま、

11年前、ミットチルダに迷い込んだ時空漂流者。

諸星勇夜。

「ほらよ…しばらく休憩だ」

勇夜が差し出したのは、この世界の清涼飲料水だ、なんでも体中の水分とほぼ同じ成分が入ってるらしい。

すぐにでも水が欲しかった。

今マンションの屋上にいて、夜だったのに、真昼間の砂漠を長時間歩いてきた気分だ。

キャップをとると直ぐにボトルの液体を口の中に放り込む。

体内の水と同じという謳い文句は本当らしい。

まだ体は重いが潤いが戻ってくるのがまざまざと感じられる。

飲料水を与えてくれた彼はあたしからのわがままでこうして毎晩、組み手に付き合っている。

アルフの相棒で主人でもあるフェイトは空中での高速機動による接近戦がメインの魔導師だ。

アルフも一応空は飛べるけど、元が狼であるせい、フェイトはどうまく飛べない。

陸上なら負けないのに、空での追いかけてこではいつも負けはアルフだった。

だから彼女は、戦闘の時には中々遠距離の後方支援がメインだ。接近戦をやることはあるけど、メインと言う訳でもない。

でも彼に指南を求めた際、まず体から鍛えろと言われた。

大まかなメニューは3つ。

常人より多目な準備運動とトレーニング。

雑念を捨てる為の黙想。

そして組み手。

これらのメニューを結界内で行う。

結界の中では、時間の経過が結界外と異なる。

外では数十秒の時間だが、内部では一時間前後。

よって実質、短くて半日、長くて丸一日分ぶっ通しの特訓であった。

本人の前述の独白の通り、アルフ自身、素手での格闘なら自信はあった。

だがあそこまで攻撃が通らないと思わなかった。

何度殴っても、何度蹴っても相手に当たらない。

避けられるか、弾かれるか、払いのけられるかだ。

そのくせ、勇夜からの攻撃はほぼまともに受けることになる。

拳は弾丸のように速いし、手刀は刃のように鋭いし、蹴りはハンマーのように重いし、どれも急所に的確に当ててくるのだが、特に投げ技は一番きつかった。

気がつくくと、自分の体が宙に浮き、地面に叩きつけられる。

一回ならまだしらず、色んなバリエーションで何度も何度も投げられた。

勇夜によると投げ技は、自分の体重がそのまま、ダメージとして自分に伝わると言う。

どんなに身をクッションや鎧で覆っても、ほとんど意味がないらしい。

事実、投げられた瞬間が一番体にきつかった。

前になんでこんな訓練内容なの？って聞いたら。

「運動を繰り返すと、体内の魔力循環の巡りが良くなって効率良く、素早く魔法も使えるようになるんだよ」

と返答が帰ってきた。

おまけに、稽古中の勇夜はとにかく厳しい。

鬼、鬼畜、鬼気、鬼面、鬼教官、鬼軍曹

鬼がつくほど厳しい。

容赦無し。

甘えも慈悲も一切無いスパルタ。

リニスの魔法の授業とは、180度正反対。

休憩は適度に入れてくれるが、それまでは砂漠で長時間走らされるような地獄を味わされる。

ちよっとでも泣き言が入ると。

「お前の耳と鼻と目と馬鹿力と俊敏性は飾りか！！？人より頑丈で恵まれた体を持っておいてそのザマはなんだ！？」

「体で覚えこまなければならぬことを、口先で逃げるような野郎は足手まといだ！」

「一体お前が使い魔として、相棒としてどんな努力をしたんだ？使い魔アルフはフェイトに一体何をした？」

「その顔はなんだ！？その眼はなんだ！？その涙はなんだ！？お前がやらなくて誰がやる！？お前の涙で…フェイトを救えるのか！？」

手までは上げなかったが、アルフは徹底的に彼から罵倒された。

昭和のスポ魂精神と現代の合理的トレーニングが、見事に合わさった特訓であった。

まだ数日しかたっていないので、体に変化があるのかまだ分からない、それこそ一朝一夕で鍛えられるなら苦労はしないけど。

とりあえずメンタルは、確実に鍛えられている実感はアルフにはあった。

ある日の夜、アルフは…

「あのさ…あなたのデバイス見せてくれない？」

藪から棒であったが、どうしても気になることがあったのだ。

「いいけど振り回すなよ、おもちゃじゃねえんだから」

「あたしはそこまで子どもじゃない！」

反論はしたけど、実際年齢ならフェイトより年下なのは本当だっ

た。

彼は立ち上がり、デバイス（相棒）のリンクを指にはめている左手を肩まで上げて伸ばした。

「リンク」

『イエスマイマスター』

地面に青緑色の魔法陣が現れ、起動用パスワードを唱える。

「『古より受け継がれし光よ、私の剣と銃と鎧となりて、邪悪なる意志を薙ぎ払え、契約のもと、絆を守護せし希望を我に、零牙！SET！UP！！』」

大方の魔導師ならそのリンクが杖か武器へと変わると想像するだろう。

だが彼の場合は違った。

リンクから、青緑色をした雪のようなマリンスノーのような粒子が溢れだす、最初は無軌道に溢れてたそれは、勇夜の左手を中心に集まり、一瞬光輝くと、実体化したそれを勇夜は手に取った。

それは鞘が着いた一振りの剣だ、ただあたしの知ってる剣と違って、弓みたいに刀身が曲がっている。

「こいつの基本モードの元になった剣は刀っていつてな、この日本で独自に発展した刀剣さ」

そう言うとそれを鞘から抜いた。隠された刃が月の光に照らされ光沢を見せる。

「綺麗……」

一度目にしたことがあるにも拘らず、アルフは思わずそう呟いていた。

刀は普通の両刃の剣と違って刃があるのは片方のみで、やはりやや湾曲している。

刀身は雲のような模様が幾つも並べられ、日頃から手入れをしているのか新品同然に光を反射し、この上ない美しさを醸し出していた。

それでいて、見ただけでこちらを容易く切り裂いてしまうような武器としての鋭さを秘めた、武骨さと流麗さを兼ね備えている。

芸術には疎いけど、優れた美術品や工芸品を目にした時、なんとなくこんな感情が浮かんでくるんだろうなと感じた。

いくつか気になることはあるけどまずは…

「てつきり、そのリンクが変形するのかと思ってた」

そう：デバイスを起動したにも関わらず、リンクは指輪のまま勇夜の左手に収まっている。

「私は、バリアジャケットの生成、魔法発動と戦闘のサポートが主な役割です、武器の使用と、それを介して発動する一部の技は、この非人格型アームドデバイスの『零牙』が行います」

「アームドってことはベルカ式も使うのかい？」

「いや、一応練習はしたが、似たようなレアスキルがあるから、あんま使わねえな」

そのレアスキルも気になるが、確かに、異相体との戦いから、フイトと同じ接近戦がメインだと言うことは窺えた、魔力を介さず、

只の一振りでもバルディッシュを切ってしまうほどの腕前をもってるとは思わなかったけど。

「ねえ、ちよつと魔力弾を撃ち込んでみてもいい？」
「良いぜ」

魔力弾を数発、生成する。

勇夜も刀を鞘に納め、フェイトと対峙した時のように構えた。私は勇夜に向けて魔力弾を撃った。

すると信じられない光景が目に見えた。

彼は刀を抜き、上段から振り下ろすと、全ての魔力弾がろうそくの火のように消し飛んだ。

使い魔であるアルフの目でも、まともに見えないくらい素早く抜いたと言え、

？刀を振ったことで発生した風で魔力弾を掻き消したのである？

「風圧で魔力弾を消すなんて……」

やはり『魔導殺し』の異名は伊達じゃない。

「魔法にしる、剣術にしる使い手の使い方次第ってやつさ……持ってみるか？」

「いいのかい？」

「ああ……気をつけるよ」

彼から零牙を受け取った。

実際持ってみると……重い……

予想以上の重さだった。

本とかで見た剣の構えを見よう見まねで、やってみた。

「力入れ過ぎだ、こういうのは卵持つぐらいの握力でいいんだぜ」
「卵っ!？」

これを勇夜の言う通り卵を持つぐらいの握力で振ってみると言われても、無理としか言えない。

これをあれだけの速さで手足のように扱う勇夜って…

「何者なんだいあんた？」

様々な意味合いを含んだその言葉を無意識の内に声に出していた。一拍置いて、それに気づいた、どうしよう、どう言い分すれば、

「聞きたいか？」

「いや……やっぱいいかな」

「?………ならいいが……」

とりあえずほっとした。

勇夜は零牙を鞘に納刀し、それをまた粒子化させるとリンクへと戻っていった。

「ところでさ……こっちも少し聞いていいか？」

「なんだい？」

「アリシアって女の子に……聞き覚えがあるか？」

「……………」

訳が分からなかった。

そもそも自分には見知った人間は、フェイトにリニスに…あいつぐらいで…

男と知り合いになったのも勇夜が初めてだった。

アリシアなんて、聞いたことが無い。

「フェイトの姉貴らしくてな、あの子が生まれる前に死んだらしいんだが」

そんなこと初耳だ。

あいつの使い魔だったリニスだって、知らなかったかもしれない。

「アルフ？」

「え？あついや…」

「……………やっぱうまくいってねえんだな…フェイトとプレシア・テストアロツサは…」

「……………っ！……………知ってたのかい？」

「……………薄々な…」

「……………昔からあいつはいつも研究室に籠って、まともなフェイトと顔を合わすこともしなかったんだ…」

あいつは、あたしが使い魔としてフェイトと契約した頃には話どころか、顔さえ、フェイトにも合わせなかった。

だからあたしから見たあいつは母親失格の人でなし、でしかなくて…

「なのに…フェイトに危ないお使いさせといて、お褒めの言葉を一つもかけてくれない……………」

その度にフェイトは寂しい気持ちを無理に笑ってごまかしてきた。
今だって…

「でも…それと、そのアリシアって奴とどんな関係が…」

「前に、20年以上前の魔導炉実験の事故の記事を見たことがあって、その開発主任がプレシアだったんだよ、そのアリシアって娘さんもその事故に巻き込まれて亡くなってるんだが…」

20年以上…

「そのことでフェイトから聞いてないか？」

確かフェイトから、自分はその頃生まれて、勇夜の言う事故で昏睡状態になって、5年前に目が覚めたって…

これじゃ辻褄が…

「そのアリシアの写真を見つけたんだけどさ……見るか？」

なんでだろ、よく分かんないけど、見ない方が良いつて、こころが警告してくる、その先には踏み込むなって……フェイトのお姉さんなのに…

「無理にはいわねえよ…アルフにはかなりきつい代物だからさ」

でも…

「うん…」

「……………っ!？」

勇夜の一言で、なんとか現実に戻ってこれた。

「悪いな…嫌なこと聞いて……………今日の組み手はこれでお開きだ」

そのまま、結界を解除し、その場を立ち去ろうとする勇夜。

「勇夜……」

「……………今のお前に、稽古組む余裕あんのか？」

……………。

思えば、あの時、勇夜が全てを話さなかったのは…英断だったと思う。

だって…あの後に全てを聞いた時、

自分の中にあつた引っかかりが全て解けたと同時に

まるで自分のことのように絶望したから…

インテリジェントデバイス。

端的に言うと、AIを搭載した、人格を持つ魔法の杖である。

使い方次第では、魔導士のポテンシャルを最大限に引き出せるが、術者が未熟だったり、デバイスとのコンビネーションがなかったりするとともに扱えない代物だ。

それに大変高価な代物、車なら高級車レベルに相当し、またAIを搭載するので構造上とても複雑で脆弱なので、あまり一般には浸透していない。

一方で、ビギナーにも優しいチュートリアル機能がインテリジェントデバイスにはある。

たとえば高町なのはとレイジングハートの場合。

今、彼女は授業中なのだが…

『イメージトレーニングを開始します』

なのはの視界は授業を教える先生と黒板と、それを受ける生徒との授業風景から、青空と雲に変わり、海原を見渡せるほどの高さに浮いていた。

「ふええ…」

もう何度か空を飛んだ経験はあるが、その光景に言葉が出なかった。

それが、レイジングハートが作り上げた、仮想空間であり、なのはの脳内映像だっていうんだから驚きである。

まあこの機能は全てのインテリジェントデバイスに搭載されているのだが。

『戦闘には速度やパワーも必要ですが、それよりもさらに必要なものがあります、それが何か分かりますか？』

「ええーと、負けない気持ちとか…」

とつさに思い浮かべた言葉を言ってみた。

漫画では結構それで活路を見出したりするけど。

『好ましい回答ですが、それ以外に』

「えっと…」

『知恵と戦術：すなわち自分の力をどう使いつつ、勝利に持つていくかです』

前にレイジングハートは自分を『高性能な乗り物』と呼んでいた。乗り手がいないと性能は発揮できないと。

その乗り手が使いこなすために必要なのが、知恵と戦術ってことなんだよね。

そうしてトレーニングが始まった。

この仮想シュミレーターのおかげで、なのはは授業中でも魔法の練習が行えた。

だが熱心にレイジングハートの教導を受けている一方で彼女の頭は…

なんであの子…あんなに寂しそうな眼をしてたんだろ？

同じジュエルシードの収集が目的でありながら、自分と戦闘を行い、叩きのめした金髪の女の子のことで一杯だった。

初めて会った時、なぜか昔の自分を思い出した。

ずっと一人だと思い込んで、塞ぎこんでいたあの頃に…

いや…あの子の抱えてるものはひょっとしたらあの頃の私以上かもしれない。

「ごめんね…」

と詫びておきながら自分を落とした少女。

どうしてあんな寂しい目をしてまで、ジュエルシードを集めてるんだろ？

気がつけば一日中、彼女のことが頭から離れなかった。

それは言葉に出さなくても…

「いい加減にしなさいよ！」

放課後の夕陽が指す頃、なのははいつものようにアリサとすすかと三人で帰っていたのだが、物思いにふけているのはの態度にアリサの堪忍袋の緒が切れた。

「最近何話してもぼーと上の空であんた何考えてんの!？」

なまじ親友であるがゆえ言葉に出さなくても、顔で『何か悩みがある』ことが筒抜けだったのである。

「ごめん…」

そして内容が内容なだけにまともに話せず、そしてうまく誤魔化すための言葉を持たないなのはには『ごめん』以外に返せる言葉が無く。

「ごめんじゃない！あたしたちと話してるのがそんなに退屈ならいくらでもぼーつとしてなさいよ！謝るくらいなら…事情くらい教えてもらっても…いいじゃない！」

「アリサちゃん！」

それを素直に受け止められるほど、気持ちに余裕が無いアリサはその場を走り去って行った。

「なのはちゃん…」

「いいよ…今のはわたしが悪いから…アリサちゃんの所に行っただけ」

「ごめんね…」

なのはを置いていくことが申し訳なさを感じつつも、アリサが去っていった方向に走って行った。

そう言えば…

— 昨日のことだ。

光兄が見周りから帰ってきた時…

丁度、今の自分みたいな表情をしていたような気がする。

やっぱり…わたしのわがままから…

光兄もユーノ君も、ほんとはあたしにこんなことさせたくなかったんだ。

たとえ自分にレイジングハートの『乗り手』の資質があるといつても、

特に光兄は昔、王国を守護する騎士だったこともあって、やっぱり

りあたしみたいな女の子を戦わせることに抵抗感があるんだと思う。
昨日は許してくれたけど、怪我もしちゃったし…

でもあの人が…

あの、口調は荒いけど、自分を叱咤してくれた光の巨人。

『ウルトラマンゼロ』

あの人が言ってくれたように、中途半端に終わりたくない。

だからちゃんと言おう。

わたしは？辞めない？って。

親友への苛立ちで、アリサは前を向く余裕も無いまま走っていたため。

「きゃ！………ごめんなさい！」

通行人とぶつかってしまった。

相手の顔を見ないまま、頭を下げ、顔を上げると。

「あ…あなた………」

「アリサちゃん！」

そして、アリサを追いかけてきたはずかも。

「あ……」

その人に釘付けになったからである。

「なんだ？」

その通行人が何を隠そう。

先日のサッカーの試合で、選手を差し置いて名プレーを披露した。諸星勇夜だったからである。

「で、その親友が、理由は分かんねえけど悩んでて、あんたらに話してくれないことに怒って走ってきたら、俺とぶつかったってわけか……」

アリサとすずかは、近くの公園でブランコに座りながら、向かいの金具に座り、今ぶっきらぼうな口調でいきさつを聞いて要約した勇夜と話していた

「そうなんです……」

俯いたまま何も言わないアリサの代わりにすずかが答える。

あの後直ぐに立ち去ろうとしたが……

「そんなに急いで、どこ行くつもりだ？それとも友達と喧嘩したのか？」

とあながち的外れでもないことを聞いてきた。

それから、そんなこんなで今に至っている。

「なのはは隠してるつもりなんだけど、悩んでいること、見え見えで……困ってることも見え見えで……なのに……何度聞いても教えてくれない……悩んでも……迷ってもいないなんて……嘘じゃない」

独白のように、アリスはやるせなさを口にした。

すずかも、同じ気持ちなのか沈んだ表情をしている。

だが勇夜は、彼女の顔から、別の『気持ち』を感じ取った。

別……と言うよりは、むしろその『なのは』と同じく、親友に言えない悩みを抱えている……表情と言った方が正確かもしれない。

「それで……その悩みを聞いてあんたはどうしたいんだ？」

「……………それは……………」

答えられなかった。

自分たちに打ち明けてくれない事実には惑わされて、そこから先を見落としていたからだ。

「確かに、その悩みを聞いてあげるだけでも良いことさ、それだけで心に乗った重りが軽くなる、でも……打ち明けようと思っただけ……結構時間がかかるもんなんだぜ」

「今は……無理に聞かない方が良くってことですか？」

「そんなところ……あんま押しすぎると……却って言いずらくなるもんなんだよ」

勇夜 ゼロは二人にそう言いながら、彼の父のことを思い出していた。

ずっと、父だと明かせぬまま、陰から見ていることしかできず、危うく闇に落ちそうになった自分に苦悩を刻むことしかできなかったウルトラセブン。

「まあ、ただ待つのも癪だ……ってんなら、『話せる時が来たら話せ』」

と予防線を張っとくって手もあるけどな」

要は、タイミングってことなのだ。

それを見定めないと、ずっとすれ違っただままになってしまう。

「ありがと…何か口にしたら楽になったわ」

アリサはそう言うと、素っ気なくその場を去っていった。

「私からも…ありがとうございます」

「いいさ、君だってその親友みたいに、そのなのにも、あの子にも言えない『抱えてること』があるんだろ？」

「え？」

どうやら凶星のようだった。

この子から感じる、魔力と違う『何か』に…関することか…或いは…

詮索はそこでやめた。

俺も似たようなもんだからな。

「あ…あの…」

「聞かねえよ、俺にも…そういうの抱えてるからさ…じゃあな」

勇夜はさすがの背を向けて、手を振りながらその場を後にした。

一人取り残されるはずか。

勇夜さんの言うように、今は、待ってることしかできないんだね。なら今は、待ってあげよう。

ちゃんと saying してくれるまで……

「あ、習い事に遅れちゃうー！」

「で…話してなんでですか？なのは」

突然なのはから話があると持ちだされたのは、帰って間もなく。

今二人は近所の公園にいる。

念の為、人払いの結界を張っている上である。

ちなみにユーノは先に散策に行つてこの場にはいない。

「あのね…ジュエルシード集めの…ことなんだけど…」

やっぱりその話ですか…

昨日なのはがフェイトと戦闘して負傷したこと。

見周りと評して、ゼロと接触し、彼から聞いた話の重さに、意気消沈して、なのはに素っ気なく振る舞ったことで、なのはに心配させたようですね。

「やっぱり…その…」

「もういいですよ、その話は」

「え？」

「ゼロだつて言っていたのでしょう？」半端に関わつて半端に後悔するな』って」

「うん…」

「なのも覚悟を決めたのなら、僕も覚悟を決めます」

でもその前に

「ですがなのは、僕からも話があります」

「何？」

こちらからも聞いておきたいことがある。

「ジュエルシードを集める以上、あの子とは確実に戦うことになり
ます、はつきり言っただけなのはより場数も積んでいて…強い、もし鉢
合わせになった時はどうしますか？」

「できれば…お話したい…なんで…ジュエルシードを集めているの
とか…」

「それでその後は…」

「え？」

光の目が冷静でありながらも、厳しいものになる。

「譲れない理由があるからこそ、彼女はなのはと戦ったんでしょ、
それはなのも同じです、目的を知ったところで、衝突は避けられ
ません」

「はい…」

今まで、こんなに厳しくなのはにものを言うことが無かったため
か、よそよそしい態度になった。

本当ならゼロに会ったことと、彼から彼女に関する情報を聞いた
ことを言っておきたいところだが、その彼から、集めている情報が
確信を帯びるまで待つてほしいと言われている。

なのはにそれを話さないのは気が引くけど…。
でも信憑性が不確かな情報は、却って混乱を招くということには
同感でもある。

「それでも…お話をしたいんですね？」

しばらく間を置いてなのはは、まっすぐ僕の目を見て、力強く頷
いた。

やっぱりそう言うところは物凄く。

頑固だ。

下手すれば、姫様やあのスターコルベット以上かもしれない。

「（なのは、光さん！）」

「ユーノ君？」

「見つかったんですか？」

「（一応は、でも反応が微弱でどのあたりにあるのかまでは）」

「わかりました、行こうなのは」

「うん！」

？別の宇宙から来たゼロが命がけで戦っているのです？

ふとエメラナ姫様がジャンバードに言ったという言葉思い出した。
た。

姫様は、ゼロのように戦えなくても、せめて自分にできることを
率先してやろうとした。

なら自分たちも人としてやれることをやろう。

とあるビルの上。

諸星勇夜ことウルトラマンゼロは立っていた。

目を光らせる。その表現のままに、黒目、瞳を青白く光らせながら。

クレアポヤンス
透視

人間態の時でも使える超能力の一つだ。

その能力で彼は、街中に隠れ潜むジュエルシードを探していた。

「リンク、どうだ？」

『ダメです…やはりジュエルシードの反応が微弱で、具体的な位置まで特定できません』

相棒のサーチでも簡単に捉えられそうにない。

「となりや…方法は」

透視も使いつつ、根気よく足で探し回るか。

か…
あると思われる場所に、魔力を打ち込んで、強制的に発動させる

一番手っ取り早いのは後者だ。

だがあのロストロギアは大変デリケート、ちよつと衝撃をぶつけただけで何が起きるか分からない。

それにこんな街の人だかりの中じゃ、とてもやる気にはなれない。フエイトたちなら多少のリスクを承知でやるかもしれないが。

.....つ.....!!

なんだ？この胸騒ぎ...

『どうしましたか？マスター』

「いや...なんか嫌な予感が.....」

具体的には分からない。

でもどうにも胸に引っかかりを感じる。

こつこついうのを『第6感』とか『虫の知らせ』って言うのか？

なんとなく『ウルトラマン』の力が必要になるような事態が起きる様な気がする。

『マスター、見て下さい』

勇夜はリンクの指定した方角に目を向けた。

空から金色の雷が降り注いでいる。

今、雷を起こせるような積乱雲は空には無い。

そして雲からは魔力が…

よって自然現象から来るものではないと気づいた。
だとすりゃ……雷鳴を轟かせる主は唯一人。

「フェイトか…」

第2ラウンドのゴングがもつすぐ鳴りそつだ。

Episode 11 - 慟哭の夜空（前書き）

9 / 29 : 加筆修正入れつつタイトル変えました。

Episode 11 - 慟哭の夜空

時刻は午後7時50分近く。

灯りに照らされた夜の街の喧噪の中、高町兄妹は歩いていた。

「（確かにこのあたりなんですね？ユーノ）」
「（はい…反応は確かに）」

このあたりに微弱ながらも、波動を発するジュエルシードがある。なのだが、やはりどこにあるかは、簡単に尻尾を掴んでくれない。手分けして探したいところだが、この時間帯に子どもが一人、歩いているのはとても目立つし…

光も戸籍上は未成年なので、そろそろ夜の街を歩くには厳しい状況だった。

そんな時だ。

突然雲が大量発生し、月光が照らす夜空を覆い尽くした。誰の仕業で、どういう意図で行っているかは直ぐ検討が着いた。

まさか！こんな街中で…

ユーノも相手の真意を察したようで、すぐさま広域結界が貼られ、周辺にいた通行人たちが消えていった。

「なのは！あの子よりも先に封印を！」
「うん！レイジングハート！」

『Standby READY SET UP』

レイジングハートの光がなのはを包み込んだ。

高層ビルの上で、反応がある地域に手当たり次第に魔力の雷を撃ち込んでいたフェイト。

やがてその稲妻の一つがジュエルシードに命中したのか、青い光の柱が上がった。

「見つけた……」

フェイトも柱が上がった方角へと飛んだ。

なのはとフェイトは光の柱にある程度接近すると。

『キャノンモード』

なのははレイジングハートを砲撃形態にし

『グレイブフォーム』

フェイトはバルディッシュを槍としても使用可能な、強力な大規模魔法を使用する時にとる形態、グレイブフォームへと変えた。

『デバイスバスター』

『サンダースマッシャー』

それぞれのデバイスに膨大な魔力が集まっていく。

「ジュエルシード！封印！」

それぞれの魔力光が発せられたタイミングも、ジュエルシードに命中するタイミングも同時だった。

レイジングハートから桜色の魔力が、バルディッシュからは稲妻が迸る雷撃が、それぞれ発射される。

双方から封印処理を施した魔力を受けたジュエルシードは活動を停止し、光の柱は消えていった。

その光景を見つめていた光。

あとは、なのはの言葉に彼女はどう反応するか…

はなから話し合いに持ち込めるほど上手く行くななんて思っていない。ゼロからの話では、彼女は知り合い以上の関係を持った人物は極端に少なく。

年上か年下、歳の近い子や異性とはほとんど関わりが無かった。母親とさえ、今では家庭内別居のように疎遠で、こうして母から指定された物を収集するのが只一つの繋がり。それを淡い希望にして、頑なにになっているのが今の彼女。

でも同年代のなのはの言葉なら、あるいは。淡い期待ではあるが抱かずにはいられない。そう内心呟いた時だった。

なんとなく嫌な風が吹いた気がした。

まるで災害が来る前兆のような…

気持ち悪いくらいに生温かい風が…

思わず空を見た。

「あれは…」

空が歪んでる？

上空は…というより上空の空間が台風のように渦を巻いて歪んでいた。

まさか、こんなところで空間のワームホールが？

この場合、虫食いを意味するワームホールとは違う。

あのネコ型ロボットのどこでもドアのように、

こことどこかの空間が、繋がったのである。

その規模はドアどころではないのだが…

だが確かなことがある。

自分も勇夜も巨人としての力が必要になる、ということだった。

何が起きるの？

なのはもフェイトも、空の異常に気が付き、目が離せなかった。

すると空に黒い穴が開いた。

それだけでも異常事態なのに、そこから巨大な物体が降りてきた。地震と粉塵が生じる。

しかも二つ…

その姿になのはは、

「怪獣？」

と呟いていた。

どちらも二足歩行で50メートル以上はありそうな体。

片や、巨大な一本角と青い発光体が付き。

片や、羊のような角を一对持った。

怪獣だった。

「なんだ？あの生き物は……」

なのはよりもこの世界で言う『非常識』に関わりが深いユーノでさえ驚きを隠せない。

地上に降り立った怪獣二体は、地響きを立てた直後、

こつちに視線を向けた。

ジュエルシードを狙ってる！？

ここに来て競争相手は一気に増えた。

しかも相手は得体のしれない未知の巨大生物。

対処方なんて分かるわけもない。

初めて異相体を戦った時以上の恐怖が、なのはを支配していた

「（なのは！ユーノ！）」

「光兄！？」

「光さん？」

「（あの怪獣たちは『僕たち』が相手をします、なのははあの子とジュエルシードを！）」

「う……うん」

「分かりました」

今は『光ミラーナイト』と『ウルトラマンゼロ』に頼るしかない。
むしろああいう手合いが、彼の兄とその仲間力を、発揮できる相手なのだから。

「なんで俺の世界の怪獣が…」

見間違いの無い。

あの二体は、ゼロのいた世界に生息している巨大生物であった。

「（リヒト！準備はいいか！？）」

「（こちらはいつでも）」

「よし！リンク！ウルトラアイを！」

『はいマスター』

リンクからウルトラゼロアイを出現。

光も、いつもは服の下に隠しているペンダント。
ミラージュアイズを首に掛けたまま取り出した。

「ミラー！」

両腕を重ねた後、横に広げ、その両手をミラージュアイズの前に翳す。

「デュア！」

「スパーク！」

勇夜はウルトラゼロアイを目に装着し。

光はミラージュアイズの前で両手をクロスさせた。

両者が光に包まれた。

フェイトもその巨体に圧倒されていた。

あれくらいの大きい生物は管理世界にもいる。

だがあれから発する凶暴な殺気はその比じゃない。

目にしたものの全てを敵と見なし破壊しかねない勢いだ。

お願い止まって…

今まで実戦を経験してきたにも拘わらず…フェイトも恐怖と震えで立ちすくんでいた。

駄目…

こんなところで立ち止まったら…

金縛りになったフェイトに怪獣の攻撃が襲いかかる。

奇しくも、フェイトと同じ、雷撃。

たまらず、目を瞑るフェイト。

『ディフェンサー』

防御魔法を唱える愛機だが、『防ぐこと』に難があるフェイトでは…

しかし、何時までたっても、衝撃が来ない。

代わりに、瞼越しにでも感じる暖かな閃光。

どうしたのかと、目を開けるフェイト。

「あれは…」

怪獣と対峙する二人の巨人がそこにいた。

怪獣も突然の乱入者に驚きを隠せないようだ。

フェイトは片方に見覚えがあった。

鏡から突然現れ、自分とも交戦した緑と銀色の人…

じゃあ…

赤と青のボディ、銀色の顔、黄色の鋭つい瞳、頭にはナイフのよ
うな刃をのせた、あの巨人は。

あれが…噂の管理世界に度々現れては消える神出鬼没の『光の巨
人』？

その巨人が自分に振り向いた。

姿は変わっても、佇まいで誰なのか分かってしまった。

勇夜…なの？

その心境を見透かしたように頷く巨人。

「あの…勇夜…」

「（今の俺は…ウルトラマンゼロだ）」

ウルトラマン…ゼロ？

「（詳しいことは後にしてくれ）」

一連の出来事に虚をつかれた怪獣たちは、直ぐに目の前の巨人た
ちに敵意を表し、威嚇の咆哮を上げた。

「デエア！」

「ハア！」

光の巨人、ウルトラマンゼロ。
鏡の騎士、ミラーナイト。

言葉を交わさなくとも、二人は共闘する意思を示し
怪獣たちに向き直り、気迫を発しながら構えた。

ユーノは突然の巨大生物の介入に戸惑ったが、
ミラーナイトとウルトラマンゼロが相手をしてくれることに安心し
た。

あの二人の実力は直に見ている。
幾多の修羅場を潜り抜けてきたことは間違いない、その背中から
発する頼もしさで充分に分かる。

「なのは！今の内に確保を！」

「させるかよ！」

突然そこから、誰かの拳が迫った。
咄嗟に結界を張って応戦するユーノ。

その影は女性だった。

いや見かけは、自分より年上みただけどむしろ少女と呼ぶべき
だろう。

でも、あの耳と尻尾は…

ひょっとして…

「君は一体？」

「フェイトの邪魔はさせないよ！！」

少女はオレンジ色に光り輝くとその姿を、その髪色と同じ体色を

した狼へと変貌した。

「間違いない…使い魔」

まさかあのフェイトって名前らしい魔導師の子に使い魔がいたなんて…

なのはあの子と、光さんとウルトラマンゼロは、あの怪獣との相手たちで精一杯だ。

今は僕が相手をするしかない。

このフェレットの体でどこまでできるか分からないけど、なんとかかしてみせる。

そしてなのはとフェイトは、

片やなのはは、地面に足を置いて彼女を見上げ、
片やフェイトは、空から彼女を見下ろしていた。

「レイジングハート…モードリリース」
『了解』

だがなのははまだ戦うつもりは無い。

兄の言う通り、それは自分のわがままで、戦いになることは避けようがない現実なのかもしれないけど、

「この間は自己紹介できなかったけど」

それでも知りたかった。

「わたし、なのは、高町なのは」

『サイズフォーム』

相手はこれからやり合おうっていうのに何を言ってるんだという面持ちで魔力の刃を形成した。

「ジユエルシードと私たちには関わらないでって、言ったはずだよ」

「それを言うなら、わたしの質問にも答えてくれてないよね？」

あの子がどうして、あんな危険な物を集めているか…

「まだ名前も聞いてない！」

どんな名前なのか…

どうしてそんな寂しい眼をしているのか…

その一途さに一度構えを解くフェイトだったが、すぐに魔力スフィアも形成し臨戦態勢をとった。

？今度は手加減はしない？

その意志表示だった。

なのはも、やり切れない気持ちを抑え、レイジングハートを再起動。

彼女の意志とは裏腹に、第二ラウンドの幕が上がる。

こうして巨人と怪獣、獣（少年）と獣（使い魔）、魔導師と魔導師の共闘と激突が入り混じった戦闘が始まった。

・ユーノVSアルフ

一見するとそれは小動物のフェレットと肉食獣の狼の食うか食わ

れるかの追跡戦だった。

だが都市のど真ん中で行われているそれは少々違う。

「なんでジユエルシードを集める！？あれは危険な物なんだ！」

「ごちゃごちゃうるさい！」

分かっている…そんなことぐらい。

勇夜は…今は『ウルトラマンゼロ』って巨人になってる彼は、あれのことを『碌でもない形でしか叶えてくれない欠陥品』って言った。

今相手をしているイタチみたいな奴だって…

そいつを発掘した張本人らしいし…

その危険性は誰よりも知ってるはず…

だけど、今はどうしてもあれが。

あれが必要なんだ！

アルフは飛び上がり、鋭利な爪でユーノに襲いかかるが、ユーノはそれをバリアで防いだ。

結界と防御に関して言えばユーノは達人レベルの域だった。

・ゼロ&ミラーナイトVSコツヴ&パズス

二人は二体を引き寄せ、なのはたちと距離をとった。

「ゼロ：やはりこいつらは？」

「コツヴとパズス：俺の世界にいた怪獣たちだ…」

少し説明が長くなるが、ウルトラマンが存在する世界は昔？複数あつた？。

何故過去形なのかと言うと、かつて怪獣を自在に操る力を持ち、宇宙を恐怖で君臨していたレイブラッド星人という存在がいた。

やつによって、時空が歪められ、ウルトラマンが存在する世界は一つに纏まってしまった。

後に『ギャラクシークライシス』と呼ばれる出来事である。

コツヴとパズスはギャラクシークライシス以前は、根源的破滅将来体と呼ばれる、破滅をもたらす存在が地球を襲い、その地球自らが自らと自らの星に住む生命を守るための光を生みだし。

その光を得て超人になった地球人を『ウルトラマン』と呼んだ世界。

その世界のとある惑星に住む野生動物だった。

本来は大人しい種族であつた彼らは度々破滅招来体に無理やり地球に移動され、その意志とは反して尖兵にされ、暴れた。

彼らに操られていたわけでは無い。

操る必要なんて無い。

環境に適応するための本能と、自分のテリトリーを作ろうとする本能と、無我夢中で生きようとする本能だけで街を破壊するので、それだけで十分に脅威だったのである。

「俺はパズスをやる、コツヴは頼む」

「了解：」

ゼロはパズスに、ミラーはコツヴに立ち向かっていった。

巨体と巨体がぶつかり合い。

地響きと粉塵が舞う。

常識を超えた大きさの巨人と怪獣の組み合わせ。

見かけではパズスの方に分がありそうだが、パワーは互角、

むしろゼロが押していた。

そのまま組み合った手を振り払い。

重い正拳突きと肘打ちと蹴りが、連続でパズスに突き刺さる。

ただのパンチでもゼロに掛ければ、針のように鋭い。

最後に両手突きで炸裂。

たまたま後退するパズス。

そのまま追い打ちをかけようとするゼロ。

だがパズスの角から稲妻が走ると。

「何!？」

高圧電流がゼロに向けて放たれる。

後退し、横転して回避するゼロだが、ここはビル街のご真ん中。

結界で周辺の配慮はある程度無視はできてもやはり移動に支障が出る。

その制約を承知しつつも躲すゼロだが、パズスの口から今度は火炎を発射。

両手を盾代わりしてなんとか防いだが、その隙を突き。

本命の電撃がゼロを飲み込む。

いくらウルトラ戦士でも、電流をもろに受けるのはきつい。

一瞬体がマヒした感覚に襲われる。

その隙を狙い、今度は雷撃と火炎を同時に発射するパズス。それを受けたゼロは吹っ飛ばされ、ビルに叩きつけられた。

上等じゃねえーか！

ゼロは態勢を立て直し、手を頭部に翳すと。

ゼロスラッガーを飛ばした。

狙いは電撃を生みだすあの角。

だがそれは何かに弾かれた。

念力で何度も何度もスラッガーを当てるがその度に角に纏った電磁波に阻まれる。

『電磁バリアで防御していると思われませう』

どうやら角に発生させた電磁波は盾にも使えるようだ。

「ならこれならどうだ！」

ゼロは二つのゼロスラッガーをキャッチすると、二つの刃は光に包まれ、一つの剣の柄に変形し、刀のような形をとった光の刀身が伸びた。

ゼロはデバイスと同じように、状況に応じて、ゼロスラッガーを自在に変えられる。

これは日本刀を模した形態。

『ブレイドスラッガー』

ゼロはそれを投げ、刀にエメリウムスラッシュを放つ。

光線に含まれるエメリウムエネルギーで破壊力、スピードとともに上昇した刃はブーメランのように回転しパズスの頭部に迫る。

変わってこちらはミラーナイトとコッヴ。
コッヴの手は指の代わりに一振りの鎌がある。

振るわれる鎌の手を躲したり、

手で打ち払って防ぐミラーナイトだが。

コッヴは両手でミラーの頭を挟み込んだ。

力任せに押さえつけるコッヴ。

首を絞めつけられる様な圧迫感を感じるミラーナイト。

そのまま、押しつけられ、羽交い絞めされながら後退される。

そのままミラーナイトを投げ飛ばすコッヴ。

高層ビルに叩きつけられ、破片に埋もれるミラーナイト。

ミラーはスピード、即ち『柔』を主体とした戦闘が得意なので、こ
うした真っ向からのパワー勝負では後手に回りがちだ。

コッヴは、その攻撃が有効だと思ったのか、瓦礫から、粉まみれ
になったミラーナイトを鎌の手で羽交い絞める。

その勢いのまま、彼を押し倒した。

だが、彼も負けてはいられない、それに対する対応策はある。

「ミラー！ エナジー！」

ミラーは両腕からエネルギーを直接相手の体に送り込んだ。
ダメージを受けた相手は腕の力を緩める。

チャンスは逃さない。

鎌を両手で払いつつ、お返しとばかり。

ミラーナイトは相手の脳天に手刀を見舞い、さらに顎に向かって

アップターの要領で掌底打ちを炸裂。

怪物と言えど生き物であることは変わりない。
頭に衝撃をまともに受ければ脳震盪だつて起こす。

ひるんだコツヴにミラーの回転キックが命中。

さらに連続で回転の勢いで威力が増幅された蹴りを当てていく。
彼は蹴り技ではメンバー随一の手だれだ。

最後に横転して放ったストレートキックにコツヴは倒れ込んだ。

「ハア！」

特徴的な腕をクロスしたかのような構えを取るミラー。

直ぐにでも止めといきたいが、まだどんなカードを隠し持っているかは分からない。

いつでも攻められるよう、感覚を研ぎすましつつも、冷静に距離をとり出方を窺うミラー。

来る！

起き上がったコツヴは頭部から光弾を発射した。

ミラーはすかさずパントタイムの要領で、中空を手で横になぞると。

「ディフェンスミラー！」

バリアを作り、複数迫る光弾の群れを防御した。

ならばと考えたのか、コツヴは今度は腕の鎌を重ねると、エネルギーが集まり、光線が放たれた。

間一髪ミラーは空へ飛び、回避するがコツヴは彼に向けて再び鎌からの光線を発射。

ミラーも両手を突き出し。

「ミラーナイフ！」

いくつもの手裏剣の如き光の刃はコツヴの光線と衝突。爆発が起きる。

ミラーナイトの姿は爆煙で見えなくなったが、

「ミラーキック！」

煙を切り払い、弾丸の如き速さでナイトのキックはコツヴの脳天に命中した。

その勢いそのまま仰向けに倒れるコツヴ。

着地をしたミラーナイトに。

「ミラーナイト！」

ゼロが彼を呼んだ。

見るとゼロはパズスの尻尾を掴んでいる。

その意図を理解したミラーナイトは、コツヴの背後にまわり。

同様に尻尾を鷲掴みにした。

ゼロとミラーは腕力を込めて相手を持ち上げ。振り回す。

何度も何度も、プロレスの投げ技の要領で回し続け。

「行くぞ！」

ゼロとミラーは互いに向けて怪獣を投げ飛ばした。
投げられたコツヴとパズスは空中で激突。
続けて落下し、コンクリートの地面からくる衝撃が追い打ちをか
けた。

本当なら…連れ戻してやりたいんだが…

ゼロは心の中でそう呟いた。

コツヴとパズスは本来は大人しい性格の種族なのだ。

こうして暴れているのは無理やり、地球に連れてこられて操られ
ているだけで彼らに悪意は無い。

だがこの怪獣たちがどこから連れてこられたのか分からず、こう
して暴れまわる以上。

倒すしか最善の手は無かった。

いや……最善なんて言葉は、傲慢か…

恨んでも良い…せめて安らかに眠ってくれ…

「行きますよ！ゼロ」

「ああ！」

ミラーは両腕をクロスし右手を上げ、左手を下げ時計回りに回し
て広げ、ゼロはリンクがある左手をカラータイマーに翳し。

エネルギーをチャージした二人は、コツヴとパズスに向けて。

「シェア！」

ゼロは拳を突きだした左腕から竜巻状の光線。

『サイクロンストリーム』を。

「シルバークロス！」

ミラーナイトは×字で組んだ腕から。

必殺の光の刃を放った。

それを受けたコツヴとパズスは、粉々に爆発四散した。

感傷に浸っている暇は無い。

ジュエルシールドはどうなった？

・なのはVSフェイト

そしてビルとビルの合間を飛びまわる光跡が二つ。

なのはとフェイトだ。

現状では、なのはは追われる者。

フェイトは追う者な状態。

前方のなのはに向けて、雷の魔力悠導弾を数発発射。

なのはに光弾の群れが牙を向く。

だがなのはも前の時のように直ぐにやられるつもりは無い。

全弾回避すると、魔力スフィアを4発発射。

今は応戦しなければ、自分の言葉さえ伝えられない。

話し合いを所望しながら、戦闘を行う。
明らかに矛盾していた。
それはなのはただけでは無い。

桜色のスフィアを回避するフェイトにもだ…

内心では相手を傷つけるという行為には抵抗がある彼女。
そうでありながらいくら母の頼みとは言え、今は戦闘行為を行わなければならぬ。

非殺傷設定が無ければ文字通りの殺し合いに発展しかねない事態なのに。

フェイトが全弾回避した直後。

『キャノンモード 非殺傷スタン設定』

チャージを完了したレイジングハートから、

「シュート！」

桜色の魔力光が放たれた。

回避は困難と判断したフェイトはシールドで一旦防御し、退避した。

「君なりの目的が…事情があるなら…ぶつかり合うことになるのは…仕方が無いかもしれないけど…でも何も分からないまま…戦うのだけは嫌なの！」

分からないまま？

その言葉が微かながらも痛みとして刺さった。

そつだ…私も知らない…

母さんがなんでもそこまで、ジュエルシードを欲しがっているのか…

あんなに優しくかった母さんが、なんであんなに冷たい態度を取るのか…

「わたしも言うから…だから教えて、どうしてジュエルシードが必要なのか…」

敵対しているはずの少女の言葉が、フェイトの心に波紋を起こす。

そつ言えば…

諸星勇夜「ウルトラマンゼロに自分の目的を知られてしまった時…

あの時、どうしようって…このまま母さんの願いを叶えられなかったら…どうしようって思ったのに。

どこかほつとしてる自分がいた…

結果的には言え、自分の抱えているものを勇夜が知った時、どこか安心している自分がいた。

共有してくれる人がいることに、喜んでいる自分がいた。

言葉では何も変わらない、変えられないって今まで考えてたけど…

「フェイト！答えなくていい！」

地面から狼形態のアルフが叫んだ。

「ジュエルシードを手に入れるんだろ！？」

でもやっぱり…今の私にはこれしか…

光の懸念通り、それは淡い期待であった。

フェイトは、ジュエルシードに向けて飛んだ。

なのも続けて追いかける。

狙いは宙に浮く菱形の宝石。

どちらかより先に手にすること。

封印する時と同様に。

互いのデバイスが同時にジュエルシードに触れた時…

「今すぐそこから離れる（離れて下さい）！」

ウルトラマンゼロとミラーナイトの警告が響いた。

二人の警告も空しく…デバイスが触れた衝撃で菱形の宝石から膨大なエネルギーが放出。

光はドーム状に広がりながら、大爆発を起こし。

魔法と同様に殺傷力は無かったがその場にいた全員は光に呑みこまれた。

なんて威力だ…

たった一個で、あれぐらいの衝撃で、こんだけの次元振を…

ジュエルシールドは例えるなら、大量の魔力を無理やり詰めた代物だ。

そしてそれを覆う外殻は、風船波に脆い。

さらに魔力を空気だと仮定して、そんなものに衝撃を与えて穴を開けたらどうなるか、それがこの有様だった。

光がようやく収まった。

視覚の機能を取り戻した二人の巨人は目を見開くと。

なのはは地面に叩きつけられ、気を失っていた。

「なのは!」

ミラーナイトは変身を維持したまま、人間サイズになりつつ、なのはに駆け寄った。

愛義妹を抱く兄、バリアジャケットの魔力フィールドと、あの状況下でも主なのはを守ろうとした愛機レイジングハートのお陰で、外傷は無い。

気絶したのは次元振の衝撃波による魔力ダメージが原因だった。

一番震源地に近く、なのはを庇ったレイジングハートはあちこちヒビだらけではあったが。

「ありがとう、レイジングハート……戻ってくれ」

『了解：モードリリース』

妹に代わって彼女のパートナーに礼を言いながらほっとするミリアーナイト。

フエイトの方は言うど。

「ごめん…戻ってバルディッシュ」

うまく退避はできたが、バルディッシュのダメージも甚大なので待機状態に戻した。

とりあえず全員無事か…

そうほっとした時だ。

ん？

ジュエルシードの様子がおかしい。

まさか…あんだだけバカでかいエネルギーを出しておいてまだ！？
フエイトにも目を向けるゼロ。

デバイスが使えないのに封印処理をするつもりか！？

「あの莫迦あ！くそお！！」

人間サイズへ体を縮小させながらゼロは、暴走寸前のロストロギアに突っ込んだ。

『巨人態のままでの封印処理は非常に危険ですマスター！』

「分かってる！」

冷静さと焦りの合間で忠告するリンク。

実はゼロの姿の時は魔法はほとんど使えなくなる。

体内の太陽エネルギーと魔力は一定以上の量に達すると相殺する

性質があるからだ。

当然…封印魔法も…

だが人間体　勇夜での飛行スピードは、フェイトに劣る以上、
彼がとるべき行動は一つしか……

ジュエルシードに向けて地面すれすれを飛ぶフェイト。
バルディツシュが使えない今、自分がやるしかない。

「フェイト！？ダメだ！」

アルフの呼びかけに聞いている時間は無い。
右手がジュエルシードに触れようとする寸前。

「デエア！」

何かが横から来て、先にロストロギアを取った。

誰が！？

何かが通り過ぎた方向に視線を移すと。
必死にジュエルシード素手で押さえつけるウルトラマンゼロ＝勇
夜がいた。

「ゼロ！」

「勇夜……」

「来るんじゃないね！」

駆け寄ろうとしたミラーナイトとフェイトをゼロは制した。鉄面の表情は変わらないが、かなりきついことが窺える。自分と違って、愛機であるデバイスは健在なのに…

どうして…自分が今やろうとしたことを？

「ピコン…ピコン…ピコン…」

ゼロの胸の中央にある水色の宝石が赤に変わり点滅し始めた。

膝をつくゼロ。

エネルギーを抑える為に集中した結果、彼の体内にある太陽エネルギーが、急激に消費されていった。

「止まって…くれ…」

ゼロの手から光が溢れだす…

それはウルトラ一族の体から流れる血だった。

それでも辞めない。

離すわけにはいかない。

人間態に戻って、封印処理をする時間も無い。

ここで手放したら、また次元振が…

明らかにゼロの方が遙かに満身創痍でボロボロなのに……

それでも、わたしの身を案じてる。

こんな時どうすればいいの？

ありがとうっていうべきなの？

あの巨大な怪物を倒した勇夜でさえ、こんな状態。

もし……自分がやってたら……

「うん……」

今の私には……頷いて……大丈夫だったことを伝えることしかできなかつた。

「そりゃ………」

勇夜「ゼロは鉄面皮で表情が変わらない代わりに、安心した声色で、フェイトの無事を確認すると……」

「よかつ………たあ………」

力尽き、その場に倒れ込んだ。

「勇夜？」

彼の許に駆け寄り、今にも泣きそうな顔で、ゼロの体を揺するフ
イト。

だがいくら揺すっても呼びかけても、胸のカラータイマーが空し
く点滅するばかりで、ピクリとも動かない。

「い…いや…嫌……………嫌だよ……………」

悪い夢であってほしかった。

現実だって認めたくなかった。

わたしがジュエルシールドが欲しいって

どうしても必要だって、わがままを言ったばかりに…

「勇夜……………ダメえ……………勇夜！お願い起きて！！起きてよ！！勇夜
！！！！」

自分が行おうとした行為が原因で、目の前の人々が傷つき…倒れ…
命の危機に瀕し、瀬戸際に立たされている。

その事実を、彼女が『今までに受けた外傷』よりも、残酷にフェ
イトの心に深く突き刺さり、抉らされた。

わたしが…無茶をしようとしたばかり…に

この人に…勇夜に…ゼロに…………

わたし……………

Episode 11 - 慟哭の夜空（後書き）

今回の話でゼロが使った光線ですが、児童雑誌で募集されたコンテンツでグランプリになり、ステージショーで使われている技「サイクロン光線」をアレンジしたものです。

名称を変えたのは、厨二っぽいゼロに光線で名称は合わないな
…といった厨二的発想ですwwwwww

公式ではウルティメイトブレスレットから発射しますが、本作では左手を正拳突きで突き出して放出しています。

Episode 12 - 嵐が過ぎた後…（前書き）

元ヤンのゼロと、不良真っ盛りな学生の組み合わせは、一度はやってみたかったシチュエーション。

海鳴市に隣接する都市、遠見市。

フェイトたちが隠れ家として使っているマンションはここに建てられている。

今彼女たちの部屋のベッドでは、借用主の代わりに、ウルトラマンゼロの人間態、諸星勇夜が今占拠し、眠りにについている。

いつもは一纏めにして縛っている黒衣の長髪は下ろされ、さらにいつもは鋭い刃を連想させる目つきと無愛想な容貌も、眠っているためか少年どころか少女にも見えてしまう独特のあどけなさを前に影を潜め、余り人と関わりを持たなかったフェイトたちから見ても、その彼の顔つきは美形中の美形に位置していた。

そんな彼を先程の戦闘で痛々しく血を流し負傷した右手を、アルフが包帯を巻いて、手当てをしていた。

一方彼女の主であるフェイトは、ベッドの向かいの壁で暗い表情を浮かべながら、体育座りで佇んでいる。

先ほどまで泣いていたのか、その目じりは赤く腫れていた。

というより、泣き喚いていたというのが正解か。

アルフは冷静に倒れた勇夜を連れ込み介抱しつつも、彼のことで泣き叫び、落ち着いたら落ち着いたで『ごめんね…ごねんね…』とさっきまで連呼していた主に驚いていた。

彼女とはかれこれ3年の付き合いだが、ここまで感情を発露した

ところを見たのは、アルフの知る限りでは初めて。

周りを配慮する余り、日々自分を抑える生き方をおくるフェイトの現状を、齒がゆく感じていただけあり、個人的には良い傾向だと思っし、嬉しいとはつきり断言できる。

「いいのかい？これだけで……」

『心配いりません、確かにマスターは、魔法等の補助を借りなくても、常人を凌駕する身体能力を有していますが、身体の構造は、それほど人と変わりはありませんから……』

「それなら良かった……でも……何者なんだい？……あんたたちって……」

そのきっかけを作ってくれて、『約束』通り主を助けてくれた勇夜には感謝しているが、前から様々な意味で……彼のことにはなっていた。

そんな時に、彼が50mもある異形の巨人へと、姿を変えたのだ。

ただものではないとは……薄々感じ取っていたけど……

彼を運んでいる途中、人間サイズに縮小した『ゼロ』は、光を発し、『諸星勇夜』の姿へと戻った。

自分をウルトラマンゼロと名乗った彼が何者で、人間と巨人、どちらが彼の本来の姿なのか？

アルフたちには質問したいことが、山ほどある。

もっとも、フェイトはそれ以上に、彼を傷つけた罪悪感に苛まれ

てはいるが。

『そうですね……これから話す内容を、秘匿できるとお約束できるなら、全てお話致します、フェイトもよろしいですね？』

「っ……………」

晴れない表情のまま、フェイトは黙って頷き、了承するのであった。

自分は今、闇の中にいた。

ここは夢の中か？

今自分はゼロの姿をしている。

只でさえ地球ではウルトラ一族にとっては、体力の消耗が激しく、太陽の光から得るエネルギーは微量しか得られない環境だったのに、あれだけエネルギーを使ったのだ。

こうしてウルトラマンの姿を維持できるの自体あり得ない。

ロストロギアを掴んで負傷した右手も、無傷だ。

十中八九、これは夢。

ゼロ…ゼロ…ゼロ…

誰だ？

誰の声だ？

いや……誰なのかは直ぐ判別はついた。

目の前に光が照らされる。

光が収まると、そこには懐かしい相手がいた。

「久しぶりだな……」

「ベ……ベリアル！」

そう……ウルトラマンでありながらダークサイドに堕ち最強最悪の悪魔に……なる前の……

かつて、ベリアルとの戦いで、カラータイマーの光が消え、力尽きてしまった時。

ともに戦った同士たちの『希望』と、あらゆる世界に、伝説を残している『銀色の巨人』の力で結集した。

バラージの盾、ウルティメイトイージス……リンクによって復活するまでの間、自分の命を繋ぎとめてくれた。

そうでありながら倒すことでしか救えなかった。

そのダークサイドに堕ちる前の……

ウルトラマン……ベリアル……

「……………」

何と言ったら良いのか、言葉に出ない。

かつて俺は、ベリアルと同じように恒星の代わりに故郷を照らす人工太陽、プラズマスパークタワーのエネルギーに手を出そうとし

た。

「彼とは似た者同士だ。」

強くなりたい…それに執着するあまり、自分を見失って…

俺は…親父や師匠やみんなのお陰で立ち直れた…

だがベリアルは…ずっと履き違えたまま…

「もう10年以上たつのに…まだ気にしてるのか？」

「っ!…!………当たり前だろ……」

ずっとこの人は暗闇の中で、悪事を重ねる自分を見ることしかできなかつた。

奪って。

殺して。

破壊して。

際限無く欲と憎悪を撒き散らして

罪を重ねていくもう一人の自分。

自分の未来の可能性の一つだったこの人を…

「俺は殺すことしかできなかつた…何度あんなを助けられたらって思ってたよ」

「懺悔をしたい気持ちは分かるが、聞いてくれないか」

「え？」

「フェイト・テストロツサのことだ…」
「思わぬ単語が相手の口から出てきた。」

「どうして…フェイトことを…」

「詳しくは言えないが…彼女の母親はかつての俺と同じ状態にある…目的を果たす為に手段を選ばず…それをただ実行するための機械」

「どつという意味だ？」

「確かにあの親子には何か深刻な問題がある。
でも機械って…」

「彼女と、その母の罪は一生汚名として残るし…君も決して許しはしないかもしれない…だけど…それでも…あの『親子』を助けてや
つてくれ…」

「ベリアル…」

「君なら…未来を掴み取ったウルトラマンゼロならできると」

「待ってくれ！」

「頼むよ…」

そう言うと彼は、闇へと消えていった。

先に目が入ったのは天井。

確か…フェイトたちが今借りてるマンション。

『おはようございますマスター』

「あ…あ…」

『無茶もほどほどにして下さい……地球人の血を引いていると言っても、地球では長時間ウルトラマンの姿を維持できないことに変わりないので……』

俺はジュエルシードを握った右手を見た。

アルフが巻いてくれたらしい。

痛みはもう無い。

ウルトラマンとしての生命力と、リンクの治癒魔法でほぼ完治していた。

『うなされていましたが、何の夢を？』

「ベリアルに……会ってた……」

『……………そうですか……』

リンクはかける言葉が見つからないのか、そうとしか言わなかった。

どうあがいてもベリアルは、その脅威を直に触れた大方の人たちにとっては

『悪魔』

と同義語。

だけど……その悪魔になる前の彼を知ってしまった俺としては、複雑な心境になるわけで……

相棒が、それを悟ってくれただけでもありがたかった。

あーいつまでも引きずってらんね！

それこそベリアルが安心して成仏できない。

心機一転するために深呼吸をした。

『わたしからも謝ることがあります』

なんだ？改まった態度で……………そういうことか……………

「話したんだよな…二人に…俺たちのこと」

『はい…』

「昨日変身しちまったんだ、手間が省けたよ、お前の口から話してくれたが分かりやすいだろうしな」

『いえ…』

「あと、どれくらい眠ってた？」

『12時間42分38秒です』

なんだ…まだ半日しか経ってないのか…

まわりを見渡してみた。

家の主たちは出かけてるようだ。

テーブルを見ると、そこにはトーストと目玉焼きとサラダがある。

置手紙があった。

それを手に取って読んだ。

『こんなものしかありませんが、食べて下さい、昨日はありがとうございました
って言えなくて…ごめんさい』

……………たく……………そこまで気負わなくて良かったのに……………

ミットチルダ語で書かれた文面はお世辞にも綺麗とは言えない。

いや…綺麗には…書けなかったんだ。

なぜなのかは敢えて言わないでおこう。

すると突然、懐の携帯電話が鳴った。

表示には『高町光』とある。

「もしもし…」

「ゼロ…大丈夫なのですか？」

相手は高町光「ミラーナイト」。

この間、携帯電話の番号交換をしたのだ。

念話を使えば良いじゃないかって？

確かに直ぐ連絡はつくが、よほどの急用でもないのに相手の状況、用事に関係なしに、いきなりはずけずけと頭ん中に向けて話せねえだろ…

電話越しにでも、透き通った彼独特の声、心配した声音になっているのが理解できた。

「もう心配無いぜ」

「良かった…カラータイマーが鳴った時はどうなるかと思いましたよ」

ウルトラマンは、自らが得られる太陽エネルギーの強弱によって、巨人の姿を維持できる時間がまばらになる。

カラータイマーはそんな己のコンディションを知るための装置だ。光の国以外の惑星や星系に出る者は、必ず着けることが義務付けられている。

もしこの輝きが消えてしまえば、最悪死ぬことになる。

ウルトラマンは超人ではあるが、決して不死身では無いのだ。

「今日学校あるだろ、続きは放課後、海鳴臨海公園でいいか？」

「そうですね、分かりました、ではまた後ほど」
ピッ、カタッ。

さてと…光と会うのは夕方、それまでは暇だ。

ずっと部屋にいるのも何だし…。

時刻が午後一時を過ぎた頃、

フェイト・テスタロッサは海鳴の街中を歩いていた。

バルディッシュは自己修復中で当分使えないが、発動前のジュエルシールドなら見つけようと思えば見つけられる。

なのはや勇夜から『寂しい目をしてる』と言われるほど、彼女は明るい性格とは言えないが、今は普段以上にその表情は暗い。

原因は昨夜の…

自分の代わりに素手でジュエルシールドを封じようとして、怪我を負った。

光の巨人、ウルトラマンゼロ、諸星勇夜。

本名『ゼロ』ユウヤ・ヴェアリストア』

彼が眠っている間、リンクが色々話してくれた。

ゼロたちウルトラマンのこと。

故郷のM78星雲光の国のこと。

如何にして光の国の人たちが『ウルトラマン』の力を手に入れたこと。

彼が尊敬している父のウルトラセブンのこと。

あの緑と銀色の巨人、ミラーナイトらゼロの仲間たちのこと。

かつてゼロが故郷で犯した罪。

次元振に巻き込まれ、その仲間と離れ離れになり。体が幼児退化してミットチルダに迷い込んだこと。

リンクはその次元振で自我に目覚めて、デバイスに相当する機能を得たアイテムで、厳密にはデバイスとは異なることその他諸々。

次元漂流者とは聞いていたが、まさか正体が50Mもある巨人とは、思ってもみなかった。

それも驚いたけど…

？だ…大丈夫…か？？

自分の方がダメージは大きいのに、それよりも自分を案じてくれたあの人。

一応…覚悟はしているつもりだった。

相手を傷つけてでも、ジュエルシールドを手に入れるって。

でも…

あの人が倒れて力尽きた時…

自分の集めている物がどんなに恐ろしいものか痛感させられた。自分よりもずっと強くて、頼もしいと思ってた人でさえ…あれだけ傷つけ、消耗させるロストロギア。

リンクの話ではウルトラマンは魔法とは別系統の能力を持ち、巨人の姿ではそれを100%発揮できるが、反面魔力は体内で一定以上の量になると互いを相殺してしまうので魔法はほとんど使用できなくなるらしい。

でも…リンクを介しての封印処理はできはずなんだ。

ほんの少しの衝撃で、次元振を起こすものと知らなかったばかりにバルディッシュも傷ついて。

あたしがゼロよりもジュエルシールドに近い距離にいて、素手で封印しようと考えたばかりに…わたしよりも先にジュエルシールドを取るためにゼロのまま封印しようとして…勇夜は倒れた。

私のせいだ…私が…私が全部…自分がいけない子だから…

彼女は身の上の境遇から、ネガティブ思考に陥りやすい。

それでいて周囲には大丈夫だって強がってしまう。

そうして溜まった淀みを流す術を知らない彼女の気持ちは沈んでいくばかり。

だから気づけなかった。

「キャッ！」

通行人とぶつかってしまったことに。

「どこ見て歩いてんだ？」

しかも相手が悪すぎた。

いわゆる不良と呼ばれる相手である。

「目がないのか！？お嬢さんよ」

しかも5人ほど…

「あ…あの…」

その剣幕を前に、まともに言葉が出ない。

「なんだ？口も聞けないのか？」

バルディッシュは修理中。

その上ここは管理外世界なので魔法も迂闊に使えない。

アルフを呼ぼうにも今から間に合うかどうか…

八方塞がりの手詰まりであった。

そんな苦境な状況の中。

「おい！探したぞ」

向うから声がした。

声のした方に目を向けると。

そこには諸星勇夜が立っていた。

「悪い…その子うちんとここでホームステイしてる外国の子でさ…まだ日本語に慣れてねえんだよ」

上手いこと良い訳をしつつ、こちらに歩んでくる勇夜。

「ほら、行くぞ」

「あっ……」

勇夜はフェイトの手を掴んでその場を去ろうとするが

「待てよ…そいつの保護者を気取ってんなら、責任取れ!!」

そう言って勇夜の腕を掴んだ。

それを勇夜は、一瞬で振り払って掴みなおした。

「いててえええ!!!!」

かなり強く握りつつ捻っているらしく、掴まれた不良の一人が悲鳴を上げる。

「てめええ!!」

不良仲間が突っかかるうとしとしたが、突然立ち止まった。

全員顔が恐怖で歪んでいる。

特に腕を掴まれた一人は、猛獣に迫られた様子だ。

「怪我したくなかったらさっさと失せろ……」

怖い…

とてつもない殺気とドスのきいた低い声だった。

それこそ刀剣を連想させる鋭さ。

言葉にするなら。

冷気

冷血

冷眼

冷徹

不良たちと違って、視線を向けられていないフェイトでさえ伝える殺気。

彼は幾多の死線を潜り抜けてきたウルトラ戦士。

それこそ目の前の街のチンピラなんて虫けら同然。

手を掴む以外に手を出していないのはせめてもの配慮であり。

ウルトラマンであるがために、己に課した心構えでもあった。

不良たちはたまらず全員情けない声を上げながら、逃げて行った。

「で、いつまでしがみついていたんだ？」

「ふえっ？」

最初フェイトはそれがどういう意味合いか理解できなかった。

一拍置いて、ようやくフェイトは無自覚の内に勇夜にしがみついていたことに気がつく。

わたし…今…勇夜に直にくっついて…

抱きついて……………。

勇夜に……

ゆ…勇夜に…!!

「ひゃあ…!!」

顔を真っ赤にし、変な声をあげながら慌てて離れるフェイト。

「じ…じ…じ…!ごめんなさい!」

そして思わず反射的に謝っていた。
それこそソニックムーブ級の速さで。

「なんか…こっちが脅したみたいな口ぶりじゃねえか」

ジト目でフェイトを見つめる勇夜。

「っ……………ごめん」

そうだ…勇夜はできるだけ穏便に済ませつつ、わたしを助けようとしたんだ。

あの殺気は脅しと言えば脅しだけど、せめて暴力沙汰にならないようにとの苦肉の策だっただけで。

「まあいいけど…目つきが悪いってことぐらい…自覚はしてるさ」
「そ…そんなこと無いよ」

確かに彼は目つきが鋭いと言われれば、鋭い。

人間態の諸星勇夜でも、巨人態のウルトラマンゼロでも。

その為、口調と相まって、第一印象は近寄り難い人と思われることが多い。

「ふっ、さつきまで怖がってたくせにか？」

何とか弁解するつもりだったのに、今度は皮肉っぽい笑みでからかわれた。

また一本取られた、である。

「うっ…いじわる…」

思わずフェイトは涙目に俯きながら呟いた。

なんとも破壊力抜群の「いじわる…」である。

「悪かった…ほら、これで涙ふけ」

彼は懐からハンカチを出し、フェイトの目じりを拭いてあげた。

元不良のウルトラマンと。

現役不良の学生たち。

口調が粗暴なところは同じなのに。
貫禄と甲斐性は雲泥の差であった。

それからフェイトは今現在。
勇夜に手を繋がれて、一緒に街の中を歩いている。

「（あの……）」

「（何だ？）」

「（どっちの名前で…呼んだら……）」

「（どっちも本名だが、この姿の時はユウヤ、ウルトラマンの時は『ゼロ』って呼んでくれ、ウルトラマンであることは隠してる身だからな）」

「（うん）」

ちなみにどうして彼が、自分の場所を把握できたのは。

半分は偶然だが、わたしが探査魔法を使っているとふんで、魔力を辿りながら散策していたとのこと。

それと、なんでもこの日本では金髪の人珍しく、わたしは街中ではかなり目立つ方らしい。

それはそうと、考えてみれば、勇夜と二人つきりなのはこれが初めてだった。

それ以前にわたしは勇夜に会うまで、男の人と会話したことが無かった。

手を繋ぐなんて尚更。

ましてやさつきみたいに抱きつくなんて。

一度意識し始めるとそれが起爆剤になり、顔が火照って仕方が無い。

それに、正直今は勇夜と会いたくはなかった。
と言うより、合わせる顔が無かった。

今は包帯も解いて傷も一つないけど、今握られてるこの右手は私のせいで…

勇夜は私が受けるはずだった傷を代替わりしてくれたんだ。

なのに私は…

「フェイト」

突然勇夜は私を呼んだ。

ペコン！

「いたっ！」

するといきなりおでこが痛みを訴えた。

勇夜がフェイトの額にデコピンをしたのである。

「また…『私のせい』だとか考えてただろ？」

「な…なんで分かったの？」

おでこを抑え、さすりつつ、痛みでまた涙目になりながら、質問するフェイト。

まさか読心術でもあるの？

いくらウルトラマンでも…そこまで万能なんて。

「顔でモロバレだ、アルフだって言わないだけでフェイトが無理してることに気づいてるさ、精神リンクなんか頼んなくてもな」

どうやら超常的な力を使わずとも、顔に書いてあったみたいだ。自分では完璧に隠してるつもりだったのに。

また一本取られちゃった。

でも……

今やっと気づいた。

勇夜の手って、こんなに暖かいんだ。

鍛えてることは明白な武骨な手だけど。

太陽の光がエネルギー源な種族ってこともあるのかもしれないけど。

彼の隠れた温かさが、表れている気がして。

初めて会った時、ほんとのところ、第一印象はとても怖かった。

自分にとって異性　男の人は未知の生命体であったこともあるけど。

さっきみたいな怖い目をして、拳句魔導師としては負けないと自信があったわたしを刀一振り下して、介抱してもらったと思ったらロストロギアを集める目的を知られて…

でも……

今は一緒にいるのも、手を繋ぐのも怖くない。

むしろ安心する。

わたしが生まれた頃には、母さんは父さんと別れたらしくて、だからわたしには父親というものが分からなかった。

でも今は……

お父さんってこんな感じなのかな？

たぶん……そうなんだ。

年齢ではむしろ『お兄ちゃん』なんだろうけど。

あれ？でもウルトラマンって……かなり長生きなんだよね？
何万年も生きる種族だって、リンクから聞いた時は本当驚いた。
兄でも、ちよつと変かな。

それでも、お兄ちゃんと呼んだ方がしっくり来た。

「やつと笑ったな」

「え？」

私……笑ってたの？

そんな自覚無かったけど。

無理は無い、彼女にとって心から笑ったのは久しぶりの事なのだから。

実は以前から、彼女は彼のことを考えていると、自然と頬が緩んでいた。

「フェイトは笑ってた方が可愛いぜ」

「//////////……………」

分かってる//////////

これはお世辞でもからかいても皮肉でも口説きでも無くても、さら
っと口にしただけなんだ//////////

けどそうだとしても。

当分赤くなつた頬は収まりそうに無かつた。

そして追い打ちとばかり。

ぐう~~~~~。

「また飲まず食わずでまわつてただろ？」

「ご//////////ごめん//////////」

それはそれはよく響くお腹の虫で。

彼女はそれはそれはゆでダコのように真っ赤になつたとさ。

さて、フェイトの腹の虫を納まらせるような丁度いい店は。
ふととある喫茶店が目に入った。

？喫茶翠屋？

たまたまコンビニで雑誌を読んだ時に載っていた喫茶店だ。
なんでも、女学生や主婦に人気の店らしい。

甘い物が嫌いな女の子なんて、そうそういねえだろうし、ここに
するか。

勇夜に誘われるがまま、『翠屋』と書かれているらしい看板が掲
げられたお店に私は入った。

空いていた窓際の席に勇夜と向かい合わせになる形で座る。

メニューを見たけど、写真はともかく、文字となると…

バルディッシュには言語翻訳機能が着いているので会話は問題ない
けど、文字となるとそもいかなかった。

なので勇夜にフォローしてもらいつつ、わたしはイチゴパフェを
選んだ。

ちなみに勇夜が頼んだのは抹茶羊羹というものだった。

この日本って国の固有のお菓子らしいけど。

あ……その日本固有と言えば…

「アルフから聞いたんだけど、勇夜のデバイスって刀って言う日本
の剣をモデルにしてるんだよね？」

「ああ、他にも形態はあるけど、師匠のレオから刀を使った剣術も
指南されたから、だからあれが一番使いやすくてな」

勇夜からの話では、その師であるウルトラマンレオって人は格闘などの接近戦では右に出る者はいないらしい。

その修行もかなりスパルタな厳しいものだったらしい。挫けそうになった時にはむしろ。

『その顔はなんだ！？その眼は何だ！？』

逆に厳しく叱咤されたらしくて…勇夜のとんでもない強さの源を垣間見たような気がした。

一応フォローするが、二人は今ミットチルダ語で会話している。発音と文法はほぼ英語と同じで、フェイトは『外国人』な容姿なので、怪しまれはしなかった。

「それと…前々から気になってたんだけど」
確かに魔法に頼らなくても、この人は強い。
それは分かるけど…

「どうして囑託魔導師のままなの？」

「……………フェイトは魔法のことをどう思ってる？」
「質量兵器よりは…安全で…クリーンな力って…」

「そう言えなくもないけどな、俺に言わせりゃ魔法ってのは、おもちゃの弾と本物の弾を本人の意思でいつでも切り替えられる銃みたいなもんだ、それにフェイトもあの子も、昨日のジュエルシード暴走並みの被害を出すことだって出きるんだぜ、スイッチ一つで大勢を殺せるのが質量兵器なら、使ってる人間を『大量破壊兵器』にしちまうのが『魔法』…てのが俺の考え…」

言われてみると、確かにそうだった。

非殺傷で忘れがちだったけど、確かに魔法は個人差はあるけど、人、それも大勢を殺せるだけの殺傷力と破壊力を持つてる。

「魔法に限ったことじゃないねえけど、完璧に安全が保障された『力』……………つーか、エネルギーなんて無いんだよ、まあそんな管理世界の価値観についていけないことと、後は俺の反骨心ってやつさ」
驚いた…そういう考え方もあったんだ…。

管理局は魔法に固執しすぎて、そのくせ人によっては魔法が一切使えない人もいるから、局は万年人手不足で悩んでいた。

おまけに勇夜の『ウルトラマン』としてのあの驚異的なパワーと、リンクから聞いた、力を渴望するあまり『太陽を盗もつとして故郷を一度追放された』という彼の過去から踏まえると、彼の持論はとても納得できた。

だから勇夜は…管理局を『いけ好かん』と言って距離をとってたんだ。

でも…もし彼が局の高官になったら…

「…ふふっ…」

「何がおかしい？」

想像してみたら、思わず笑ってしまった。

諸星勇夜としても。

ウルトラマンゼロとしても。

「ごめん、勇夜に偉いお方は似合わないなって」

「そんなの…こつちから願ひ下げだ」

「それもその『反骨心ってやつ』から？」

「う…うるせえ…」

彼は強がって見せたが、カウンターをくらったことあって、かなりシヨックだったようだ。

やった。

やっと勇夜から一本取れた。

勇夜の言う通りだ。

こつ、心から笑うなんて本当久しぶり。

できれば…母さんともこんな感じに…

あ…

そうだった…私はこの人を母さんに…

「あの…勇夜…」

「何だ改まって」

「明日、母さんのところへ行きます、約束通りあなたにも会わせますから」

「そつか…」

さすがに母さんのことになると、笑顔が消えた。

？何も分からないまま戦うのは嫌なの？

突然あの白い子の言葉を思い出した。

あの時はジュエルシードの確保を優先させたけど。

どうして母さん…あんなものが必要なんだろ？

今日の前にいるこの人を、傷つけたのに…

こんなに…悪ぶってるだけで、そう振る舞ってるだけで、こんなに優しい人を…

もし、母さんの…あのジュエルシードを使う『目的』が勇夜にとって許せないものだったら…

それこそ次元振で世界を道連れにするようなことを、行なおうとしていたら。

そして勇夜が、母さんと戦うようなことになったら。
不安がフェイトの中を侵食して行く。

違う！

違う違う違う違う違う違う違う違う！

母さんはそんな人じゃない。

バカバカバカバカバカバカ！

あたしの大馬鹿！

母さんは悪くない！

そんなことを考える私が悪いんだ。

今だって、研究に忙しいから、あたしと会わないだけで…

あれを持って行けば昔みたいに…

あの頃みたいに……笑って…

「フェイト！」

勇夜の言葉でなんとか思考の迷宮から出てこられた。

「なんか顔色悪いぞ…」

「大丈夫…」

大丈夫…勇夜と母さんが戦いになるようなことなんて…無い。
絶対無い。

大丈夫。

「もう行くか」

「う…うん」

そう嫌な考えを振り払いつつ。
私は勇夜とこの店をあとにした。

せつかく勇夜が奢ってくれたのに。

パフェだってあんなに美味しかったのに。

心配させちゃったかな…

そっだ…母さんにこの店のケーキをお土産に持って行こう。

大丈夫。

きつと大丈夫だから。

そう自分に言い聞かせてはいたが、一度芽生えた不安はフェイトの心に寄生したまま、離れようとはしなかった。

夕方。

学校の授業があらかた終わり、学生は部活に従事するか、ちょっと寄り道しつつも家へ帰る時間だ。

で、高町光はと言うと。

「待てよ高町！」

駐輪場に置いた自転車に乗って、今にも下校しようとしたその時。

またスカウトですか…

光に剣道着を着た学生が呼び掛けてきた。

彼が通う

「もう帰るのか？」

「ええ…先約がありました」

臨海公園で諸星勇夜ことウルトラマンゼロと情報交換の為に会う約束があるのだ。

実は彼は？色々？訳あって、この三年間一貫して帰宅部だった。このところ、それが功を奏したのは言うまでもない。

「武闘派一家の一人のお前が入れば百人力何だがな」

「一人で戦局を覆せるほど、世の中甘く無いですよ」

「甘く無いね…ところで今日は『何枚』もらったんだ？」

「すみません…急いでいるので」

慌てて自転車を走らせた。

なんとか振り切れた…

本当に王制国家の騎士であった光「ミラーナイトは、その気品ある佇まいと穏やかな物腰と文武両道さで、本人にその気は無くても校内では一目置かれていた。

例えば、今みたいに部活のスカウトを受けたり。

彼は一度自転車を止め、バックから、封筒を何枚か出した。

例えば女子生徒から、昔風に言うところ『恋文』が何枚も下駄箱や机の中に置かれたりしている。

中にはメアドと番号まで入っている始末。

彼の性格上、彼女たちの行為を無下にもできず。

こつして目的地に行く間も彼女たちにどう断りの返事を入れるか考えていた。

海鳴臨海公園に着いた時には、勇夜は既にそこにいた。

「怪我の方は？」

「ほらよ」

右手をこちらに見せてきた。

どうやら既に完治済みのようだ。

すると彼が何か投げてきた。

受け取るとそれは無糖の缶コーヒーだった。

「ブラックで良かったか？」

「問題無いです」

船の汽笛と、カモメの鳴き声が響き、空と海原は暁に染まっている。

「明日、フェイトのお袋さんに会って来る」

「大丈夫なのですか？相手は名の知れた魔導師なんですよ」

「魔導師ならな…だが腕っ節自体なら、話は別だろ」

それもそうだ。

少なくとも戦士としてのキャリアなら、自分たちの方が上だ。

過信では無い。

客観的に思考した上で、自分の力に矜持を持っているのである。

「あと、義妹さんのことなんだけどさ」

「なのはが何か？」

「いや…なんであんなにフェイトに話し合いを求めてたのか、気になっただ」

なるほど、そう言うことでしたか…

「ゼロは彼女に初めて会った時、どんな印象を持ちましたか？」

「……………なんか……………寂しい目をした女の子だなんて……………」

「なのはも…そう感じたそうなんです」

どうしても…知りたいの…あんなに寂しい気持ちを押し込めてジユエルシードを探してるのか…

「悪いな…口止めさせて」

ゼロが詫びを入れた。

集めた情報が確定できるまで、フェイトに関することは、口止めしておくように光に頼んでいたからだ。

「謝ること無いですよ、なのはは昔から人の痛みに敏感な子でしたから、知っても知らなくても、同じだったはずですから」

自分の心の痛みよりも、相手を案じることを優先させる。

だから、何もできないことに何度も心を痛めていた。

だから、ずっと探していた。

自分にしかできない何かを。

自分はそのなののはの在り方を尊いと思う一方で、危ういとも感じていた。

「だから…わたしはなのはを」

「エメラナの騎士だった頃みたいに守りたいって思ったてか？」

「はい」

「親父みてえだな」

「そうですね」

彼の父、ウルトラセブンもそんな、相手を重んじ、案じ、思いやる人の一面を知り、当時は戦闘員でない身でありながら地球を守るうとした。

いや…セブンだけじゃないですね、それはウルトラマン全員に言えるかもしれません。

あ…あとそれから…

「あのコツヴとパズスについては何か」

「誰かが無理やり連れてきた、ぐらいしか…まだ」

昨夜現れた、こちらの地球がある世界には存在しないはずの怪獣、それがどうして、結界の張られた街の真ん中に出てきたのか。

現状ではまたあんなことが起こる可能性が皆無では無いとしか分からなかった。

「例のデータ持ってきたか？」

「はい」

光はバックからUSBメモリを取り出し、彼に渡した。

「なるべく早く持ってくるからな、お前のデバイス」

「かたじけないです」

やはり自分としては『ミラーナイト』力は切り札としてとっておきたい。

それには、戦略の幅を広げるためにも、魔法を使用するための『杖』がどうしても必要だった。

幸い、勇夜に行きつけにしているその手の業者がいるそうなので、今渡したパソコンソフトで設計したデバイスのデータを元に作ってもらうことにした。

無論、ユーノがなのはレイジングハートの管理者権限を譲渡したように、その時空管理局と言う組織にとっては眉をひそめる行為なんだろうけど。

「時空管理局が介入してくる………ということは」

「次元振も起きちまったからな…流石に重い腰を上げるだろうさ」

事態の收拾のためなのだろうが、またややこしいことになりそうですね。

彼の話からすると決して一枚岩では無いし、内外に色々問題も抱え、彼自身も不信心を持っているようですし。

もし彼らと接触した折には。

ここまでの経緯、場合によっては自分たちのことも…
それでも自分にできることをしましょう。

「そういえばな、今日お前んとこの店に行ったんだけど、お前の親父さんって武術でも嗜んでるのか？」

彼が翠屋に来たことも驚いたが…特に…

「どうしてそんなことを聞くんですか？」

彼が『武道』では無く『武術』という表現を使ったことに驚きを隠せなかった。

「いや…それが…」

「君？」

「あの…なんででしょうか？」

会計を済ませようとした時、この店のオーナーらしき中年よりは若い男性からじろじろ見られた。

そついや…俺もこの人をどこかで、

「あ、この間の試合の時にいたでしょ？君」

思い出した。

あいつの義妹のなのはと、ユーノに初めて会った日。河川敷を歩いていたらサッカーの試合がやってて。

その時に試合をやったチームの監督さんか…

「すみません、あの時はおたくのチームに一点入れてしまっ…」

試合終了の時に、たまたま俺のところボールが飛んできて、条件反射的にこの人のチームのネットに放り込んだんだよな。

「いいよ、君のシュートを見た後、部員たちの士気がさらに高まったからね」

そうなんだ…ならいいけど…でもあのシュートができるまで上達できるかは保障できなかった。

「私は高町士郎、君の名前は」

彼は自己紹介しつつ、握手を求めてきた。

高町？ひょっとしてミラーナイトを養子にした一家ってこの人たちなのか？

そついや、喫茶店を経営してるとは聞いてたけど。

「諸星勇夜です」

そんなことを考えつつ、こっちも応対して、握手を交わした瞬間。

……っ！

手に付いた、竹刀ダコとも呼称される独特のタコ豆と、岩のよう
なこつさ。

自分も武術に嗜んでいるから分かる。

この男、相当な手だね、文字通りのもののふだ。

『実戦』も経験してる。

殺し合いつて名の実戦を。

なんで一介の喫茶店のオーナーが…

「その連れの子は？」

士郎さんがフェイトのことを聞いてきた。

明らかに日本人な風貌の勇夜と。

金髪赤眼のフェイト。

どちらも『美』がつく顔つきなこともあり、かなり目立つ組み合わせ
わせだった。

「（勇夜…どうしよう）」

フェイトは念話で不安を口にした。

「（そのままダンマリしてる）」

「観光に来たらしいんですけど、親御さんと離れちゃったらしくて、
一緒に捜し回ってたんです」

なんとかその場をまとめて、二人は翠屋をあとにした。

「見かけは温厚そうな親父さんだったけど、あれは殺し合いの経験がある手つきだった、義妹さんといい、あの一家はどうなってるんだ？」

ゼロの懸念は最もだ。

この日本はかれこれ50年以上、内外問わず戦争をしていない。自衛と称して存在する自衛隊も志願制なので、戦闘訓練さえ受けたことが無い人がこの国では多数だ。

そんな国で、死線を潜り抜けていると匂わせる人物は、同様に経験した者から見れば、どうしても目立つし、感じとりやすい。

ここまで感ずかれては仕方ないですね。

「御神真刀流……」

「ん？」

「高町、正確には父士郎氏の旧姓、不破家に伝わる古流武術です、その不波一族は、昔から要人警護の仕事を生業としていました」

「なるほど、昔ながらのSPってやつか、道理で」

「義父ウチさんは今は引退して一介のマスターですがね、これ以上のことは秘匿を義務付けられているので、申し訳ないですが」

「いいさ、俺たちだって似たようなもんだからな……しかしさしずめ戦闘一家だな、お前んとこの家族」

戦闘一家ですか……間違っていないのがなんとかも……

「そう言う勇夜も、剣術の心得はあるようですが？」

「あれは、修行やってた頃にレオ師匠から、宇宙拳法と一緒に教え込まれただけだぜ、一応師匠は地球の古流剣術を学んでたらしいけど」

「どんな流派ですか？」

「香取神道流……だったか……」

「なんですって……」

「あの香取ですか!？」

「ああ…室町辺りから、発祥した総合武術だつて……」

「正式名称、天真正伝香取神道流。」

飯篠家直という侍が開いた、特に歴史が長い剣術の流派であった。

「まさか、神道流の剣士と会えるとは……」

「とはいってもあくまで師匠が習ってただけで、正式なその流派の剣士つてわけじゃねえしな………あ、やべ、そろそろ買い出しにいかねえと……」

毎日彼女たちの為に、食事を作っているんですよ…

実の親よりも、親の役目を果たしているのがなんとも……

「ゼロ、明日は気をつけて下さい、どうも何か……」

「ああ…肝に銘じておくよ」

ゼロがやられることは無いでしょうが……

彼は幼いころに母を亡くして、おまけにその母とは血の繋がりが無く、実の母もゼロを生んだ際に無理がたたって亡くなり、父親とさえ生きていること知ってから、そんなに経っていない。

家族がすぐ近くにいるのに触れ合えない。

近いけど……遠い……溝。

その痛みを知っているゼロにとって、もしあの人がフェイトに『一方的な暴力』を強いていることが真実だと思えば知らされたら…
ゼロは彼女を許さないでしょうね。

そんな不安を胸に秘めつつ、わたしはゼロを見送った。

「光さん」

この声は…

「ユーノですか？」

地面を見渡すとフェレット形態のユーノがいた。

「すみません…見回ってた時にたまたま」

「いいえ、僕と彼がこうして会っていることは知っているでしょ」

ユーノには勇夜がフェイトとは停戦協定的なものを結び、事件解決の情報収集の為に動き、信頼している自分に提供していることを知らせていた。

勇夜^{ゼロ}本人はフェイトたちの行為そのものは許してはいないが、裏にある事情に対し、放っておけないが為に今の立ち位置にいることも含めてだ。

「それもあるんですけど…」

「デバイスのことですか？」

「はい…」

やはり、こうして協力させてもらっている今でも、巻き込んでしまったことに負い目を感じているんでしょう。

「わたしも、中途半端に後悔をしたくないから、こうしているんです、これではとユーノの負担も減るなら、それで良いじゃない

ですか」

「本当に、ありがとうございます」

「ただ…お互い管理局への言い分は、今の内に考えておいた方が良いでしょうね」

「そ…そうですね…」

ユーノは苦笑いで返すしかなかった。

まあすぐにでも管理局が捜査に乗り出してくれば、あんな大災害も未然に防げたかもしれない。

そこを上手く相手方に突いて、チャラにはできないものではないか
かね…

普段から言動も物腰も丁寧な彼にしては珍しく、チャライ言語で
思考していた。

Episode 12 - 嵐が過ぎた後…（後書き）

考えてみればリリなのシリーズで『母性』は出てくるけど、『父性』の要素は余り出てきません。お父さんキャラは出てくるけど、父親らしい描写はそんなに……なので作者なりに父性をクローズアップしてみました。

ん？「それならある意味はなのはママはパ……」ストップ！
死にたくなければそれ以上言うな！

フェイトの言うとおり勇夜の立ち位置はどちらかというところ兄貴寄りですが。

あと自分で書いといてなんだが、フェイトが健気でかわい過ぎて辛い……
まだなのはにはツンツンでクールに振舞ってるのに、ゼロには泣いたり笑ったりと年頃の女の子。

「お土産って…お菓子？」

それがフェイトが抱えているケーキボックスを見たアルフの第一声だった。

ここはフェイトたちが隠れ住むマンションの屋上。
今からフェイト、アルフ、そして諸星勇夜が『時の庭園』へ行こうとしている時だ。

「何か文句でもあんのか？」

「文句は無いさ…ただあの人が喜ぶかなって…」

アルフはお菓子を土産にすること自体に異論は無かったが、やはり『あの人』への不信感からどうも乗り気では無いようだ。

ちなみにそのお菓子類は、昨日寄った翠屋で買ったものだ。フェイトもかなり気に入っていたらしい。

実は『競争相手』の親が経営してる店だったことは内緒だ。

「よく分からないけど…こう言うのは気持ちかなって」

気持か…

フェイトはフェイトなりに、お袋さんの気持ちに答えたいと思っ
てんだらうが…

昨夜、自分のマンションに戻り、プレシア・テストロッサの経歴を調べていた際、気になる項目があった。

いや…と言うよりも、この親子の問題の核心と言え、こちらの世

界に来てできた自分の家族とも因縁浅からぬ内容。

もしプレシアが、あの『技術』に手を出していたとしたら……辻褃は全て合う。

あの親子が疎遠な理由が。

ジュエルシードを集めさせている理由は、まだ分ならず仕舞いだ
が……

地面に転移魔法を発動するための魔法陣が浮かぶ。

「次元転移…目標地点…時の庭園」

「（リンク、転移先の座標記録、頼むぞ）」

「（了解）」

「次元座標・・・876C 4419 3312 D699 35
83 A1460 779 F3125」

胸に抱えた引っかけかりを抱えつつ、俺たちは時の庭園へと飛んだ。

まるで城人中だな…

それが時の庭園に入った、勇夜の感想だった。

まさか、転移するといきなり、果てが見えないくらい長い廊下に出くわすなんてな。

「（建物の構造から見て、要塞クラスの大きさがあると思われます）」

「（なんともマッドな……お袋さんまでそんな野郎であってほしくはないが……）」

フェイトたちにここで暫く待つてると言われ、俺は廊下で突っ立って待つことになった。

だが俺たちには却って都合が良かった。

『天井に通気口が見られます、そこを通りましょう』
「了解と…」

と心じつつ勇夜さっそうと飛び、魔力で足を壁に密着させ、通気口の中に侵入した。

もし昨日見た研究内容が事実なら、そこから得た推論が事実なら、この庭園にはあの3人の他に生命反応がもう一つあるはず。

そう踏んで、俺は己の感覚を研ぎ澄ませ。

リンクは周囲の視覚状況から、目的地へと繋がるであろうルート
を処理演算して導く。

つまり片や直感による勘と。

片や緻密な計算による勘で。

?その子?がいるかもしれない部屋へと向かっていった。

なんとか…通れる広さで良かったな…

自分でも言うのもなんだが、背は高い方だ。

もし通れなかったら、その時点でアウトだった。

そう考えつつも進んでいると…

『微弱ですが生命反応があります…』

「ああ」

俺も微かだが感じた。

その後リンクの指示の通りに先に向かい。

「ここだな…」

勇夜の目が青白く光る。

透視で真下の部屋を確かめた。

何らかのガラスの容器が見えるが、ここからではよく見えない。

「零牙、ダガ モード」

リンクから青緑の光の粒子が溢れ、一振りのナイフを形作った。

俺の使うデバイス『零牙』を短刀形態にしたものだ。

「ヒートスライサー」

その刃を魔法で熱をこめさせ、赤く染まった刃で床を四角字に切りこみを入れつつ底辺にあたる部分だけを残して、押し込み、金属の天井を缶詰を開けるように開く。

もつとも缶詰の場合は引いて、こっちは押し込んだのだが。

ちなみに全部を切らなかつたのは、元に戻しやすくするため。

まず辺りを見渡す。

特にトラップも無いようだな。

畏が無いか確認した後、そのまま俺は躊躇うことなく飛び降りた。常人にはきつい高さだったが、魔法の補助もせずに、造作も無く着地する勇夜。

そして…例のガラス容器に目を向けると。

「……………」

言葉が出なくなった。

一瞬幻覚か錯覚の類だと思った。

正直嘘であつてほしかった。

これまで掴んだ情報も。

自分の推測も。

自分の目に写る光景も。

何もかも。

だが、何度瞬きしても、現実是不変ならない。

残酷な事実がそこにはあつた。

視線の先には生体ポッド。

大きなガラスの容器には、人間一人が液体の中で佇んでいる。

一糸纏わぬ姿で漂っていたのは。

フェイト…

違う…見かけからして6歳ぐらい…となればそれが誰だか判別が
ついた。

「アリシア…テストロッサ」

あの魔導炉の暴走事故で命を落とした…プレシア・テストロッサ
の娘だった。

てことは…やっぱり……………フェイトは…

『マスター、そろそろフェイトが呼びに来る可能性がありますが、早く戻って下さい』

「ああ…分かった」

揃って欲しく無いパズルのピースがこれで全てはまってしまった瞬間だった。

最初にいた廊下に戻ってきた勇夜。

まださっきのショックから立ち直れず、心臓がバクバク鳴る。

何度かの深呼吸と精神統一でようやく鼓動が正常になった。

やっぱり予想した通りだった。

だが実際目になると、あらかじめ予想してても衝撃的であった。

プレシア・テストロツサは以前、とある研究を行っていた。

使い魔を超える人造生命の育成の名の下に。

とある人間の細胞から、元になったものとそっくりの人を生み出す技術。

いわゆる…クローンの生成を…

その研究の名前が…

「勇夜！」

突然アルフがこちらに走ってきた。

かなり切羽詰まった表情をしている。

「何があった？」

「いいから来て！」

俺はアルフの後に続いて走り出した。

案内された先には一つの大きな扉があった。

見事なレリーフが彫られているが、そんなことに気を止めてはいられない。

彼女の方を見ると、いつもの勝気な少女はそこには無く、憤りと悲しさとやり切れなさや悔しさが入り混じった表情をした使い魔がそこにいた。

耳も彼女の心情を代弁するかのようには垂れ下がっている。

「アルフ？」

「勇夜…お願いだ…フェイトを…」

その時、扉の向こうから、声が聞こえた。

正確には、それは悲鳴。

少女が激痛を訴える悲鳴と。

鞭のようなものが人間の体を絶え間なく打ちのめす音。

それだけで。

たったそれだけで中で何が起きているのか理解できてしまった。認めようにも認めたく無くて。

彼女の母がそんな外道じゃないって。

何度もそう願った。

だが真実はどこまでも冷酷にそれを嘲笑して目の前にいた。

『マスター！落ちついて下さい！』

相棒の忠告も空しく響き。

どす黒い感情が彼の心を埋め尽くしていった。

「下がってる…」

それがわたしが玉座の間の扉の前に連れてきた時の、勇夜の第一声だった。

同時に寒気を感じた。

建物の中が寒いわけじゃない。

今日の前にいる少年から発せられる、どす黒く冷たい殺気。

無意識に彼の言う通り後ろに下がる。

だが背中越したというのに。

自分に向けてはいないのに。

刃を喉元に突きつけられたような感覚が襲いかかる。

こんなこと今まで無かった。

初めて会った時も。

組み手をしてもらった時も。

ウルトラマンに変身した時でさえ。

彼は扉の目の前に立ち。

右腕を振り上げると。

力任せに、扉に拳を叩きつけた。

一撃で扉が開いた。

そしてその先にあったのは。

ボロボロなバリアジャケットを羽織って倒れているフェイトと。魔力の鞭を形成したデバイスを持ったプレシアだった。お土産にと持ってきたケーキも無残に床にばら撒かれていた。

「フェイト!!」

アルフは気を失った主へと駆け寄り、抱き抱えた。華奢な彼女の体は鞭で撃たれた痕がいくつも。

なんでだよ…

アルフは納得できなかった。

フェイトはちゃんと言われた通りのものを持ってきたじゃないか…
なのになんでこんな仕打ちを。

「アルフ…」

無感情にさえ感じられる低い声が横から響いた。

「悪いが、フェイトを連れて出てってくれ…この人と話がある……」

アルフは彼の言う通り、フェイトを連れて、玉座を後にした。

「いったい何の用かしら？人の家に土足で入り込んで、あまつさえ

賤の邪魔をするなんて……」

賤？

さっきまでやってたのが賤？

聞き間違いかと思った。

あれで賤だなんて何の冗談だ？

どう見てもただの八つ当たりにししか見えなかった……

年寄り風に言えば、最近の親は賤と暴力の境界さえ理解できないのか？

そう無粋なことを考えなくなるほどに……

「あ、あなたね……フェイトに纏わりつくネズミ……かの噂の？魔導殺し？」

この女を直に見るのはこれが初めてだ。

写真では何度か見たが。

とてもあの子の母親とは信じられなかった。

似ても似つかない。

紫がかった黒い長髪も。

氷のような鋭利な美貌も。

何から何まで……

さっきの光景がそれを拍車にかける。

「質問が幾つかあるんだけどな……プレシア・テストロッサ」
「答える義務は無いわ」

プレシアの手からその髪と同じ紫色の稲妻が発生し。

勇夜に向けて雷撃が放たれた。

雷撃は彼を飲み込んで爆発を起こし。

爆煙で勇夜の周囲が見えなくなる。

大魔導師と呼称されるだけあり、プレシア・テストロッサの一撃は凄まじかった。

詠唱も無しで、これだけの威力である。

そこらの魔導師ならその一撃でリタイヤになっているだろう。

非殺傷なら気絶。

殺傷なら確実に死亡レベルの威力だ。

死体さえ、生前の形を留めていないだろう。

だが…

「撃ってる暇があんなら…さっさと答えろ……」

爆煙からは右手を翳して、勇夜は何事も無かったように立っていた。

大理石の床は無残にも抉られているのに。

彼は傷一つ付いてない。

より冷たい目つきを秘めて。

巨人の姿の時は金色に輝く瞳も。

人間態の今は光の欠片も無かった。

「あの子はおんたからの『危ないお使い』を…必死でやってたんだぞ、そんでこの始末とはどう言うことだ？」

「必死？笑わせないで…」

美貌が歪んだ笑みを形作る。

「これだけの時間をかけて、回収したジュエルシードはたったの4つ…大魔導師の娘としてはあまりにも期待外れだわ…」

大魔導師………か………

それには異論が無い。
白状すると、？魔導師？としてなら、自分でもこの野郎には勝てなかった。

今の一撃で即死していたかもしれない。

だが…。

「期待外れ？そんなもんはなから持つてるのかあんたは？」

「どつという意味かしら」

「あんたの目を見れば嫌でも分かる、？アリシア？と生き写しなあの子への憎悪ってやつがな……」

一瞬相手はやや面喰った表情をした。

まだそんな表情ができるとはな…表情には出さなかったが、驚き自体は隠せなかった。

だが彼女は、すぐに冷酷な笑みに戻り。

「……………調べたのね」

「あんたの愛娘を死なせたあの魔導炉事故、20年以上も前のことなのにその子にそっくりなフェイト…そしてあんたのやってた研究、これだけあれば…フェイトがあんたの実験が生んだ、デザイナーベイビーだってことは検討がつくさ」

彼女がフェイトの母親。

それに間違いは無い。

しかし…フェイトはこいつの子宮の中で生まれたわけでは無かった。

ガラスの生体ポッド。

それが彼女の母胎。

ポッド内に蓄えられた液体。

それが母体の代わりに彼女を自分で呼吸ができるまで育てた。

実際に目にしたわけでは無いが彼女がそうしてこの世に受肉したことは間違いない。

どうしても…もう一度…もう一度娘に会いたいと願ったこの野郎の願いで。

フェイトは？アリシア？として…この世に。

「そこまで知ってて、なぜあなたはあの？人形？に拘るの？赤の他人であるあなたが」

「……………今……………何て言った？」

何を言ってるのか分からなかった。

分かりたくもなかった。

訂正しよう。

分かっていたけど、認めたくなかった。

子への『憎しみ』どころか、その子を人とさえ、みなしていない事実を……………。

「何度も言わせないで…あれはわたしにとっては何だの？人形？よ」

人形だ？

生まれ方が違うだけで。

娘と同じ遺伝子と容姿であるけど。

異なる存在であるあの子を。

血の通ったあの子を…

玩具だとしても言いたいのか？

人間だって認めてないのが？

自分が生んだ子だって思っていないのか？

「教えてあげるわ…わたしにとっての娘は、アリシア只一人だけよ…」

冷酷な美貌に、悲哀と言う名の揺れが加わりつつも。

「私の時間も…愛情も…何もかも全部アリシアに上げるはずだった…それを叶えるためなら、世間にどう思われようとも構わなかった…」

恐らく…一人たりとも知ることが無かった。

この？プレシア・テストロッサ？だった人間の闇。

「なのに…どうして…どうしてあんな人形に注がなくちゃいけないの！？あんなアリシアの出来損ないに、ただ似ているだけの失敗作に、愛情なんて、注げるわけ無いでしょ…！！」

「だから、『全て』を取り戻すために、私は人形を生かしているだけ、用なんて済めば…」

「だったら…！」

今解った。

この外道がフェイトを酷使してまでジュエルシードが欲しい理由。それを理解しただけに…

「だったらな…今すぐ言えよ…」

許せない。

「なんですって？」

最初はただ死なせてしまった愛娘への贖罪だった。

「今言ったことを…その本音をな、フェイトに今言ってみせろよ！」

フェイトはその贖罪の過程で『アリシア』として生まれてしまった。

倫理的には問題があるクローン。

人によつてはこの外道の罪の象徴だとも言うだろう。生まれたこと自体が罪だと言うやつもいるだろう。

「？お前は自分の娘じゃない！？アリシアと似て非なる人形？、母親だつて認められないなら！洗いざらいあの子に言え！！言ってみろよ！！！！」

でも俺にとつては……そう言い切れる理由がたとえ……あの子の出生を後から知ったからだとしても……

フェイト・テストロッサという。

一人の人間。

一人の…一人しかいない…

「そしてあの子を解放しろ！」

それを…

人形だつてほざきながら。

痛めつけておきながら。

「あの子に縛り付けてる足枷を……解きやがれ！」

『目的』を果たすまでの道具としてしか見てないのに。

自分の『娘』としてあの子を縛り付けて。

あの子に罪を重ねつけている。

「てめえの下らないエゴのために、フェイトとアリシアを弄んでんじゃね！」

このケダモノが許せない…。

「真実を知れば、フェイトは何年も闇ん中を閉じこもるかもしれねえ、だがせめて、あの子を妹としてかわいがってやるさ…自分の娘とも、アリシアの？妹？としても見ようとしなないあんたの代わりになああ……！」

「黙りなさい……」

「黙れだ？笑わせるなよ……フェイトを道具にしてんのは誰だ……一言もあの子の言葉を聞いてあげなかったのは誰だ……見てあげなかったのは誰だ……『あの子たち』に地獄を見せてんのは誰だ……！！それを見ない振りをしてるのは誰だ……！！あんだろ……！！！！人でなしが……！！」

勇夜の怒りは、一種の同族嫌悪、近親憎悪も混じっていた。

彼も以前は、誰も言葉にも耳を貸さず、誰とも、自分とさえ向き合うことができず、フラストレーションを撒き散らして。

心を閉ざしていた。

そんな時期があつたからだ。

「あなたに…何が分かるの？」

今まで、震えながら聞き手に徹していたプレシアは。

「私とアリシアの…何が分かるの！！！」

懐からもう一つデバイスを取り出した。

「（あれはまさか！？）」

いつもは冷静な勇夜の相棒も驚きを隠せない。

なぜならそのデバイスは、余りに酷似していたからだ。

勇夜^{セロ}の世界で、怪獣を操る怪獣使い？レイオニクス？が使うアイテム。

バトルナイザーに。

色が紫なことなど、細部に違いがあるが見間違いのようがない。

『サモン・ローディング』

そのデバイスから、5つの光が放たれ、勇夜の周りを何周かする

と。

5体の西洋鎧を着た騎士に似た風貌をしたロボットが出現。体格も武器も様々だが、明らかにマスターを狙っている。

？どう足掻いても勝ち目は無い？

内の一体が馬上槍で勇夜に襲いかかる。
が、次の瞬間。

攻撃したはずのロボットは四肢を切断された。

？そう…この機会たちに、勝機なんて端から無かったのだ？

彼の手には、いつの間にか零牙が握られている。

他の三体が彼を取り囲み、一斉に攻撃を仕掛けるが、勇夜は刀身に、エネルギーを込めると横薙ぎに一閃。

その斬波に三体は両断され。

最後に残った一番巨体で二回りも大きな一体は、勇夜に拳を振るうが、難なく左手の掌で受け止めると。

腕力で一気に相手の腕をねじ切り、右手の一撃で腹部を貫いた。

そしてプレシアに冷酷な瞳を向ける。

彼女の手には先ほどの一撃以上の凄まじい雷の魔力が溜められていた。

さっきのロボットは時間稼ぎのために召喚した囁ませだったのである。

「消えなさい！！！！」

明確な殺意を込めて。

雷撃が放たれる。

その雷は今度こそ、勇夜の肉体を完膚なきまで破壊する。

？何ですって？

はずだった。

雷撃を放った直後。

右手に持っていたデバイスは切断され。

彼女の喉元に、零牙が突きつけられていた。

距離にして10mあったはずなのに。

間違いなく仕留められる一撃だったはずなのに。

よくまわりを見渡してみると彼女から見て左側にあたる壁が抉れていた。

そう…魔導師としてなら勇夜に勝ち目は無かった。

だが、？戦士？としてなら…

諸星勇夜はこの平行世界に来てからも、心身を鍛えることを怠らなかつた。

海鳴に来てからも、情報収集や調理の合間を縫って、仮想シミュレータを使いつつも鍛錬を欠かさない。

街中を歩いていようが。

本を読んでいようが。

デバイスのマルチタスク機能を活用してだ。

その日頃の研鑽の結果、人間態でもある程度ウルトラマンの力を行使できるようになった。

彼が『ディファイレーターパワー』と命名したエネルギー。

本来は、ウルトラマンにならなければ使えぬ能力。

無論スペシウム光線のような、大火力の遠距離攻撃はできず、非殺傷にもできないが、肉体と得物による攻撃力が格段に強化され、魔法よりも早く発動できるメリットを持つ。

特に今のようなメカ相手には有効的であった。

フェイトのフォトンランサー、プレシアの雷撃を受け止めたのも、そのエネルギーで張ったバリア。

『ゼロディフェンサー』

今の一撃もこのバリアでまず受け止め、向きを斜めにずらして受け流したのである。

そして間髪いれず彼女が視認できないスピードで、相手へ踏み込み距離を詰め、居合の要領でデバイスを切り裂き、こうして喉に突きつけたのである。

戦士としてなら。

戦いを経験したきた者なら。

彼の方が上手だった。

プレシアは身動きがとれなかった。

この距離で下手に撃てば自分も巻き込むのもあるのだが。

文字通り身動きができなかった。

自分の体がいうことを聞いてくれない。

体が：心が：この男は危険だと叫んでいるのに、応えてくれない。

これは彼の能力の一つ。

ウルトラ念力。

テレキネシス。

全てのウルトラ一族が持つ能力だが、特に父ウルトラセブンとゼ口はトッポクラスの使い手。

怪獣やウルトラマンクラスの巨人にも有効な技である。

並の人間相手なら、そのまま為す術も無く金縛りにできる。

プレシアにとって今日の前にいる相手は。

感情が感じられない目をしながら、明確な殺意を発するこの少年は。

まさに死神だった。

殺される。

生物しての本能がそう感じた。

だが。

「臆病者が……」

そう吐き捨て背を向けると。

プレシアにかけられた金縛りは解除された。

体が硬直していた影響と彼女を蝕むものの影響で、息が乱れ、しばらく立てそうも無かった。

しかし彼女にはまだ念力の金縛りがかけられたように呆然としていた。

彼が先ほど言った。

ある言葉によって。
その言葉から、忘れていた、『あること』を思い出したことで。
それを知る由も無い勇夜は。
一度も彼女に目を向けることも無く。
玉座の間を退室した。

玉座の間をでると。

まだ眠ったままのフェイトと。

沈んだ表情で抱えるアルフだった。

「ゆ…勇夜…あのさ…」

眠りについている主と違い、彼女は扉越しに一部始終を聞いてしまっていた。

「後にしてくれ…帰るぞ」

勇夜とフェイト達の足元に青緑色の魔法陣がしかれると。

「次元転移…目標地点…遠見市」

三人の姿は光と共に消えた。

昨日、勇夜と光は次元振をきっかけに時空管理局が重い腰をあげ

ることを話していたが。

マルチバースの海を泳ぐ。

船が一隻。

時空管理局本局が所有する、時空を超える船。

L級巡航艦船。

アースラ。

その艦内の廊下を歩く女性が一人。

緑がかった髪を勇夜よりはやや上向きに縛り。

本局の制服を着込んだ見た目は20代後半に見える女性。

女性は目の前の自動扉を抜けると。

「みんなどう？今回の旅は順調？」

ドアの先はこの船の艦橋だった。

入室するとともに、この船を動かしているクルに声をかける。

「はい。現在、第三船速にて航行中です。目標次元には、今からおよそ12時間後に到達の予定です」

「前回の次元震以来、特に目立った動きは無いようです」

的確に報告をするクルたち。

この女性の名はリンディ・ハラウン。

時空管理局本局に勤める局員で。

このアースラの艦長だ。

「事件の中心人物である二名の魔導師も今はその活動を停止してい

るようです」

その彼女のために紅茶を淹れているショートカットで茶髪の少女はこのクルーのオペレーター。

エイミー・リミアッタ。

「管理外世界で起きた小規模のものとは言え、次元振の発生は見過ごせないわ」

勇夜の予想通り、管理局はその重い腰を上げてアースラクルを地球に向かわせていた。

「それから、？彼と例の巨人？が両方確認された以上、事態はかなり深刻と思われます」

艦長席に腰かけたリンディに淹れた紅茶を渡すエイミー。

彼女が言う『彼と巨人』が誰なのかは言うまでも無い。

彼はどちらの姿でも、管理世界で名の知れた存在なのだから。

何せ、どちらも大概は、管理局が捜査で介入する前に事件や事故を解決してしまうのだ。

その『彼ら』が両方存在しながら手を焼いている時点でかなり状況はややこしく、緊迫していると推測できた。

「そうね…危なくなったら、急いで現場に向かって貰わないと、ね、クロノ？」

リンディは艦橋内で佇む黒衣と黒髪の少年に声をかけた。

彼はクロノ・ハラオウン。
管理局では執務官と呼ばれる役職に就き。
リンディの息子でもある魔導師だ。

「わかっていますよ、艦長」

親子だからと言って公私混同はせず、彼は事務的に。

「僕は、その為に居るんですから」

中央に深い青色の光沢が埋められたカード…デバイス愛機 を取り出しな
がら答えた。

勇夜は時の庭園から遠見市のマンションに戻ると。

彼はまだ目を覚まさないフェイトをベッドに寝かせた。

こつちに戻ってから、勇夜とアルフは一言も会話をしていない。

ベランダにたたずむ2人は、お互い気まずさからどう切り出すか、
踏み込めずにいた。

あの玉座の間で交わされた会話の内容をアルフも知ってしまった。

勇夜もそれを察し、何も言いだせずにいる。

「勇夜…本当なのかい？あの話…」

しばらくしてアルフが先に静寂を破った。

「本当だ…」

そして彼が調べ上げた『真実』を、アルフに話した。

フェイトが…

あのアリシアって子の、クローンなんて。

あたしと同じように、人工的に生まれた命だったなんて。

それをあの女は、『人形』としか見てなかったなんて…

あの女がやっていた研究。

クローン技術。

フェイトがああ、の勇夜がみせたアリシアと瓜二つで。

その研究の名前が。

プロジェクトF・A・T・E。

パートナーと、同じ名を冠した技術。

これだけのことを聞かされたら、信じるしかなかった。

『プロジェクトF・A・T・Eは、単にクローンを生み出すだけではありません、元になった人間の記憶も、そのクローンに植え付けるのです』

「……じゃあ…フェイトが言ってた、『優しい頃の母さん』って、『恐らく…アリシア・テストロッサの記憶によるもの、と思われま

す
『

じゃあフェイトは、一度もあいつから愛情も笑顔も向けられない
まま今日まで生きてきたの？

姉貴が経験した記憶だけを、頼りにして。

「すまねえ…お前の主人…：… フェイトにも…：… ひどいことを言っ
ち
まっ たな」

「いいよ…：… 謝んなくて…：…」

まさか謝罪を受けると思わなかったのでアルフは戸惑った。
だって…。

「あたしもあの場にいたら、勇夜と同じことを言ったと思うし」

勇夜と違って、自分の場合は逆に打ちのめされただろうけど。

「そのことには、逆に感謝してるんだ、あたしが今まで言いたくて、
言えなかったことを、洗いざらい代弁してくれたからさ…：…」

昔からフェイトと話そうともしない。

顔を合わせようとしらない。

研究室にずっと籠って。

一方的に『危険なお使い』を頼んで。

苦労して持って来ても、礼の一つも言わずに。

さっきみたいに何度も痛めつけて。

ただ？アリシア？じゃないからって…

アリシアとして生んでおいて、そんな手前勝手に…。

「けどさ…それならあいつは、ジュエルシードで何をするつもりなんだい？」

一番腑に落ちないのはそこだった。

願いを叶えてもらうにしても、勇夜が欠陥品と称して、ちよつと衝撃を与えただけでバルディッシュを破損させ、ウルトラマンであった勇夜も倒れるほど消耗させ、あれだけの被害を出したのだ。

いくらあんな壊れた人間だからって…あんなものを使って、娘を蘇らせる何て願いを、叶えてもらおうなんて。

「アルハザード……」

「え？」

『別名？忘れられた都？とも呼称されます、遙か昔に、今以上の技術が結集していたらしい文明の都市で、史実では跡形も無く消滅したことになってますが、今もどこかの空間に存在していると提唱している学者もおります』

「て、ことは…あいつはジュエルシードを使って」

『わざと暴走させ、無理やりゲートを開く魂胆でしょう』

「そして今は、そこへ行く為の切符稼ぎってことさ」

今の文明の技術では無理でも、あの都にある技術なら、あるいはと。

「フェイトは…その為の踏み台…ってこと？」

『そう…なりますね』

勇夜があそこまで怒るのも無理無い。

あたしだって、今すぐにでもあの女をぶん殴りたくて、腕が疼く。

「でも……」

でも…一番の問題は…

「フェイトに……なんて話せば……」

そういったところで勇夜は口到人差し指を付けた。
どうしてかと思ったが。

眠っているフェイトの方を見ると。

彼女の瞼が動き、少しずつ開きながら。

アルフの主は目を覚ました。

「フェイト！」

駆け寄るアルフ。

「大丈夫かい？」

「大丈夫……平気だよ」

彼女はそう言いつつ、ベットから出ようとす。

「フェイト？」

まさかと思った。

「探さなきゃ……ジュエルシード」

「まだ探す気なのかい!？」

勇夜とアルフは呆然自失になった。

昼間の仕打ちで、体力も戻って無いはずなのに。

その体も、痣だらけで痛々しいのに。

「だって…母さんが、これじゃ足りないって……」

「でも…ちゃんと言われた物を持ってきたじゃないか…なのにあんな酷いことを」

「酷いことじゃないよ…母さんはわたしの為を思って……」

「思ってるもんか！あんなの……あんなのただの八つ当たりじゃないか！！」

気がつけば叫んでいた。

あいつの目的を知ってしまっただけに、この全身の痣を作った元凶の期待に

応えようとする彼女の態度に納得いかない。

「違うよ…だって…親子だから…」

「フェイト！だって………だってあいつは　　！！」

「待て……」

思わず『あのこと』言いそうになりかけたあたしを勇夜が静止した。

「フェイト、まさかいつもああいう風に、あのお袋さんの言うことを聞いてたのか？」

フェイトは頷いた。

「親の言うことを聞くのは確かに当然だ、でもな、それだけじゃ、血を繋がってるだけじゃ………親子って言わねえんだよ」

彼の言葉を前に、フェイトは黙ったまま答えない。

「黙ったままじゃ何も伝わらないだろ…俺にも…お袋さんにも…正直に言う…俺もアルフと同じ意見だ、俺から見たらあんなのは親子じゃない…所有者と奴隷だ…あんなのは母親じゃない…独裁者だ」
「勇夜…それ以上母さんを」

勇夜はあたしが、我慢して言葉に出来なかったものをフェイトにぶつける。

「何度でも言っただけさ！あいつはフェイトを見ようとしてもしていないし、フェイトも『血縁』だけの繋がりに甘んじてるだけだ、ジュエルシードを集めるよりもやらなきゃいけないことがあるだろ…あいつに伝えなきゃならないことだって…」

「……………」

フェイトには悪いが、今回は勇夜の意見にあたしは賛同だった。

「だから、一度あの野郎に…」

「それ以上言わないで……！」

勇夜とアルフは目を見開く。

「母さんは何も悪くないの…悪いのはあたしだけなの…母さんを失望させたから、あんなことをさせるのも私のせいなの…わたしが良い子でいないから…言われたことをやらないから…期待に応えられないから、こんなことを続けることに迷ってるから……！」

頭を抱え、蹲りながら…自分の言葉で己の精神を自傷する少女。

「だから…母さんの悪口を…言わないで……全部、わたしがいけない子だから………」

こんなフェイトは、今まで見たことが無かった。
彼女が、誰にも見せなかった……心の『闇』。

「そうかよ…なら好きにしろ……」

「勇夜？」

「今日を持って約束は終わりだ……」

アルフは時が止まった感覚に囚われる。
フェイトも顔は見えないが、震えていた体が固まった。

「もうここには来ない…次に会った時は容赦はするな、全力で来い、こつちも全力で邪魔をする」

そう…今日がこの『約束の期日』であることは前々から決まっていたこと…今までの状況が、異常だったのだ。

「どんな願いがあるにしろ、あんたのお袋さんに、この星を？道連れ？にされちゃ、たまらないから………」

「待って、勇夜！」

「じゃあな……」

まるで世界が終ってしまつとよ様な表情をするフェイトを振り切つて、彼は部屋を後にした。

「勇夜！」

アルフはフェイトを残すことに罪悪感を感じつつも、勇夜の後を追った。

残されたフェイトは、ただ嗚咽を繰り返すことしか、できなかった。

あの勇夜の表情。

間違いなく、本心とは反対の気持ちを見せなきゃいけない人の顔だった。

だって、何度も…何度もフェイトはそうして、無理をして来たんだから。

だから今みたいに、今まで溜めこんでいたものが一度に爆発してしまつて。

ドアから出て、下を見ると。

既に勇夜はマンションを出て、歩いていた。

周りに人がいないことを確認し、あたしは飛び降りる。

「勇夜！」

走りながら、彼に呼び掛けると。
相手は立ち止まった。

一瞬こちらを振り向こうとしたが、直ぐに止めて。

「やり合うなら、今度にしてくれ……」

「そうじゃない！そうじゃないんだけど……」

勢いで来てしまったので、いざ何を言ったらいいか分からない。
自分も初めてだった。

あんなに自分を攻める主が。

あの女への不満を口にする、窘められることはよくあったけど。

「どうにも……ならないのかい？」

自分の言葉も、勇夜の言葉も届かず、あんな雁字搦めになったフ
ェイト。

そんな彼女の痛みを知らず、痛みしか与えない母。

「悪いが…俺たちじゃどうにもならねえ」

低く静かに彼は答えた。

「フェイトみたいな虐待を受けている子はな…親が悪いなんて微塵
も考えないらしいだよ、こうなのは全て自分のせいだと………自
分を責め続けるんだってさ……」

勇夜のその言葉と皮切りに、突然雨が降り始めた。
最初はまだ少量だったが、直ぐに本降りとなる。

まるで、自分たちの気持ちを代弁するように。

「そんな…」

「お前も見ただろ…今のフェイトには、それこそ血を吐きながら続ける…悲しいマラソン…ってやつを続けることしか…できない」

死刑宣告を受けた気分だ。

濡れた髪も耳も尻尾も服も、その冷たさも、突きつけられた現実に比べれば苦にならないほどに。

なんで…

なんでなんでなんで…

なんで……なんであいつがフェイトの親なんだよ…

娘を犠牲にして、娘を生き返らせようとする野郎が…どうして…

「あと…あのことはまだフェイトには話さないでくれ」

あのこと。

「プロジェクトFATEのこと？」

「ああ、下手すると、抜けがらみてえに笑わなくなったフェイトと一生をともにすることになるぞ」

一生…。

生涯ともに過ごすこと。

それがフェイトとわたしが出会った契約。

その契約の時、あたしはフェイトを守るって誓った。

そして『彼女』から、フェイトを幸せにすると約束した。

今あのことを話せば、あたしはそのどちらの誓いを守れないまま……死ぬまで生なきや……ならないの？

「俺も、そこまで冷酷になれねえよ」

相変わらず背を向けていた彼はようやくこちらに顔を向けた。

彼なりに見せまいとしているのだろうが頬をつたる雨粒が涙に見えるほど、顔は……目は……は憂いでいる。

その顔を見ても解る。

何が……『容赦するな』だよ。

今でも彼は自分たちを案じてる。

どうしたら、フェイトを救えるか、助けられるか、もがいて苦しんでいる。

それを、やせ我慢で隠してる。

「もう行くぞ」

そう言っつて彼は歩き出した。

やるせなさど、無念を秘めた背中を見せながら。

アルフも、背中を見送りながら、悲しさと悔しさと無力感の前に、足に力が入らなくなり、膝をついた。

ああ……。

この人が、フェイトの親だったら…家族であってくれたら…どれだけ良かったか…

一瞬、そう思ってしまった。

こんなこと、フェイトにとても言えたことじゃないのに。

そう考えてしまった。

雨がひどくなる中、あたしは勇夜が見えなくなるまで、ずっと彼を見つめていた。

幕間 其ノ壱

灯りが消失しているどこかの部屋。

一人の男が、汗をかき、息を荒げながら、膝をついていた。
髪はすっきりとした短髪で歳は初老あたり。

そして彼の右手には・・・
怪獣使い。

レイオニクスが怪獣を操作するのに必ず必須となるアイテム。

『バトルナイザー』

プレシアが持っていた類似品とは違い。

正真正銘の本物だ。

男は現状の自分が恨めしかった。

『彼』にとって、本来そのバトルナイザーは、無用の長物であったからだ。

だが、地球人のレイオニクスとその仲間たち。

二人の『光の巨人』によって、『今の世界』に飛ばされ、その能力の大半を失った。

レイオニクスでも雑作ない、2体同時使役さえ、今の彼にはままならない。

まあいい・・・

完全復活の手だてはある。

『あの本』さえ利用すれば……

そのための準備も怠っていない。

データも取れた。

？あの技術？が人間だけでなく、？怪獣？にも有効であると示すデータを。

まさか『奴』の息子と、その仲間たちが、こちらに来ているとは思わなかったが、逆に言えば『自分たち』に対抗できる存在は、彼らしかない。

管理局など、図体がデカイだけの組織、恐るるに足りない。

どの道彼らでは、手遅れな状況でもまともに手は撃てまい。

『ギヤラクシークライシス』の時と比べれば、十分恵まれている環境下だ。

自分と世界の現状はよく分かった、とりあえず……今は静かに待つ時。

部屋の中を電子音が響く。

男は机に設置されたキーボードを操作、『SOUND ONLY』と表示されたモニターが現れる。

「マンジョウメ博士、グレーム提督が呼びです」

「分かりました、直ぐ向かいます」
嘲笑したくなる気持ちを抑えながら、彼は答えるのであった。

幕間 其ノ壱（後書き）

今回はA・S編に繋がる幕間の回でした。

色んな意味でにやりとした方もいるのではないのでしょうか。

このマンジョウメという人物の容姿は「ウルトラQ」で同名の役を演じた佐原健二さんという俳優さんをイメージしています。

次は原作では、クロノの横槍回ですが、異相体はオリジナルになります。

無印3話とダブるので…

幕間の回でも言いましたが、異相体は本作オリジナルです。
なんか、仮面ライダーアギトの怪人アンソウみたくなつた。

あと、男性キャラを活躍させすぎた。

元々、本作を書くきっかけの一つが、男性キャラが冷遇されがちなりりなのシリーズに対し、せめて光を……だったわけなんです。

もうこうなつたらやけくそだ!!!

「ウルトラマンゼロのテーマ」を聞きながら、お読みすることをお勧めします。特に勇夜セロたちが出てくるところから。

あの夜に現れた、毎週テレビで放送される特撮モノでしか見ない存在だった。

怪獣が現れ。

ジュエルシードが次元振を起こして、愛機のレイジングハートが傷つき。

前に自分を励ましてくれたウルトラマンゼロも。

あの『フェイト』と呼ばれた女の子の代わりにジュエルシードを止めようとして、怪我を負った。

それから3日。

光兄に聞いたけど、ゼロさんのいた世界から無理やり連れてこられた以外は分からないらしい。

何にしても、光兄ことミラーナイトとウルトラマンゼロがいなかったら。

為す術も無かったんだろうな…。

フェイトちゃんもろとも…

話をしようと思えてきません。

結局、戦うことになっちゃったけど。

そういう頑ななところはあの子と似ていると、あのあと兄に言わ

れた。

心当たりはある。

最近特に。

ジュエルシード集めにはユーノ君や光兄にかなり無理を言ったし。二度も話し合おうとして、拒絶され、ゼロさんには親身になっているのが自分でもよく分かるほど、あんなに泣き叫ぶところを、ダメージで体が言うことをきかない中見せ付けられたのに。

今でもあの子に話を聞きたいと、思ってる。

そのあと……どうしたいかは、まだ解らないけど。

「(なのは)」

そう考えこみながら下校していると、念話でユーノ君が呼び掛けた。来た。

電柱の隅からフェレットが出てきた。

勿論ユーノ君だ。

前に、どうして人間の姿にならないのと聞いたことがある。

地球に来て消費してしまった魔力の回復と。

その魔力を減りにくくさせること。

見た目とは裏腹に、フェレットの時の方が怪我の治りが早い。

とのことだった。

実際、初めて魔法を使ったあの夜の後には、その前に異相体と戦った時に受けた怪我は、ほとんど治っていた。

そしてユーノ君の首には赤いビー玉。
前はユーノ君が持つてて。

今は私の魔法の杖であり、パートナーとなっている。

レイジングハート。

「直ったんだね、レイジングハート」

「うん：見回りついでに届けようと思って」

「にははは、ありがとう」

私は愛機を受け取り首にかけた。

「また、一緒に頑張ってくれる？」

『All right, my master』

そう改めて、愛機に語りかけた時だ。

二人の脳裏にジュエルシードが発動したことを示す波動はよぎる。

「行こうなのは」

「うん！」

そのジュエルシードは今、海鳴臨海公園と呼ばれる公園のどこか
にある。

今はそれしか分からない。

「レイジングハート：解る」

『申し訳ありません、生物を取り込んだことまでは解るのですが』
来てみたのはいいいけど、肝心のジュエルシードがどこにあるか見
つからない。

あのフェイトって子が前にやったみたいに、強制発動を思い切っ

てやる手もあつたが、すでに異相体になっているかもしれないので、それは却下となった。

光さんはまだ学校にいる時間なので、無闇に学業を疎かにさせてまで甘えるわけにはいかない。

でも…

どこなんだ？

もう結界は貼つてある。

対象もこの中にあることは分かつてる。

出てくるまで待つしかないのか？

そうこうしていると。

結界内に侵入者？

空を見上げると。

金色の魔法陣と共に。

あの金髪で黒衣の魔導師が現れて降り立った。

『GET SET』

彼女はこちらに自分のデバイスを向け構えた。

「あの…フェイト…ちゃん」

「っ……………フェイト…テストロッサ」

少し間を置いて彼女は名乗り上げた。

それでも戦う意思は変わらないらしい。

異相体がまだ見つからないのに。

その時だった。

上から！

「なのは！」

『Protection』

上空から突然光弾の雨が降ってきた。

なのはもあの子も自分も防御して無事ではあるが。

同時に、今攻撃をくわてきた犯人であろうその異相体は現れた。

人間に近い体格と大きさで。

手の代わりに羽を持ち。

この地球に存在するカラスと呼ばれる鳥のような顔と黒い体色をした。

その異相体は複数で出現した。

二、三体ってレベルじゃない。

自分たちの周りを数十体もの数で囲んだ。

その様はさながら忍者のよう。

あるいはカラス天狗か…。

そして…

一斉に襲いかかってきた。

「なのは！空へ」

『Flier FIN』

空にいても危険なことに代わりない。

だが移動と回避なら、飛んだ方が速かった。

僕はなのはの肩に乗り。

「接近戦は避けて、遠距離攻撃で仕留めて」

なのはの背後に光弾が迫り。

ユーノはバリアをはって食い止めた。

「防御と僕がなんとかするから！」

「分かった」

僕もこんな数を相手にするのは初めてだけど。

現状で把握できたのは。

あの群れが異相体を作りだした実体にはぼ近い幻影で、本体はそ
の中に紛れているということだった。

でもなのはのサポートをしつつ、どこまで本体を探せるか。
でもやるしかない。

非力でも、自分にできることを。

結界内に入り込むと、すでにあの白い魔導師とフェレットがいた。

なんとなく言わなきゃいけない気がして自分の名前をいいつつも、
戦おうとしたら。

異相体は何十体も現れそれどころでは無くなった。

当面の相手はこの黒い鳥人間たち。

『Photon lancer multishot』

稲妻の魔力スフィアをいくつか形成し。

『FIRE』

それを放つ。

一撃でいくつかの異相体の分身が消えた。
これだけ数がある以上は、まずある程度減らして、本体を探しやすくする状況を作るしかない。

『Scythe Form』

できれば大技で一気に叩きたいが相手は光弾やら、爪やらくちばしやらで果敢無く攻めてくるので立ち止まっていられない。

スピードは速いが、速さならこっちは上。

持ち前のスピードを生かして、フェイトは金色の刃で次々と異相体の群れを切り裂いてゆく。

『Arc Saber』

魔力刃を飛ばし、ブーメランのように飛ぶ三日月の刃は対象を切り裂き。

『Explosion』

以前なのはに使用して、有効打となった魔力刃の爆発を行った。
爆風とともに発散された魔力で消滅する影。

その一方でなのはは。

ユーノ指示通り、距離を取り。

『Divine shooter』

誘導効果のある魔力弾を発射しつつ。

かなり数も削られたのに減る気配がまったく無い。
なのはたちは焦りを隠せなかった。

そしてフェイトもまたしかり。

相手は相当隠れるのが上手いようだ。

いくら倒しても、いまだに本物を見つけれない。
アルフが来るまではまだ時間がかかる。

そして…

あの人は。

もう来てはくれない…

自分もあの時、パニックになっていたし……元々そういう約束だった。

母さんに合わせるまではジュエルシードの収集には手は出さないが、手伝いもしない。

でも自分にもしもの時があれば、全力で助ける。

食事だって毎日作ってくれて

アルフの要望通りに稽古に付き合ってくれて。

約束通り何度も助けてくれて。

あの時は、命だってかけてくれた…

でも……それはあくまで、『約束の範囲内』だったんだ。
それは終わってしまった。

もう……あの人とは……

その心の揺れが一瞬の隙を生んだ。

『主！右です！』

いつもの冷静さから考えられないほど、切羽詰まった声色でバル
デッシュが警告したが、間に合わない。

異相体の一体からの爪による一撃が、フェイトに致命傷を与えよ
うとしたその時。

突然、異相体が血を噴き出した。

状況が読めないフェイト。

気がつくと、まわりの異相体が次々と切裂かれて消えていく。

何も無い……いやあった。

だが余りの速さに、その異相体を切り裂く何かを視認できない。

何が？

その時だ。

空から何かが降ってきた。

その光を纏った何か……いや何者かは、空中からの急降下蹴りで
直進して。

行く手を阻む異相体を巻き込んだ。

そして地面を摩擦で煙が立つくらい速さでスライディングし、
勢いを殺しながら降り立つ。

煙がたたつてよく見えない。
だがその後ろ姿で、なんとなく解ってしまった。
彼はゆっくりと立ち上がる。

黒に使いこげ茶色のジャケット。
濃い青色のジーンズ。

黒い髪を伸ばして後ろでしばり。
それがこの上無く似合ってしまうほど中性さと、
精悍さが両立さ
れ。

無愛想ながら、凜とした顔つきと切れ長の吊り目の少年。

彼がここに来ることは予測がついた。

その時は戦うとも決めていた。
だってもう約束を守る必要も無い。
もう心おきなく、自分たちのジュエルシード収集の妨害をして、
最悪お縄を頂戴するだろうから。

なのに…

彼の周りに漂う二振りのナイフから、さっきまで縦横無尽に飛ん
でいた正体が分かった。

彼は腕を振ると、ナイフはそれに応えて、異相体の群れを切り刻
んでいく。

並の誘導魔力弾よりも速く、正確な軌道で、数を減らしていく。
ウルトラ念力で、巧みにコントロールできるからこそできる芸当
だ。

どうして…今もこうして助けてくれるの？

どうして？

彼はこっちを向いたが何も言わない。
無表情で何を考えているか読めない。

ただ…

彼は飛びまわる二振りのナイフを手にとると、それを一つの拳銃
へと形態を変え、構える。

銃口に魔力が集まり。

射撃魔法『マグナムシユート』を発射…

青緑色の魔力の弾丸は、フェイトを襲おうとした異相体を仕留め
た。

その一連の行動だけで彼がどうするつもりなのか理解できてしま
った。

どうしてなの…

もう…敵同士なのに…

彼の行為だけでは無い。

それを、嬉しいとも感じている自分にも…戸惑いを隠せなかつ
た。

そして彼が来るなら、彼も。

突然レイジンググハートが光り出し。

半透明の紋章が現れる。

来たんだ。

この現象を見るのは、これで二度目。

自分の義兄の固有能力。

紋章から現れた、上着を脱いだ以外は制服のままな高町光は。

両手に持っていた、普通の刀にしては短い、短刀にしては長すぎる刀を振るい。

異相体数体を切り刻んだ。

「大丈夫ですか？二人とも」

「うん（はい）」

「すみません、これを取りに行くのに時間が掛かりました」

光の持っている刀は小太刀と言い。

一般的な刀よりも短めだがその分小回りが利く代物だ。

もうこの二人が来てしまつては、異相体に勝ち目は無かった。

本来の巨人の姿をとることが無くても。

この二人の実力は、文字通り一騎当千なのだから。

異相体たちはそちらの方が脅威的だと感じたのか。

地上に降り立ち一斉に勇夜へと標的を変え向かってきた。

「零牙、ブレイドモード」

勇夜はハンドガンモードの零牙を鞘の付いた一振りの刀、『ブレイドモード』へと変え。

異相体の群れに向けて腰を下げ、居合の構えをとる。そして踏み込みと同時に抜刀した。

行なつたのはたったそれだけ。それだけだ。

だがその一振りで、魔力をこめていない只の一振りでも異相体数体が血祭りを上げた。

彼はそれだけに留めず。

反撃を許さぬまま、刀を振るう。

腕、腰、足、体全体の運動を巧みに使い、振るわれる斬撃は異相体をバターで切るような軽さで仕留めて行く。

無駄が無い。

華麗とさえ言えるのに、力強ささえも感じられる舞い。

人間でも剣術を究めれば、真剣でも常人には軌道が読めないほどの速さで振ることが出来る。

ましてや師であるウルトラマンレオから体術とともに剣術を叩きこまれたことで達人級の腕前を持ち、かつ常人以上の身体能力を持つ彼が刀を持てば。

いちいちデバイスで呪文なんか唱えなくても。

ただ一閃するだけでデバイスも両断する必殺の一撃となる。
だが相手も接近戦は無謀だと判断したのか、空に飛び上がり遠距離攻撃を果敢無く仕掛けてくる。

それならこつちもと、即座に零牙をダガ モードにし、空中で静止させ。

『Knock spin slugger』

魔法陣が敷き、勇夜の右足に風が集まってくる。

そして、かつて河川敷でシュートを披露した時のように、回転の勢いで零牙を蹴り上げた。

魔力と風による衝撃波を纏った刃は先程とは比べ物にならないスピードと攻撃範囲で異相体の分身たちの数を減らして行く。

これはかつて勇夜ことウルトラマンゼロと彼の父ウルトラセブンが使用した。

アイスラッガーを飛ばす技。

ウルトラノック戦法を自分流にアレンジした。

『ノックスピンスラッガー』

を魔法流にアレンジしたものを。

自分の魔力と魔法でかき集めた空気を足に秘め、ダガ モードの零牙を蹴って飛ばす。

刃の直撃を受けなくても、刃の周りに漂う魔力と風の刃で掠めただけで広範囲の敵を仕留めることができる技だ。

そして光も。

勇夜に負けず劣らずの剣速で二刀の小太刀を振るい、圧倒していた。

勇夜の太刀捌きが柔と剛を併せ持った剣なら。

彼の剣は柔の二刀流。

流れるような軽やかさで振るっていた。

勇夜と違い、デバイスが無いので、燃費が悪く、下手に魔法は使えない。

せいぜい飛行ぐらい。

それだけでも凄い気がするが…

そんなハンデをもつもしない奮戦だった。

そして彼が取得している御神流は小太刀をメインとした古くから伝わる古流武術。

武術と呼ばれるだけあり、それは殺しの技術だ。

ただ、光が習得したのは昔から要人警護を生業とした剣士たちによる、護る為の殺人剣。

なのはたちを守るという目的を持った光の御神の剣はその名の通り獅子奮迅の力を引き出す。

分身の一体が、光の一閃をバリアで受け止めたが、その腕はいきなり、粉々に砕け散った。

これは御神流の剣技。

『徹しち』

斬撃の衝撃を相手の体内に通す技。

今のようには防御されても通用する技だ。

以前ゼロと戦闘した時にゼロスラッガーを弾かせたのも、この技。あの時は相手がウルトラマンだったから得物を弾かせた程度で済んだが、その気になれば人体破壊も容易な危険極まる技だ。

実戦を想定した殺人剣な以上、危険なのは当たり前ではあるが。

「ミラー！セイバー！」

御神流の剣技に、さらに二次元人としての力を加えれば相手にとつては脅威の内の脅威。

異相体なら手加減はいらない。

非殺傷に拘る必要は無い。

小太刀から振るわれたいくつもの三日月の刃は異相体たちを真っ二つに切裂いていく。

戦いは数。

数の多さが勝利の条件だ。

間違つてはいない。

戦場ではその方が勝率は高い。

それが常識だ。

だが今この瞬間は、そんな常識は働いてくれない。

たった二人の戦士によつて数が多い方が劣勢になるという非常識が主導権を握っていた。

しかしこれ以上戦闘が長引けば、主導権は『常識』に握られることになる。

本体以外は分身とは言え、大量の魔力が蓄えられた、異相体をバツクアップをしてくれるロストロギアがあるので、相手には物量による消耗戦、という手段があるからだ。

ここで一気に勝負をつける！

二人は行動を起こした。

勇夜は零牙を鞘に納めると。

『Arrow mode』

リンクの眩きと共に零牙は光り。

刀がカラーリングはそのままに、弓へと変形した。

『Vanishing Spear, Rain Shoot』

リンクのかけ声とともに、魔力でできた弦を引くと魔力が集まり、弓を引いた彼の右手と、周辺にいくつもの魔力の矢が現れた。それは、彼だけの魔力でできているわけではない。

「レイジングハート… あれって」

『集束魔法、この場に散らばった魔力を再利用しているのです』

この場で使われて分散した魔導師たちの魔力だった。

彼はそれを再利用したのである。

魔法の中で、難易度が高い高等技術。

魔導殺しと呼ばれながら、魔導師としても優秀と称されるのはこのためであった。

「撃ち抜けええええええー！！！！」

彼の言葉と共に必殺の魔力の矢の群れ
バニシングスピア・
レインシュート。

異形のカラス人間の群れに雨の如く全て突き刺さる。
命中した異相体は跡形も無く消滅し一気に数が減った。
そしてダメ押しとばかりに光は小太刀を構えると。
目を伏せ意識を集中させる。

深く深く深く。

目を開けると、彼の視界はモノクロとスローで埋め尽くされていた。
た。

それは、御神の剣を極めた者が使える奥義…

一瞬の出来事だった。

いきなり異相体の分身たちが血祭りを上げた。
それもほぼ同時に。

魔導師にしろ。

異相体にしろ。

誰にしろ、こう思っただろう。

何が起きた？と…

光の巨人の人間態である彼を除けば、その事態の全容が理解できなかった。

御神の剣士はここまで動けるのか…

その勇夜も思わず感嘆した。

そう…光は人が、その動きさえまったく目に入らない速さで。

一斉に叩き斬ったのだ。

御神真刀流奥儀。

『神速』
しんそく

人間にはその意識関係無く、その体にリミッターがかけられてい
る。

神速は御神の剣士たちがそれを意識的に集中して外すことで、驚
異的な速さで移動できる奥儀に分類される高等技。

使用中は視界が白黒になり、アクション映画のようにスローモー
ションになる。

その間は銃弾だろうと、新幹線だろうと、本人から見れば人間の
徒歩より遅く見える。

無論、これは無理をして体を速く動かす行為なので、負担は大き
い。

二次元人の力を受け継ぐ光も例外じゃない。

速さなら、フェイトをも上回るが、消耗もそれ以上の両刃の剣だ。そのため斬り伏せたあとは直ぐに解除した。

だが数が一気に減り、探索の時間も確保できたお陰で、勇夜は本体を透視で見つけることができた。

あれだな…

「フォトンダガー！」

透視で本体を捉えた勇夜は、右手の指の間から、魔力の刃を三つ形成した。

それはかのアメコミに出てくる最強最硬度の金属を纏った爪を持つ野性的なヒーローのようだった。

勇夜はその刃たちを本体に投げつける。

宇宙ブーメランを自在に使いこなすウルトラ戦士だけあり、その投擲された刃は正確に、その刃は三つとも異相体の脳天に命中し。

本体は血と断末魔を上げて、本体は地面へと落ちた。

だが二人はそれを逃がさない。

神速の負担から回復した光は、まずかなり離れた距離から一気に詰めて時間差をつけて二刀による斬撃を斬り付けた。

御神流奥儀ノ一。

虎切^{こせつ}。

長距離からでも相手を両断できる抜刀術。

それにプラスして、さらに居合を見舞う。

奥儀ノ二。
虎乱。こじらん

×字に斬られた異相体は悲鳴を上げ、光は後退。
そして同時に勇夜は高く飛び上がり、異相体へ向け。

『オーラ
Aura Saber』

「ジュエルシード！封印！！」

ブレイドモードに戻し、落下の勢いと刀身に魔力を込めて威力が増した零牙を、上段から唐竹に振り下ろす。

噴き出す異相体の血を横目に、そのまま返す刀で飛びあがりながら、下段から切り上げた。

そして連撃で為すがまま宙に舞う異相体を、勇夜は一回転しながら、逆胴横一文字に一閃した。

光の抜刀による×字の斬撃と封印処理を施した勇夜の三連続の斬撃、『十連参牙じゆせんざんが』を受けた異相体は腹部に埋め込まれたジュエルシードは発光し、爆発。

取り込まれたカラスは元に戻って飛び去り。

その元凶は、何事もなかったかのように傲然と宙に浮いていた。

神技とさえ言える二人の技と、絶妙なコンビネーションに魔導師たちは呆気にとられていたが、すぐに本来の目的を思い出し、空に上がってジュエルシードに急接近。

デバイスとデバイスがぶつかりそうになったが、その直前に二人

は先日起きた次元振を思い出し、下がって距離をとった。

うかつに触れれば数日前の二の舞になる。

今地面に佇むあの宝石は、ちょっとした衝撃で次元振を起こしてしまふのだから。

なのはは光を、フェイトは勇夜をそれぞれ見た。

二人とも手に持つ刀をえものゆっくりと鞘に納める。

剣道の経験者から見れば、それはもう美しい納刀だ。

どうやらここから先は介入せず、一騎打ちを見守る立場に徹してくれるようだ。

フェイトは複雑な内心を押し込めて。

今は助けてくれたことと、チャンスを作ってくれたことに感謝してバルディッシュを構えた。

「悪いけど…これだけは譲れない」

「うん…それはわたしも同じ」

なのはもまた愛機を構える。

なんでそう寂しい目をしながら。

自分にはごめんって言って落として。

心を痛めながらそれを集めるのか。

それが知りたい。

でも…今はそれが叶わないなら。

どんな理由があろうとこっちも譲れない。

その直前。

魔法陣と光と共に二人の間に彼は突然現れ、左手でレイジングハートを右手のデバイスでバルディッシュを受け止めた。

黒いバリアジャケットを羽織り。

右手に無骨な形をした杖を持った少年。

「ここでの戦闘は危険すぎる！」

こら！せつかくいところだったのに、何止めてんだこのKY野郎！！！！

とか言いたい気持ちは分かる。

でも落ちついてほしい。

彼の言うことも、正論だ。

いつ起爆してもおかしくない、爆弾がある目の前で戦おうとしたのだから。

勇夜たちは、そうならないようフォローするつもりではあったが、彼は黙って見過ごせなかった。

「时空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせて貰おう」

こうして……かなり出遅れた形で、時空管理局がこの一件に介入した。

やたらピンチが多い、本作でのフェイト。
でもいいんです。
ヒロインですから。

ちなみに、巷ではKYとか酷い言われようの某執務官ですが、さすがにそれは言い過ぎでしょ……とも言いたいが、この横やりだけは擁護できねえ…

リリゼロ・オリジナル技集（前書き）

今回は、キャラが劇中使用したオリジナル・アレンジ技を紹介し
ます。

9 / 5 タイトル変えました。

9 / 20 一部の技の名称を変えました。

9 / 26・29 項目を追加しました。

え？和と洋が混じって天使ちゃん並に痛すぎるだ？

痛くて結構！創作の中ぐらい厨二的センスを駆使しても良いでしょ。

リリゼロ・オリジナル技集

【オリジナル魔法/技】

・諸星勇夜

マグナムシユート

零牙ガンモードの時に使用する射撃魔法。

球体に圧縮した魔力の弾丸を発射する。

一話ではカートリッジ（詳細はキャラ紹介 part1にて）と併用して使用したが、これは威力の向上のためではなく、自分の魔力消費を抑えるのが目的であった。

バニシングスピア

零牙をアローモードに変形させて発動する射撃魔法。

魔力で構成された矢を発射する。

チャージに時間がかかり、誘導機能も無いが、なのはのデイバインバスターをも上回る貫通力を誇る（魔法障壁にも有効）。

ファイナルウルティメイトゼロのように、弓ごと飛ばさないが、矢の光は酷似している。

バニシングスピア・レインシユート

バニシングスピアのバリエーション技。魔力矢を勇夜の周辺に複数生み出し、その名の如く雨のように放つ。

一発一発の攻撃力は通常のバニシングスピアに劣るが、引き換えに誘導機能が付加されている。

劇中では、空气中に散らばったなのはたちの魔力を再利用して使った。

本作ではこの技を元にスターライトブレイカーが生まれる事になる。

フォトンダガー

握り拳にした指の間から、魔力でできたナイフを3つ生成して、投げつける。

その正確さは、中の人繋がりで刹那並み。

オーラセイバー

ブレイドモードの零牙の刀身にエネルギーを込め斬りつける技。シンプルであるがゆえに使い勝手が良い。

ディファレーターパワーを使ったVerと魔力を使用するVerがある。

ノックスピンスラッガー（魔法版）

ゼロスラッガーのように空中で静止した零牙ダガーモードを、魔力と魔法でかき集めた風を集め足で蹴り上げて飛ばす。

ユニコーンガンダムのビームマグナムのように、掠めただけでも有効打になる。

ヒートスライサー

魔力を振動させて発生された熱で、零牙の刀身を熱して対象を斬る魔法。

ブレイドモードとダガモードで使用。

ゼロディフェンサー

人間体の時にディファレーターパワーで使用するバリア。ゼロの時に使用するウルトラゼロディフェンサーと同じくサイズ、形状は自由自在。

劇中ではテストロッサ親子に使用。

魔法の障壁よりタイムラグが短く汎用性が高いので、勇夜は防衛魔法を一応取得しているものの、ほぼ宝の持ち腐れ、いらぬ子状

態になっている。

ただし、魔法ではないのでデバイスの自動詠唱による発動はできない。

ウルトラ念力

テレキネシス

直接手を触れずに物体を動かす、または拘束する能力。

人間体でも、怪獣の動きを封じることができるとは強さ（ウルトラマンレオ本編でダン（セブン）がよく使用していたが、本調子でないこともあり、寿命が縮むほど体力を消耗していた）。

クリアホヤンス
透視能力

物体を透視する能力。発動の際、瞳が青白く光る（セブントV本編序盤でダンが初めて透視を披露した時の演出が元）

また発動中は視界をカメラのようにズームできる。

アイズインパクト

一話で勇夜が披露した。零牙を一閃すると同時に殺気を込めた眼光をぶつけることで、相手に本当に斬られたと錯覚させる技。大概の人間は気絶するが、同等の殺気で相殺できるので戦いなれた猛者には通じにくい。が、非殺傷などのせいで戦闘でも中々命がけな状況を体験できない魔導師にはかなり有効だったりする。

元は江戸時代の剣客、松山主水が眼光で金縛りにする技、『心の一方』がモデル。

るろうに剣心に登場した鵜堂刃衛も主水が創設した剣術『二階堂兵法』の使い手で、『心の一方』もマスターしている。

ストライクゼロ

14話で使用した、ディファレーターパワーを足に集中させて蹴りつける。人間体でのウルトラゼロキック。

なのはが本作9話と劇場版で使った空中体当たりの飛び蹴り版。

十連参牙

同じく14話で披露した、斬撃技。

まず上段から斬りつけ、飛びあがりながら切り上げ、最後に一回転から横一文字にと、相手を十文字に切り裂く。

飛天御剣流、「龍槌翔閃」に「竜巻閃」をプラスしたようなもの。

・高町なのは

デイベインショット

デイベインバスターの威力を抑えて、連射力を上げた簡易版。

無印第12話の時の庭園内での戦闘で、レイジングハートから魔力をビームライフルみたいに発射して使用していたシーンが元。

リリゼロ・オリジナル技集（後書き）

次の本編はどうするか…

なのはの二次創作において、『時空管理局』の扱いが一番の壁でたんこぶだと作者は認識しています。

極端にアンチ方向へ行けない。かといって所属する全ての人が良識がある組織か…と言われても…

やっぱリグレーに描くのが無難かな…

Episode 15 - 管理局の介入（前書き）

ゼロ「なんかどこぞのシャフトみてえに修正多くねえか？」
作者「すみません……何分初めてなもんで……」

嫌な予感がする。

諸星勇夜ことウルトラマンゼロは、なのはとフェイトがデバイスを構え、互いを見据えた時にそう感じた。

実際、ジュエルシードにちよつかいをかければ、その嫌なことはなるのだが、そうならないようにカバーすれば良い。

今回はゼロになっていないんだから、問題無く魔法は使える。

だつてのになんだこの胸騒ぎは…

はつきりと言えないが、この前に感じた予感とも、何か違う…

まさか…管理局がいきなり現れて戦闘を中止させるなんてことは…

「ストップだ！」

あつたな…

しかもよりによって…

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ！」

右手にホログラムで身分証を堂々と提示してそいつは名乗り上げた。

あの石頭を超えた『鉄頭』がご登場とはね。

これがアニメかなにかなら、確実に視聴者からブーイングくるぞ。確かこういうのを日本の若者言葉で、KYとか言ったよな。

勇夜は顔には出さないようつとめながらも、心の中でメタ発言しつつ溜め息を出した。

でもクロノが来てるということは、アースラクルーが捜査担当を任されたということ。

勇夜にとって、信頼できる局員たちが派遣されたことは幸いだっ

た。

彼は管理局の現状の仕組みと在り方に疑念を抱いているが、その存在そのものは否定していない。

ウルトラ一族で結成された『宇宙警備隊』と、ある意味似たもの同士だ。

反面教師的な一面込み、ではあるが。

とは言え、今フェイトを御用にするわけにはいかなかった。

臨海公園に来る前、彼は『時の庭園』が停泊している座標地点に行っていたのだが、既にものけの殻だった。

一番の脅威はプレシア。

こういうのもなんだが、今フェイトを捕えても、プレシアにとって都合の良い駒が消えるだけ。

ベリアルが夢で忠告してきた通り、やつは今、狂気に堕ちて、『ある目的』を遂行するための機械になり下がってしまったている。

勇夜自身、あの時は、その狂気を前に、心から湧き上がる殺意に飲み込まれそうになった。

そのプレシアを止めない限り、次元災害と世界消滅の危機は続く。

フェイトにまで、その汚名を背負うことになる。

少し褒められたやり方ではないが、この際贅沢は言えない。

「(リヒト...)」

「(なんですか勇夜?)」

「(ちょっと、一芝居頼めるか)」

「ここでの戦闘は危険すぎる、二人とも武器を下げて」

いきなりの乱入者に二人は戸惑いは隠せない。

だがここは言う通りにするしかない。

特にフェイトは下手に動けばその場で捕縛されかねない。

なのはたちは、あくまでジュエルシードをすべて集めたら管理局に渡すつもりではあったので、ちゃんと説明すればお咎め程度で済むだろう。

だがフェイトの場合は本人の事情はどうあれ、母の私的利用のためを集めているのだ。

「詳しい事情を話してもらおうか」

執務官は彼なりにその場の事態を收拾させようとするが。

突然、燈色の魔力光が降り注いだ。

「フェイト！撤退するよ！！」

しかけたのは人型形態のアルフだ。

さらに数発魔力光を発射して、黒衣の魔導師を牽制する。魔力弾の当たった地面は煙を上げ、それが目くらましの役目をした。

フェイトはその隙を狙い。

ジュエルシードに手を伸ばそうとする。

なのも追いかけてよとしようとするが、間に合いそうにない。

フェイトの手が空色の宝石に触れようとしたその時。

「きゃっ！」

彼女にいくつもの水色の閃光が襲った。

クロノが魔力弾を放ったのだ。

その狙いは正確で、フェイトはその攻撃をもろに受けてしまう。

「フェイトちゃん！」

威力自体は高いと言えないが、受けるより避けるなスピードタイプで、防御に難がある彼女には決定打になってしまった。

「フェイト！」

傷ついた主に駆け寄り、抱えるアルフ。

魔力ダメージを受け、呼吸が荒く、頬が熱をこじらせたように紅潮している。

そんな彼女たちに、ポーカーフェイスでデバイスを構え。

狙いを付ける。

とどめの一撃を今放とうとしたその時。

「やめて！」

なのはが発射線上に立って庇おうとする。

さすがに発射を止めるクロノだがなぜ庇おうとしたのか問おうとした時。

背中に殺気が突き刺さった。

「なっ！」

気がつくのと彼の首筋に刃が突きつけられていた。

光の得物である小太刀の刃。

御神の剣士は、己の気配を消すことができる。

そのまま、相手に気づかれずに攻撃することもできた。

「不可抗力とは言え、義妹に手を出しそうになった以上は手加減はしませんよ」

今の彼は普段の穏やかさも、主にユーノに向けられたヤンデレシスコンモードとも違う。

戦士の目だ。

それも冷徹の二文字がつく。

「よせよ二人とも」

一瞬触発の状況を勇夜が宥めた。

「けどな」

が…その彼も。

「やり合つ気なら、俺はその剣士さんに助太刀するが、どうする？ 執務官さん」

殺気を発しながら零牙をガンモードに変え、銃口をクロノに向けた。

「（今の内に逃げて下さい）」

「（貸しにしといてやる）」

「(二人とも…すまない!)」
二人が作ってくれたチャンスにアルフはフェイトを抱えて、その場を去っていった。

それでも張り詰めた空気が止まらない。

一瞬触発。

クロノは焦りを隠せなかった。

魔導殺し、諸星勇夜。

その意図はともかく、彼の实力は身にしみて知っている。
なんせ彼とは旧知の仲で、実際に戦ったところもある。

まだ異名が広まる前のことであったが、その名に恥じず、『あの時』はデバイスさえ起動できずに敗北を喫した。

あの時思い知らされた。

己の肉体も鍛え方次第で武器になることに。

自分もあれから修練を欠かさず、強くなっていることは自負しているが、それは相手も同じ。

そして自分に刃を突きつけている彼。

腕は未知数だが、勇夜とほぼ互角とっていいだろう。

現に隙を突かれてしまった。

二対一。

どうする？

焦りを押し込めて、冷静に思案して状況を打破しようとしたが。

「これでいいですか？勇夜」

意外にあっさりとは彼は剣を引き。

「ああ」

勇夜もあっさり銃口を下ろして、零牙をリンクに収納させた。

「どついうことだ？勇夜」

さつきまで二人の眼から発せられていた、そのまま相手を突き殺せそうな殺気は、すっかり当人たちから消え失せている。

はつきり言って面喰った。

「まだあいつらを捕まえるのが早いと思ったから、そいつと一芝居打ったまでさ」

勇夜はそう言いつつ、ジュエルシードに手を向けると、菱形の寶石は掃除機のごとく彼の手に吸い寄せられ、手にとり、クロノに投げた。

無論この能力はウルトラ念力だ。

一応テレキネシスというレアスキルで、周りには通している。

だが名称が違うだけでどちらも念力、嘘は言っていない。

『彼の場合、半分本気が入っていたようですが』

「はは…そこは否定しません」

リンクに凶星を指されて苦笑する光。

『（シスコンナイト）』

「（おいおい…間違っていねえがな）」

内心呟いた相棒に勇夜はツッコんだ。

「早いつて…君は」

彼の言うことも分かる。

ロストロギアを不法に集める犯罪者を逃がすことになったのだから。

というかこの執務官が来て、かつ執務官とフェイトとアルフの行動パターンを踏まえた上で、最初からこうするつもりだった。

公務執行妨害と見なされても仕方ない。

「チビクロじゃ話にならん」

「なっ！？君はまだそんな呼び方で！」

「じゃあまっクロノ、さっさとリンディを出せ」

「その名前でも呼ぶなど言ってるだろ！あと提督に呼び捨てにするなど」

「はいはい、そこまで」

先程の張りつめた状態から一転して、漫才のような空気になるところだったところをタイミングよく。

通信によるモニターが現れ、リンディ・ハラオウンが現れた。

因みにクロノが実年齢の15歳より小柄であることは事実だ。

声変りもまだしていない。

アニメなら、女性声優が演じることになるくらいに。

表向きは15歳で通している勇夜とは、かなり身長差がある。

彼が年相応より長身で大人びていることもあるし。

そもそもゼロは、見た目以上に齢を重ねているか。

「すみません、片方を逃がしてしまいました」

「まっ、大丈夫でしょう、彼も彼なりの意図あつての行動だろうし」
第一印象に堅物って言語が浮かぶクロノとは対照的に。

母である彼女はかなり大らかだった。

『で…あなた方にはわたしたちの船に来てほしいのだけれど、大丈夫かしら』

「俺は問題無い…光たちはどうする?」

「同行します、これまでの経緯を話さなければならぬでしょうから」

クロノ君という男の子がフェイトちゃんを攻撃しようとした時、とっさに私は庇っていた。

はたから見たら、おかしい行為だろう。

これから戦おうとした相手を助けるなんて。

そもそもあの子をできるなら、助けになればと考えてるのに、戦いになってる時点で色々とおかしんだろうけど。

でもあの時、どうしてもああしなきゃ…て思った。

光兄と勇夜さんのおかげでフェイトちゃんは逃げられたけど。

それでわたしたちは今クロノ君によって、どこかの建物の廊下にワープしていた。

「(ユーノ君…ここって)」

「(えっと…、簡単に言うと、いくつもある次元世界を、自由に移動する為の船だよ)」

「(あんまり、簡単じゃないかも…)」

ユーノの説明では簡単に理解するのは皆無であった。
ちんぷんかんぷんとはまさにこのこと。

『(なのは、宇宙がどんな形をしているか知っていますか?)』
勇夜さんのデバイスであるリンクがいきなりそう質問してきた。
そう言えば勇夜さんとして、この人と会うは、河川敷のことを
除いて、これが初めてだった。

光兄から、やっぱり勇夜さんがウルトラマンゼロだってことは、
聞いていたけど。

本当に見た目は日本人にしか見えない。
それを言うなら光兄もだけど。

無論、彼女はその程度のことと偏見なんて抱く人間ではないが。

「(わ…わかんないです)」

なのは正直に、リンクの質問に答える。

『(星のように、球体でできているのです、そして宇宙の外には、
たくさんの宇宙が泡のように幾つも存在する空間が存在しています、
一般的にマルチバースと呼称される空間です、ここはそこを渡るた
めの戦艦)』

なんとなくだけど分かった。

つまりここは、そのマルチバースって言う海を泳いでいる船なん
だ。

『分かりましたか?』

『なんとか…です』

「いつまでもその格好というのも窮屈だろう。バリアジャケットと
デバイスは解除しても平気だよ」

そうクロノ君に言われて、ようやく自分がレイジングハートを起動したままであることに気がついた。

「レイジングハート、モードリリース」

『A-I-I r i g h t』

愛機を待機状態にし、格好も制服に戻る。

「お前も人間に戻った方がいいんじゃないのか？」

「ああ、そういうえばそうですね。ずっとこの姿でいたから忘れてました」

勇夜さんに指摘されたユーノ君はその身を輝かせると、男の子の姿に戻った。

最初にユーノ君が人間の男の子だと知った時は本当驚いた。

魔法がある世界なんだから、てっきりしゃべるフレットだと勘違いしてしまったからだ。

光兄に言われなければ、この時までずっと知らなかったかも。

でも忘れてたってユーノ君……地球人に変身している光兄と勇夜さんと違って（実は二人とも、地球人の血を受け継いでいるそうだけど）普通の人間の男の子なのに。

ちなみに勇夜さんは、黒のインナーにジーパンは、ほぼそのままに、白いパーカーを着ている。

後で聞いたが、別に変えなくても、元の服装のままバリアジャケットを展開できるらしい。

じゃあなんで、わざわざ目立つ服装に変身するの？と言われても……察して下さい。

そうしてわたしたちはリンディさんていつこの船の艦長さんのいる部屋に案内された。

「艦長、来てもらいました」

「「「……………」」」

言葉が出なくなった。

目が点になった。

言葉の通り、開いた口が塞がらなくなった。

日本人であるのはと。

日本人として生活してきた二次元人と。

ある程度日本文化に精通しているM78星雲人。

から見て、とてもシュールな光景だったのだ。

床は座敷と畳で土足厳禁。

壁のまわりには盆栽がいくつも置かれ。

室内にもかかわらず桜の木が一本立っており、わざわざ空調で桜吹雪まで演出している。

そして中央には、

「お疲れ様。四人ともどうぞ、楽にして」

どう見ても日本人からかけ離れた容姿のリンディ・ハラオウンが茶道具を揃

えて正座して待っていた。

もつどこから突っ込んでいいのやら…。

ハリウッド映画よりはまだ純然たる和室なのだが、室内に桜と壁や天井やガラスが反して未来的で無機質、さらに獅子おどしまで置かれている始末なので

『なんちゃって日本』からは抜け出していない。

本人の言い分では、一応現地の人間さんに尊重したつもりらしいのだが。

彼女に言われた通り、勇夜、光、なのは、ユーノは座敷に正座で座り込んだ。

「久しぶりね、勇夜君」

「ああ」

「勇夜、知り合いなのですか？」

「まあ…色々とな」

と勇夜は苦笑いした。

「初めましてね。私はリンディ・ハラオウン。この次元航行船アースラの艦長をしています」

「高町光と言います」

「高町なのはです」

「ユーノ・スクライアです」

そうして自己紹介の後、リンディから出された和菓子と茶を頂戴しつつも、

ここまでの流れを彼女たちに話した。

「なるほど。あのロストロギア、ジュエルシードを発掘したのはあなただったのですね」

「はい…それで…僕が回収しよう」と

ユーノは思い詰めた表情で呟いた。

最初にこの世界に来た時よりは、『自分でなんとかしなきゃ病は治まって
いるが、やはり発見してしまった責任感はその簡単に拭えない様子だ。』

「立派だわ」

リンディは彼のその心意気を称え。

「だが同時に無謀でもある」

息子のクロノは彼の行為を咎めた。

どちらも正論だ。

責任を果たすというのは立派だし、それを果たそうとしない大人が
うようよし

ている世の中では、彼の爪の垢を煎じて飲ませたいとさえ思える。

だが、クロノの無謀という発言には、勇夜も光もなのはも同感だ
った。

なんせその先が文字通り無謀過ぎたのだ。

まず単身で碌に、目的地に関する知識も無いまま、管理外世界に
入り込んだ
こと。

勇夜は前々から、知識で地球、日本のことは知っており、フェイトも日本に来る前は、現地の下調べをし、二人とも一時的な住みか
を確保していたが、ユーノは事態の收拾に焦るあまり、それらを怠
ってしまった。

次に彼の持っていた、今はなのはの愛機であるレイジングハート。

このデバイス、実はスクライアー族が発見した出自不明の謎に包まれた代物
で、なのはと契約するまでは正式に契約者として登録させてくれなかった。

そのため封印などの一部の機能を除いてほとんど万全に使用できなかった。

最後には地球での魔法行使。

魔導師は大気中にある魔力素を取り込みエネルギー源にして魔法を使用する。

だが慣れない異世界で魔力素を取り込み過ぎると、適合不良と呼ばれる現象によって、体調不良をおこしてしまうのだ。

なのはが夢で見た異相体との戦闘で封印に失敗したのも、その適合不良が最大の要因。

かのウルトラマンゼロも、かつて似たような現象に陥ったことがある。

ウルトラ戦士の力の源は、太陽光線などの光エネルギーなのだが、ゼロが初めて異世界に来た際、その世界の太陽エネルギーを吸収できず、巨人の姿を長時間維持できなくなってしまう、もしもの為にと父のセブンから託されたウルトラブレスレットに貯蔵された、非常用エネルギーを直ぐに使用せざるを得ないことになってしまった。

未知の土地に行くには、それだけのリスクがあるのである。

そんな様々な悪条件が重なり、ユーノは極度に消耗したことで魔法適性のある地元の住民の協力を頼まないといけなくなり、なのはと光ミラーナイトが協力者としてこうしてここまでに至っているのである。

まあ高町兄妹の協力を得られたのは、不幸中の幸いであった。なのはたちが見つけてくれなければ、人間の姿にしろ警察に補導、フェレットの姿にしろ外来動物として捕獲され、探索どころじゃなくなっていたことにもなりかねなかったからだ。

話を戻そう。

「あの…その『ロストロギア』ってなんですか？」

彼女にとって聞き慣れない単語が出てきたので、なのはは質問をした。

「ん〜遺失世界の遺産…って言われても、ピンと来ないわよね」

この世界には様々な次元が複数に、同時に存在している。

その世界の中には、極端に科学技術が進歩しすぎる文明が出てくることもある。

度を超えて発達しすぎた技術は、やがて文明そのものを滅ぼしてしまうことになるのだが、その後に残された厄介な置き土産、危険極まりない遺産が残されることになる。

「それらを総称して、『ロストロギア』と呼ぶの、私たち管理局や保護組織が正しく管理していなければならぬ品物」

そしてそのロストロギアであるジュエルシードは、次元干渉型のエネルギー結晶体、特定の方法で起動させれば、空間内に次元震を引き起こし、最悪次元断層さえ巻き起こしかねない危険物。

一昨日のように一個だけでもあれだけの被害を出す。

「次元断層が起れば、世界の一つや二つ。簡単に消滅してしまうわ。そんな事態は防がないと…」

リンディはそう説明しながら、緑茶に大量の角砂糖とミルクを入

れた。

「（うげ…）」

もう一度言おう。

『緑茶』に大量の角砂糖とミルクを放り込んだ。

話してる内容の深刻さとは裏腹に、これまたシユールな光景だった。

緑茶という飲み物を知ってるだけに、なのはも、礼節をわきまえる騎士であった光でさえ、げんなりとした表情をしている。

最早、苦味なんて欠片も無い、跡形もなく消えているだろう。

「まだそこまでしねえと、まともに飲めないのか？」

もはや液体と言うより、ジェルになった緑茶だったものを嬉々とした表情で飲むリンディに勇夜が突っ込んだ。

「失礼ね、私にはこの味が一番気に入っているんです」

「勇夜、それはどういう？」

まさかこの人のこの常軌を逸した行動に、勇夜が係わっているのか。

「実は前に？なんやかんやあって？、この人に御中元で緑茶を送ったんだが…」

流石に苦すぎると、クレームとまでは言わないが、苦言を呈された。

そして以前読んだ本で、地域によっては砂糖を入れる習慣があることを思い出し、彼女に薦めたら、こうなってしまったわけ…。

この人は想像以上の甘党だったのだ。

「そのなんやかんやと言うのは？」

「なんやかんやは……」

一拍置いて彼は。

「なんやかんやだが………何か文句あるか？」

どや顔でそう答えた。

「どの数年前に放送してた正味33分持たせる迷探偵だ。」

「いくらなんでも地球の娯楽に染まりすぎでは…」

「まだこっちには数日しか来てないだろ！」

「そりゃ昔は『二万年早いぜ！』とか『俺のビッグバンは！』とかかなりはっちゃけて迷言を連発していたが。」

「でもまあどうやら、話すと長くなるので、また今度にしてくれという意思表示だろうと、光は納得することした。」

「だから、これよりジュエルシードの回収は私たちが担当します」

「一度はブレイクされたシリアスな空気が、部屋を支配する。」

「「え…」」

「なのはとユーノは、リンディの発言を飲み込めていない。」

「…君たちは今回のことは忘れてそれぞれの世界に戻るといい」
「でも！」

「ランクSS+の危険なロストロギア、しかも、次元干渉に関わる事件だ。民間人に介入して貰うレベルの話じゃない」

「クロノはそう言ったが、二人とも納得できない様子だ。」

「確かに本来なら、こういう事件は管理局のような警察組織がやるべきであって、民間人がどうこうできる問題ではない。」

「彼女たちがこういうことをしていること自体、異常な状態なのだ。」

「……………いやです…」

「「なのは？」」

「そんな…何も無かったみたいにやめるのは…絶対嫌です!!!」
なのはは、普段の彼女の言動から考えられない剣幕で、反論した。

なのはの脳裏には自分のミスで勇夜Ⅱゼロが尻拭いをしてくれなければ大勢の死者を出していたジュエルシードが起こしたあの街の惨状を含めた、ジュエルシードが引き起こしてきた災害が掠めていた。

そして…。

「しかし君は…」

「嫌なんです！このまま中途半端に終わっていつもの生活に戻るのも、そうやって中途半端に後悔するのも!!!」

フェイトのことも。

まだあの子の目的も聞いていない。

まだあの子の瞳に映る寂しさの訳も知っていない。

まだ…目的を聞いた後、どうしたいのか、整理がついてない。

なのに引き下がるなんて…

ここまで深く状況の一部としてかかわってきた以上、今更下がれと言われて、素直に従えるわけなかった。

「落ちつけ」

「勇夜さん…」

勇夜がなのは宥める。

「妥協案が無い訳でもないさ、そうだろ？提督どの」

「そうね、急に言われても気持ちの整理もつかないでしょう。今夜一晩、話し合ってそれから改めてお話をしましょ」

少なくとも一方的に引き離されることはなさそうだが……。

「それからすまないが、そちらのお一方は先に席を外してくれないか」

クロノからいきなりこんなことを言われた。

勇夜と光は残した上で退室しろと。

「君のお兄さんと友人にちよつと、お話したいことがあるから」

リンディはそう言ってくれたが、どうしても不安が消えてくれない。

だってこの二人は、自分にとっては人間と変わらない。

でも、この人たちの正体は50Mもある巨人さん。

前にテレビで見た、とある映画を思い出す。

守っている人たちから、差別と偏見を受ける超能力を持ったヒー

ローたちのお話だった。

自分とはもかく、あの映画のように光兄たちのことをを好ましく思わない人だって……。

おまけに二人は、その超能力者たちより、強大な力を持っている。

「なのは、ユーノ、外で待ってて下さい」

光からの言葉もあり、渋々二人はこの部屋から退室した。

「で……俺たちに何の話があるってんだ？」

「正直なところ、二人に聞きたいことは山ほどあるんだが…」
「そうだな…こっちにも心当たりがいくらかでもあるし。」
「単刀直入に言う、君たちは何者だ？」

「只の囑託魔導師」

「普通の中学三年生ですが」

「とぼけないでくれ」

「なんかはぐらかそうと思ったのだが、この鉄頭の前では駄目だったか。」

「君たちからは、魔力とは違うエネルギーが感じられる、それにさっきの戦闘、とても『普通の人間』がなせる技じゃないし、あの連携も、昨日今日会った関係ではできない芸当だ」

「出歯亀とは感心しませんね」

普段は穏やかな物腰の光も眉をひそめる。

あの戦闘の一部始終を見ていたのなら、さっさと加勢してほしいか
つた。

事情聴取ならその後でもできただろうに。

「ごめんなさいね…でも私たちとしては、あの『黒衣の子』のこともそうだけど、あなた方のこととあの次元振の起きた夜に現れた巨大生物と巨人たちとの関連ついて、できるだけ情報が欲しいの」

「と言うよりはもう知ってんだろ？俺たちがその『巨人』だって」

ハラオウン親子の表情が驚きに染まった。

この二人の戦い振りから見て、推測は確かにしていた。
けどまさか、こうもあっさり白状されるとは。

「お見せしましょう、論より証拠とも言いますし」

余り自分たちの正体は大っぴらにはできないのだが、今はこうでもしないと信頼は得られないだろう。

二人はその場を立ち。

勇夜はリンクからウルトラゼロアイを取り出し。

「ミラー」

光はミラージュアイズの前で両腕を横に重ね。

「デュア！」

「スパーク！」

二人は眩い光に包まれ。

それが収まると二人が立っていたところには。

片や青と赤に彩られ、柔軟さと逞しさが両立したボディ。

銀色の鉄仮面と金色の瞳。

片や銀と緑で彩られたスレンダーな体。

目や口などの代わりに漢数字の10にも翼を広げた白鳥にも見える黄色い光沢がついた顔。

そしてどちらも無機的だが、何らかのスーツの類ではなく、純粋にその生物のものとと言える体表。

人間と同じ体格をしながら、人とかけ離れた容姿をした『人』がそこにいた。

「何豆鉄砲をくらった顔してんだよ、こうなること…わかってたんだろ？」

「それはまあ…そうなんだけど」

思わずリンディは苦笑いで返した。
姿は変わっても、声も言動も仕草も、かの『諸星勇夜』その人そのものだったからだ。

「仕方ありませんよ、この世界では、僕たちのような姿をした人種は、まだ存在を確認されていないようですし」

そうして二人は人間態へと戻り、自分たちの関係と、こちらの世界に迷い込むまでの流れを簡潔に話した。

「と言うことは、なぜ勇夜君の世界にいた生物がこちらに現れたのかは…」

「今んとこ、どっかの次元を超える力を持った誰かさんが、送り込んだってことしかわからね…」

一応、こんなことをする連中には心当たりはあるのだが、厄介なことにゼロの世界では該当する野郎は複数おり、情報も少ないこともあって断定はできなかった。

「だが、地球人として暮らしていた光はともかく、なぜ勇夜は『マウンテンカリバー』と呼称されていた巨人、ウルトラマンゼロであることを隠してたんだ」

ちゃんと説明したらしたでクロノはきつく問いただしてきた。

この鉄頭…。

「ざっくりまとめるとな…一つ、俺たちの力は余りに強すぎんだよ
ウルトラマンはその気になれば都市一つ、それどころか惑星全体を廃墟にできるほどのパワーがある、なのに地球では最低三分といふシビアな時間制限があるにもかかわらず怪獣一体にてこずるのは、周辺の被害を考慮して本気で戦えないためだ。」

現にその時間制限と配慮の無い、たとえば怪獣墓場などの場所では複数の怪獣軍団相手（多少弱体化はしているが）に無双の強さを発揮していた。

その怪獣墓場での戦闘に参加したゼロも、制約のある地球で戦ったとは言え、先輩であるウルトラ兄弟もてこずった強敵たちをバツタバツタとなぎ倒した。

「二つ、俺たちウルトラマンには、非殺傷なんてご都合設定は無い」

相手の肉体を傷つけずに攻撃できるウルトラ戦士なんて…せいぜい…確か名前はコスモスっていったか…一部ぐらいしかないのが実状。

「三つ、『俺たち』の力を無闇に悪用されなくなかったから、四つ…実際にウルトラマンの力をものにしてしようとして、滅んだ文明もあるからだ」

「なんだって!？」

ハラオウン親子は驚愕した。

「どうということなの？勇夜君」

「それは私が説明しましょう」

勇夜の相棒であるリンクが口を開いた。

昔、ある星にスペースビーストと呼ばれる異形の生命体があった、その脅威にその星の文明は日々悩まされていたが、ある時救世主が現れる。

ウルトラマンノア。

彼はその超常的な力を持って、ビーストを殲滅したが、同時に自らの力を全て使いきり、休眠状態になった。

だがビーストが復活することを予見した人々は、ノアの能力と姿を模した人型兵器。

ウルティノイドザギを生みだした。

予測通り、ビーストは現れ、ザギはそれを殲滅すべく、着実に成果を上げていった。

だがある時、兵器でしかなかったザギに自我が目覚めた。

その自我がノアの模造品であるというコンプレックスと、その力で森羅万象、ありとあらゆる存在を掌握したいと言う悪意を生み、ダークザギと名乗ってむしろビーストの繁殖を活性化させ、生みの親たちに反旗を翻した。

追いつめられた人々は落し前を含め、自らの星を爆破、ザギを道連れにしようとしたが。

『それでも奴は死なず、結局元になったノアの手よって、ようやく倒されました』

「これで分かったら？お二人だって、自分たちの文明から、ロストロギアを生み出したくはないだろ…」

つまり、迂闊にウルトラマンの超人的なパワーに手を出せば、その文明と同じ末路になりかねないということだった。

「でもどうしてデバイスであるあなたがそのことを」

『私は正確にはデバイスとは呼べません』

デバイスでは無いだつて？

魔法発動の補助もして、意志もあるのに？

「なら何なんだ？」

「こいつも、そのノアから生まれた分身みたいなもんだからな」

ノアの正体は同じウルトラマンであるM78星雲人にもよく分かっている。

彼の記憶を受け継ぐリンクでさえ、どこでどう生まれて、いつから存在しているのかまでは覚えていなかった。

ただ単体で時空を超える力を持ち、ゼロたちをも凌駕する圧倒的な力を以て、太古の昔から全ての次元世界を見守ってきたことだけは言える。

そのノアから授けられたバラージの盾、ウルティメイトイージスとゼロの父であるウルトラセブンから受け取ったウルトラブレスレットが融合。

こちらの世界に迷い込んだ際、自我に目覚め、インテリジェントデバイスと同等以上の思考と演算能力を得たのが、このリンクことウルティメイトブレスレットだった。

「それじゃ君の持つてるそれは…」

「ロストロギアだとか言うなよ」

クロノが言おうとした単語を勇夜は先こした。

「そもそも俺たちの文明はまだ滅んじやいない、滅んだ後だからロストロギアって言うんだろ？それにさつきも言ったが、管理世界じや、俺も相棒も危険分子扱いされかねないからな、だから隠してたんだよ」

その彼の認識は、あながち間違っていない。

だからハラオウン親子はそれ以上何も言えなくなった。

なまじ彼の人間性に触れていた為、こうして『自分』を隠しつつ、今まで生きていたことと、そうさせていた自分たちの世界に複雑な心境になる。

『確かに私は、ザギと同じノアから生まれ、同じように自我を持ちました、似た者同士であることは自覚しています、ですがマスター以外に力を貸すつもりも、あなた方にみすみす利用されるつもりも、ましてや悪用するつもりもありません』

「利用されるとは何だ！？君は！」

その単語が気に障ったのか声を荒げるクロノ。

『あなた方の文明も、後世の人々からロストログアと呼称されるような遺産を生み出さないとはい限らないですよ、いくらどのような力があるうと、私たちは神ではありません、なることもできません、全ての世界を管理しようと言つのなら、それぐらいの心構えと戒めを持って、驕りは捨てて頂きたい』

「リンク…もついい」

気持ちは分からないわけでもないが、普段以上に刺々しい物言いだったので勇夜が戒めた。

『…マスター………申し訳ありません…』

「そう謝れんならいいさ、悪い、こいつはザギのことも含めた、人間が嫌になる記憶を、嫌と言うほど持つてるから、自他ともに敵しいんだよ」

「いいえ…こちらこそ、野暮なことを聞いて」

内容が重さを前に、バツが悪い気持ちになつたリンデイが詫びを入れた。

「もうその話は無し、で、あの黒衣の魔導師の女の子のことなんだが」

「そうだった…なんでみすみす逃がすようなことを、君なら簡単に捕らえられたはずだ」

そう指摘された勇夜はポケットからUSBメモリを取り出し、クロノに投げた。

「これは？」

「あの子とあの子に使いつ走りさせてる野郎のデータが入ってる、今あいつらを捕まえても、黒幕は尻尾を掴ませてはくれねえし、それにはつきり言うとな、この事件はあの子の心を救えない限り、解決にはならないんだよ」

「それは今捕まえても…彼女を救うことはできない、という意味か？」

「ああ」

なんだかんだ言つてこの鉄頭は義理人情に篤いし、冷たく振る舞うだけで本当はお人よしだ、局員として、人を助けられないことは人一倍心を痛める。

「とりあえず、情報を提供してくれてありがとう、で…お代の方なだけで」

光は疑問を浮かべた。

お代つて…。

「それならタダでいいぜ」

「え？」

二人は信じられないとした面持ちで固まった。

「あの…どうしたのですか？」

気になった光が二人に問うてくる。

「彼…少し……守銭奴なところが……あつてね」

そう…勇夜は表向き囑託ではあるが、いわば何でも屋的な立場だ。管理局から依頼を受けて、局員と共同で仕事をする時はともかく、今のような情報提供や管理局が腰を上げて捜査に入る前に、案件を解決した時は、莫大な報酬を要求することがある。

当然反感を買うことになるが、彼も負けじと、管理世界の問題点と具体的な改善案を提示して反論し。

また、万年人手不足で後手に回りがちな管理局よりも、世の為人の為に、自分の力を使い、世界に貢献している為、局は頭が上がり、強く言えないのが実情だった。

とある殺人嗜好症の少女を愛してしまった、黒縁眼鏡の少年のいところである、違法スレスレの行為で手柄を上げる刑事さんに似た立場を、彼はこの世界で確立していた。

そんな彼がタダと言ってきたのだ。

かの天才無免許医が、無償で手術してくれるくらい稀なことだ。

「仕方ねえだろ…お前らを探す為の旅費が必要だったんだ」

「そう言われては…仕方ありませんね」

金にがめついのは、自分たちを探すためとあればこちらも強く言えない。

「でも…タダとは言ったが無条件ってわけじゃない、俺たちの正体を含めた、今話した内容を、内密にしてくれってことが条件だ」

彼はそう言うと、左手を正面に翳すとウルトラ念力でクロノからメモリを取り上げた。

「呑めなきゃ、犯人は自力で探してくれ、場合によっちゃ、記憶消去も辞さねえぞ」

「すみませんが、私もその条件が呑めないのなら協力できません」
「光さん…」

まさか光「ミラーナイトまで言って来るとは。

「私たちの力が、災いを呼ぶ可能性はゼロではありません、世界の秩序を担うあなた方も、それを呼び寄せたくはないでしょう、どう

してもなのはたちを協力させることに抵抗があるなら、先手を打っておくべきでしたね、上の方々の腰が重すぎたのも、この現状を生む要因であることは疑いようがありませんから」

管理世界が巨人たちの力を利用する、あるいは彼ら、彼らと同じ能力を持たせようとモルモットにされた人たちに、非人道的な実験を行う、全くあり得ないとは言えない。

そんな中でもゼロは正体を隠しつつ諸星勇夜と言う人間として、時にゼロとして人々を守ってきたのである。

彼と、友である光も、こうして、管理局が来る前から事態の收拾にとりかかっていたわけだし。

「分かったわ…その条件を呑みましよう」

「艦長！」

彼らのその行為を無下にはできなかった。

「戦力は多い方がいいでしょう？クロノ執務官」

「はい…」

執務官殿は渋々了承した。

根は悪い人ではないのだけれど、正義感が強すぎるあまり、なんというか…勇夜が鉄頭と評するのも 無理無いと光は思った。

その点勇夜も光も中々の策士だ。

これぐらいの強かさが無いと、綱渡りはできないこともあるのだろう。

ある意味、ヒーローの必須スキルとも言える。

「それじゃあ」

勇夜はリンディに、事件の当事者たちのデータを渡すのであった。

Episode 16 - 問われる覚悟（前書き）

まさか一週間ちょっとでPV一万年アクセス突破するとは…
読んでいただき、まことにありがとうございます。

「光兄！」

応接室から出てきた光になのはは突然抱きついた。

「なのは？」

「（何も…されてないよね？）」

念話でそう聞いてくる。

ハラオウン親子を信じていないわけではないが、どうしても待ってる間は不安で不安で堪らなかった。

それで前述の行為に至ったのだ。

「（大丈夫ですよ、現にこうして無事なんですから）
優しくなのはを宥める光。」

「（よかった…）」
その彼の態度にようやくなのはの心は落ち着きを取り戻し……
・たのだが。

「兄貴にゾッコンなのは分かるが、もう少し周りを見てくれねえか」
勇夜の発言をきっかけに、落ちついたら落ちついたで今度は兄に抱きついた自分に恥ずかしくなってきた。

「余り義妹いもづこをからかわないで下さい」

「悪かったよ、俺にもなのはと同年代の義妹がいるから、つい調子乗いもづこっちゃった」

「例の、ご先祖様が日本人の方ですか」

「ああ、特に下の子はかなりのやんちゃ坊主で帰ってくる度にミサ

イル見てえな体当たりで抱きついてくんだけどな」

ミサイルとは何とも物騒な表現ではあるが、実際彼にはミサイルなんて人間態でもへでもないのだから性質が悪い。

でも言い方とは裏腹に微笑ましい勇夜の表情に彼もまた妹を溺愛してることは容易に窺えた。

ひよっとして勇夜、ゼロは天性の兄貴気質があるのでは…。

根拠はある。

彼は二次元世界とエスメラルダのある宇宙に来た際、惑星アヌーでベリアル軍の侵攻で重傷を負った青年ランと一時的に一体化したことがある。

そのランにはナオという弟がいた。

最初こそ、ベリアル軍の侵略ロボット、ダークロプス（モデルがゼロなのだから当然だが）にそっくりな得体の知れない巨人に兄を乗っ取られたとも言えたので戸惑ってはいたが、彼の一目荒い口ぶりに隠れた真摯な人柄に触れ、すぐに彼を『ゼロ兄貴』と呼んで慕うようにまでなった。

案外彼の人柄は特に小さい子に惹かれるのかもしれない。

そんなことを考えていると。

「いいじゃない、兄妹仲が良いのは」

茶髪の跳ね具合が特徴的なショートカットの女の子がやってきた。

「勇夜、この人は？」

「この船の通信主任でクロノとは、同僚兼執務官補佐役の」

「エイミィ・リミエッタ、エイミィと呼んで下さい」

「高町光です、この子は妹のなのはです」

「よろしく、なのはちゃん」

「はい、よろしくお願ひします」

勇夜が鉄頭と評するほど堅物な執務官と違い、気前の良い、社交性豊かな補佐官、それが光から見た第一印象だった。

「勇夜君も久しぶり、二年ぶりだよね」

「お前もあの鉄頭も相変わらずで安心した、今でも隙ありやあいつをからかってんだろ？」

「当たり前、クロノ君ほどからかい甲斐のある子はそうそういないからね」

しかし、同僚とは言え趣味が上司へのちょっかいとは、この組織もけっこう緩いんですね。

からかい甲斐があるのは同感ですが。

「でも二人ってさ、いつ頃から知り合いなの？さっきのコンビネーション、とても息が合ってたけど」

「（痛いところ突いてきたな・突いてきましたね）」「」

彼女なら自分たちの正体を知っても尚、気兼ね無く接してはくれそうだが…

さて、どうしたものか…

「エイミィ、報告書の方はどうした？」

「あ、ごめん、じゃあまた今度ね」

上司の執務官によってなんとかその場は回避できたのだった。

4人はアースラから臨海公園へと転移して戻ってきた。

日はオレンジ色だが、空が青に染まるほど沈んではない。

勇夜はなのはの方を見た。

「どうした？」

「あ…あの」

とろろどろろこつちを見て何か言いたげそうなのだが、どうしても止まってしまう、そんな様子。

「フェイトちゃんの……ことなんですけど」

？勇夜と同じ…寂しい目をしていると？

光に言われたことを思い出した。

そついやこの子も俺と同じ理由で、あんだだけフェイトに話し合いを求めてたんだっけ…。

「フェイトちゃんから聞いてませんか…あの…ジュエルシードを集めてる理由とか」

フェイトとは表向き停戦協定みてえなもんを結んだってことは光にはもう話している。

そこから知ったんだろ、その内話すつもりだったし、だが…。

「で…聞いてどうすんだ？」

「そ…その…」

前々から、フェイトには同い歳の友達が必要だと感じていた。

あいつは今まで年上か年下しか、付き合いが無い。

俺なんて、ぶっちぎりの最年長、母親より年上だ。

やっぱり対等な関係の友人が必要だ、それこそなのはみたいなのが…

「ジュエルシードは渡したくない、でも彼女をどうにかしたい、でもどうしたいのか、まだ分かんないんだろ？…」

だからと言って、この小5の女の子に安易にお願いするつもりはない。

そのため敢えて、厳しく淡々した声色で。

「はい…」

「中途半端に関わって、中途半端に後悔するなって前にも言ったよな」

「はい…」

なのはに問いかける。

「勇夜…」

「妹思いなのは分かるが、しばらく黙っててくれ」

単に知りたい気持ちだけでは、フェイトの抱えているモノに関わってほしく無い。

「あの子の境遇は、はっきり言って重すぎるぞ」

彼女の境遇も。

彼女の家族が抱える咎も。

あの子自身も知らない出生も。

何もかもだ。

この事件が終わる頃には、あの子は自分の支えにしているものを失うことになる。

一生抱えなければならぬ罪と過去と痛みはずっと足枷のまま、生きていかなきゃならないのに。

「あの子と友達になりてえならな、肩代わりしろとまで言わねえけど、その重みを一緒に背負ってあげて、支えあげなきゃならないんだぞ、その為に………腹……括れるか？高町なのは」

誰だろうと、他人の背負ってる物を完全に代わりには背負えない。人によっちゃ自分の痛みなんて他者には理解できないなんて言う奴もいるだろう。

現に俺はそうだった。

それでも、その人を心から、なんとかしてあげたい、その心意気と覚悟があるなら。

それは、目の前の少女への問いかけでもあり、自分自身への問い。

気がつくくと、日は水平線に半分浸り、空には星がいくつかが光を発していた。

街灯も灯りをともし始めている。

「なのは…」

彼女は暫く、俯いて黙ったままだった。

ユーノが心配そうに彼女を呼び掛ける。

だがやがて下を向いていた視線を勇夜に向け、真っ直ぐこちらに見据えた。

「はい」

さつきとは違つ凛とした佇まいで。

光の言う通りだ。

ホントに頑固だよ、この子は。

フェイトと似た者同士だったのも頷ける。

実際知ってしまえば、その決心が揺らくかもしれないけど。でも…

「分かった、不平等がねえように、ここにいる全員に教える」

光には大方話してはいるが、改めてつてことで。

勇夜は目を閉じ、右手の人差し指と中指を立て、側頭部に付けた。それをなのはたちに向けた。

光はともかくとして、なのはとユーノは何をしようとしたのか良く分からなかったが、指を向けられた瞬間、知りたかった事柄が一気に脳内を駆け巡った。

「フェイトちゃんが…クローン」

「まさか…親から虐待を受けてるなんて…」

勇夜はテレパシーで、フェイトに関する情報を直接相手の脳に送

ったのだ。

「次に会う時までには、君の答えを聞かせてくれ、俺からの『宿題』だ、あと光」

「はい」

「暫く地球を離れることになるから、その間頼むな、注文のデバイスも必ず持って戻るから」

「了解、任せて下さい」

二人は挨拶代わりに互いの拳を打ち付けた。

「じゃあ」

勇夜は左手の指を鳴らして結界を発生させ。

そして光たちから離れて、距離をとると。

「リンク」

『Yes, My Master』

ウルトラゼロアイを取り出し。

「デエア」

眩い光とともに勇夜はウルトラマンゼロへと姿を変えた。

ゼロはなのはたちを見据え、頷くと。

「シユア！」

その場を飛び立ち。

空の彼方へと飛んでいった。

その雄姿を三人は見えなくなるまでずっと見送っていた。
同時に周辺の結界も解除される。

「さあ、帰りましょう」

光のその一声を皮切りに三人は臨海公園を後にした。

「駄目だよ…管理局まで出てきたんじゃないよ…もうどうにもならないよ…」

隠れ家として住んでいるマンションで、クロノの攻撃で負傷した主の手当てをしつつ、アルフはそう切り出した。

「大丈夫…だよ…」

「大丈夫じゃないよ！だって雑魚クラスならともかく、あいつは一流の魔導師だ…あの時は、勇夜と光って言う勇夜の友達が助けてくれたけど」

その勇夜は囑託魔導師で、その友はあの白い魔導師の身内、彼らは今後管理局と協力体制をとらざるを得ない。

自分たちは今まで以上に厳しい条件下での綱渡りを要求されることになる。

「本気で捜査されたら、ここだっていつまでバレずにいられるか…」

少なくとも、勇夜がこの場所を管理局に教えることは無いだろう、それならあの場で捕まればいいこと、なんせ絶好のチャンスだったからだ、わざわざ逃がしておいて隠れ家を教える、そんな遠回りなことをするメリットは無い。

が、それでも焼け石に水だ。
どちらにしる、隠れ家を特定されるのは時間の問題だった。

「あの鬼婆…あなたの母さんだつて酷いことばかりする…二人で逃げよう…もうあんな奴のためにこれ以上…」

逃げてもいつかは拘束されてしまうだろう。

だが虐待を受け、無理やりロストログアを集めていたが耐えきれなくなつて逃げたと供述すれば…刑罰は軽く済むかもしれない。

勇夜もそれを攻めはしないし、できるだけ罪を軽減できるよう奔走してくれるだろう。

良くも悪くもフェイトのことが優先上位のアルフだが、そんな彼女でも彼を信頼し、慕うようになっていた。

彼がもし家族であつたなら。

いや、勇夜だけじゃない。

フェイトには魔法の先生兼親代わりをしてくれた人がいた。

名前はリニス。

山猫を素体としたプレシアの使い魔。

研究室に籠りきりな実の母の代わりに、フェイトと自分を自分の娘のように育ててくれた。

勇夜の言う、単に血が繋がってるだけでは親子とは言えない。

アルフはそれに同感だった。

だつてフェイトとあの二人が一緒にいるところを見ると本当の家

族のように見えたから。

勇夜はどちらかと言えば、兄と言えるかもしれないけど。

あの二人が実のフェイトの親であったならどれだけ良かったか。

そう思えば思うほど、対して実の母への憤りは大きくなるばかりだった。

『あのこと』を知ってから益々。けれど…

「だめだよアルフ、母さんにそんな酷いことを言ったら」

それでも彼女の主は『実の母』を庇った。

先日のように、パニックを起こして取り乱すとまではいかないまでも。

「言うよ！だって私、フェイトが心配だ…！ フェイトは、私のご主人様で、私にとっては世界でだれより一番大切な子なんだよ」

『あのこと』を口に出してしまうことを必死に抑えながら、アルフは思いのたけをぶつけた。

虐待を受けてる子は親が悪いなんて微塵も思わない。

全部自分のせいだと攻め続ける。

なんて不条理なんだろう。

全てはあの鬼婆の理不尽なエゴなのに。

「群れから捨てられた私を拾ってくれて…使い魔にしてくれて…ず

「っつと優しくしてくれた！」

分かっている、この体に宿ってる自分の命は、病にかかり群れに見捨てられた狼の子のモノではないことぐらい、あの狼は間違いなくあの時死んだのだ。

狼としての記憶も、あくまで脳に残ってるだけで実際に自分が体験したものではない。

まさかフェイトも、それが姉とも言える人物の物とは言え、他人の記憶を持っているとは思わなかったけど。

それでも自分を繋ぎとめてくれたのは、一生一緒に生きると言うてくれたのは、紛れも無いフェイトという女の子なんだ。

「そんな優しいフェイトが泣くのも悲しむのも…私、嫌なんだよ！」

なのになんでこんな辛くて、悲しい目に遭わなければならないの？

どうしてそれに耐えながら生きなきゃならないの？

使い魔と主人は魔力だけでなく、精神でも繋がりを持っている。

どんなに感情を表に出さなくても、内に押し込めた苦しみは、いやでも使い魔に伝わってしまう。

今までフェイトの為を思って、あの女の頼みごとを聞いてきたが、もう我慢の限界が来ていた。

「ごめんね、アルフ、だけど、それでも……私は母さんの願いを、叶えてあげたいだ」

だがそれでもフェイトは折れようとはしない。
寂しさと悲しさと自分を攻める気持ちを押し込めたまま。

なら自分にできるのはそんな彼女を支えてあげること。
それは変わらない。

でも…でも…やっぱり…

お願い…誰か…この優しい主を助けて下さい。

笑顔を取り戻して下さい。

そう…願わずにはいられなかった。

「すごいや…、みんなAAAクラス以上の魔導師だよ！」

次元航行船アースラのモニタールームでエイミーは感嘆の声を上げた。

今ここでは、クロノとエイミーが先程の勇夜たちと異相体との戦闘分析を行っていた。

エイミーが興奮するのも無理は無い。

相手の異相体は本体を除いて全て分身なのだが、それこそ小隊以上の数なのだ。

それを相手に4人とも、獅子奮迅の戦い振りを披露しているのである。

「勇夜君はもちろん、3人とも魔力量は平均100万を悠に超えて、最大発揮時にはその3倍以上、魔力量ならクロノ君を上回っちゃってるね」

「エイミー…魔法は魔力値の大きさだけじゃない」

実際、魔力量は多いに越したことはないのだが。

「状況に合わせた応用力と的確に使用できる判断力だろ」

まあ結局のところは使い次第ってことなのだ。

使い手がボンクラ未満なら、高い魔力量も宝の持ち腐れにしかない。

一応補足するが、クロノは決して魔力量が少ないわけではない、むしろ多い方だ。

なのはたちが余りに出鱈目過ぎて霞んでるだけであって、執務官の肩書は伊達ではない。

「僕から見れば、魔力運用も含めた戦闘に関しては、勇夜と高町光の方が上手だ」

「でも、それならクロノ君だってその上手の一人でしょ、なんてっ たってこのアースラの切り札なんだから」

「……………」

クロノはそのまま黙りこむ。

そう言われるだけの自負はあるし、そのための努力は怠ってはいないが、いざこう口にされるとどうも気恥ずかしい。

相手がクロノ弄りに定評のあるエイミィとなれば尚更。

「でも、カツコよさなら二人に軍配が上がるかな、背も高いし」

「エイミィ！」

「何？私クロノ君がちっちゃいなんで一言も言ってないよ」

執務官補佐は悪戯げな顔で上司に返してきた。
公務中でも二人の間で度々起きる光景である。

そんな時、突然ドアの開閉音が響く。

「あ、艦長」

リンデイが入室してきたのだ。

「ああ、あの子たちの戦闘データを見てたのね……………確かに凄い子たちね、なのはさんたちもそうだけど、勇夜君と光君は特に…」

まずこの二人、飛行を除けば身体強化などの補助魔法はまったく使っていない。

光にはデバイスが無いというハンデがあるが、勇夜の場合、デバイスを実質二つ持っているにも関わらず、バリアジャケットは纏っているものの、魔力フィールドはほとんど使用せず、戦闘を行っている。

実は勇夜はリンクに攻撃が着弾する寸前、その瞬間だけ魔力バリアを張る様に設定させているのだが、管理世界の住人から見れば自殺願望でもあるのか？と疑りたくもなる。

だがこの二人は、常人を遙かに超えた超人であり巨人だ。

そして二人とも、恵まれた肉体に驕ることなく、この世界に流れ着いてからも己の研鑽を続けて、人間態でも魔力補助を使わずとも（もつと端的に言えばわざわざ使う必要が無い）、驚異的と言える戦闘能力を獲得しているのです、その分魔力消費を抑えられている。

その上で使う際は、無駄弾を出すこと無く確実に相手を仕留めていた。

特に勇夜は戦闘区域に散らばった、自他の魔力を再利用して、魔力の矢を形成した。

言うのは簡単だが、魔法に限らず、体内で作られたエネルギーの運用は、例えるなら陶芸のように繊細なコントロールが必要となる。

特に集束魔法は、高等の中の高等技術。

クロノが上手と評するのも、決して過剰評価ではないのである。

ただ、彼らの無双振りは魔法に限ったことではないのだが。

例えば、勇夜がダガ モードの零牙を空中に自在に飛ばしているのは、彼のウルトラ念力の賜物だし、光の鏡から鏡へのワープは二次元人の特殊能力、神速などは御神流の剣技だ。

魔道師と違い、彼らにとっては、魔法は自分が戦闘に使えるスキルの一つでしか無い。

管理世界、特に管理局の人間が魔法に拘り過ぎている事情を考慮してもだ。

「総合的な戦闘力なら、二人はSクラスにいくかもしれないわね…」

本当に二人の戦闘能力はずば抜けている。

もし…彼らの本来の姿である巨人に戻れば、エネルギー相殺現象による魔法使用がほぼできなくなるというデメリットを差し引いても……管理世界に彼らに並ぶ猛者はそうそういないだろう。

それだけに、自分たちの能力を悪用されることに、あれだけ拒否反応を示すのは至極当然なのかもしれない。

強い力は時に争いを生む要因になりかねないのは、紛れも無い事

実。

現に人間には、新たなエネルギーや技術が出現する度、争いの道具に利用してしまう悪しき慣習があるのだから。

「けど…一番の問題はこの子たちよね」

なのはにしろ、ユーノにしろ、光にしろ、勇夜にしろ、ジュエルシードによる災害を防ぐ、あるいは最小限に留めるために収集を行っている。

だが、あの黒衣の魔導師と使い魔はと言つと。

「虐待を受けても尚、母親の願いに応えようとする女の子…」

愛娘を失った母が、禁断の技術に手を出したことで生まれた娘の生き写しでありながら、その技術名と同じ名を冠し、自分の出生も母の内面もその使用目的も知らぬまま、暴力を受けつづけながら口ストロギアを集め続ける少女。

フェイト・テストロッサ。

その母でありながら、彼女を娘と認めず、道具としてしか見ていない魔導師。

プレシア・テストロッサ。

「ですが、本当なのでしょうか？プレシア・テストロッサの目的がアルハザードへの道を開くというのは」

「今のところ、勇夜くんの憶測でしか無いけれど、可能性が無いわけとは…言えないわね」

彼女には何かしら収集を駆り立てる強い目的があるとは思っていたが、勇夜からもたらされた背景は余りに重かった。

彼女を救えなければ、この事件は解決しない。

勇夜の言葉は、実能的を得ているのであった。

「まだ小さいのに…辛いでしょうね」

Episode 16 - 問われる覚悟（後書き）

改めて、各キャラのパワーバランスの比重の取り方の難しさを痛感

……

でもちゃんと最後まで書ききるぞ。

ゼロ「『前編』の文字まで英語なんて厨二過ぎるだろ…」

ミラー・グレン・ジャン「『ゼロも十分厨二だ（です、だぜ）』」

「」

マルチバース。

地球人が到達するには、まだまだ先になるであろう宇宙の外。

光の国でも、その住人達全員のエネルギーを動員しても一人しか送り込めない超空間。

無数の宇宙が点在するその海の中を、一つの光が泳いでいる。

ウルトラマンゼロだ。

彼は今、惑星ミットチルダのある第一管理世界へと向かっていた。

『諸星勇夜』としての生活に不満は無いが、大っぴらにウルトラマンの姿に戻れないこの現状では、唯一ゼロとしてのびのびと飛べる貴重な時間だった。

堂々と星中を飛び回れた光の国と違い、管理世界では局員だろうが非常時以外の飛行は禁じられている。

それが法で定められたルールであることは承知しているが、それでも飛ぶことに恋焦がれることがある。

だからどの次元世界に行くにしても、ばれない様細心の注意を払いつつ、こうしてゼロになってマルチバースの海を飛び回っているのだ。

同じようにその空間を飛んでいる次元航行艦に出くわしたら、どうするか？

実はゼロは飛んでる間、認識制限の魔法を自らにかけている。

某猫型ロボットの秘密道具に石ころ帽子というアイテムがある。

それを被っている間は、同じ帽子を被った者以外、誰であろうが視線に入っても、道端の石ころの如く見向きもされなくなる帽子だ。それに似た効果がある魔法をゼロは飛んでいる間使用している。幸い、太陽エネルギーと相殺するほど消費は高くなく安上がりなので一役買っていた。

光の国でも一人送るだけで手一杯なところをゼロはどうやって移動しているって？

それはリンクことウルティメイトブレスレットのおかげ。

これによりゼロは、単体で次元を自在に移動できるウルトラマンノアと同様の次元航行能力を得ている。

だからこうして人一倍注意力が必要になることを大目に見れば、自由に、快適に宇宙飛行ができた。

ゼロ「諸星勇夜がミットチルダに向かうことになったのは、先日のプレシア・テストアロッサと殺し合いに発展した、その日の夜のことだ。

傘を持ってなかったとは言え、彼は雨の大群を前に、走ることも無く淡々と夜の道を進んでいた。

当然ずぶ濡れだが、そんなことを気にする余裕は彼には無い。

その足で仮住まいのアパートに戻り、服を洗濯、風呂に入った。

風呂上がりの彼は今髪を下ろし、黒のランニングシャツにゼロの体色を思わせる青いラインの入った赤のジャージを履いている。

体は太すぎる、痩せすぎず、無駄をそぎ落としてつつも、バランス良く鍛え上げられ、濡れた長髪もこの上なく似合う。

顔つきも、長髪と違和感無く調和がとれているほど整っている。水もしたたる良い男を地で行く容姿だった。

ちなみにどうして髪を伸ばして、ポニーテールにしてるのかと聞かれれば彼はこう答えるだろう。

『親父が一番近い髪型だから』
ゼロと父のセブンをよく知る者なら、この一言だけで納得してしまっ筈だ。

彼は冷蔵庫からスポーツドリンクを取り出し、飲みながらリモコンでテレビを点けた。

だが、たまたま点けたチャンネルの番組の内容を見て反射的に消してしまった。

夜のニュース番組で、偶然児童虐待を特集していたのである。

たとえリンクが、メディアをマスゴミと評しようともニュースの内容容そのものに罪は無い。

それでも余計気分が沈む。

その日実際に虐待を目にしたからだ。

「あー！ー！！」

やけになってベットに仰向けで倒れ込んだ。

あの時、俺は、あの野郎に殺意を抱いた。

殺す、その寸前までいった。

母と騙っておいて、娘と認めない娘を痛みつけ、縛り付け続け……
ただ一人の女の子を蘇生を実行するだけの機械、プログラムになり下がった魔導師。

そいつがジュエルシードを使い、近隣の次元世界、それこそ地球を踏み潰してまでも、次元振を起こして、無理やりあるのかすらも分からない所へ行こうとする外道。

彼女に対して、危うく、また『あの時』みたいに自分を踏み外しそうになった。

何が『あなたに何が分かるだ』

分かりたくも無い。

こんな奴は人間じゃない、人では無いんだから、殺しても殺人にはならない。

一方的に被られる恐怖と痛みと絶望を与えてやる。

フェイトが今までこいつから受けてきたものを倍返しにして。

後悔させてやる……俺とやり合おうとしたこと。

フェイトを痛みつけたこと諸々含めて。

我ながら未恐ろしい。

基本お人よしで善良なウルトラ一族でも、どす黒い感情に支配さ

れてしまうことがある。

現に勇夜「ゼロはあの時そうなりかけた。

ゼロになって跡形も無く消し去ってやるうとさえ…頭をよぎった。そんな勇夜を引きとめたのは。

『優しい女の子をどん底に落とすのがウルトラ戦士なのですか？』

念話で自分に語りかけてきた相棒の静かながらも、厳しい一言だった。

それでなんとか踏みとどまれた。

でも、ささくれた心を落ち着かせるには、時の庭園から出るしかなかった。

あの4個を分捕る余裕さえ無かった。

当初はなんとか、あいつにフェイトを使って収集させるのをやめさせて、回収した分を発見者のユーノ・スクライアに渡しそうとしたのだが。

あの親子が抱える問題はとんでも無く深刻で…。

本当なら、私情なんて捨てて、力づくでもやめさせた方が賢明なのかもしれない。

そのチャンスはいくらでもあった。

あの時も、フェイトたちと初めて会った時さえ。

でもできない…できるわけ無い。

その方法じゃ、次元振の危機は回避できても…救えない、助けられない。

でも…でもどうしたら、あの子を救える。

寂しく悲しい目をして、雁字搦めになったあの子を。

ようやく激情で淀んでいた思考がクリアになってきた。

けど、『最善の手』って奴を考えれば考えるほど、選択肢が脳裏をかすめては、あれは駄目、これも駄目とどんどん消えていく。

たとえそれが仮初のものでも、向かう先が絶望に繋がる谷底でも、フェイトにとっては淡くて……微かな希望^{ひかり}……

フェイトを止めることは、希望の守り手である俺^{ウルトラマン}が、あの子の希望^{かり}を……あの時見せた笑顔だって……最悪……奪^{ウルトラマン}うことになる。

でも止めてあげなければ、フェイトは独りのまま、背負わされた十字架と、嵌められた足枷を引きづりながらの人生を送らせることになる……

『申し訳ありません……マスター』

「なんで謝るんだよ、それを言うのは俺の方だ……」

『私も色々と思案しましたが、とても薦められないものばかりなので』

ああ…そっちの方が…

てつきり、憎悪に身をまかせそうになった自分のことかと思った。

あの時の自分を悔んで、恥じていることを悟ってくれたのか、あの後リンクは何も追及しなかった。

それに文句は無い。

でも、今度もしノアに会う機会があるなら…謝っとかねえとな。
せっかく俺を信じて、リンクを授けてくれたんだから。

「『ウルトラマンは神では無い』……………か……………」

これは先輩であるウルトラマンメビウスに、初めて地球に来たウルトラ戦士　ハヤタことウルトラマンが彼に言った言葉。

その通りだ。

かつては、盲目的に欲しくてたまらなかつた、一度失いながらも、
少しずつ取り戻していった、こんなに破壊的な力を持ってしても、
女の子一人助けられりゃしない。

フェイトだけじゃない。

ベリアルも……………

『母さん』の同じ部隊の仲間だった……………大切な人たちも……………

一人では限界があることは分かってるけど、なまじ力があるせいで、
無力感もより鋭い槍になって心に、突き刺さる。

彼にしては珍しく思考がマイナスの方向に行っていた。

どづしたら……………。

何か…何か…あの子の心を研ぎほぐせるものがないか？

何かあるはずなんだ…何か…。

何か……………

？何も分からないまま、戦うのは嫌なの！？

あの光…ミラーナイトの義妹。

高町なのは。

あの子が、フェイトに呼び掛けた時。

僅か、ほんの僅かだがあの子の心が解きほぐれたような気がした。

あの時は怪獣と交戦していたが、ゼロの時は五感が遥かに高くなるので、その時二人が交わした会話もしっかり耳に入っていたのだ。

フェイトと同年代の小学生兼魔導師の女の子。

考えてみれば、フェイトは対等に付き合える同い年の友がいない。その同年代の友人ができない、そもそも外界と関わることもできない身の上だった。

なし崩しとは言え、同い年で一番フェイトに関わりを持つのはなのだけ。

なら…あの子に賭けてみるのも悪くないかもしれない。

でも……………それにはなのには……………

いいのか？

今自分の胸の中で淀んでいるジレンマを……フェイトがしょって
いる十字架を……少し前まで、普通の小学生だったあの子に……抱
えさせていいのか？

リヒトだって……ユーノだって……なのはを戦わせなきゃいけな
い現実に無力さを突きつけられて……苦しんでるはずなのに……

どっちにしても、それは自分のエゴだ……俺はそれを……あの
子たちに押しつけることになる。

ちきしょう……地球と……地球を含めたこの世界が、滅ぶか滅ば
ないかの瀬戸際に立ってるってのに……

このままじゃ……

~~~~~。

なんだ？

突然携帯電話の着信音が響いた。

勇夜はベットから携帯を置いた机に向かい、手にとる。

誰からの電話かと発信先を確認してみたら。

「おやっさん？」

勇夜にとって、こちらの世界に来てからの馴染み深い人からだっ
た。

そして現在、マルチバースを飛ぶゼロに戻る。

良いニュースだって言ってたけど、なんなんだ？

その相手からの電話内容に疑問を持ちつつも、丁度ミットチルダに用があったのでそれも兼ねて、こうして行くことにしたのである。

見えた…。

勇夜の眼前に泡粒。

あれが、惑星ミットチルダがある、第一管理世界と呼ばれる宇宙。ゼロはスピードをさらに速め、並の生物なら跡形も残らないほどの高熱の水素ガスで覆われた宇宙の表面に迷わず突っ込んで行った。

第一管理世界、惑星ミットチルダ。

魔法文化が発達している管理世界の中心的な立場に位置する星。

その星の首都、クラナガン。

地球より科学技術が発達しているとあって、近未来的な高層ビルがいくつも立ち並ぶ都市だ。

この都市の中央のビル街から少し離れた住宅街の道中をゼロから人間態に戻ったりユックを片腕だけかけた諸星勇夜が歩いていた。

旅人としては軽装だが、旅道具の大半はリンクの四次元ポケットに収納してある。

彼は今、こちらの世界に迷い込んでから、お世話になったある一

家の許に向かっている。

里帰りと言われれば、はっきりと里帰りだと言える。

もう日は夕暮れになり、夜空が顔を出し始めている。
目的地に着いた。

ミットチルダに迷い込んで、あるうことか体が4歳児に退行した俺を実の家族のように引き取って、正体を明かしてからも、家族として迎えてくれたナカジマ一家の住宅。

半年ぶりの我が家。

なのに少し身構えている自分がいる。

だってな…うれしいと言えはうれしいんだが。

勇夜はインターフォンを押す。

『どちら様ですか？』

一拍置いて、幼い女の子の声がインターフォンから響く。

「ギンガか？勇夜だけど」

「勇夜兄ちゃん！？」

インターフォン越しからでもその声の主が弾んでいることが窺える。

するとドアからロックが解除された音が鳴り。

ドアを開けて。

「ただいま」

この世界での『我が家』に久々に入ると。

「ゆうにいい！」

「がは！」

腹部に衝撃が走り、そのまま倒れ込んだ。

「す……… スバル、お前また……」

勇夜に体当たりしてきたのは、7歳くらいの青い髪を男の子のように短髪にした活発そうな女の子だった。

「おかえり ゆうにいい！」

名前はスバル・ナカジマ、このナカジマ家の次女でかつ末っ子さん。

「スバル……またお兄ちゃんにタツクルして、早く離れなさい！」

奥からスバルと同じ髪色だが、反対にロングヘアな小三くらい女の子がやってきた。

名はギンガ・ナカジマ、スバルより二つ上のお姉さんだ。

「は……い！」

姉の言葉に渋々従うスバルはようやく勇夜から離れた。

「大丈夫？お兄ちゃん」

「ああ……ただいま……二人とも」

「「おかえりなさい」」

勇夜にとって実の妹とも言える姉妹たちだ。

「毎度のことながら災難だったな勇夜」

ナカジマ家の家主であり、勇夜にとってミットチルダでの父とも言えゲンヤ・ナカジマが最早風物詩レベルともなっている末っ子タツクルのことを聞いてそう答えた。

「笑い事じゃねえよおやつさん、あいつのバカ力はウルトラ戦士でもきついんだからな」

勇夜ことゼロはゲンヤのことは父のように思っているが、実の父であるウルトラセブンのことも配慮して、彼のことを『おやつさん』と呼称している。

「やんちゃになれるのは子どもの内だけだぞ、それにヤンキー時代のお前さんに比べたらかわいいもんじゃないか」

「ぐっ……そこ突いてくるか」

苦笑いで返すしかなかった。

確かに元気がいいのがいいことだが、はつきり言って帰ってくる度にスバルの体当たりの威力が右肩上がりになっているのは気のせいだろうか？

でも一応、あいつのバカ力の源には心当たりがある……だからあまり強くは言えないんだよな。

「二人とも、お酒が進むのはいいけど、ほどほどにきなさいね」

食器を洗いながらクイントが二人に注意する。

昔は、管理局員だったが、ある事件をきっかけに引退し、今は専業主婦だ。

「分かってるよ（分かってるさ）」

勇夜は戸籍上では未成年だが、実際は3000歳近く生きている

ウルトラ一族、ナカジマ家では、スバルとギンガが寝ている間、二日酔いにならないように加減する条件で酒を飲むことを許されていた。

「で、用ってなんだよ？いきなり電話してきて開口一番帰ってこいって」

幸い、ミットチルダに他に用があることと、苦も無く次元を超えられることもあり、その日の内に帰れた。

日本とクラナガンの時差も、実はそれほど大差無い。

「驚かそうと思ってな、お前さんにとっちゃ、念願叶った話しかからん」

念願って…まさか…

「見つかったのか！？光の国が…」

「ああ、これを見てくれ」

おやつさんはそう言ってリモコンを手にとると、テーブルの上に3D映像が浮かんだ。

ここミットチルダのある次元世界を含んだマルチバースを形作ったホログラムだ。

「この隣の平行世界の一つにな、地球に酷似した星とそこから丁度300万年離れた先に、勇夜が言っていた、恒星のように自ら光を放つ惑星が存在する次元世界が見つかったんだ」

ゲンヤの説明とともにホログラムが一つの宇宙にズームし、光り輝く惑星が映し出された。

勇夜は自分たちウルトラ一族のことは内密にするようナカジマ家には頼んでいたが、自分たちの星が人工太陽で光り輝く惑星である

ことなどは公表した上で探査を頼んでいたのである。

場所さえ分かれば、後はもう自力で行ける。

なぜゼロが次元を超える力がありながら手をこまねいていたのは、前にもいったが、ミットチルダのあるこの次元世界が、光の国のある世界からどれくらい離れているか把握できなかったことが上げられる。

目的地に行くまでの船も燃料も食糧も揃っているが、肝心の地図が無い状態。

そしてなお且つ、多数の世界を内胞したマルチバースも無数に存在する。

そのため自力で探そうとすれば、虱潰しに博打を打ちながらの旅になるのは明白だった。

以前のゼロならそうしたであろうが、これまでの経験から、ウルトラ戦士でも一人でできることには限度があることを学んだ今は違う。

「勇夜：やはり、帰りたいか？故郷に」

おやっさんが改まった表情で俺に語りかける。

そりゃここに来たばかりの時は帰れたらな、とは考えていた。

「部屋は空けておくから、帰る時はいつでも言っただけ、向うのお父さんも、帰りを心待ちにしてると思うから」

クイント母さんの言う通り、今だって親父は、俺が帰ってくるのを心待ちにしてる。

でも…。

「当分はまだこっちにいるさ、まだ一人しか仲間見つかっていないし、やることも山ほどあるし……時々里帰りはすると思うけど」

仲間探しもある。

ジュエルシードのことも。

それが起こす災害も、巻き込まれる地球も。

そしてフェイトたちのことも

それを残して、のこのこ帰省なんかできるわけ無い。

それに、師匠であるレオが地球を『第二の故郷』だと呼んだように、この家は俺にとって故郷の一つだから…。

色々厄介事が多い雑でお粗末な世界だが、だからこそ、どうしても放っておけない。

「そうか、じゃあその時はセブンの親父さんも連れてきてもらいたいな」

「ああ、でもその時まではおわずけどぜ、おやっさん
そう返して彼は一杯の酒を飲みほした。

その翌朝。

「お兄ちゃん、起きて」

ナカジマ家長女のギンガが、ぐっすり夢の中の勇夜を起こそうと揺すっていた。

時刻は朝5:00。

陽光が、勇夜の使っている部屋を照らす。

「うう~~~~~」

その光と、ギンガの呼び声が目覚ましとなって勇夜は起床した。

空を飛び、光線を放ち、念力を駆使し、格闘にも強く、体のサイズも自由自在な、米国人から「スーパーマン」と称されるであろうM78星雲人でも生き物、眠気と無縁ではないし、睡眠も必要だ。

「おはよう〜ギンガ〜」

「今日、朝練付き合ってくれてるって約束でしょ」

「あ〜そうだったな〜」

ねぼけた目をこらして改めてギンガを見ると、服装はいわゆる体操着でいつでもOKな状態だった。

全国のブルマフリークの方々には悪いが、生憎短パンだ。

なお勇夜には、妹を愛おしいと思ってもそんな趣味は微塵もない、あっち方面にしる、そっち方面にしる。

むしろギンガたちに『そんな目』をした連中を、最低でも…

ゼロツインシユートか、プラズマスパークスラッシュ。

下手すると、ファイナルウルティメイトゼロで成敗しかねない。

全国のブルフリまたはロリ好きな方々は要注意するように。

「じゃあ先に外で待ってるから」

「ああ」

場所は変わって、今わたしことギンガ・ナカジマは、血の繋がりは無いけど、兄でありウルトラヒーローである勇夜お兄ちゃんと近所にある公園にいます。

どうして兄がウルトラマンであること知っていると云いますと、長くなりますね……………色々。

いつもわたしは朝早く起きて走っているのですが、今日は兄と同伴です。

本当は妹のスバルも一緒にやりたいんだけど…

「用意はいいか？」

「うん」

お兄ちゃんはウルトラマンの時にでも使っている、片手を真っ直ぐに突き出し、もう片方の手を腰に据え、後ろ脚に重心を置く、兄のお師匠さん直伝の構えをとります。

今からわたしと組み手をするためです。

「お互い頑丈な身だ、遠慮はするなよ」

お兄ちゃんが人間の姿でも一騎当千のツワモノであることは分かっています。

だから…

「そのつもりだよ、お兄ちゃん」

わたしも構えをとり、踏み込みました。

数分後…

「はぁ…うう…ふぁ…あぁ…」

息が荒れているのはわたしで。

「大丈夫か？」

とわたしに気に掛けているのは兄です。

因みに、兄はこの数分、わたしの攻撃をひたすら避けたり交わしたりの繰り返しです。

結局一撃も当てられませんでした。

いくら攻撃しても交わされ避けられ、隙をつかれて投げ返されま

した。

やっぱりお兄ちゃんは強いです。

「中々様になってきたじゃねえか」

「でも、お兄ちゃんに比べたら…」

「あせんなよ…強くなることに近道はねえんだ」

確かにそうです。

兄は強いですが、その強さは昨日今日の鍛錬で身に付けたものではない。

本当は、彼のお師匠さんとその師匠だった兄のお父さんのように、厳しく指導してほしいのですが、それは小学校を卒業してからと言われました。

「そういや、スバルはどうした？」

「えっ？」

「母さんから一緒に習ってたんだろ？シューティングアーツ」

「……………」

「ギンガ？」

「やめちゃったんだ…スバル…」

兄は驚いた表情を浮かべます。

「そうか・・・」

その理由はわたしも分かっていますし、兄も察したようです。スバルとわたしは、普通の人間の体ではありません。

戦闘機人で人造魔導師。

体が機械でできたサイボーグで、母さんのDNAで生まれたクローン。

それがわたしたちの正体。

名前の通り、わたしたちは兵器として生まれました。

兄がウルトラマンであることを隠しているようにわたしたちも家族や一部の人を除いて、クローンでサイボーグであることを隠しな

がら生活しています。

普通の人間を超えた戦闘能力を持つていることもありませんが、クローンも戦闘機人も、ミットチルダで禁止されている技術だからです。

妹も普段は明るく振る舞ってますが、本当はまだ小さいながらに、兵器としての自分が…怖くて怖くて…堪らないんです。

わたしも無い訳では無いのですが。

「お兄ちゃん…」

「なんだ？」

「お兄ちゃんも自分の力が怖いって…思うことある？」

兄は少し困った顔をしましたが。

「……………無いつて言ったら…嘘になるか」

いつもなら絶対見せない、どこかせつない顔をしてそう答えました。

「光の国にいた頃は、周りがスーパーマンだらけだったから、気にもとめなかったけどな」

お兄ちゃんたちウルトラ一族は、個人差はあるようですが、みんな光線を使え、空も飛ぶことができます。

けど、魔法は人によっては、まったく使えない人もいます。

お父さんのその一人ですから。

「実際、俺の力を見て、怖がる奴だって、いるしな……」
「そんなことない！」

寂しい顔で呟いた兄に対し、自分でこんなこと質問しておいて、わたしは思わず叫んでいました。

だって、勇夜お兄ちゃん「ウルトラマンゼロがいてくれたから、わたしたちは人として暮らしています」。

母さんだって、魔法を使えない体にはなったけど、今でもこうして生きてくれています。

何より、相手が怖がってパニックを起こしかねない巨大な体で、わたしたちを助けて、あんなに優しく手を差し伸べて、私たちを掌に乗せて飛んでくれました。

あの時の経験は一生忘れられません。

無機質で暗い実験室と汚れた大人しか知らなかったわたしたちに、世界がこんなに広くて、綺麗だったこと、『光』があるってことを教えてくれたら。

だから、母さんにも父さんにも直ぐに心を開くことができました。

お兄ちゃんは私の叫びに一瞬びっくりした様子でしたが。

「ありがとな」

同じように普段絶対見せない、優しく温かな笑顔でそう言ってくれました。

でも、ありがとって言いたいのはこちらです。

だって、私たちのお兄さんは、ヒーローなんですから。

子どもなら一度は夢見る、掌に乗せてもらって飛ぶウルトラマン。
本作ではナカジマ姉妹がゼロに乗せてもらったという過去がありま
す。
なんとか過去編を書けるまでいきたい。

『だから僕もなのはも、そちらに協力していただきたいと』

次元航行艦アースラ。

艦内の一室のモニターにフェレット姿のユーノが映っている。

彼は今、レイジングハートを使い、ハラウン親子と通信をとっていた。

話の内容は、自分たちを協力者として、ジュエルシード回収に行かせてほしい、と言うもの。
言ってしまうえば売り込みだ。

「協力…ねえ……」

クロノは、年相応より幼く、あどけなさが残る顔立ちをしかめ面に染める。

真面目一徹で人一倍正義感も局員としての矜持も強く、民間人を巻き込むようなことはしたくない、と言う気持ちも強い執務官だ。

上司である母の考えは別として、ユーノたちの売り込みには余り乗り気ではなかった。

『僕はともかく、なのはは、そちらにとっても有効な戦力です、ジュエルシードの回収、あの子たちへの牽制、そちらとしては便利に使える筈です』

ユーノはなのはの魔力資質という切り札を手札から出す。

確かにおいしいメリットではある。

管理局においての最大の難敵は、犯罪者でもテロリストでもロス
トロギアでも無い。

？人手不足？だ。

自分たちの戦力をほぼ『魔法』に限定してしまったことによる代償だ。

魔法は万人が持てる能力では無い。

管理世界で魔法そのものが使えない人間は少ない。

魔法が使えずとも局員になれる者はいるし、就ける職種もある。現にナカジマ家の家主はその使えない人間の一人だが、部隊を抱える部隊長、一国一城の主だ。

だが管理局のその性質上、魔力持ちの人間が重宝されるのも、それに該当する人間が決して多く無いと言うことも誤魔化しようが無い事実であった。

そんな中で、管理局にとってなのは喉から手が出る人材だった。

実際問題、アースラのクル も少数精鋭と言えば聞こえはいいが、人員に余裕は無い。

『それに…なのはを戦力として抱えるなら、彼も喜んで協力してくれるでしょう』

ユーノがもう一枚の切り札を切り出した。

彼とはもちろん、なのはの義兄であり、鏡の騎士である。

高町光ことミラーナイト。

光は前に、リンディたちに、なのはが協力者として事件に関わり続けることを望み、管理局が彼女の身の安全を最大限努力してくれるなら協力するという条件をあらかじめ出していた。

穏やかな人柄で社交性がある彼にしては棘があるやり方だがちゃんと訳がある。

それは彼がシスコンであることもあるのだが、仲間であり、恩人であり、現状二人しかいないが自分たちのチームのリーダーである。

諸星勇夜。

ウルトラマンゼロが、管理局に対して、距離を置くスタンスを取っていることが上げられる。

その最大の理由は、時空管理局が『魔法』に傾倒し過ぎている実態と、自身が魔法と異なる系統の異能の力を有していること。

そして、彼自身が過去に力を過度に求めすぎる余り過ちを犯し、危うく悪に身を堕としそうになった体験からだ。

ゼロはその体験から『どんな力にも危険が付き物な麻薬で、使い手は常にそれを自覚して、己を戒め、律しなければならぬ』と、持論を持つようになった。

それだけに、管理局が魔法を『クリーンで安全な力』特別扱いし、管理世界では質量兵器と呼称される、火薬などを使用する実弾兵器や、核ミサイルなどの大量破壊兵器を中心に魔法以外の力を規制、タブー視し、腫れものみたいに排他的にみなしている考えに懐疑的だった。

彼は以前魔法を『おもちゃの弾と実弾をスイッチ一つで切り替えられる拳銃、使い手そのものを大量破壊兵器にする力』と表した。ゼロの魔法に対する捉え方が実に端的に現れている。

何が非殺傷だ。

冗談じゃない。

完璧な安全神話なんて無い。

地球、この日本でも『原子力』を地球温暖化の原因となるCO2を出さないクリーンなエネルギーと称していた。

50年も前から、映画の中からはいえ、その原子力で生まれた怪獣の王がその危険性を提唱していたにも関わらずだ。

結局、自然の脅威を前に原子力の安全神話は引きはがされたが。

確かに魔法には対象を傷つけずに攻撃できるという優位性がある。だが人間は時に、感情という名の荒波に吞まれ、思わぬ行動をとってしまう生き物。

そうなった時、激情に駆られ非殺傷設定と呼称されるおもちゃの弾から、殺傷設定という名の実弾に変える事態にならない保障はどこにもない。

ゼロを含めた、ウルトラマンたちも例外じゃない。

さらに、ゼロたちウルトラ戦士はとてつもない破壊の力と巨体を持つ巨人だ。

魔法も使い手によっては使い手そのものを、大量破壊兵器に変えてしまう危険性があるのだが…

下手すれば管理局は、質量兵器以上に煙たがり、畏怖し、排除対

象にみなしかねない。

よって、たとえゼロ「勇夜を『人』として受け入れてくれた管理局員でもあるナカジマ夫妻や義妹たちのことを含めても、彼らが所属している組織の体質にたいし距離をとらざるを得なかった。

むしろその義妹たちの出生も、その不信を強める一因となっていた。

前置きが長くなった。

結局、どの力もエネルギーも道具も技術も、使う者次第で、その存在そのものは否定できない。

こうしたことをゼロから聞いていたミラーナイトも管理局に対し、ゼロほど懐疑的ではないが慎重な姿勢をとっている。

彼の二次元人としての能力もまた、ウルトラ戦士の能力と同じ目で見られない保障は無い。

地球では少年兵の存在が倫理的に問題があるのに、管理世界ではその年齢の子たちでも就けてしまう実態も対しても、その慎重さに拍車をかけていた。

だがらと言って、このままそんな厄介な組織と愛する妹のなのはを関わらせるのをじっと静観することもできなかった。

それで前述の条件を出したのだ。

本筋に戻ろう。

「考えてますね……………まあいいでしょう」

「っ！…母さ！………艦長」

クロノは思わず公私混同してしまうほど驚いた。前述した通り、彼は局員としての矜持が強い。

本当なら……断固反対したいところなのだが…

「手伝つて貰いましょう、切り札は温存しておきたいもの、ねえ、クロノ執務官？」

上司兼母親であるこの人も、何の考えも無く了承する訳は無いし、そして上司であり、母がそう決定した以上、部下で息子であるクロノはそれを受け入れるしかなかった。

けど…

クロノはまだ若いにも拘わらず、もう何度目か分からないほどの溜め息をついた。

場所は変わってここは通信先のなのはの部屋。

『ですが条件が二つあります、兩名とも身柄を時空管理局の預かりとすること、それから指示を必ず守ること、よくって？』

「分かりました」

最初から無条件で協力させてもらえるとは考えていなかった。

が、これでののはや光さんに学校を休ませなければならなくなったが、もうこの際贅沢は言わない。

二人がまだ義務教育の学校に通っていてよかった。

一方で内心は、やっぱり勇夜さんとアースラの人たちに任せただ方が良いのかもしれないとも考えた。

事故自体は不慮のアクシデントだけど…なのはと光さんを巻き込ませてしまったのは、一人だけで突っ走ってしまった…自分なのだから……

そして日頃の生活を縫って、手を貸してくれた兄妹たちを…今度はその『日常』をも犠牲にさせることを強いてしまうことになる。

それだけにこうして返答するまで、時間が許す限り、悩みに悩んだ。でも…二人の故郷であるこの星が危機に瀕している。

それを知ってしまった今、あの時なのはが語気を強めたように、二人とも、絶対に引き下がらない。

なのはも、あの子…フェイトのこともあるから、中途半端に引き下がりほしくない。

ならその分、自分も二人の力になれるよう、力を尽くそう。

ユーノはアースラとの通信を切り。

『なのは、光さん、決まりました』

念話で二人に結果を報告した。

『了解です』

『うん、ありがとユーノ君』

その時なのはは、母の桃子の食器の洗浄を手伝っていた。

光はと言うと、義父と義兄と義姉と一緒に御神流の稽古のために裏山に出かけている。

「はい、これでおしまいっ」と

皿洗いが一通り終わり、二人はリビングに移動してソファーに向かいあつた形で座った。

「それで、大事なお話ってなあになのは？」
「う、うん」

なのはは、魔法やユーノ、ミラーナイト、光、ウルトラマンゼロ
「勇夜のことを伏せつつ、彼女の精一杯の表現で暫く学校を休み、
家を当分空けなければならぬことを話した。」

普通の家庭なら、娘がまともな理由を話さずに家を出ると言いだ
せば、断固反対して阻止するだろう。

まだ小学生となれば尚更だ。

だが高町家の場合、少し事情が違った。

光が言っていた魔法のこと…なのよね…

なのはの話を聞きながら桃子は内心でそう呟く。

前にも話したが、高町家は光が、別世界から来た二次元人の血を
受け継ぐ巨人であることを知った上で彼を養子として迎えた。

その為、当時生まれたばかりのなのはを除いた全員が彼の正体を
知っている。

そして以前彼から、なのはについてこんなことを言われていた。

？なのはには特殊な力が存在します？

その時は彼もその力がなんなのか漠然としか分からなかったらし
いが…

あの日、なのはがユーノを飼えないかと言ってきたあの日。

なのはが寝た後、光は話があると言って私たちを食卓に集まらせ

た。

その内容は…

魔法が存在する別の世界から、事故で海鳴に過去の文明の遺産がばら撒かれて、その発見者である男の子が回収に来たが失敗、苦肉の策として、その子はなのはと光に助けを求め。

なのはの力がその魔法が使える力で、その時目覚めたと言っことだった。

余りに突拍子も無い話ではあったが、光もまたその突拍子も無い別の世界から来た住人で、耐性がついていたので直ぐに信じられた。

その時言われたのが、危ないことであることを分かった上でなのはが自分の意志で私たちに話してくれるまで、魔法のこと諸々のことを知っていることを伏せてほしいと言うものだった。

「危ないこと…なんだけど、大切な友達と光兄と一緒に始めたこと…最後までやり通したいの…」

危ないこと。

それが事実であることは間違いない。

海鳴公園のボート場や、動物病院で起きた謎の損壊事故。

大勢の人が、アスファルトから出現した巨大な樹木を見たと言う
集団幻覚。

これらが、その？遺産？の仕業であることも聞いたからだ。

「一つ聞くけど…光がどこから来た男の子なのか、もう知っているのよね？」

「うん…」

「そう…隠していたことは謝るわ…けどそれでもお母さんは心配よ…いくら光がとても強い人でも…なのはのことが、凄く心配」

でも…それでもなのはは止めないだろう、この家族の中で一番強情で頑固な子だから、光もそれが分かっているからこそ、一緒にその友達のお手伝いをしているのだろうし。

「でも、もう決めているんでしょう？お兄ちゃんと友達と始めたこと、それを最後までやり通すって、ならお母さんはそれを応援するわ、お父さんたちにはちゃんと説得しておいてあげる」

なら今できることは、その背中を押し上げてあげる一方で、本当に心から心配してあげ、無理はしないように…と伝えるだけだった。

けれど、また光になのはのことを頼んであげないといけないなんて…

なのはがまだ小学校にも入っていなかった頃、わたしたち一家は色々あってなのはを残して。夜遅くまで家を空けなければいけないかった。

本当はまだ甘えたい年頃だったのに、なのはは我慢してくれた。

それでも一人の夜はさぞかし孤独で辛い時間であっただろう。

本当は寂しいことを訴えたくて仕方がなかっただろう。

思いつきり涙にして、出せるだけ出したかっただろう。

そんな時、光は率先して、なのはの傍にいてあげた。

一度、溜めこんださみしさを光に発散したことがあったらしい。

以来、なのはは特に光に対し、甘えん坊になった。

今でもなのはは、光を『光兄』と呼んで慕っている。

そのことを恭也は承知しつつも、悔しがってしたけど。

前に『同じ声なのに、どうしてここまで違う』とか言っていた。

文武両道な彼が中学に入っても、帰宅部であり続けるのはできるだけなのはの傍にいる為だ。

思えば、なのはのことはいつも彼に押しつけてばかり。

今だってそう…

でもお願い光…いや、鏡の騎士、ミラーナイト…

なのはを…お願いね。

「でも心配なのは変わり無いわ、だから…気をつけていきなさい」
実のところ、ウルトラマンゼロから出された宿題に関して、まだ
明確な答えは出ていない。

フェイトちゃんはどうしたいか…。

一応、初めて会った時から知りたかったジュエルシードを集める理由、どこか寂しさを感じさせる目をしている理由。

諸星勇夜越しにとはいえ、なのはは知ることはできた。

だがその内容は、なのはの想像を超えたものだった。

テレビやネットなどのメディアや、フィクションからぐらいいしか聞かない。

親から虐待を受けながら、無理やりロストロギアを集めさせられ。

しかも、彼女は母の实の娘のクローンで、母はフェイトを娘と認めず。

彼女自身、その真実を知らないまま、ジュエルシードを集めれば、実は元になった人間の記憶の中にあるかつての母に戻ることを信じて、自分とも何度も戦っていたことを突きつけられた。

なのはも、昔は周囲に疎外感と孤独を感じ、それなりに辛い過去を体験しているが、彼女に比べれば自分は幸福であったと認識せざるを得ない。

そんなフェイトちゃんより恵まれた自分に何ができるんだろ？

勇夜さんの言う通り、ただ知りただけでは駄目なんだ。

それだけじゃ、また中途半端に後悔するだけ。

だから自分に『宿題』を出してくれたんだ……また半端に関わったせいで、自分を攻めてほしくなかったから。

まだ自分なりの解答は見つけられない。

自分がフェイトちゃんをどうしたいのか、どう接して向き合おうべきなのか……

アリサちゃんとすずかちゃんの時よりも、ハードルが高くて多いし……

正直……『腹を括れる』か……すらも分からない。

でも……『あの時』みたいに、このまま何もせず後悔して、何もできないまま終わってしまうのも……嫌なんだ。

それでもユーノ君と光兄と最後までやり遂げると決めただ。

ジュエルシードを集めることも。

それが引き起こす災害からみんなを守ることもだつて。

そして……自分がどういう形で生まれたこともしらずに、お母さんと分かり合えない日々を送っているフェイトちゃんを、勇夜さんと一緒に助けたいことだつて。

「うん、ありがとう、お母さん」

だから今は、背中を押してくれるお母さんに感謝の言葉を送った。

少し時間を巻き戻す。

ユーノがアースラと交渉していたその頃、光は裏山で、

「はアアアアア！」

義父の士郎と木刀で打ち合っていた。

無論御神流なので、小太刀の長さで二刀流だ。

身体能力では光の方に軍配が上がるのだが、御神の剣士としてのキャリアは士郎の方が上。

よってほぼ五分五分の稽古だった。

それを義兄の恭也と義姉の美由希が見学している。

『なのは、光さん、決まりました』

その時ユーノから念話で結果を報告してきた。

どうやら交渉は成立したようだ。

だがユーノの話では当分学校は休まなければなさそうだ。

自分はまだ良い。

危険な藪の中に入る覚悟はあるし、己を守れるだけの力は日頃の研鑽で積んでいる。

けど……なのはにその藪の中を一緒に通らせることになるのは、気が引くし、抵抗感がある。

勇夜^{セロ}も、きつとそのことで悩みに悩んだはずだ。

フェイトの境遇は、友と妹を迷わせるには、充分過ぎる重さを有している。

だから『腹括れるか?』とあの時、なのはと己に問おたんだ。

思えば……『父』が、自分がエスメラルダの騎士になることを、最後まで反対したのは、今の自分と同じ気持ちだったからなんだ。

あの頃の自分は、二次元人の父に、複雑な感情を抱いていた。分かりやすく言えば反抗期。

騎士としては尊敬し、目標ではあった。

でも……『父』としては……『親』としては……許せなかった。

エスメラルダ人であった自分の母は、生んだ時に無理が祟って帰らぬ人となった。

父だってそれを悔んでいたのに、自分は父を攻め、『見殺しにした』と罵倒し、反対を押し切って騎士になり、『ミラーナイト』という名を王家から承った。

そのささくれた心はエメラナ姫専属のナイトになり、彼女や同僚の騎士たちの交流で治まっていったが。

でも……和解は果たせぬまま、父は……ベリアル軍の侵攻で命を落とした。

自分も騎士の本懐を果たせぬまま、悪に堕ちそうになった。

だから、ほぼ同じ身の上でありながら父セブンと和解できたゼロが、羨ましかった。

なのはへの想いも、あの時の後悔をしたくない、させたくないから……

それなら、なのはの意志を尊重させるべきなんではあるが。

でもそれにはどうしても、なのはをフェイトに戦わせることになる。

誇りある騎士、戦士たち同士にとっては気高く、互いを讃えあう神聖なものでも……

やはり『戦い』とは、血生臭く汚れ……多くの人を弄び、命を奪い、狂わせる魔物。

『魔法使い』を続けるなら、恐らくずっとなのはを苦しめる鎖シレンマになることは違いない。

だが…『取り柄が無い』自分に悩んでいたなには、『魔法』は指し込んできた光明きほうでもある。

そう簡単には、手放せないだろう。

自分が、御神流の稽古に励んでいたのも、『力』が自分から消えていくかもしれないことへの……恐怖と不安があつたから……
けれど力を持つことは、己の無力さという傷を助長させる塩でもあつて……

「例の友達からかい？光」

念話を感覚的に察したのか士郎はその話しかけてきた。

自分たちが今何をしているのかは、話してあるのだが、実はその友達が今家で飼っているフェレットであることは内緒にしていた。

自分もなのはを巻き込んだことに関して、あれほどユーノにお仕置きしたのだ、もし恭也兄さんあたりが知ったらどうなるか…

自分が言うのも何ですが、想像するだけでも寒気がしてきました。

『お前を殺す』程度ではすまないかも……

「はい…暫くなのはと、家を離れなければなりません」

「そうなんだ……ごめんね光」

「なぜ美由希姉さんが謝るんですか？」

「だって、昔からなのはのことは、光にまかせつきりだったし…」

「気にしないで下さい」

「自分も、あのロストロギアやフェイトのことを、なのはに『まかせつきり』だ、おあいこ以上に高くついでるのに…」

「そつだぞ美由希、光は兄として当然のことをしてるんだ、だから…だから…」

あれ…なぜでしょう、デジャヴと言う単語が今浮かんだのですが…

「見ないでくれ…こんな醜い兄を…」

「恭也兄さん…」

気づけば兄さんはかつての自分と同じようにこちらに背を向けて体育座りをしていました。

なのはが自分を『光兄』と呼んで、そろそろ微妙なお年頃に差し掛かるいまでも、自分を慕っていることを、羨ましがっていることは知っていましたか…

どうにも気まずいです。

前に『同じ声なのにどうしてこうも差がつく』と言って落ちこんでいたそうなんですが。

ゼロも、『体育座り』をして落ちこんでいた僕に初めて会った時は…

『最後まで守る為に戦い抜いた、勇者の姿だ！！お前は、立派なやつだぜ』

と叱咤してくれましたし、その言葉に偽りは無いでしょうが、内

心ではこんな気持ちを抱いていたのでしょうか？

「大丈夫だ、学校には上手く説明して、休みをとらせるから……」
家族がこうしてフォローしてくれているのだ。

「なのは小さい時は『色々あったからな』……なのはには余り父親らしいことをしてやれなかったし、光がいなきや、ずっとあの子は周りに遠慮して生きていたかもしれないしな……だからさ……」

「父さん……」

「ミラーナイト……なのはを……頼む」

それでも……

自分たちには、自分たちを想ってくれる愛しき人たちがいる。

共に走る朋友^{とも}たちも……

守りたい人と世界だって……

「はい」

なら私も、最後までこの事件を収束させるべくやれることやろう。
人として、戦士として。

そして……ミラーナイトとして。

なんか自分の極端な物の見方がダダ漏れな回になった。

でもどうしても……「~~~~はクリーンなエネルギーです」的な謳い文句が被ってるような気がして……

キラザビートスターの予告編キターー！！！！
やんちゃさが健在なゼロに安心。

「ブラックホールが吹き荒れるゼツ！！！！」
サーガの予告も出ないかな。

ジャン「ところで作者」

作者「なんだよ焼き鳥」

ジャン「君までその名を！……まあいい、新メンバーに加わりそう
なジャンキラーはどうするのだ？」

作者「そついやそつだった……何らかの形で本編に出せるようアイ
ディアを練っています」

ミットチルダの高速道路を走る車たち。

その中を一際目立つ格好をしたバイクが一台走っている。

地球人から見ても目立つデザインバイクだが、ここミットチルダにおいてそれは、確かな異彩を放っていた。

そのバイクの名はVMAX。

地球のヤマハと言う日本の自動車事業に携わるメーカーが開発したバイクだ。

そのバイクを一言で表すならそれは………『暴れ馬』だ。

地球仕様でも最大で1600CCものの排気量と200PSのパワーから放たれる驚異的なスピードで乗る者を圧倒する、加速の一点を徹底追及されたモンスターバイク。

その拘りの余り、車体は重過ぎ、足付きは悪い、燃料容量は少なめ、日本ではその加速性能を持てあます。

騎士王みたいな人を遥かに超えた存在でないと、まともにスペック全力全開で使えない鬼畜マシン。

今高速道路を疾走しているのは、見た目こそ西暦2007年からフルモデルチェンジして発売されたモデルだが、内部構造はミットチルダ仕様にするためにかなりの改造がなされ、最早容姿が同じな

だけの別物となっているが、そのコンセプトはきっちり受け継がれている。

そんなエッジの効いた怪物マシンを苦も無く操っている物好きなライダーは、何を隠そう、諸星勇夜であった。

彼は今、ある目的で、ミットチルダの郊外にある森に向かっていった。

場所は変わってここはアースラの会議室。

「と言う訳で、本日0時を以て、本艦の全クルーの任務はロストロギア、ジュエルシードの搜索と回収に変更されます」

リンディは会議室に集まったクルー + に今後の任務内容を通達していた。

「また本件においては特例として、問題のロストロギアの発見者であり、結界魔導師であるこちら」

「ユーノ・スクライアです」

「それから彼の協力者であり、現地の魔導師さん」

「た、高町なのはです」

「そしてなのはさんのお兄さんでもある剣士さん」

「高町光です」

その＋がこの三人だ。

「「「よろしくお願いします」」」

紹介された三人はクルに挨拶をした。

緊張でやや強張っているのは、ユーノと対照的に光は、凜と堂々とした姿勢と流麗な佇まいで頭を下げた。

さすが王制国家のナイトをやっていただけある。

なおその佇まいに一目惚れした女性クルーがこの時、大量に発生したらしく、アウトロー寄りな勇夜と人気を二分する事態が局内で起きたらしい。

場所はさらに変わって、ミットチルダをVMAXカスタムで疾走していた勇夜は今、ミットチルダの南部にあるアルトセイム地方と言う、近未来の大都市風なクラナガンとは対照的に緑の森林がほぼ人の手が加えられずに残っている辺境の地域に来ていた。

勇夜はVMAXから降りると、バイクは光を輝かせたと思うと、リンクへと消えていった。

リンクに限らず、デバイスには、4次元ポケットと同じ収納機能があるのだ。

『それで、これからどうするおつもりですか？マスター』

「悪い、そこまで考えてなかった…」

一度ミットチルダに戻ったのは、事件とその関係者に関する資料の収集するのが理由の一つであった。

今日もそれが目的で、足を走らせていた。

フェイトたちの生家である『時の庭園』。

今は、マルチバースの海に佇んでいるが、前はここに停泊して生活していたらしい。

でもフェイトにとっては生まれ育った地なんだろうが、後はせいぜい、フェイトがアルフと、この辺りを公園代わりにして遊んでいたぐらいか。

ただ、なんとなくここに来れば何かがある。

痕跡が残っている根拠も保障も無いのに…

曖昧だが妙に胸に引つかかる直感のまま、気がつけば来ていた。

いくらミットチルダに来たからって…

どうしてここに『何かがある』なんて考えたんだか…

行きあたりばったりにも程があるな。

気がつくと自分は、自嘲していた。

『マスター』

「どづした？」

『ここから南西5？先に建築物の反応があります』

こんな辺境の地に民家？

だれかが都会の生活に疲れて、隠居生活でもしてんのか？

ともかく、このまま手ぶらで帰るのも癪だったので、行ってみることにした。

「じゃあここからは、ジュエルシードの位置特定はこちらで行うから、場所が分かり次第、現地に向かって貰います。」

ブリッジの艦長席でリンディは、なのはたちに任務の概要を話していた。

「……はい」「」

了承する一同。

「艦長、お茶です」

とそこにエイミィが、湯のみと、角砂糖とミルクというシュールな組み合わせで、お茶を淹れて持ってきた。

「ありがとう」

受け取ったリンディは迷わずに、湯のみの中に砂糖とミルクをドバーと勢いよく入れ、恍惚とさえ表現できる満足げな表情で、一服していた。

本人にとつては、好きな組み合わせなんだろうが、やはり見てるこっちは胸焼けとの戦いを強いられ、それに慣れそうも無い。

「そう言えば、こちらから頼んでおいてなんなのだけど……二人とも学校は大丈夫なの？」

「あ、はい、私も兄も家族に説明してありますので、大丈夫です」

ちなみになのはは、アリサとすずかにも全容は伏せつつ、家を空け、学校を休んでであると伝えていた。

その間のフォローは、まだ関係が疎遠な状態のアリサが積極的に行っていたとのことである。

「これなのかリンク？」

『はい、間違いありません』

指定された先にあつたのは民家だった。

一階建てで、木材で組み上げたシンプルなもの。

どうやら、今は空き家になっているようだ。

だが一応、ドアをノックした上で、俺は中に入る。中はテーブルと暖炉しかない殺風景な部屋だった。

床をこすると、指に埃がこびり付いた。

空き家になってから、それなりに月日経っている。

「2、3年ってところか…」

部屋中を見渡してみると、窓際に置かれたテーブルにトランクが

一つ、置かれていた。

無粋なのを承知に、俺はフックを外し、開けてみる。

そこには…

分厚い一冊の本と…

添えられた花と…

「『DEAR MY FATE』……これって…」

と書かれた一通の封筒だった。

思えば…俺がここに来たのは、『彼女』がフェイトにこれを渡してほしいという、意志を受け取ったから、だったのかもしれない。

なのはと光とユーノが、アースラに同行してから10日ほど経った。

その間は特に記すことは無い。

異相体との戦闘がいくつかあったこと。

ジュエルシールドの反応が検知され、現場に急行したが、フェイトたちに先を越された、或いは逆に先越したこと。

戦闘になった時は、3人のコンビネーションで対処したこと。

残ったロストロギアが6個にまで減ったことぐらいだ。

ともかく、ここ数日は、フェイトたちと鉢合わせとなる事態がまったく起きずじまいであった。

後は、何があったのかと言つと。

三日前。

光は、異相体と戦闘にもなった海鳴臨海公園で待っていた。
ミットチルダから戻ってきた勇夜から、自分専用のデバイスを受け取るためだ。

彼の二次元人のワープ能力を使えば、アースラの個室から、ここに来るまで朝飯前だった。

事前になのはたちに何か動きがあれば直ぐ念話で呼ぶよう頼んであるので、非常時に後れをとることはほぼ無い。

「おい！」

海を見ながら待っていると、勇夜がやってきた。

指定の時間から2、3分早い到着だ。

因みに光は15分前から来ている。

「長旅御苦労様、まあ勇夜にとっては隣町に行く感覚だったのでしようけど」

「皮肉のつもりか？」

「滅相ありません、本当のことを言っただけです」

「ならいいけどさ」

実際、勇夜はゼロは半日もかからずに、次元の壁を越えられる。

シニカルさ抜き的事实であった。

「で…例のものは」

「ああ、できてるぜ」

勇夜はリンクから、鏡の星の紋章によく似た形をした宝石が埋め込まれたプレスットを取り出し、光に渡した。

「希望通り、基本形態は二振りの小太刀にしておいたぜ、マニユアルデータもプログラムもリンクがお前の戦闘データを元に作ってそん中に入っているから、その気になりゃ今からでも使えるぞ」

「ありがとうございます」

勇夜が渡したのは、光自らデザインした設計データを元に作成してもらった、零牙と同じ、アームタイプのデバイスであった。違いがあるとすれば、

『おはようございます、マスター光』

AIが埋め込まれていることだ。

リンクと違い、声は男性のものであった。

「で、そいつの名前どうする？」

「そうですね…シルバーライト…でしょうか…構いませんか？」

『了解』

「しかし、よく一週間でできましたね…」

「元管理局の技術顧問だった行きつけの職人さんお手製だ、典型的な石頭だが腕は確かだぜ」

「そうなんですか…」

彼の言う通り、シルバーライトは一週間の突貫工事できたとは信じられないほど、完成度が高かった。

「ところで、ジュエルシードはあとどれくらい残ってる？」

「6個です、今は海底を重点的に探しまわっています」

海ん中か、可能性は0じゃねえよな。

「イカに憑り付いて、クラーケンになったりとかはねえのか？」

「今のところは、ありませんね…」

光は苦笑いで返した。

だがこれも可能性は0ではないのがみそであった。

「そちらの方は収穫はあったのですか？」

「あ…ああ、まあ…」

「勇夜の表情に『哀愁』の二文字が漂っていた。

「勇夜？」

「色々さ……」

とりあえず今詳しく聞くのはよそう、そろそろアースラに戻っておかないと。

「そうですか…僕はアースラに戻りますが勇夜はどうします」

「やめとく、まだ陸地に散らばっていないとも限らないからさ」

「それもそうですね……ではまた…」

それから三日間。

アースラでは粘り強く探査は続けられていた。

フェイトたちも、探すのに手こずっているのか主だった動きを見せず。

出撃する機会も減り、なのはたちは専らアースラでデバイスによる仮想訓練をするか談笑する日々を送っていた。

「はあ…今日も空振りかもしれないね…」

なのはとユーノは、今アースラの食堂で食事をとっている。

ちなみに光さんは、部屋で仮想シュミレータによる訓練中。

勇夜さんから渡されたデバイスを今の内に慣らしておきたいとのことだ。

「全部集まるまで、結構長くかかるかもしれない…ごめんねなのは、まだ友達とも喧嘩したままなのに」

「ユーノ君が気にすることないよ」

「でも…喧嘩になったのは、僕たちに関わってることが原因なんだよね？」

「にはは…まあね…」

関わりと決めたのは自分の意志だし、アリサちゃんを怒らせてしまったのも自分だ、今やってることを片づけたら、そちらもちゃんとけじめをつけよう。

「もしかしたら、家族や友達に『魔法』のことちゃんと話すことになるかもしれないけど、あ、ちゃんと秘密にするよう言うからね！」
「大丈夫、もうこうなったらちゃんと話してあげないと、みんな納得してくれないと思うから」

「そうだね」

「それでなのは…勇夜さんから出された例の『宿題』の方は…」

「うん…まだなんだ…」

なのはの原動力であった、どうしてフェイトが、あんな悲しく寂しい目をして、ジュエルシードを集めているか…

本人から聞いたものではないにしろ知ることができた。

けどその先だ、彼女をどうしたいのか、何をしてあげたいのか、

まだ答えは出ない。

母の願望から生み出され、ただ『アリシア』では無いという理由で拒絶され、その『願望』を現実にするための道具としかみなされず、本人はそれすらも知らぬままに、母に報いようとする孤独な女の子。

そんな子に自分は どうしてあげたいのだろう…

「あたしも昔は一人ぼっちだって思ってたことあったけど…」

「なんで？ …… あんなに優しい家族がいるの？」

「実はね…」

わたしのお父さんは、翠屋のオーナーになる前は偉い人のボディガードをする仕事をしていました。

御神流もそうした仕事のために代々伝えられてきた剣術だそうです。

わたしが三歳の頃、翠屋を開く為に最後の仕事に臨んだあの日、お父さんは大ケガを追って入院をすることになり。

お母さんは翠屋の営業に、恭也兄ちゃんと美由希姉ちゃんと光兄は学校の合間のお手伝いで忙しく、わたしはみんなが帰ってくるまで、家で一人待つ事が多くなりました。

まだ小さいながらも、我儘を言うてはいけません。

迷惑をかけてはいけません。

我慢しなきゃ …… 耐えなきゃ いけません。

そう自分を抑えつけながらおくる毎日でした。

でもやっぱり……

一人でいることが……

傍にいた人が誰もいないことが、寂しくて寂しくて……

わたしは誰にも必要とされない。

いらぬ子なんだって……

何もできない、取り柄がない子だって……

何度頭を過ったか……

そんなある日のことでした。

光兄がいつもより早く帰ってきました。

この頃の私はまだ『光兄ちゃん』と呼んでいました。

光兄は、灯りも点けずに待ってたわたしを見て、心を痛めたのでしょう。

「寂しくないですか？」

お馴染みの丁寧な言葉遣いで自分を心配してくれました。

でも心配させちゃいけないと思った私は無理に笑って。

「大丈夫」

と言いました。

その日の後も、光兄は毎日早く帰って来て、傍にいてくれました。でも、素直になれない私はある日。

「大丈夫だから、我慢するから！なのはを放っておいて！」

「ずっと、なのはを一人にしたのに！どうして、一緒にいてくれるの！？」

と云ってしまいました。

直ぐに後悔したけど…

小さいなりに愛想をつかれたと思ってしまいました。

そしたら…

光兄はわたしを抱きしめてくれました。

何も言わずに、強くも、せつなくも、優しく。

そしてただ一言。

？一人にさせて…ごめんね？

言葉とともに、その想いを抱擁で伝えてくれました。

その時、溜めこんだものが一気に溢れ出ました。

いらぬ子だって嫌なことを考えてた自分が…

心配させてしまった自分が…

何より何もできない自分が許せなくて…

そして自分を抱きしめてくれたこと。

一緒にいると言ってくれたこと。

それが、とても嬉しくて…

その後は、その言葉の通り、翠屋の手伝いも行いながら、できるだけ自分と一緒にいて、遊んで、笑ってくれました。

わたしも、そんな兄を素直に何度も甘えたりしていました。

その頃からです。

私が光兄と呼ぶようになったのは…

「そ…そんなことがあったんだ…」

「な、なんか…色々と重くなっちゃったね…」

なんとか、話題を明るいものにしなきゃ…

不自然にならないように、話の内容を軌道修正と。

「そう言えば、ユーノ君の家族って」

「ああ、僕は元々一人だったから…」

「え…そうなの？」

ユーノによれば、彼の両親は発掘作業中に起きた落盤事故で帰らぬ人となったとのこと。

場を明るくするつもりが、逆に墓穴を掘ってしまった。

彼と違って、なのはは親兄弟全員いるだけに、どう答えればいい

か、言葉が見つからない。

どうしよう…

「いや！確かに両親はいなかったけど、部族のみんなに育ててもらったから、一族みんなが、僕の家族なんだ」

ユーノ君は慌てながら返してきます。

「そっか…」

考えて見れば、ジュエルシードを集めることに時間を費やしていたから、こうしてゆっくり話すのは久しぶりだった。

まだ会ってから数週間だから、ちょっと変な言い方かもしれないけど。

「雑談ですか？二人とも」

噂をすれば光兄が、昼食のトレイを携えて隣にやってきた。

『あの時』のことを思い出して話したせいかな、急に恥ずかしくなつて顔が赤くなり出しました。

「どうしましたなの？」

「え…ううん、な、なんでも無いよねユーノ君」

と言ったものの、顔は赤いままなので説得力がありません。

「あ、えーと、そうだね」

「………？」

笑ってごまかそうとするけど、やっぱり駄目……かな。

そう考えていた時でした。

突然艦内にアラートが響く。

『エマーゼンシー！ 搜索域の海上にて、大型の魔力反応を探知！』

同時に事態を知らせるアナウンスも響く。

三人は気持ちを切り替えて、アースラのブリッジへと向かった。

例の海域では、波が荒々しく蠢き。

どす黒い雲は、台風並みの風と雨を起こしていた。

その真っ只中に、フェイトとアルフはいた。

何を隠そう、この異常気象を起こしているのは、フェイトなのだ。アースラと同様に残りのジュエルシードが海にあると踏んだ彼女がとった行為は、余りに無謀すぎるものであった。

「撃つは雷、響くは轟雷。アルカス・クルタス・エイギアス…！！」

九つの魔カスファイアから稲妻がほとばしった。

以前、海鳴市街で行ったことと同じく、ジュエルシードに魔力を撃ち込んで強制発動、位置を確認し、再封印を行うと言うもの。

だがその以前と違って、今度はそれを6個まとめで行おうとする

ものであった。

魔法もその分大掛かりなものになる。デバイスのサポートで発動に必要な詠唱は最小限に抑えられるが、大規模魔法となると、術者が直に自分の言葉で詠唱することを余儀なくされる。

彼女の恵まれた魔力量でも、その大半を奪う大規模な雷撃だった

(このプランに間違いは無いけど)

相手は下手するとゼロの世界の怪獣以上の被害を及ぼす怪物。それを一気に6体を無理やり起こして、その6体相手に消耗した体で戦うのである。

プランと表現するには、荒っぽく無茶で、リスクが高くつく行為であった。

稲妻は荒れる海原に降り注がれると、撃ち込まれた海中から、青白い光を輝かせる。

ジュエルシードが発動したのだ。

それも一度に。

「はあっ…ああっ…見つけた…」

海中の光は、さらに輝きを増し、それに呼応するように、波が生き物のようにざわめき始める。

(これだけの魔力を撃ち込んで、更に全てを封印するなんて…。こんなの、フェイトの魔力でも、絶対に限界を越えてる…)

大技の行使で、もう既にフェイトの息は荒く、疲労が溜まり始めている。

執念場とは正にこのことだ。

地道に一個ずつ探す手もあつたが、もう彼女のメンタルにそんな余裕は残されていなかった。

「アルフ！空間結界とサポートお願い！」

「ああ！任せといて！」

でも自分にできるのは、彼女をサポートし、守ること。

アルフはそう自分に言い聞かせながら、眼前の大波に挑むのである。

艦橋に入った光、なのは、ユーノの三人は、モニター越しにその状況を見ていた。

「光兄、フェイトちゃんは何を？」

「この前のように、強制発動して封印するつもりでしょう、でも今度のは規模が違いすぎる……」

「なんともあきれた無茶をする子だわ……」

「無謀ですね…間違いなく自滅するでしょう、あれは個人が出せる魔力の限界を超えている」

なのはは光、リンディ、クロノの三者三様の言葉から、少なくともフェイトが危険な状態にあることを理解した。

映像越しに見ても、極度に疲労している体に鞭を打ち戦い、苦戦を強いられていることは一目瞭然。

「あ、あの、わたし急いで現場に！」

「その必要は無い」

モニターの向うへ急行しようとするのはをクロノが引きとめる。冷徹とさえ、言えるほどの冷静な口調で…

「彼女が自滅するまで、静観すると言つのですか？」

光はクロノの意図を読み取った。

「そうだ、たとえ自滅しなくても、力を使い果たしたところで叩けばいい」

「でも！」

非情な宣告。

だが正論であり。

この場における最も合理的な選択肢であつた。

「どう足掻いても、フェイトが行おうとしているのは、個人的な理由から来る違法行為であり、犯罪であり、まだ幼い少女であるとしても、覆しようのない事実。」

「捕獲の準備を」

「了解」

クロノは年上の部下であるクルーに指示を出す。

「残酷に見えるかもしれないけど、これが現実、わたしたちは常に最善の選択をしなければならないの」

最善の選択、組織の人間は時に私情を捨ててことに当たらなければ

ばならない。

が、光はともかく、小学生のなのには納得しろと言われても、無理な話であった。

とは言え、命令を聞くという条件でアースラに同行しているため反論もできない。

だが目の前には、魔力刃を形成するだけの力も残っていない、満身創痍の少女がいる。

けど、冷静に考えてみればなのは一人が、向うに行くだけで事態が好転するとは限らない。それどころか、今までみたいに妨害に来たと思われて……余計事態がややこしくなる危険性もある。

ジュエルシードを集めるのが、彼女が縊る、たった一つの希望^{かり}、幼いなのはも、『真実』を知ったことでそれを思い知らされたけど……このまま放っておいたら……1個だけでも危ないのに、6個全部が暴れることを許していたら、危ないでは済ませられない事態になる。

どうしたらいいの？

どうにかして、フェイトちゃんを止めたいのに。

拳に力が入り、迷いの迷路に嵌り、抜け出せなくなりそうになる寸前。

「（何そんなところで油売ってんだ？）」

なのはの脳裏に念話で声が響いた。

「（勇夜さん？）」

その相手は、自分とフェイトを何度も助けてくれた諸星勇夜その人。

「（リンディたちの言い分に間違いは無いさ、俺も正しいと思ってる、けどな、なのはの……フェイトへの想いはその程度のもんだっただのか？）」

先程のクロノの発言とは対照的に荒っぽい温かみのある言葉が響いてくる。

「（でも……）」

「（命令無視の落し前は僕たちがつけます）」

「（光兄……）」

「（なのは、あの子の元に行ってあげて、僕も行くから）」

「（ユーノ君）」

次元を超えてやってきた二人の巨人と一人の少年がなのはの背中を押して行く。

いけないことは自覚してる。

でも同じ想いを持つてるのは、わたし1人だけじゃないんだ。

同じ想い？共有する……こと？

その時なのはの脳裏に閃きが走った。

そうか……ようやく今……掴めた。
自分がフェイトちゃんをどう向き合いたいか。

「（僕が結界内へワープさせます、『僕たち』も直ぐに追いつくので先に行って下さい、なのは、ユーノ）」

「（うん!）」

「（はい!）」

光はなのはとユーノに向けて手を翳すと、掌から光の粒子が飛び二人を包み込んだ。

「君たちは!」

何をしようとしているか察したクロノは、止めようとするが。

「待っただ」

目の前に転移魔法で勇夜が現れ、それを阻止する。

「ありがとう、光兄、勇夜さん!」

なのはのお礼の言葉に二人は頷いて返す。

無言の頷き…

ただそれだけで二人から、勇ましさと頼もしさを感じた。

「ナイトムーバー!」

光がそう言うとともに二人はその場から消えた。

「君たち!今何をしたのか」

「説教なら、後であいつらの分まで聞いてやるよ、だけどな…この

まま呑気に待ってたら、色んな意味で手遅れになるから……俺たちも行ってるぜ」

「罰則も僕たちがお受けいたします、ですが、僕たちは僕たちの『最善の選択』をしたままでです」

二人にその気は無かったが、この場にいる人たちにとってはこの上ない皮肉だった。

現にここで静観を続ければ、アースラの面々では手に負えなくなるのも、可能性から現実に変わるからだ。

二人の足元に魔法陣が現る。

「「転移！」」

勇夜と光　二人の戦士は、魔法使いである彼女たちを助けるべく、その場から消え去っていった。

〔キャラ紹介 part2〕

?シルバークライト

イメージCV：小野大輔

概要：光が零牙を参考にして作成した大まかな設計データを元に、勇夜曰く「行きつけのデバイス職人」が作り上げたアームドデバイス（その職人さんはA'S編に登場予定）。

零牙と違い、AIを搭載している、性格は光に似て騎士のように礼儀正しいが、まだ生まれたてなので口数は少ない。

同様にカートリッジシステムも搭載している。

基本モードは鍔無しの二振りの小太刀で、色は緑色がメイン、どの形態も二刀流&ツーンハンド。

右手用にAIのコア、左手用にカートリッジ装填口がある。

主にプログラムされている魔法はミラーナイトの技をアレンジしたものが多い。

待機モードは二次元人の紋章が彫られた腕輪で光は右腕に装着している。

え？中の人がどっちもガンダムでは冷徹な戦闘マシンの仮面を被ったガンダムパイロットで、AIRでは国崎往人を演じてたじゃねーかって？いいじゃん！国崎最高！！

・ショートセイバーモード

基本モード、形状は鍔無しの小太刀。

光が御神流を会得していることもあり、魔法の補助抜きでも切れ味抜群。

エクシアの実体剣の如く、魔力障壁に有効で、使い方次第では魔力刃も切り裂くことが可能。

・ビームセイバーモード

小太刀の刀身が実剣から魔力刃になった形態。

実体がある物体には効果的だが、その分魔力消費量はショートセイバーより多く、魔力障壁は撃ち破りにくい。

基本形態がさしずめガンダムエクシアのGNソードなら、この形態はGNビームサーベル。

・リングエッジモード

ミラーマンRELEXのミラーマンが使っていた武器をイメージした、半月形のチャクラム形態。

刀身から、カッター状の魔力弾を発射し、拳銃のように使える。

その連射力は零牙ガンモードより高い。

例えるなら、零牙ガンモードがデビルメイクライ4のネロが使っブルローズならリングエッジモードはダンテのエボニー&アイボリー。

・ハルバードソードモード

フルドライブ形態、ガンダム00のスサノオが使う実体剣、シラヌイとウンリュウをイメージ。スサノオの剣と同じく実体剣と魔力刃両方の機能を有している。当然その分魔力の燃費がかさむ。

名前の通り連結させて薙刀のように使用可能。

?クロノ・ハラウン

CV：高橋美佳子

概要：若干12歳で管理局執務官の地位に就いた魔道師の少年。

勇夜とは小学校からの腐れ縁。

原作では父のクライド・ハラウンはクロノが3歳の時に殉職したが、本作では8歳の時に変更（クロノの名台詞に、より重みを出すため）。

本作でも堅物な性格が災いして、勇夜やエイミーにたびたび弄られたり（例：勇夜から石頭を通り越した意味合いで『鉄頭』と称される）、KYと呼ばれても仕方ない、なのはたちの一騎打ちに横槍を入れてしまったりする。

年齢の割に小柄で変声期もまだ来ていない。

冷静沈着でクールだが、実は感情が表に出がち、たとえば不機嫌なら、不機嫌であることが100%周囲にダダ漏れでそこをエイミーにとよく指摘される。

社員としての責務を実直に果たそうとする一方、人手不足など組織のしがらみで、後手に回りがちな管理局の現状を歯がゆく感じ、未だに囑託のままな勇夜に対しても、実力を認めているだけに複雑な心境を抱いている。

クロナの派な方々には悪いが、『無印には残ってた』なのはへの好意は最初から無し、フェイトの兄ボジも勇夜に実質奪われ……あれ？しまった！…原作より不憚な立ち位置になってる？……おまけに周り（オーバーAAAなのにはたちに、スーパーヒーローな勇夜たちなど）が出鱈目に強いせいで、余計影に潜みがちに……

勇夜とは意識的に対になるようにしつつ共通点もある。

（勇夜：長身　クロナ：小柄、長髪　短髪、母と死別　父と死別、黒髪、バリアジャケットのカラーが黒寄り、使用デバイスがAI非搭載）

ある意味勇夜とは青島刑事と室井管理官、ユーリとフレンのな関係（ただし勇夜はユーリの仕事人的行為には否定的な考え）。

A、S編では、心の奥に隠していた闇の書への憎悪に直面することになる。むしろ何で本編で出てこなかった……ゲームでちょこっと出てきたけど。

?リンディ・ハラウン

CV：久川綾

概要：アースラの艦長、提督にしてクロノの上司兼母。

基本的な設定は、他のキャラと比べると原作アニメからあまり変化は無いが、実は、勇夜が囑託魔導師の試験を受けた時に担当官をしていた。その際彼をスカウトしようとしたのだがバツサリと断られた上、勇夜は日頃から抱いていた管理世界の問題点を痛烈に指摘、当時ただのクラスメイトの域を出ていなかったクロノと後日いさかいになり、模擬戦することになったという経緯がある（勇夜曰く「なんやかんや」の大まかな流れ）。

さすがに反省し、リンディが日本の文化に興味があることを知った勇夜は、お詫びにと緑茶を送るのだが、結果的に彼女の甘党嗜好を促進、酷くさせてしまうことになるのは、言うまでもない。

作者とウルティメイトフォースゼロ座談会

作者「さて今回は、ウルティメイトフォースゼロの面々との座談会をお送りします、ご存じの方もいるかもしれませんが、改めてメンバー紹介を、みなさんどうぞ」

ゼロ「ウルトラマンゼロ、ウルトラセブンの息子で、このチームのリーダーだ」

ミラー「ミラーナイトです、かつてはエスメラルダの騎士で、こちらの作品では高町家の次兄です」

グレン「俺の名は、グレンファイヤー、前は宇宙海賊の、今はゼロが作ったチームの炎の用心棒だ」

ジャン「ジャンボット、エスメラルダ家に代々お仕えしてきた宇宙^{スターコル}船にして、ロボットだ……しかし良いのか？まだ私たちは本編には出ていないのだぞ、作者」

作者「せっかくの機会なので、改めてあなた方のチームのことを世の人たちに知ってもらおうと思ひまして全員呼んだんです」

グレン「出番があつて、知名度が上がってくれらなら別にいいぜ、俺の元になったヒーロー『ファイヤーマン』とそいつが主役の番組は、サ エさんにぼろ負けして打ちきりになつちまつたんからさ」

ジャン「のっけから返答に困ることを……」

作者「知らない方々に、彼らは何者かと説明しますと、彼らウルテ

イメイトフォーエスゼロは『ウルトラマンゼロ the movie 超決戦 ベリアル銀河帝国』の主役、ウルトラマンゼロと、リニユールされた円谷ヒーローたち、ミラーナイトにグレンファイヤー、ジャンボットによって結成された宇宙警備チームです」

ミラー「少々スカウトの仕方が手荒でしたよね、ゼロ」

グレン「だな、どっかの海賊王を目指す妻わら帽子みてえだったぜ」

ゼロ「ぐ……お前らだつてまんざらじゃなかったじゃねえか」

ジャン「当たり前だ、でなければ姫様の護衛をすっぱかして、加入するわけがないだろう」

グレン「お前は何かとつけて、姫様姫様と口にするよな」

ジャン「無礼者！エメラナ姫を愚弄するのか貴様！？万死に」

グレン「ちよつとタンマ！あんな今どき清楚……だったか？で、かわいい姫様に文句なんか出ねえよ」

ジャン「ならよろしい」

ミラー「危うく別のキャラのセリフが出るところでしたね……」

ゼロ「そろそろ良いか？これは作者の書いてる作品をメインで座談するんだろ」

作者「はい、質問事項があれば、ネタばれは避けつつもできるだけお答えしますので」

ゼロ「まずは俺からな、その…俺のフルネームのことなんだが」

ミラー「二次創作とはいええ、フルネームが明らかになったウルトラマンですからね、ゼロは」

作者「少し話は変わりますが、本作のゼロの人間態の名前をどうするか、かなり悩みました、当初は『零』が『りょう』とも読めることを知って諸星零にしてみたのですが、しっくりこなくて……」

ジャン「他には、仁^{じん}、蓮^{れん}、ウルトラマンプレミア2011でのゼロの人間態の名でもあったシンが候補だったそうだな」

作者「はい……ですがこれらもしっくり来なくて……で、とある洋画の吹替えをした声優さんの名前を見た時に、これだ！」と

ミラー「名は内田夕夜さんでしたね、最近はレオナルド・ディカプリオの吹替えを担当している方と聞いています」

作者「その内田さんの名前を元にして、諸星勇夜とネーミングが決まったのですが…今度はどうしてその名なのか、頭を悩ませることになり……」

グレン「面どくせえな……別に細かい意味はなくてもいいんじゃないかねーか……セブンの『諸星弾』だって、とってつけた名前だろ？」

作者「こっちはそうもいかないんです！すみません、そういう性分なんで……そこで閃き、勇夜はゼロのミドルネームであることを思いついたのです、母はアン又隊員であることは決めていたので日本人風の名前を入れても違和感は無いですし、そして名字の諸星を英

訳させて、

『ゼロ』ユウヤ・ヴェアリースター』

とフルネームを作るに至ったのです、勇夜の『や』が夜なのは、本作では地球人の血を受け継ぐゼロにとっては本来の姿でもあるはずの人間体を、ウルトラマンである自分を隠すための『仮面』として使わなければならない悲哀の意味合いとしてつけています」

グレン」で、顔つきはポニテにしたらつきよ（空の境界）の式つちつて……美形過ぎんだろ」

作者「いいんです、ダンとアンヌの子ですから（ドヤ）、それにゼロは見る角度によって、柄が悪そうだったり、あどけない少年っぽく見えたりするデザインなので、その多面性を人間体にも見せようとしたうえでの設定です」

ミラー」で、次は僕の名前ですが、どういった経緯で」

作者「ミラーナイトの地球人としてのの名前である「高町光」はすんなり決まりました、ですが実は小説家になろうに投稿されたなのは二次創作に同姓同名のキャラがいたことを思い出し、ならばと光と書いてリヒトと読むことにしました、どちらも意味は同じですが中二的センスですね、で、二次元人の本名としてリヒト・シュピールゲルと命名しました、シュピーゲルは『鏡』を意味しているので、鏡の騎士にはぴったりと思ひまして」

ジャン」なるほど、ちなみにキャラクターの名前付けに法則はあるのか？なのはの登場人物の一部の名前は、車名がモデルと聞いたが」

作者「強いて言うなら、呼びやすさ……ですかね、それ以外は特に法則を設けていません」

ゼロ「じゃあ後の二人の人間体の名前はどうするんだ？」

グレン「もう決まってる、作者から聞いてんだが、暫くは秘密にしろと言われてんだ」

ジャン「私も口止めを言い渡されている、容姿も具体的なイメージは決まっているとしか言えない」

ミラー「そうなのですか」

ジャン「次は私からだ、リリカルなのはの登場人物の設定が、かなり変更されているようだが」

ゼロ「そうだよな、なのはとフェイトたちの歳も小5に上がってるし」

作者「それはキャラ紹介の回でも言いましたが『その年齢で言うせりフじゃない感』を少しでも抑えるためでもあります、私見ではなのは本編の絵を見ると、なのはたちの体格が小5、6くらいに見えたこともあり、フェイトとはやてが小学生ライフを送れるよう考慮して2歳繰り上げました」

ミラー「原作アニメより、感情を荒げること多くなりましたね」

作者「ミラーナイトのお陰でとらハ3ほどじゃありませんが、アニメにあつた孤独・疎外感是和らいでいます、一方で周囲に守られてばかりで取り柄となるものが見つからない自分へのコンプレックスを強調させました、本作のなのはとらハとアニメの折衷とっていただければ」

ミラー「キーワードに『魔王化回避計画』とあるのはなぜですか？」

作者「それ今言わなきゃ駄目ですか？」

ミラー「今です（目がレッドアイになりかけてる）」

ゼロ「そりゃ、愛する妹が『悪魔』やら『魔王』なら言われていい気はしないよな」

ジャン「ファンという割に、3期に関しては辛口な評価のようだな」

作者「そこ突きますか、まあ答えましょう……私は確かにアニメも特撮も好きですが、いい大人なのである程度線引きと境界は引いて、節度を持つと心掛け、『信者』とよばれるような盲信はしないように心掛けるスタンスでいるのです、そんな私から見ればなのは3期は、例えるなら『踊る大捜査線』の映画3作目に見えて仕方ないのです」

ゼロ「新キャラが沢山、リストラ・出番が減らされた旧キャラとか共通点はあるわな」

ジャン「新しい要素を盛りつめようとしたが、成功したと言えず、『愛すべき欠点』が擁護できないまでに膨れ上がった点も酷似している」

ミラー「なのはとユーノの関係が平行線なままなところも、青島刑事とすみれさんの2人と被りますね」

グレン「なんか何のために出てきたのか分んねえキャラもいたよな、レジラスとか言ったか？あいつ含めたおっさんキャラとか……」

ジャン「彼らに限らず、ある意味3期に出たキャラ全てが被害者とも言える」

ミラー「なのはも、本作を書く前の作者の脳内では『魔王』『なのはママ』といった、記号的単語しか残ってませんでしたからね、それらが独り歩きしてしまったことは認めますが」

ゼロ「だから二次創作でフォローするやつらが多いんだけどな」

作者「はい、そこは愛すべき点ですね、無印はフェイトの救済の物語でしたが、本シリーズでは、テーマの一つとして『なのはの救済』も入れてます、別にキャラクターに比重を置いた作風も悪いとは言いませんが、一方でその結果、なのはというキャラを歪めてしまったとも考えてしまうのです、やはりそこは『好きだから』こそ、厳しく言わせてもらいます、これはなになのはに限ったことではありませんし、自分の力量でどこまでできるか分りませんが……」

ゼロ「そこはガンバとしか言えねえな、俺たちじゃ背中を押すぐらいしかできないからさ」

作者「ありがとうございます」

グレン「他のテーマは言わねえのか？ゼロとフェイトのラブストーリーとかさ（ニヤニヤした口調で）」

ゼロ「バーロー！！！！！！そんなことはいいだろ！で、最後の質問だが……」

ゼロ以外「（無理がありすぎる）」

ゼロ「今後の展開とかどうすんだ？」

作者「第1部は修正作業を除外すれば全話書いています、A、S編も一応結末は決めてます、問題の3期は……まだ悩んでいますね」

ミラー「ですが作者にとって、悩み、迷いがあつてこそ人、なのでしょう?。」

作者「はい、ティガ45話のシンジヨウ隊員の『俺も苦しむぞ・苦しんでみんな明日へ行こう!』の言葉は名言だと確信してますし、葛藤があつてこそ、その先のキャラが下す『決断』が燃える展開を生むと信じてますから」

ゼロ「そんなこんなで、読者もみんな、これからもよろしくな」

ゼロ以外「……ゼロが珍しくヒーローしてる」「」

ゼロ「俺はれっきとしたウルトラヒーローだ（怒）!!!俺のビ
ックバンは!ブラックホールをも飲み込むぜ（怒）x2万!」

ゼロ以外「……（やっぱゼロはこうでないとwwwwww）」「」

作者とウルティメイトフォーエスゼロ座談会（後書き）

以上、勢い任せの駄文でしたWWW

Episode 20 - 海上の決戦

空が光った…

6個のジュエルシードの強大なパワーを前に、防戦一方だったフ
イトは降り注ぐ眩い光に釘付けになった。

そして、雲と光の隙間から、降りてきたのは。

桜色の光を纏った、あの白い魔道師の女の子。
陽光を浴びたその姿は正に天使だった。

「フイトの邪魔を…、するなああああああ！！」

妨害するためにこの場に介入してきたと思いこんだアルフは、な
のはに拳を振り上げるが…

「落ちつけ莫迦」

その拳は勇夜の掌に受け止められた。

「勇夜！？」

「このまま、フイトと海ん中へとお陀仏になりたいか？」
彼がここにいるということは、戦う為に来たわけじゃないってこ
と？

「僕たちは戦うために来たわけじゃない！」

「今は拳を引いて下さい、戦うなら後でもできるでしょう」

それを頷けるように光とユーノが呼び掛けた。

ちなみに、初めて実戦でデバイスを起動した光は、勇夜より明るい色のジーン

パンと、ミラーナイトと同じカラーが塗られたジャケットを羽織っていた。

ファスナーを襟まであげているあたり、彼らしい。

そしてその手に持つのは、緑が主な配色の鍔無しの一振りの小太刀。

シルバーライトの基本形態、ショートセイバーモード。

『何をやってるんだ君たちは!?!?』
通信でクロノの声が響く。

「鉄頭はしばらく引っ込んでろ……」

勇夜は呆れ気味に返し。

『なっ!?!?』

「ごめんなさい!でもほっとけないです!?!ジュエルシールドも!フェイトちゃんも!?!」

クロノもフェイトに思うところがあるのか、通信越しに押し黙った。

その様子を呆然と見ていたフェイト。
だから反応が遅れた。

自分に迫る、波と言つ名の鞭の一撃に。

「フェイトちゃん!」

「はっ!」

その凶刃がフェイトを捉える寸前。

「オーラセイバアア   !!!!!」

勇夜が刀身にディファレーターパワーを纏わせた零牙で横薙ぎに
両断した。

「勇…夜…?」

「遅くなってすまねえ、でも…それが『約束』なんでな」

約束。

フェイトが、自身の魔法を以てしてもどうにもならなくなった時、
必ず助ける。

それを彼は当たり前のように言葉にし、実行していた。

「まずはジュエルシード止めないと…。放って置いたら融合して、
手の付けられない状態になるかもしれない!」

ユーノの言う通り、ジュエルシードの輝きは増し、波の勢いも凶
暴さを増し
ていた。

もし融合を許せば、光の巨人、鏡の騎士の力を以てしてもてこず
る相手にな
る可能性も捨てきれない。

「光とユーノとアルフは奴の動きを止める!三分割にしてな!」

「了解!」

「はい!」

「勇夜?」

あたかも普通のことのように、自分に指示を出してきた勇夜にアルフは戸惑い気味。

「フェイトちゃん手伝って！、ジュエルシードを止めよう、勇夜さんと一緒に」

この子と…勇夜と…
手伝ってほしいと言ってきたのはに対して、フェイトも面喰った。

『Divide Energy』

勇夜となのはは、リンクとレイジングハートから魔力をフェイトに供給させた。

疲労による重荷が抜け、体内に魔力が戻っていくことを、まじまじと感じるフェイト。

『供給完了』

バルディッシュの応答とともに消えかけた魔力が回復。

「光兄とユーノちゃんとアルフさんがサポートしてくれるから、今のうちに」

その言葉通りにユーノは。

「チェーンバインド！」

魔法陣から魔力で形成された鎖を解き放ち、異相体を縛り付ける。

だが相手も大人しくしてはくれず、鎖を解き放とうともがく。

「このままじゃ……」

「ストラグルバインド！」

そこにアルフもバインドを形成し、その抵抗を抑えつけた。

彼女の使ったバインドは、捕縛した対象の魔法効果を弱らせる効果がある。

ジュエルシードのパワーを弱体化させるには充分。

その分拘束力は大したことはないが、パワー不足はユーノのチェインバインドによって、互いをカバーしていた。

「（勇夜が助けてくれるんだ、なら今は）」

彼が助太刀に来てくれたこともあるが、優先すべきことを見定め、たうえでの彼女の行動だった。

「ライト！初陣です」

『Your will, Mirrors ring』
「ハアアア！」

光はライトの刀身から、CD型の魔力カッターを形成して放つ。

ウルトラマンの『八つ裂き光輪』を参考にした技だ。

二振りの刀身から発した二つの刃は、幾重にも分身。

バインドに縛られたジュエルシードの荒波を三分割に切裂く。

融合寸前だった異相体の波は一体から三体になったが、弱体化し、その勢いを一気に弱めた。

再融合を阻止すべく、ユーノとアルフは、バインドの力を強めて縛り上げる。

分散したことで力が弱まり、動きが封じやすくなった。そして光は追い打ちに。

『Silver weight』

異相体の真上に、彼の防御技、ディフェンスミラーを彷彿とさせる輝く十字架を形成、それが幾重にも降り注ぎ、突き刺さる。

これも、周辺に特殊な重力場を作る「ミラーウエイト」を元にした彼独自の魔法、『シルバールウエイト』だ。

それが重りとなり、異相体の動きがさらに鈍くなる。

三重の拘束で、異相体は先程までの勢いを失速させていた。

今が最高のチャンス。

「1人2つの割り当てで封印だ、行くぞ！」

「はい！」

『Arrow mode』

『Canon mode』

勇夜となのはは足元に魔法陣を敷き、愛機を遠距離攻撃用の形態へと変えながら。

「ディバインバスターフルパワー、行けるね？」

『当然です』

なのはトリガーに指をかけ標的に向かって構え。

「リンク、とっておきのを」

『了解、バニシングスピア、チャージ開始』

勇夜は魔力の矢を引きながら。

大技を解き放つための、膨大な魔力エネルギーを、愛機に集束させていく。

特に言葉を交わすまでもなく、連携をとる一同にフェイトは戸惑っていたが。

なにより…

『Glave form, set up』

「バルディッシュユ？」

普段は寡黙だが、指示に従順な愛機が勝手に形態を変えたのである。

だが、もうここまでくれば何をすべきか一目瞭然だった。

二人の言う通りにすればいいの？

どうして、今でも二人が自分を助けて、語りかけてくるのか、まだ分からないのに。

けど…

勇夜と一緒になら…

6個同時は駄目でも、2個なら…

引き絞った魔力の矢を離して。
必殺の一撃を解放した。

溢れる桜色の魔力光が

迸る金色の雷が

燦燦と輝く青緑色の矢が。

災厄を巻き起こす宝石を呑みこんで行った。

アースラのモニターに映ったのは、青い閃光の後に活動を停止したジュエルシードだった。

「凄い…6個全部を完全封印」

エイミイはオペレートの仕事をこなしつつも感嘆の声を上げる。

「なんて出鱈目な…」

「でも凄いわ…」

ハラオウン親子も、クル たちも驚きを隠せない。

一発で封印させた彼らのパワーもあるが。

何よりも敵対している身同士でありながら、それぞれの役割を分担し、迅速に事態を収束したその手際の良さに驚嘆を隠せなかった。

特にその指示を飛ばした諸星勇夜ことウルトラマンゼロ。

実力はあるが、なまじ性格に癖のあるメンバーで構成されたチームのリーダーを務めていただけに、指示もそのタイミングも的確。

彼が双方から、信頼を受けていたことも勝因の一つであったろう。

本人は自分の立ち位置を一番中途半端と自虐していたが、それがこつという形で功を奏したのである。

無論、あの場で一人でも欠けていたら、ここまで暴走を食い止められなかっただろう。

海上に『6人』全員いたからできた離れ業だった。

勇夜：やつぱり君は…

クロノは内心彼の実力に敬意を表しつつも。

理由は理解しているだけに、未だに囑託に甘んじている彼の現状に複雑な心境を抱かずにはいらなかった。

海は静寂を取り戻し。

雨も風も止み。

雲の合間から太陽光が降り注ぐ。

先程の荒れた光景から一転して、穏やかなものになっていた。

「勇夜さん……」

「もう決まったんだろ？言ってみてやれ」

「……………はい」

そう…彼から出された宿題。

その自分なりの解答がようやく定まった。

だって、

光兄が一人だと思ってたあの頃の、あの時に教えてくれたこと。

勇夜さんが自分に宿題を出した時、ヒントを既に出してくれたこと。

なのはは、真っ直ぐフェイトに向き合う。

その真っ直ぐに自分を見つめる瞳にフェイトはどう応じればいいか困惑した。

「フェイトちゃんの抱えてることに比べたら、私は恵まれているのかもしれない、甘ったれた…我儘な子なのかもしれない、でも、今伝えたいの、ジュエルシードは……………どうしても譲れないけど……………私は……………フェイトちゃんと……………」

自分の想いを打ち明ける。

喻え歪な生まれ方をしているも。

心を押し殺して戦っていたとしても。

自分はその子より、暖かな家庭で育っていたとしても。

目の前の悲しむこの女の子を助けたいから。

その悲しみを、少しでも和らげることができるよう、共有できるようにしたいから。

だから…わたしは君の……

「友達に……なりたいんだ」

フェイトはなのはの言葉に目を見開く。

これで全てが変わる訳では無い。

まだ二人には超えなければいけないハードルが多くある。でも決して無駄な行為ではない。

これが…確かな一歩であることは間違いないのだから。

だがなのはが想いを告げるために用意された静寂は、簡単に破られる。

最初は勇夜と光が…

本能が自分たちに危険が迫っていること呼び掛けてきた。

まさか！

そして次は。

『次元干渉？ 別次元から本艦及び戦闘空域に高次魔力来ます！
あ、あと六秒！？』

通信から響く無情な宣告。

「母さん…」

フェイトは、その宣告を遂行する元凶の名を読んだ。
黒く染まった空から、紫色の稲妻が降り注ぐ。

「動かないでください！」

それが当たる寸前に勇夜と光は互いのエネルギーを合わせて巨大な長方形のバリアを貼り、雷撃を防いだ。

二人の合体防御技。

『ディフェンスミラーゼロ』
の魔法版だ。

(フェイトと同じサンダーレイジだが…)

(威力は彼女より…遥かに…上)

なのはたちを巻き込ませないと二人は必死に耐える。
第一射はなんとか持ちこたえた。

だが、間髪入れず、まるで勇夜たちをジュエルシールドから引き放すように、最初の一撃よりは弱目だが、さらなる雷撃が降り注ぐ。

果敢無く振ってくる雷に回避に専念するしかない一同。
その間にアルフは、ジュエルシールドに目掛けて飛んだ。

しかし、その目前に。

「これは渡さない！」

クロノがアルフの眼前に転移をして立ちはだかった。

「じゃまを……」

アルフは激情のままクロノを、

「するなアアアアア！」

投げ飛ばした。

その隙に回収しようとするが……

三個だつて！？なら残りはまさか……

クロノを投げ飛ばした方に目を向けると、クロノの手には残りのその三個があり、デバイスに収納していた。

「ちくしょう！」

アルフは海面に魔力弾を撃ち込み、水柱で目くらましをし、母のとつた行動に立ちつくしているフェイトを連れて逃げ去っていった。その時はアースラムも攻撃を受け、システムが一時ダウンし、逃亡した先を特定することも断念せざるを得なかった。

「グオホオ！」

災害クラスの雷を降らせた元凶。

プレシア・テストアロツサは時の庭園、玉座の間で多量の血を吐いた。

吐血は止まったが、息は荒く、短いサイクルで呼吸が繰り返されている。

「もうこれを使うのも…限界かもしれないわね」

彼女の右手には、『バトルナイザー』と類似した補助デバイスが握られている。

そして左手は、吐血した血液で、赤く染まっていた。

こんな汚れた手で、あの子を取り戻そうと、もう一度会いたいと考えるなんて…なんて愚かだったのか……

ここに来て初めて、あの子との約束を思い出すなんて…

?てめえの下らないエゴのために、フェイトとアリシアを弄んでんじゃね!?

そうね…わたしは娘、いいえ…娘たちの為と言いながら、結局自分のことしか考えてなかった…

子どもたちを不幸にさせてばかりだった大悪党…

大事にしていたものに気づくのがいつも遅すぎる愚者。

ならせめて…私にできることは…。

「指示や命令を守るのは集団を守るためのルールです。勝手な判断や行動があなたたちだけでなく、周囲の人たちも危険に巻き込んだかもしれないということ。それはわかりますね?」

アースラの会議室。

ここでは艦長のリンディ・ハラウンが、命令無視をして独断行動をとったのはたちを、厳しい声色と口調で咎めていた。

リンディの横にはクロノがあり。

無論、光も勇夜もこの場に同伴している。

「はい」

大小問わず、組織に属することは、同じ組織内にいる同士と一心同体かつ一蓮托生となる。

生きるも死ぬも・・・は言い過ぎかもしれないが、一個人の独断が全体を巻き添えにしてしまう結果を生み出しかねない。

「艦長：責任はこの子たちを煽った自分たちにあります」

「彼女たちの処分も私たちがお受けいたします、如何様にでも」

子どもの論理で動いたなのはたちと違い、組織運用については、この二人の巨人は身に染みて知っている。

この世界に来る以前から、二人はある意味社会人として、組織に身を置いていた。

その為最初から、罰則を受けること覚悟して、彼らはあの場に臨んだ。

「待つてあなた達、確かに本来なら嚴重に処するところですが…。融合暴走の危険性があつたということも鑑みて……」

とは言え、あのままフェイトが生き倒れるまで静観を続ければ、ジュエルシード同士が融合して、以前海鳴市街で起きたものと比較にならない次元振を引き起こしかねず…

最悪地球が太陽系から消滅してしまう事態になってもおかしくな

かった。

結果的ではあるが、組織の『最善の選択』が『最悪の結果』を生む皮肉的な結末は免れたのである。

「よって今回は特別に不問とします」

処分は無し、という判断になのはとユーノは頬が緩みそうになっただが…

「（安心するのはまだ早いぞ）」

「ですが…二度目はありませんよ…」

「（社会で生きると言うことはこういうことです、忘れないでくださいね）」

「（まあ、良い社会勉強にはなっただろ、グルで煽った俺たちが言うのもなんだけど……）」

三人から鋭い釘が突き刺さった。

改めて周りの人たちに迷惑をかけたことを思い知らされて、なのは表情を曇らせる。

兄と勇夜さんにまた、自分が巻いた種の後始末をさせてしまった。

「エイミィ、犯人に関する情報を出してもらえ」

「はいはいっ」

クロノの指示で別室にいるエイミィが卓上に3Dモニターを表示させた。

その映像の中にプレシア・テストロッサの画像があった。

この人が…フェイトちゃんのお母さん…

勇夜から、フェイトの出生もプレシアがフェイトに対して行っている所業諸々は聞いていたが、今表示されている写真からはとてもそんなことをする人物には見えない。

だが…

『母さん…』

あの雷撃が落ちる瞬間、フェイトの顔は間違いなく恐怖に染まっていた。

それだけ日頃、この人から手痛い目に遭っているということだろう。

と言うことは今頃は…

母の暴力を無抵抗に受けて、ひたすら耐えているフェイトを思わず想像してしまった。

なのはは拳を握り、やるせない気持ちになる。

フェイトちゃんはただ…お母さんに笑ってほしい、ただそれだけ、それだけなのに…

でもそんな願いでも、ジュエルシードはまともに応えてはくれない。

「まあこのプレシア・テストロッサとフェイトさんに関することはもう粗方勇夜君から聞いているのよね？」

「はい」

「で、勇夜君、新しい情報が手に入ったから、こちらに来たのでは無くて」

「まあな」

勇夜はリンクから、茶色のトランクを取り出した。

「勇夜さん、それは？」

「あの親子に関する重要な文献が入ってる」

「どう言うことですか？」

ユーノが勇夜に問うてくる。

「フェイトには、母親代わりに育ててくれた人がいた、これはその人が残した代物さ」

勇夜の言う通り、後にこのトランクはこの事件における重要な証拠物件となる。

聞きたくない音と悲鳴に目を閉じ、耳を塞ぎ、体を屈ませながら、アルフは玉座の間へと繋がる扉の前の床で座っていた。

なのはの想像通り、フェイトは理不尽な『躰』を今まさに受けている。

鞭が弾かれる音と、悲痛な叫びを耳にするたび、アルフの心も、容赦無く痛めつけられていく。

確かに残りの6個全部を持って行くことはできなかった。

でもだからって……

そんなにアリシアに生き写しのフェイトが憎いのか？

今までは、フェイトが引きとめてくれたから、なんとか我慢してきたけど……

もう……今度という今度は……

悲鳴と鞭の音がやんだ。

あたしは、あの時勇夜がそうしたように、拳を引いて力の限り殴り付ける。

重く分厚い扉が開く。

部屋の中は、前の勇夜との戦闘を受けた傷跡はまだ癒えず。

中央には、全身痣だらけで、バリアジャケットがボロボロの……

主であり……

家族であり……

姉であり……

相棒である……

フェイトが……

「フェイト！」

アルフは傷だらけの彼女を抱える。

「ごめんね…あたしが…」

こんなことすれば、また勇夜に莫迦って言われるかもね…でも…

「あたしがもう、何もしくなくていいようにするから…」

決意の言葉を述べ、主を床に寝かせ、マントを布団代わりに被せた。

冷たくて、固いけど、しばらく我慢してね…

玉座の間から向うに繋がる、プレシアの部屋は、その言葉の通り異界であった。

黒や紫などの黒目の色色が混じり、淀んでいる空間に、ところどころ、ギリシャ様式のものに似た円柱と

地面がまるで冬の北の海に流れる氷塊のように無数に浮いている。

そんな暗く、閑静な空間に爆発と爆音が起きる。

中央の円陣にいたプレシアが、爆発のした出入り口の扉がある方向に目を向けた。

「来たわね…」

そこにいるのは、憤怒の形相でプレシアを睨めつけるアルフ。牙をむき出し、髪も怒りで逆立っている。

顔と体つきは人間に近くても、その姿は狼そのものであった。

アルフは、浮遊している地面を、八層飛びの要領で飛び、プレシアに向かって突っ込んでいく。

が、プレシアは魔法陣を形成、そこから伸びたバインドでアルフを縛り上げた。

それを解こうともがくアルフ。

「そりゃ……………フェイトは……………普通の子とは……………違う生まれ方をしたけどさ……………」

「っ?……………聞いたのね……………諸星勇夜……………いいえ、『ウルトラマンゼロ』から……………」

アルフは驚いた。

なぜこいつが、勇夜がウルトラマンであることを知ってる?

だが今はその理由探る気にはなれなかった。

アルフがバインドブレイクでバインドを解き、プレシアに殴りかかるが、魔力の障壁に阻まれた。

障壁とぶつかった右手から激痛が走るが、構わずに左手も障壁に触れ、魔力を流し込む。

相手と自分の魔力を合わせ、中和し、障壁の魔力結合を弱めると、力の限りそれを引き裂いた。

その勢いのまま、プレシアの襟元を掴み。

「それでもあなたは母親で……………あの子はあなたの娘だろ!それなのに……………それなのに……………どうしてあんなことを、平気な顔でできるんだよ……………」

「!」
今まで溜めこんでいた憤りをプレシアにぶつける。

「何とか言えよ！この…」

その怒りの余り、反応が遅れた。
アルフの腹部に向けて、詠唱もせずに発生させた雷撃に。

「……………っ!？」

至近距離で受けた攻撃に、吹き飛ばされて、円柱の一つに叩きつけられた。

その衝撃で口を切ったのだろう。
唇から血が流れていく。

なんとか立ち上がろうとするが、全身に痛みが走り、思うように動けない。

そんなアルフにプレシアはデバイスを向けた。

「邪魔よ…消えなさい」

デバイスの先に魔力が集まる。
止めの一撃を放つ為に。

こんなところで…

咄嗟に魔法陣を引く。

ごめんフェイト……………もうちょっとだけ待ってて…

発射の直前、アルフはその場から転移して消えた。

それを見届けると、プレシアは魔力の収束を止めた。
最初から彼女を撃つ気は、はなから無かったのだから。

それにしても、あのフェイトの使い魔、ああも容易く、自分のバインドと障壁を破るとは…
それだけでは無い。

明らかに以前より、魔力の瞬間最大出力、制御能力がアップしている。

いくら使い魔とは言え、この短期間で…ここまで…

まあ良い…

なんにしてもこれで良いのだ…

あの使い魔は真つ先に、『彼』の元に行つて頼るだろう。
そして彼と『あの子』の罪を軽減させるために尽力する。

それで良い…

道化を演じて罪を被るのは自分だけで充分なのだから…

後は…

会議室での話が終わり、艦内の廊下を歩いていたのはたち。
なお勇夜は、例のトランクを渡した後、さつさとアースラから出てってしまった。

その前にクロノから、光にシルバーライトを渡したことを少々追及されたが、海の一件の事態の收拾に一役買ったこともあり、これ

もまた不問になった。

「プレシア女史もフェイトちゃんも、あれだけの魔力放出の後では
そうそう動

きはとれないでしょう、あなた達も一休みしておいた方がいいわね」

「あ…でも…」

なのはは少々渋った。

なんせ、アースラのクルーはその休息をしている間も仕事がある。
のこのこ自分たちだけ、休みをもらうのは、さすがに気が引けた。

「こちら無理を言って、手伝わせていましたからね、ご家族とお
友達に元気な顔を見せてあげなさい」

「なのは、ご厚意は受け取っておきましょう」

「光兄…そうだね」

勇夜はその時、借りているアパートに帰宅する為、雑踏の中を歩
いていた。

時間帯はもう夕方、家に帰る学生やサラリーマンがあちこち見か
ける。

さて…今後はどうするか…

全てのきっかけになった、あの魔導炉事故の資料を集めるのは良
いとして…

ジュエルシードは実質全部回収された。
もう、発現した場所で鉢合わせなんて手は通用しない。

時の庭園も、既に前にあつた地点から移動しているし。

あんだけの大技を使ったから、当分は静かにはしているのはず…

なのはが『友達になりたい』って伝えたことでフェイトにある程度心境の変

化があるかもしれないが、どの道あいつをなんとかしない限り…

一応、あいつを説得させる材料はある。

自分の故郷、M78星雲光の国、そこまでの道筋が分かった時点で芽生えた可能性。

だが、時間が余りに無さ過ぎるプレシアがそれを了承してくれる保障も、それが上手くいく保障も100%ではない。

ずっと希望に裏切られ続けたあいつに、下手に光明をみせることは、逆に傷つける結果になる可能性だつてある。

どうしたもんかな…

そんな、これからのことを思案している時だった。

「(勇……)」

脳内に声が響く。

念話？誰からだ？

「(勇夜……)」

「(アルフか…どうした?)」

弱弱しく、痛みに耐えている声からして怪我をしているかもしれ

ない。

「（庭園から……逃げて来たんだ……）」

プレシアのフェイトへの仕打ちに我慢の限界が来て、喧嘩を吹っ掛けて返り討ちにあったんだろう。

それで仕方なく、フェイトを残して逃亡したってところか。

「（今どこだ！？）」

「（確か……じ、神社とか言う建物の……裏の……森の中……）」

「（そこで待つてる！今そっちに行く！）」

「（すまない……）」

勇夜は念話を切り、人気の無い場所に移動し、周囲を確認すると。

「封時結界！あとリンク、VMAXを！」

『了解』

結界を貼り、リンクからVMAXカスタムを取り出した。

海鳴にも神社はいくつかあるが、近くに森があるところは一つしかない。

結界内なら警察も通行人も交通規制も気にせずに走れる。

勇夜はアクセルを捻り、スロットル全開にしてバイクを走らせた。

人っ子一人いない、道路のど真ん中を極太のエンジンを響かせながら、VMAXが疾走する。

日本では不法滞在で銃刀法にも違反、さらに無免許で結界内とは言え、違法改造されたバイクを、明らかに法定速度もオーバーして走らせているが、この際大目に見よう。

「ぐ……」

さつきよりはましにはなったが、全身が痛みで悲鳴を上げながら、わたしは目を覚ました。

今わたしはどこかの部屋のベットで寝込んでいたようだ。

隠れ家として使ったマンションよりは、リーズナブルと言った印象。

狼形態をしている今の自分の体には、包帯が巻かれていた。

その手当てをしてくれた人物も地元の集合自宅を借りていると聞いていたから、ここがそうなのだろう。

ガチャ。

ドアが開く音がし、部屋に灯りがともる。

ビニール袋を持った勇夜が入ってきた。

「勇夜……」

「起きたか……ちょっと待ってろ」

買い物袋から、材料を取り出すと、料理を作りだした。

「勇夜……あたし」

「大方あいつに殴り込みをしてそうなたんだろ？」

勇夜は調理をしながら、アルフがこうなってしまった経緯を簡潔に代弁する。

「うん…」

あいつを追いつめた勇夜と違って、やり返されてしまったが。

「莫迦野郎……無茶しやがって…」

やっぱり言われてしまった。

でも…彼なりに、それだけ自分を案じているということである。

現状、頼れるのは彼しかない。

初めて彼に会った　フェイトが打ち負かされた時はもう駄目だとさえ感じたが、今思えば幸運だったと言える。

頭が冷静さを取り戻し、真実を知った上で考えてみれば、遅かれ早かれ、ジュエルシードが欲しいというあいつの願いが叶えられてしまったら、真っ先にフェイトは用済みとして捨てられ…この星も巻き添えになって…

そして、勇夜が前に言ったように、自分は笑わなくなった主と後悔を抱えて、残りの人生を歩むことに…

そう思うと…なんで………あんな石ころなんか希望を見出さうとしたんだろ…と己を嘲笑してしまう。

ちゃんと彼が前から『欠陥品』だって言うてくれていたのに…

？もし君が君の魔法をもってしても、どうにならねえ状況になった時は…必ず君を助ける？

？私は……フェイトちゃんの……『友達』に……なりたいんだ？

あんなものよりも、彼とあの……白い……魔導師の女の子の方がずっと。

「できたぜ」

気がつくと、目の前にご飯と切り刻んだ材料を油で炒めた、所謂チャーハンが置かれていた。

あたしは料理の匂いを嗅ぎ、口に入れる。

ご無沙汰さった勇夜の料理。

やっぱり美味しかった。

ただ味が美味だけじゃない。

久しかった……誰かと一緒に食する温かさを思い出させてくれたのも、この人の料理だったから。

そうだ、あの時あいつは勇夜のこと。

思考がクリアになったことで、アルフの脳裏にプレシアの言った言葉がよぎった。

「勇夜あのさ……前にあいつに会った時、ゼロに変身した？」

「いや、それがどうした？」

「あいつ……勇夜がウルトラマンだってこと、知ってた……」

彼が別の次元世界のM78星雲光の国から来た巨人であることは、

あいつに一言も言っただけでなかったのに。

勇夜は若干驚いた表情をしたが、すぐ納得した様子になる。

「あんまり、驚かないんだな……」

「一応……心当たりがあるからな……それより分かっているとと思うが、俺は囑託魔導師だ、重要参考人としてお前を管理局に引き渡すことになるが、いいよな」

「ああ……構わないよ」

元々そうなることを覚悟して、彼に助けを求めたんだから。

下手に匿ってくれるよりは、むしろそうしてもらえた方がよい。

いつだって彼は、自分たちがやっていることの『重み』を示す一方で、救おうとしてくれていたんだから。

「心配すんな、保護という形にしてもらおうからさ」

故郷のある世界から迷い込み、いつ帰れるかも分からないのに、ウルトラマンの力に管理局が恐れをなして、彼を排除するかもしれないのに、それでも勇夜はわたしたち……違う……わたしたちを含めたこの次元世界に降りかかる火の粉から助けようと尽力している。私たちはそんな彼から恩を受けてばかりで、甘えてばかりだ。

本当なら、私たちを真つ先に捕まえて、止めてあげなきゃいけないかったのに……

「ありがとう……それとさ……」

「何だ？」

勇夜だけじゃない、敵対する立場なのに、それでもフェイトを何
度も呼びかけてくれた……友達になりたいって言ってくれた。

「なのは……って言ったっけ？……あの子に………会わせてくれないか
？」

Episode 21 - ひと時の休息

リンディからの指示通りに、なのはたちは一旦アースラを降りて、高町家に帰宅した。

その際、リンディも私服で彼女たちに同行した。理由はと言うと…

「とそんな感じの10日間だったんですよ」

有体に言えば、なのはたちがなぜ10日も学校をさぼってまで、家を開けたのかを高町家の方々に説明する為だった。

地球では目立ち過ぎるミントグリーンの髪も、今は魔法で金髪に変えている。

「（リンディさん…見事なごまかしと言うか…真っ赤な嘘と言うか…）」

「（す、すごいよね）」
「（虚構もここまで来ると…逆に清々しいですね）」

無論、基本不可侵な方針の管理外世界と見なされている地球の方々に本当のことは言えないので、嘘が8、真が2の割合で話していた。

本人曰く『気遣い』とのことだが…

「でもなのはさんも光さんもしっかりなさってますし、うちの子にも見習わせたいくらいで」

「またまたそんな」

「うちのクロノはどうも愛想が無くて、せめて光さんぐらいの社交性を身につけてくれれば」

こんな調子で暫く、母親たちのご近所トークは続いた。
クロノが愛想が無いのは…まあ間違いない。

本人は今頃くしゃみでもしているだろう。

で、そのことでエイミィがちよっかいを掛ける一幕になっている
筈だ。

実のところ、桃子たちもなのはたちが今まで何をしていたか、だ
いたい知ってはいるのだが、光との約束があるので、知らないふり
をして、話を合わせているのであった。

「二人とも今日明日くらいは家にいられるんでしょ？」

「うん」

「ですが、その後はまた数日家を空けることになるかもしれせん」

「そうなんだ」

「なのははアリサとすずかちゃんには連絡したか？二人とも凄く心
配してたぞ」

「大丈夫、さつきメールを送ったから」

余談だが、バニングス家の執事によると、アリサはなのはから来
たメールを見て、大層喜びながら返信したそう。

その翌日。

なのはと光が、10日振りに登校し、学業に勤しんでいる頃。

「（勇夜）」

「（どうした？）」

「（本当にこれで目立たないんだよな？）」

「（狼形態よりはましだろ、カップルと勘違いされたいなら、人型でも構わねえがどうする？）」

「（……こつちの姿で…お願いします／＼／＼／＼）」

これは勇夜とアルフの念話による会話の一端だ。

ただ…今アルフは人型でも、ましてや狼でも無く。

体毛と水色の瞳と額の宝石はそのままに小型犬の姿になっていた。

それは昨日のこと。

『アルフ、一つ聞きますが、どちらの形態でも体格の小型化はできますか？』

「やったことは無いけど、できると言えばできるね…」

リンクはいきなり、このようなことをアルフに聞いてきた。

「でもいきなりなんだいリンク？」

『形態維持による魔力消費を抑え、その分を治癒に回せば、怪我の完治が早まる筈です』

「あ、なるほど…」

リンクのアドバイス通り、体を小型にすると、使い魔としての再生能力の高さと、勇夜のメデイカルパワーと呼ばれる、ウルトラマンの能力による治癒術によるサポートと相まって、彼女の言った通りの効果で怪我はほぼ一晩で治った。

そして今、体を慣らすリハビリの一環として、こうして市内を勇夜と一緒に歩いているのである。

傍から見ればちょっと変わった容姿のワンコを勇夜が散歩させているという状態であった。

アースラへの出向は夕方を予定している。で、まだ時間があるのでこうしているのだった。

幸い、協力的な態度を示したことで希望通り、保護という扱いにしてもらった。

「（フェイトとの念話はまだ遮断されたままか？）」

「（ああ、あの鬼婆に口止めされてるみたいだ）」

アルフを保護したことで、フェイトと話をつけられると思ったが、そう上手くはいかないようだ。

「（あせるな、まだ9個しか無い現状じゃ、あいつが次元振を起こすことも、フェイトを用済みにもまだしないさ）」

「（そうだね…）」

精神リンクでフェイトの現在の感情を知ろうとしたが、今は何も感じられない。

分かってる…自分がフェイトの気持ちを感じて辛い思いをしないように、必死に耐えてるんだ。

自分の痛みに耐えているだけでも手一杯なのに…

そんなことを考えていると…

突然、勇夜はその場に立ち止まっていた。

丁度、交差点に差し掛かっていることもあるけど。

「あの子…」

勇夜の視線の先には、女の子がいた。
歳はフェイトとなのはと同じくらいで…
髪は茶色でショートカット。

足が悪いのか、車いすに乗っている。
確か、あれぐらいの歳の子ってまだ学校で勉強してる筈…

どっして…

「勇夜、あの子と…」

知り合いなのか、と聞こうとした時だった。

今、横断歩道を渡っている途中、何かに引っかかったのか、途中で転び。

そして、そこに車が迫り…

いつものように私は、海鳴大学病院のかかり付けの先生の元へ、
検査のために行く途中でした。

車いすのタイヤに何か引っかかったのか、横断歩道のど真ん中で
転んでしまいました。

いつもは兄と一緒に行くのですが、平日の時は、授業の合間を縫
って来てくれるので、少し意固地になった私は無理を言っ、今日
は一人で行こうとして…。

さらに足が悪いせいで起き上がれないわたしに向かって、トラッ
クが一台、慌ててブレーキを掛けますが間に合いません。

あたし…死んでまうの？

お父さんと…お母さんみたいに…

「危ない！」

その声が聞こえた瞬間、わたしは誰かの腕に抱えられていました。服越しでも分かる、鍛え上げられて、固いけど、温かい体。

長い黒髪を後ろに結び、それがこの上なく似合う、どっちの性別にも見える顔立ちをした吊り目の少年。

この人、もしかして…

そして目の前には、トラックに轢かれた車いすが。

そのままトラックは、その場を走り去ろうとしますが。

「待ちやがれ！！」

その人は逃げようとするトラックに手を向けると、何故か突然とその場に停車し、運転手は降りて逃げようとするが。

「うううううう、ワァァン！」

「なんだこの犬！？」

赤味がかつた茶色の毛並みをした、小さな子犬が大型犬顔負けの大声で吠えて威嚇し、逃亡を阻みます。

彼は私を抱えたまま、男に近づき。

胸倉を掴んで、右手だけで持ち上げました。

見かけによらず、かなりの力持ちです。

子犬さんも唸り声をあげて睨んでいます。

「ま、まままま、待ってくれ！」

「ならなんで逃げようとした？」

年齢と見た目に反して、ドスの利いた声でひき逃げしようとした

男に詰め寄り、相手は恐怖で引き攣っています。

「待って、勇夜さん」

「はやてだったな…こいつは君を危うく…」

「それでもやめてあげて…」

彼がわたしの為に怒ってる……ということは分かっています。

でもだからこそ、暴力は振るってほしく無かったです。

だって……せつかくまた会えたんですから。

諸星勇夜さん…

八神はやて。

それが、車いすの女の子の名前だった。

ひき逃げ未遂犯は、地元の警察に御用になったが…車いすが壊されてしまったので、勇夜は彼女を担いで、目的地の病院に送ることになった。

あたしは今、子犬の姿なので、二人が病院に入っている間は、表口の前で留守番。

そして検査が終わったのか、新しい車いすに乗ったはやてを押しながら勇夜が出てきた。

またあんな事故が起こらないとも限らないので、帰りも送っていいことになり。

そして、今現在に至っている。

ちなみになぜひき逃げ犯が、車を止めて、わざわざ足で逃げよう

としたのは、勇夜がウルトラ念力で強引に停車させたためである。
魔法と違って目に見えないので、そこは上手く誤魔化せた。

警察、はやてや主治医にも、自分は大学生で今日は講義をとって
いなかったと説明してある。

「その犬さんって、なんて名前なんですか？」

「アルフって言うんだ、暫くうちで預かっててな」

「そうなんや、さっきはありがとなアルフ、でほどほどにせにやあ
かんよ」

彼女の言葉には、訛りがあった、

勇夜の話では関西弁って言うらしい。

その訛り以外にも気になることがあった。

「（この子、どうして足が悪いんだい？）」

「（原因不明らしい……昔は普通に歩けたそうなんだが……）」

その足の障害もあって、学校も休学扱いになってるらしい。

「（家族は？）」

「（兄が一人だけ……両親の方は……交通事故で亡くなったそ
うだ）」

「（……）」

どこか彼女から、フェイトに似たもの感じていたが、まさか両親
に先立たれているなんて……。

「どうしたん？勇夜さん」

「いや……寂しくないか？親御さんいなくて」

勇夜…ウルトラマンゼロも小さい頃は父親は死んだと聞かされ、
母も物心つく頃に昇天してしまった。

その父のウルトラセブンは実は生きていて、最終的に彼が修行か

ら帰ってきた時に再会を果たしたが…

それでも、家族が近くにいない寂しさを彼は身を以て知っている。「そんな辛い顔しないで下さい、わたしは大丈夫です…兄も、くうちゃんって言うアルフみたいなお小さいキツネの子も石田先生もいますし」

石田先生とははやての主治医をしている女医さんだ。

でも、兄やその石田先生はともかく、子ギツネと友達って…

正確には、海鳴神社の裏の森に住み、少々人見知りだが、ちよくちよく家に遊びに来るらしい。

どんなキツネだよ…と内心二人は突っ込んだ。

でも本人はそう言って気丈に振る舞っているが本当は、両親と死別し、足のせいで学校にも行けないといった、自分の身の上に寂しさを感じているだろう。

そんな境遇でも泣き言言わずに笑えるこの子は本当に…強くて優しい女の子だった。

そう思っただけに…

「（アルフ…お前も感じるか？）」

「（ああ…どこの誰か知らないけど…）」

自分たちを付けている何者かに対して余計に不快感を感じてしまっ

はやてに会ってからだから、目的ははやてか？

しかも、上手くジャミングをしているが、微かに魔力を感じる。

もし魔導師なら、狙いはこの子の魔力資質か？

初めて会った時は見逃したが、今この場で会った時に、この子から膨大な魔力が感知された。

量だけを見れば、あののはやフェイトよりも遥かに上。
足の障害を除けば魔道師として大成できるだけの十分な素質を持
っていた。

しかし…スカウトのつもりなら、他に手は無かったのか？

おまけにここ地球は、不可侵と定められた管理外世界で、はやは
は足にハンデがある。

何にせよ、尾行されること自体、気持ちの良いものではない。

『（二人とも、もう少し我慢して下さい、彼女を家に送るまでの辛
抱です）』

「（分かってるさ）」

「（分かってるよ）」

彼女の自宅に着いた。

足の不自由な子を一人、家に置いて行くのもなんだったが、兄が
もうすぐ帰ってくるそうなので、二人ははやて宅を後にする。

案の定、今度は自分たちにターゲットを変えた。

同じ管理世界に関わる人間に接触されたのが癪に障ったらしい。

ある程度、はやて宅から距離をとった後。

「封時結界」

勇夜はリンクをブレスレットに変え、結界を貼って相手を引き込
み。

「アルフ…いけるか？」
「ああ…」

アルフも子犬形態から人型に姿を変え、両手を胸の真ん中で叩いた。

勇夜とリンクのおかげで、怪我の治りは良好。体のコンディションも、魔力循環の調子もよし。いつでも戦える。

「おい！この趣味悪いストーカー」

「さっさと出てこいよ、相手になってやる」

二人は構えをとる。

並の人間なら、即座に逃げだすほどの威圧感で…

が……

『魔力反応、ロストしました』

「ちっ！…逃げ足の速い奴…」

アルフが毒づく。

相手は上手いこと転移して逃げられてしまった。

引き際も心得ている辺り、慎重かつ相当したたかで頭の切れる野郎どもらしい。

彼らがその連中と再び対峙することになるのは、もう少し後の話となる。

二人がこの全容の掴めない厄介事に係わっていった一方。その日の聖祥大付属小の朝では。

「なのはちゃん、良かった元気で」

「ありがとう、すずかちゃん」

10日振りに登校したなのはを親友たちが出迎えていた。

「アリサちゃんも…ごめんね、心配掛けて…」

「まあ良かったわ…元気で…」

大っぴらに話せない事だったとは言え、悩みを打ち明けてくれな
いなのはに苛立ちをぶつけたアリサもつんけんどんな態度ながらも
内心は無事を喜んでいた。

こういつのをツンデ…嫌な予感がするので何を言いたかったの
かはご想像に任せる。

「そっか…また行かないといけないんだ…」

「うん」

「大変だね…」

「でもやっぱり…今何してるのか…話せないんだよね…」

「ごめんね…たぶんもうすぐ全部終わるから…そうしたら、ちゃん
と話すから」

今はまだ駄目でもこの一件を片付いたら、なのは二人と家族に魔
法のことを話すつもりだった。

中途半端に終わらせたくないという気持ちゆえに、周囲に心配掛
けた分の代価とも言える。

耐性がついてる家族はともかく、親友たちがその内容を呑みこむのは、時間がかかりそうだけれど。

「なのは…」

「何？」

「何か…少し吹っ切れた？」

「え？えーと…どうだろう…」

吹っ切れたと言えば、まあそうだろう。

あのフェイトという『寂しい目』をした女の子。

彼女とどうしたいのか、助けてどうするのか…

その答えを見つけられたから…

異世界から来た、二人の巨人たちの助けもあった。

「心配してた…てか…あたしが怒ってたのはさ…考え事や悩み事を抱えてたってこともあるけど…なのはが不安そうだったり…迷ったり、それで時々…あたしたちの元に帰ってこないんじゃないかって思っちゃうような目をしてたから…」

「アリサちゃん…」

あたし…そんな風に見られてたんだ…

自分がフェイトちゃんのこと、気になって仕方がなかったように。時々、どうしようもなく不安になることはあったけど、それでも自分には、大切な人が…

「行かないよ…」

自分を、大切にしてくれていたんだ。

「黙って…みんなから出て行かないよ、だって…友達だもん…」
だから…こうしてみんなと一喜一憂できるように…
フエイトちゃんに…
みんなから受け取った…この『光』を…
見せてあげるんだ。

日本の現地時間では夜中の頃。

マルチバースに浮く、アースラの会議室では、勇夜に保護されたアルフの事情聴取と今後の対策を練る為の会議が行われている。
他に今室内にいるのは、艦長、執務官、執務官補佐、囑託魔導師、現地の魔導師二人と発見者の結界魔導師だ。

「では、この日記はプレシア・テストロッサの使い魔、リニスが書いたもので間違いないな？」

「ああ、何度もこっそり中を覗こうとして、怒られっけ…」

アルフは、自分の知る限りの情報は全て話した。

プレシアの日頃の虐待。

以前から、『お使い』と称してロストログアを不法収集が行われたこと。

大方の情報は勇夜が掴んだものと同じものではあったが、関係者

の証言ということもあり、彼女の発言は、重要な証拠材料となった。

けれども、本題はここからだ。

アースラは正式に現状任務をフェイトの保護とプレシアの逮捕に変更になった。

だがその相手も簡単に尻尾を掴んではくれない。

アルフから齎された、時の庭園の座標地点もすでに逃げられた後。しかも、ジャミング効果のある結界を貼りながら、逃亡を続けている。

相変わらず、フェイトとの念話、その他の連絡も取れないままだった。

「ジュエルシードは全部回収されちゃったから、今まで以上に探査は難しいだろうし」

「でもあいつは21個全部持ってこいつて言ってたからね、最悪フェイトをこの艦に殴り込みをさせるかも……」

「やりかねえな：今のあいつなら」

あり得ない話では無い。

数日前の海での一件でプレシアは、庭園から直接艦に攻撃をし、艦内の機能を一時ストップさせたのだ。

あの時と同じことをし、フェイトを艦内に転移させて、機能が回復する合間を縫って残りを強奪。

無謀極まる行為だが、娘を蘇生させる為に娘を酷使し、ロストロギアを集め、存在さえあやふやな場所へ行こうと画策するほど、彼女は狂気に堕ちている。

しない可能性より、実行に移す可能性の方が大きかった。

「やはりこちらから、先手を取った方が良いかもしれません」

「光さん、その手とはやはり…」

「はい…互いのジュエルシードを賭けて、決闘を申し込むということですよ」

光の出した提案は、勝てば相手のジュエルシードを全て手にすることができると言う条件で、一騎討ちを行うことであった。

「でも…フェイトちゃんはともかく、プレシアがその手に乗ってくれるかな？畏れと感ずかれるんじゃない…」

「それは無いよエイミー」

「クロノ君？」

「俺もクロノと同意見だ、仮にも天下の管理局様に目を付けられちゃまったんだぜ、普通ならその時点で、リスクが大きいと判断してさっさと手を引くさ」

そう、冷静に状況を把握できるなら、管理局がこの件に介入しても直、ジュエルシードをフェイトに集めさせたりはしない。

真つ当な思考を持てていれば…だが…

「でも…あいつにはもう余裕も時間も無いんだ、メンタルもそうだが、日記の内容が本当なら…」

「重度の肺ガンに侵されてるんですよ、今のあの人の体は…」

ユーノがプレシアを蝕む病魔の名を口にした。

「愛娘を取り戻したくて何年も部屋に籠って不健康な生活を送ってたからね…ガタが来ないわけ、ないんだらうけど…」

アリシアを死なせてからは、プレシアは自らの時間を全て、娘を蘇らせる為だけに費やしてきた。

何十年係ろうと。

記憶を写したクローンを生み出そうと。

それが別人であると突きつけられても。

何度も何度も、希望とも言えない、微かな可能性に賭けてはどん底に落とされても…

そしてそれが、己の心身を疲弊させていくだけだとしても。

その代償がその病であった。

日記によれば、リニスが病魔のことを知った頃には、腫瘍は他の臓器にも転移し、管理世界の医学力でも完全な治癒はできなくなるまでに悪化していた。

プレシアが、現世に留まれる時間は、もうそんなに残されていない。

2、3年か、下手をすると1年にも満たないかもしれない。

「大博打ではありませんが…時の庭園の居所を突き止めるチャンスは、その時しか無いかと…」

アースラの探査能力を持ってしても、尻尾すら掴めない現在では

有効打な一手。

ただその分、リスクも大きい。

もし、決闘に負け、こちらのジュエルシールドが全て奪われ、以前のような広範囲の次元干渉攻撃を受け、逃亡を許せば、プレシアは確実にアルハザードに向かうために21個全てを発動させるだろう。

そうなれば、地球、太陽系どころか第78管理外世界という一つの宇宙が次元振によって跡形もなく消えてしまう。

要はそうならないよう手を打ちながら、決闘に勝てば良いのだが…

「問題はフェイトさんとの決闘の相手を誰にやらせるかだわよね…」

言ってしまうえば、フェイトを圧倒できる魔導…もとい魔道師を含めた戦士はこのアースラにおいては三人いる。

ランクAAA+の黒衣の執務官。

二次元の世界から来た鏡の騎士。

そしてM78星雲光の国のウルトラ戦士。

無論、この三人が一度は彼女を圧倒、或いは勝利を果たしたからと言って、二度目はそうとも限らない。

フェイトも今度は死に物狂いで、その場に臨み、戦うだろう。

時に執念とも言える想いは、実力差を超えた、思わぬ力を発揮することがある。

その彼女を真っ向から向かい打てるのは…

「あの…」

その志願を名乗り出たのは。

「そのフェイトちゃんとの決闘、わたしがやります」

「なのは…」

白き砲撃魔導師。

地球人の少女。

高町なのはだった。

「なのは…でもあの子は…」

ユーノが洩るのも無理ない。

あの時はまだ習いたての素人ではあったが、なのはは初戦で彼女に完敗している。

今は日頃の仮想シミュレーションと実戦による叩き上げで、様にはなってきたが、タイムンでフェイトと勝負をして、勝てるかはほぼ五分五分であった。

「でもプレシアを捕まえるなら、光君と勇夜君とクロノは戦力とし

て温存させた方が得策よね…アルフさんの話では、庭園には護衛の機械人形もたくさんいるとのことだし…」

アルフは頷く。

「あたしも全部は見たことないけど…数だけでもこの船にいる魔導師より多いよ、確か…ウルトラマンぐらいの大型の奴だって、いたしな…」

つまり数の利においては、相手方が上。

厄介ではあるが、それが分かった分、対策は充分立てられる。

「それになのはさんも、彼女と戦うことに譲る気はないんでしょ？」

「はい…まだ…あの子から返事も聞いていませんし、わたし相手なら全力でぶつかっていくと思うんです、それなら勝っても負けても…」

「疲労困憊になった彼女を止められると云うことですか…考えましたねなのは」

「にやはは…あんまり気持ちのいいやり方じゃないかもしれないけどね…でも…これ以上、フェイトちゃんには自分を傷つけながら…戦ってほしくない…自分が一人なんだって、寂しい思いをしてほしくないんです…だから…」

フェイトが自分が背負う重みに耐えられず、負けてしまう前に。

なのはは、まだ幼い顔立ちに凜とした佇まいで、周りの人たちに見据えると。

「フェイトちゃんは…わたしが止めます」

己の決意を強く述べた。

「そして…全部終わったら、友達として迎えてあげます」

良かった…

この子なら…最初の友達として、フェイトの救い手として、光になってくれると信じて…。

勇夜は顔には出さなかったが、なのはの決意に喜ばしい気持ちになった。

まだまだ…これからなんだけどな…

やっとスタートラインを作れたってところだからさ…

と付け加えた上で…

「そうとなれば、決闘をする場所ですか」

「海鳴臨海公園はどうかな、そこに結界を二重に貼って、外部と遮断すれば、周りを気にせずに戦えるよ」

そして、決行日は今から二日後と決まった。

なぜ二日後なのは、各自のコンディションを整えて、全力で臨む為に一日空けたのである。

「あとは、フェイトにこの決闘の旨を伝える方法だが…」

「それなら、俺がやっておく」

伝令役は勇夜が名乗り出た。

「大丈夫なの勇夜君？ フェイトさんが今どこにいるかもまだ…」

「問題無い…海鳴市周辺にいないのがは違いなからな」

「どう言う根拠でだ勇夜？」

「アルフには悪いが、あいつはフェイトの出生上、その顔を見る気すらしないし、庭園に匿ってもいないだろう、となりや、今頃フェイトは海鳴の近くで隠れ潜んでるさ、そこを重点的に送れば良い」

「僕のその役目は勇夜に任せた方が良いと思います、彼女も彼の言葉なら、伝聞の内容を信じるでしょうし、『ウルトラ一族』の伝達手段はミットチルダ人にも有効なんでしょう」

「まあな」

「なら…お願いしますね、勇夜君」

「了解、今からその伝達に出るから、目瞑っててくれ」

一瞬彼が今何をしようとするのか、会議室にいる一同は理解できなかった。

この中で一番付き合いが長い光を除いて…

「リンク」

ウルトラゼロアイを取り出す勇夜。

「さて！ここでゼロになるつもりか？」

「心配すんな、艦内の壁をぶち抜いたりはしねえよ」

「だが僕たちは、その伝達方法とやらをまだ」

「企業秘密だ、デュア！」

構わずに勇夜はゼロアイを装着、光が部屋を埋め尽くし。

それが止む頃には、勇夜はその場から消えていた。

建物内で変身して、内部を傷つけずに外に出るのは、ゼロに限らず全ウルトラマンが出来る芸当である。

「まったく…行動に移すのが早いというか、せっかちと言っか」

一人愚痴るクロノと苦笑する一同であった。

Episode 21 - ひと時の休息（後書き）

PV2万、ユニーク2千突破。

無理にとは言いませんが、そろそろ感想欲しい……でも贅沢は言えない！読んでくれる人だっているんだから！

あと申し訳ありませんが、更新速度がほぼ毎日から、週1、2回にします。

Episode 22 - 最初で、最後の… (前書き)

やっとなのはとフェイト、一騎討ちの回に来たぞおおおお!!
ちなみに、この小説の趣旨の如く、TVと映画と漫画が混じった描
写になっています。

アースラから飛びだした一つの光

その球体は、50Mもの人型を形作り。

ウルトラマンゼロとなった。

『次元ルート、オープン』

リンクの声と共に、ゼロの両腕から、光が発し、真下に光の筋が伸びた。

二つの筋が一つに合わさると、大きな光の輪「ワームホール」が開く。

この技の名は、

『トウインクルウェイ』

本来はウルトラマンが光の速さで何万年もかかる距離を一瞬で移動する技だが、リンクの補助を借りることで次元の壁をも越えられるようになった。

今この瞬間、マルチバースから地球近辺の宇宙まで、時空を超えた次元トンネルが開き、ゼロはその光の輪の中へと飛んで行った。

海鳴市は比較的山間に近いところに街が広がっている都市だ。

だから市街地でも、多少星が見える。

さらに山の奥へと行けば、無数の光点が漆黒の夜空を照らす。

まるで蛍のように、光は点滅を繰り返し、自分が一番光を放てるんだとばかり主張し。

そして月も今夜は満月の球体を形作り、地球に一番近い衛星である自分の立場を最大限に生かしながら、太陽から授かった黄色い輝きを照らしていた。

人それぞれ感想を持つだろうが、少なくともその光点たちを綺麗だと考えるだろう。

が、彼女には、それを感じるだけの余裕は無い。

今は大木に寄り添って、眠っているということもあるが、たとえば目を覚ましていても…同じことだ。

光の巨人と白き魔導師の少女が『寂しい目』と表した、彼女の紅の瞳は、目を閉じて入るが、滲み出ている寂しさという闇は深くなるばかりであった。

夢を見ていた。

昔の…

まだ色あせずにはつきりと覚えてるのに…

もう遠い昔の…ことのよう…

その日は、わたしの誕生日だった。

いつもは多忙なお仕事でわたしが寝てしまう頃に帰ってくることも多かった母さんもその日は休みをもらい。

わたしたちは二人でピクニックに行った。
今だって、その時の嬉しさ、楽しさは昨日のことみたいに覚えて
るのに…

なのに…

母さんが私を名前を呼ぶ時だけ。

その時だけ。

世界は無音になる。

確かに…呼んでいる筈なのに。
呼んでいることは分かっているのに。

聞こえない。

耳に入らない。

耳が聴覚の役目を果たさない。

いくら思い出そうと思っても…
その瞬間の母さんの声だけが…

お願い…

私を呼んで…

名前を呼んで…

私が聞こえるくらい。

大きく、はっきり。

わがままなのは分かってる…
でも

でもでも

でもでもでも

お願い！

…

え？今…なんて…

気がつくと、昼間の草原だった景色は、夜の森へと変わっていた。
眠っていたの？

しばしの間を置き、眠気で鈍っていた思考が研ぎ澄まされて行く。
アルフがいなくなった後。

母さんはまだ足りないとして、ジュエルシード残り12個を持って来てと頼んできた。

でも…残りはどこかに停泊している管理局の次元航行艦の中。
完全に手詰まりだ。

何度も助けてくれた勇夜も…今度ばかりは…

ふと空を見上げると。

フェイトの視線は一点に集中。

理由は、突然空に文字が浮かんだからである。

光でなぞられた文字が。

それは、日本語でも英語でも、ましてやミットチルダ語でもない。

「バルディッシュ、翻訳できる？」

『……………識別中……………翻訳不能です』

愛機でも、あの文字の意味の解読はできなかった。
ならあれは…

？フェイトへ？

突然自分を呼ぶ声がした。

そしてその声の主は間違いなく。

「勇夜？……………ゼロ？」

なぜか何となく、ウルトラ戦士としての名前で呼んだ方がいいと思っ
た。

ユウヤという名はゼロのミドルネームなのでどちらも本名で間違
いはないが。

？白き魔法使い、高町なのはが、互いのジュエルシードを賭けた果
たし合いを所望している、二日後の日本時間午前6時に、漆黒の烏
たちとの戦いがあった地に参上されたし。

ウルトラマンゼロ？

やっぱりゼロだ。

じゃあ、今の内容は…

白き魔法使いって、やっぱりあの子のことだよな。

そうだ…あの時ちゃんと『なのは』って名乗っていたじゃないか。
わたしはとり合おうとせず。

返事の代わりに刃を向けて。
何度も傷つけたのに。

それでも自分に語りかけることをやめなかった。

？友達になりたい？

て、言ってくれた…

未だに、それにどう答えたらいいか、分からないのに…

だが、同時にフェイトに舞い降りた…最後のチャンスでもあった。

アースラの会議室で今後の方針が決定した後。

なのはたちは談話室も兼ねた食堂で談話をしていた。

アルフの希望でどうしても、なのはたちと話をしたいとのことだった。

今は保護という形で、かつ協力的な姿勢を見せていたおかげで手錠等の処置はされていない。

本人も、そんな処遇にしてくれた勇夜からの気遣いもあり、脱走する気はさらさら無かった。

色んなことを話した。

アルフは、フェイトたちと住んでいたアルトセイムのことや、そこでの思い出話。

なのはの方は、家族や友達、海鳴の街のこと。

「じゃあホントに光って、絵本に出てくるような王国の騎士だったの？」

「絵本とは少し違うかもしれませんが、そう…なりますね…」

光は、地球に来る前、来た後のこと。

主に鏡の星やエスメラルダなどなどだ。

「それで、リニスさんでどんな人だったんですか？」

「あ……そうだね……」

内容はプレシアの使い魔であった、リニスの話になった。

「本当に……あたしにとってみれば、フェイトは……お姉さんで……リニスは、お母さんだった……リニスもおたしたちを……本当の子みたいに育ててくれて……」

「アルフさん？」

アルフが今までと声色が変わったことになのはたちは気になった。今彼女の顔は屈んで、表情が見えない。

だが……その体には震えが……

「知らなかった……リニスが最後に言った言葉に……そんな意味があつたなんて……」

リニスが残した日記には、フェイトとアルフの成長の記録だけでなく、フェイトとプレシアを仲介しようと奮闘する日々……と『真実』を突きつけられた後の苦悩と葛藤の記録が残されていた。

「『しつかり支えてあげて……フェイトがきつと、幸せになれるように』って託されたのに……わたしはまだ……あの子に何もして上げられてない……約束も果たしてあげられてない……」

「あ……あの……」

「ごめんね……でもこうしてさ……誰かと一緒に話すのが、こんなに嬉しいものなんだなって思うと、フェイトにそんなこともさせて上げられてない自分が、悔しくて……」

今この瞬間だけじゃない、勇夜が作って……一緒に食べた食卓も……プレシアと勇夜が会って、自分が真実を知ることになるその前日。精神リンク越しで感じた、フェイトの温かい気持ちも……

目で見なくても分かった、あの時、確かにフェイトは笑っていた……自分を安心させる為の無理をした笑顔ではなく。

心から…笑ったということに…
流れるのは…透明な雫。

そして…フェイトを心から助けようとしている人たちが、自分以外にもたくさんいるという事実。

涙とともに、悔しさと悲しみと喜びが入り乱れ、流れていく。

「あたしから言えた義理じゃないってのは…分かってる…みんなには散々なことしたからね…」

自分はロストロギアを不法に集めた共犯者で、結果的には言え、フェイトを助けたいと奮闘してきた人たちの邪魔もしてしまった。

あの時だつて…あたしが横やりを入れなかつたら、もっと早くフェイトを、心の牢獄から救い出せたかもしれない。

自分の浅はかさが嫌になる。

それでも…

「でもお願い…あの子を助けて…フェイトは今…本当に一人ぼっちなんだよ」

「うん…まかせて」

なのははきりつとした貌で答え。

光たちも頷いて応えた。

光から、アルフは自分がなんとかするから、もう寝なさいと言われて、二人はアースラから支給された部屋へと戻った。

「アルフさんも、辛かったんだね…」
「うん…今までずっと傍にいたから、その分…無力感も大きかったんだ」

だがやはり、アルフの流した涙は鮮烈過ぎて、直ぐには眠れそうにも無い。

「フェイトちゃんのお母さんも、認めて上げられるかな…フェイトちゃんが自分の子で、ずっと…寂しがってたこと…」
「時間は…かかるだろうね…」

アリシアを亡くして以来、プレシアの時間は止まったままで、ひたすら時計の針を『あの頃』に戻そうと躍起になっている。

そしてフェイトも多分、『あの頃』の実はアリシアのものである記憶だけを頼りにあの時間を取りもどこうして…

そう考えれば、確かにあの二人は親子だ。

過ぎ去ってしまった思い出に今でも縋り付いてしまい、お互い正面からお互いと『現在』に向き合えずにいる。

「なのはは大丈夫？色々辛い話を聞いて…」

13歳の自分でさえ、心を痛める現実を聞いたのだ。
今年で11歳になるのはだって…

「まだ…大丈夫、とは言えないかな…正直……だけど…フェイトちゃんだって、ずっと…今でもわたしよりずっと辛い思いしてるんだよ、ここでへこたれたら、フェイトちゃんを友達として、向かえてあげられない」

それでも彼女は諦めていない。
ジュエルシードも。
フェイトもだ。

「それに…みんながいるからね、光兄も勇夜さんもアルフさんもク
ロノ君たちも、お父さんもお母さんもお兄ちゃんもお姉ちゃんもア
リサちゃんもすすずかちゃんも、それにレイジングハートもユーノ君
だつて」

「なのは…」

「だからがんばれるんだよ…背中がいつも、あつたかいから…」

「ありがとう…頑張ってるねなのは、後悔の無いように」
「うん」

フェイトは一人ぼっち。
確かにそうだった。

だが、一人だと思ふことと、本当に一人であることは違う。
フェイトの場合は紛れもなく前者だ。

だから、そうでないことを…

一人にさせないことを…

それを彼女に伝えたい。

どこまでできるかは分からないし。

たとえその為の通過儀礼が、戦うことだったとしても。

それが、なのはの決意でもあった。

「それでも飲みますか？」

「あ、ありがと…大分落ち着いたよ」

涙で目が赤くなったアルフに光は、飲料水の入ったコップを差し出す。

今食堂は消灯されているが、その分窓から見えるマルチバースがはつきりと二人の目に映っている。

ゼロが何度も見てきたであろうその光景。

二人とも思わず、見惚れてしまっていた。

「そっぴや…あんたとこうして話をするのも、初めてだったね」

「僕のことはいよいよ彼から聞いているでしょ？」

頷くアルフ。

「仲間で恩人で友達だって、勇夜は言ってたんだって、リンクから聞いたんだけど」

「それはむしろこっちですよ…」

「あのベリアルとかいう、悪党になったウルトラマンに洗脳されたことかい？」

「それもありませんが、彼のお陰で世界はこんなに広いことを知ったし、地球に來られましたからね」

「どういう意味だい？」

「僕のご先祖様は、地球人のハーフだったんです、ゼロと同じく」

ゼロが別世界の地球の人間と、M78星雲人のウルトラセブンの間に生まれたことはリンクから聞いた。

そんな出生のために、荒んだ時期もあったことも。

それを超えて、父との絆が強固になったことも。

「僕にはこの二次元の能力を使って、惑星間ネットワークを作るのが夢でした、今思えば、それを叶えたかったのは、地球に行ってみたかったから…かもしれませんが、先祖が育った地に…」

「光……」

「不可抗力ですが、それが叶って、血はつながらなくても家族ができて、地球人として生きることでもできましたからね……」

光「リヒトのミスメラルダ人の母は彼を生んだ時に無理がたたって、昇天し男で一つ育ててくれた父も、カイザーベリアルベリアルの侵攻で命を落とした。

エメラナ姫やジャンバード、自分を騎士に任じてくれたエスメラルダの王族や、同僚の兵士たち……

そして……ゼロ、グレンファイヤー、ジャンボット。

朋友なかまたちもいて、寂しくは無かった。

でも……ゼロと同じく……家族に恵まれなかった境遇から、家族に恋焦がれていたのは事実だ。

一時期、どうして母に無理強いさせて自分を生んだのか？と父に詰め掛かったことがある。

穏やかな彼にも、反抗期はあった。

その父も、今はもういない。

それだけに、地球で、自分にちゃんと家族ができたことが、地球人として生きることができたことが、とても嬉しかった。

「血が繋がってるだけじゃ……家族って言わない……」

「え？」

「勇夜が前に言ったんだ……それだけが家族を形作るものじゃないって……」

「彼らしいですね……」

血が繋がっていないながらも、分かりあえるまで紆余曲折あった。

それを経験したからこそ言える言葉。

「なれるかな…これかも…フェイトの家族に…」

「なれますよ…今でもそうじゃないですか…ゼロもなのはも、必死に想いを伝えてきたんです、たとえ届かなくても？それでも？と…あなたがここで負けてどうするんですか？」

「ごめん…その自分の想いが、何度届けても…届かなかったからさ、弱気になつてた…」

そうだ、ここで負けちゃいけない。

もう一度、フェイトと姉妹のような家族でいられるように…

支えてあげられるように。

そうだ、今度こそ、約束を果たすんだ。

フェイトとリニスと交わした約束を…勇夜たちみんなと、一緒に。

そして二日後…

運命の日。

日本時間午前6時。

海鳴臨海公園。

二重に貼られた広域結界の中。

結界の中ということもあるが、朝はやはり静謐で、それでいでのどかだ。

だがこれから、この場所は戦場になる。

二人の魔導師の少女によって…

そのとあるビルの屋上庭園。

「ここなら、良いよね？」

そこにある噴水の前で佇む高町なのはは、念話で伝える、
これから、全力で戦うことになる相手に向けて。

「出てきて…フェイトちゃん」

思念を伝え、目をつぶりながら待っていると。

魔力とともに後ろに人の気配を感じた。

目を開けると、噴水の水面に彼女が映っていた。

直ぐ後ろにあるこの庭園に繋がる、円形のエレベーターの上に立
つ、金髪赤眼の漆黒の魔導師。

フェイト・テストロツサ。

なのはは振り向き、彼女を見据える。

初めて会った時と同じ。

寂しそうな目をした女の子。

たぶん…

たぶん今、フェイトに真実を語っても…

それでも彼女は立ち止まられない。

立ち止まれない…

「フェイトはいつでも受けて立つとばかり。」

「サイズフォーム」

魔力刃を展開した。

全ての始まりは、理不尽に引き裂かれた親子たち。

でも…自分たちのきっかけは…

「たぶん……きっかけは…このジュエルシード」

『リリース、ジュエルシード』

二人は自分が今持つてるジュエルシードを見せ合う。

「だから賭けよう、わたしたちが持つてるジュエルシードを…それからだよ、全部…勇夜さんが言ってた…わたしたちは、まだ終わってもいないし、始まってもないって、今日がその為の……スタートなんだって！」

フェイトは勇夜の単語に一瞬驚いた素振りを見せるが、直ぐにバリディツシュを正眼に構える。

そしてなのはもレイジングハートを構え。

「だから始めるんだ…わたしたちの…最初で最後の…真剣勝負！」

「始まったね…」

「そうだな」

なのはたちがいたところとは違うベルの屋上では。

諸星勇夜。

高町光。

ユーノ・スクライア。

アルフらが、この戦闘を見届ける為にこの場にいる。

アルフは、数日振りにフェイトをこの目で見た時。思わず『もう止めよう』と言いそうになった。

でも同時にフェイトはこう答えるとも思った。

？それでも…わたしはあの人の娘だから？と

そう…フェイトを助けるには、その母も一緒に助けなければなら
ない。

二人が過去とお互いを向き合って、初めて二人は本当の親子にな
る。

勇夜も、なのはも、その真実に悩みながら、助けようとずっと奮
闘していた。

そして今は、なのはが全身全霊でフェイトを止めようとしている。
今は…信じるんだ。

あの子に託したんだから…

一方アースラのオペレーター室。

「戦闘開始…かな」

「ああ…」

クロノとエイミィはモニター越しに、二人の戦闘を見届けている。
既にモニターには、いくつもの光点が輝いては消えていった。

「戦闘空間の固定は大丈夫か？」

「うん、上空まで伸ばした2重結界に戦闘訓練用のレイアー建造物

」

簡単に言うと、魔法でほぼ実体を持つ建造物を足している。

管理局の訓練でよく使われる技術だ。

「地球の人には絶対見つからないし、どんだけ壊しても、結界外へ
の被害は0と、でも珍しいよね」

「何がだい？」

「クロノ君がこういう大博打を許すなんて」

「なのはが勝つに越したことはないさ、けれど…」

確かにリスクは大きい。

だがその時の対処も想定している。

「勝敗はどう転んでも関係ないしね」

「なのはちゃんが戦闘で時間を稼いでくれるうちに、時の庭園補足の準備と」

「頼りにしてるんだ…逃がさないでくれよ」

「了解！」

陽気でフランクな響きでエイミィは応じた。

空中で何度も交差する桜色と金色の光跡。

が、桜色の光…なのはがフェイトの一撃で海面スレスレまで落下。

一瞬海水につかるが、直ぐに態勢を取り直し。
加速。

『フォトンランサー』

そこに追跡するフェイトが魔力光を4つ発射。
なんとか4発全て回避し、そのまま上昇する。

『デイベインシューター』

なのはも魔力光を5発形成。

「シュート！」

フェイトに向けて飛ばす。

『サイズフォーム』

魔力刃を展開したフェイトは、接近するスフィアを切り落とす。なのはに向かって急加速。もう一発のデイベインシューターを回避し、斬りかかった。

『プロテクション』

なんとか受け止めるなのは。

鎌と盾の鏝迫り合い。

だがなのはも防御に専念する一方。

フェイトが回避した魔力スフィアを彼女に飛ばすが、なのはの意図に気づいたフェイトは…

『サンダーバレット』

左手に魔力を集め、至近距離からかました。

シールド越しとは言え、衝撃を受けたなのはは、ビルを貫き、海上に衝突、衝撃で海水と水蒸気が舞う。

魔力光もコントロールを失い不発に終わった。

しばらく様子を見るフェイト。

まだ…終わって無い。

フェイトの直感がそう告げる。

それは当たりだった。

水蒸気から一瞬、光が見えて。

魔力の光線が突き進む。

それを上昇して回避するフェイト。

水蒸気の霧が晴れると…息を荒げながら、キャノンモードのレイ

ジングハートを構えるのがいた。

『やはり実力では彼女の方が上です』

レイジングハートが忠告する。

この短期間でなのはは魔導師としての実力を着実にアップさせてきた。

実戦を何度も経験し、時間の許す限り、訓練に訓練を重ね、寝ている間さえマルチタスクを使い、夢の中で、シュミレーションを続けていた。

だが相手だって、数年の月日をかけて修練を積み、経験も積んでいる。

簡単には勝たせてくれない。

「この日の為に特訓はしてきた、切り札だって用意してるし」

『彼』が見せた数少ない魔法の一つを元にして作り上げた。

とっておきのジョーカーカード…

だがまだそのタイミングではない。

あれを使うには、もっとなのはと彼女の魔力をこの空間にばら撒かなければならないから…

「だから後は、負けないって気持ちと、みんなからもらった想いで向かっていくだけ…でしょ？」

『ALL RIGHY MASTER』

使い手も愛機も名前の通り『不屈の心』は健在であった。

「（やはり彼女は強いですね…なのはもかなり腕を上げていますか…）」

「（フェイトも伊達に魔導師をやってねえし、あのリニスも相当教え上手な先生だったみてえだな）」

その名教師を生み出す辺り、さすがは大魔導師ってわけか…

勇夜も光もまた、なのはが勝ってくればと願ってはいるが、あらゆる非常時に対応できるよう、冷静さを保ちながら見聞をしている。

その辺りは二人とも流石、若年ながらも幾多の修羅場を潜り抜けてきた戦士たちである。

「（けど…妹さんにもあるみたいだぜ、『奥の手』が）」

「（?…それっていったい?）」

「（なんでも…俺の魔法を参考にしたらしんだが）」

勇夜の魔法を…

彼は、なのはたちに比べれば魔法の使用が極端に少ない。

海鳴での戦闘も、半分はゼロに変身して戦っていたし。

使用例も光の知る限りでは、数えるほどしかない。

自分もそうではあるのだが…

その中で一番印象に残っているのは…

……

……

……

思わず笑みを浮かべる光。
なるほど、確かに逆転の切り札には、丁度いいカードだと光は思った。

「（ただ…フェイトにもその奥の手はあるはず、この勝負、そいつの使い時をミスった奴が…負ける）」
なんせ切り札を出した瞬間が、一番勝率は高く、同時に敗北する可能性も高くなるのである。

それは単なる直感では無く。

勇夜　　ゼロが戦士としての今までの経験から導いた分析結果だった。

そこからの戦闘は…
互角かつ熾烈であった。

二人は魔力弾を打ち合いながら、雲が漂う高さまで上昇。
自分の得物で時に、10個近くの魔力弾を一气打ち合い。
交差し合い。

正面から、ぶつかり合い。
バリアジャケットも時間が進むごとにポロポロになっていく。

今戦っているのが、まだあどけない少女たちであることを忘れさせてしまうくらい。

それはそれは、戦列で激しい空中戦だった。

『サイズスラッシュ』

魔力の密度を上げた刃でフェイトはなのはの背後を取り、切りかかる。

『ラウンドシールド』

なのはそれを振り向くと同時に受け止めた。
再び、魔力の鎌と魔力障壁がぶつかり合う。
フェイトは内心戸惑った。

確実に自分の攻撃を当てられる死角からの一閃だったからである。

それをなのはは、？後ろにも目があるかのような？所作で防御した。

さらに驚くべきことは、なのはは障壁で魔力刃を挟み込んだのである。

真剣白羽取りを、バリアで行ったと表現すれば、分かりやすいだろう。

なのははその状態を維持したまま。

『バリアバースト』

わざと障壁を前面に暴発させた。

その衝撃にたまらず目をつむりながら後退するフェイト。
目を見開くと、視界内になのははいない。

焦りを抑えながら、周囲を注視していたが。

『フラッシュムーブ』

真上から、一時的に飛行スピードを上げたなのはが突進。

『フラッシュインパクト』

袈裟がけに魔力を纏わせたレイジングハートを振り下ろす。
かわせないと判断したフェイトはバルディッシュで受け止めた。

光が迸り、周りの光景がホワイトアウトで真っ白に埋め尽くされる。

今度はなのははフェイトを見失った。

フェイトはチャンスとばかり、死角から急接近し切りつけた。

だが、その一撃もなのはは回避した。

視界に張っていなかったにも拘わらずだ。

ギリギリのタイミングだったのか、胸部のリボンが切られてしまったが。

一旦出方を窺いながら後退し、距離をとる二人。

途端、たまっていた疲労で息が荒くなっていることをようやく自覚した。

それだけ予断を許さない戦闘だったのである。

なのはの愛機や、勇夜たちから総合的な実力は対戦相手より上と評されたフェイト。

だが彼女は、なのはに決定打を与えられていなことに焦りを感じていた。

初めて戦った時は、魔力が大きいだけの素人だったのに…

今はもう、自分だけの戦闘スタイルを確立してしまっている。

機動力とスピードはそれほどでも無いが…

火力と防御力なら、自分を遥かに上回っている。

有効射程も長いし。

コントロールも巧みだ。

まるで…スピードの自分に対抗するように…

違う…『ように』じゃない。
実際そうなんだ。

結果的に自分の叩き上げで、彼女はここまで強くなった。

でも…わたしがここで負けたら…
母さんを助けて上げられない。

脳裏に浮かぶのは、失って久しい。
母の笑顔。

あの頃に
戻れなくなる！

母から笑顔が消えたきつかけは…
寝る間も惜しんではげんだ。
ある魔導炉の開発計画。

その多忙さで、わたしが寝てしまう頃に疲れた顔で帰ってくるこ
とも度々だったし。

いつ終わると、わがママを言ったりもした。
それでもこれが終われば一緒にいられる時間ができる。
その言葉を信じて待ち続けた。

そして…その魔導炉の起動実験だった日。
その日、実験は失敗し、事故が起きた。
ベランダから、帰りを待ちわびていたわたしが見たのは。
母さんのいた場所から光を放つ柱だった。

それからどうなったのかは、まったく覚えていない。
次に目を覚ました時に最初に見たのは
泣きながら自分を抱きしめる母と…

あの事故で怪我をせずと眠っていたという事実だった。

その後、小さな自分には、持て余してしまうくらい大きく新しい部屋に連れられて、母さんは自分が少し休んだら、これからは何時でも一緒にいられると言ってくれた。

お仕事は？と聞いたが、その必要は無いつて…

私は思わず『右手』で母さんの頬に触れた。

その瞬間、母さんはひどく驚いた顔をして…

でも、直ぐに笑って…

私の名前を呼んだ…

『アリシア』

え？

アリシアって誰？

わたしはフェイトだよ…

フェイトはグレイヴフォームにしたバルディッシュユで突貫。

それをなのは受け止める。

バリアを貫こうと力をこめる一方で、必死に記憶を辿る。

母さんが笑ってる記憶を…

でも…それでも呼んでくれない。

どの場面でも母さんは自分を…

『アリシア』って呼んで…

フェイトって呼んでくれない。

違う。

違うよ…

そんなフェイトを見た、彼女以外のここにいる人間はほぼ総じて、一つの結論に行きつく。

アリシアとしての記憶が蘇った
は？と
ので

誰だっけいきなり自分の記憶に聞き慣れない単語が出れば、戸惑う。

そしてそれが他人の記憶だったら……
信じることなんかできやしない。
実際、勇夜たちの推測通りだった。

が、彼女は直ぐ調子を戻すと
今までで一番巨大な魔法陣が足元に出現、そして30はゆうに越える稲妻の魔力スフィアがフェイトの周辺に現れる。
ビルから見ている勇夜たちもその姿がはつきりと見て取れた。

「フェイトは本気だ……」
「アルフ？まさかあれが？」
「そうだよ……あれはリニスから教えてもらった……とっておきの切り札」

高圧縮された、一撃一撃が強力な魔力弾を大量に生成し、合計1000発、一気に乱れ撃つ技。

フォトンランサーフラックスシフト。

『この圧力…予想以上ですね』
「うん…だけど」
なのはが、防御する準備を取りかかろうとした時。
突然四肢に金色で半透明の立方体が現れ、動きを封じた。

「設置型のバインド、いつの間？」

「どうやら、スフィアは彼女が、バインドは愛機と役割を分担したようですね」

AIを積んだデバイス、特にインテリジェントタイプは、デバイス自身の意思で魔法を発動できる。

用途次第で使い手と愛機が、それぞれ異なる効果を持つ魔法を同時に行使することも可能だ。

「なら…せめてなのはにサポートを…」

「やめておけ、ユーノ」

「勇夜さん？」

思わず横やりを出しそうになったユーノを、勇夜が引き留める。

「一対一のタイムマン勝負に、手出しは無用だぜ」

「でも勇夜、本当にやばいんだよ、あれを受けたら、どんな手練れだって…」

「いいから見てろ」

焦燥を隠せないユーノとアルフに対して、勇夜は務めて冷静だった。

それこそ、彼女の足元に張られた『それ』に気づく余裕があるくらいに。

「フォトンランサー…フランクシフト」

フェイトは愛機を持った手を振りかぶり。

滅すると踏んでいた。

もう浮遊する余力さえ残ってはいない。

疲労で息を荒げながら、そう思考していた。

だれだってこの一部始終を見ればそう考えるだろう。

そしてこの勝負はフェイトの勝ちだと…

であるはずだった。

煙が晴れ先にいたのは…

満身創痍ながらも…

空に佇む。

なのはだった。

Episode 22 - 最初で、最後の… (後書き)

作中では明言されませんが、ゼロのたった連絡手段手段は真正銘『ウルトラサイン』です。

あと現状では、ノアやゼロが、どういった方法で次元を超えるのか描写が無いので (キラージビートスターで明らかになりそうかどうか)

ゼロの次元移動は作者独自の解釈です。

さて次回…星を軽くぶっ飛ばす砲を披露した悪魔に下される鉄槌とは………なんてな。

とりあえず言えることは、ネットにつけられた俗称がこれでもか！と出るのをご注意下さい。

キャライメージソング集 + (前書き)

小説家になろうに限らず、二次創作では各キャラのイメージにあつた歌を割り当ててる作者様があります。

よって突然ですが、私も趣味と独断に偏ったキャラごとのイメージソングを割り振ってみました。しかも複数…

キャライメージソング集+

? 諸星勇夜 ウルトランゼロ

新しい光

すすめ!ウルトラマンゼロ (どちらもボイジャー、これは外せない)

青い果実 (doa:ウルトラマンネクサス2nd OP)

COLORS (FLOW:コードギアス 1st OP)

cod・E (Eの暗号) (SOPHIA:仮面ライダーエター

ナル ED)

DREAM FIGHTER (宮野真守:ウルトラマン列伝 2

nd OP)

? フェイト・テストロツサ

ETERNAL BLAZE (水樹奈々:リリカルなのはA'S

OP)

progress (浜崎あゆみ:テイルズ オブ エクシリア

OP)

君がいるから... (西脇唯:金田一少年の事件簿:3rd OP)

Sprinter (Kalafina:空の境界 矛盾螺旋 E

D)

LEVEL5 - Judgment - (ELISSA:とある科

学の超電磁砲:2nd OP)

? 高町光 ミラーナイト

Change the world (V6:犬夜叉 1st OP)
Alive a life (松本梨香^{サトシ}:仮面ライダー龍騎 OP)
fly me to the sky (angelia:蒼穹のフ
アフナー イメージソング)
Take me higher (V6:ウルトラマンティガ O
P)
夢であるように (DEEN:ティルズ オブ デスティニー O
P)

?高町なのは

Grip! (Every Little thing:犬夜叉
4th OP)
Get Over (dream:ヒカルの碁 1st OP)
運命のしずくDestiny's star (GIRLS
NEXT DOOR:ウルトラマンゼロ the movie 主
題歌)
Real Force (ELISA:とある科学の超電磁砲 2
nd ED)
Spirit! (Project DMM:ウルトラマンコスモ
ス OP)

・リゼロイメージ主題歌

OP曲:Oath sign (LISA:Fate/zero
op)
ED曲:merry-go-round (CHEMISTRY:
機動戦士ガンダムUC ep3 ED)

キャライメージソング集 + (後書き)

やっぱりカオスな選曲になったWWW

「なのは…」

ユーノとアルフは自分が見ている物が信じられなかった。

100発以上ものの魔力スフィアによる波状攻撃を受けて、未だに飛んでいられるなのはに。

「ジャケットも傷ついてるけど、さっきより原型を留めてる…」

「どうやら…なのはたちも役割分担をしたようですね」

「どうということだい？光」

『まだ動けますか？マスター』

健在なのは分かっていたが、それでもレイジングハートは相棒のコンディションを確認する。

「もちろん！レイジングハート！」

『Comprehension - - Cannon mode』

「今度はこっちの 番だよ！！」

どうして…

あれだけの攻撃を受けて、なぜまだ飛んでいられるの？

疑問はつきないが、なら、反撃される前に。

そう考えた直後だった。

自分の両手両足が桜色のリングに縛り付けられた。

「バインド？いつの間にか！？」

「どこにそんなタイミングが…」

「まさか…」

それはフェイトが、スフィアの制御に集中するあまりに生じた、致命的な隙。

「発射直前に予め、トラップを張り、レイジングハートが全力で防いでる間、なのははジャケットの再構築を行ったのですよ」

尤も、何発かは直撃を受けている、決してダメージが無い…という訳ではない。

余剰魔力を放出する機能がある桜色の光の翼が広がるレイジングハートの砲口に、魔力がチャージされ、なのははトリガーを指にかける。

「デイバアイイイイイン」

「

「でもなのははだって、もう限界なんだろう？この一撃が耐えられたらもう」

「魔力は残ってないと言いたいのか？」

光を除けば、今勇夜が何を言ってるのかまったく理解できなかった。

「使える魔力はもう無い。」

「魔力は使った後、消えて無くなるものですか？」

「少なくとも、なのはの体内には…だ…」

？使い捨てられた魔力を掻き集めていることに？

先程も前述したが、あの渾身のデイベインバスターの一撃はあくまで…

壮大な前振り……………

ユーノたちは光の言葉で初めて、なのははやるつとしている…その特大の切り札を理解した。

そしてその確信を裏付ける…

「使える魔力なんて、この辺りにいくらでもあるじゃねえか」

勇夜の発言と、上空に上がったなのはの目の前に集まる魔力の光球が、疑いようの無い証拠だった。

「集束…砲撃…」

今までの戦闘で、自分敵味方関係無く使いきれずに空気中に魔力素で漂っている魔力を再利用して集め

『Starlight Breaker』

体を通さずに、使用する最上級技術。

それを最大限に生かした、なのはとレイジングハートが知恵と戦術を練って作り上げた。

「わたしたちが考えだした、最後の切り札」

光はなのはが見えなくなるくらい大きくなり、怪獣やウルトラマンら巨人たちをも呑みこむほど巨大となり、輝きを増していく。それは正に。

『星の光』

だった。

まだバインドの効力は続き、片手以外身動きがとれないフェイト。とれる手段はもうほとんどない。

「受けてみて！」

これがなのはの全力全開、渾身の一撃。集束作業は完了した。

フェイトは気迫の叫びとともに5重に障壁を張るが…

「スタアアアアアライトオオオオ！ブレイカアアアアアアアアアアアアア
アアア
！！！！！！」

球体の殻から解き放たれた、純粋な桜色の魔力の荒波。

それはフェイトの5重の障壁を容易く破り。

そして、フェイトの視界は白く染まり……何も見えなくなり、意識がブラックアウトした。

余りに強すぎる魔力の閃光は、爆風とともに雨粒となって拡散し、広がり。

ビルは次々とその衝撃に、ガラスが粉々に砕け散り、強度が耐えられない限界を超えて倒壊。

追い打ちに魔力の荒波の直撃を受けた海は、津波という名の凶暴な巨大生物となって暴れ狂い、結界内の建築物を容赦なく呑みこんでいく。

勇夜たちは、あらかじめなのはよりも上空へ飛んで退避していたので無事ではあったが、爆発の余波はここまで飛んできた。

爆発が収まった後に広がるのは。

廃墟。

その表現だけで充分だ。

海はまだ荒れ気味でささくれ立ち。

爆発を免れて無事な建物は、一つも残って無い。

辛うじて倒壊していないビルも痛々しくヒビと抉られた傷が見受けられボロボロであった。

星の光によって起こされた津波に浸水された街は正に…ゴースト

シテイそのものだった。

災害を直に体験した者なら、その光景を前に悪夢の再来とばかり、内に撃ちこまれた心的外傷トラウマを再発させてしまうだろう。

その中を、なのはは大技を使った疲労がまだとれない中、フェイトを探していた。

最初から全力で戦うことになってたし。

威力に反して、非殺傷に設定した上での攻撃なので外傷は無い。

だが、意識を失って海に墜落することは明白だった。

やり過ぎたよね…

戦ってる時は殺し合いとまではいかなかったも、譲れない目的のために死力を尽くしていたので気にする余裕はなかったが、TV越しでしか見たこと無かった惨状を前に、流石に反省し、表情を曇らせながらフェイトを探していると。

「（なのは、こっちです）」

光からの念話が来た。

兄が指定した場所に行く。

倒壊したビルの一つに、光と勇夜と仰向けに倒れているフェイトがいた。

フェイトが海に落ちる寸前、光が勇夜をミラーアイズに映る鏡面から『ナイトムーバー』で海面にワープさせ、勇夜は彼女を救いあげ、その足で近くのビルに移動したのである。

「光兄…」

「大丈夫です、気を失ってるだけですよ」

なのはは横たわるフェイトを見つめる。

すると丁度いいタイミングで、彼女は意識を取り戻し、ゆっくりと目を開けた。

フェイトの最大の敗因は、やはり『攻撃への傾倒』だった。

攻撃することに拘り過ぎるあまり、周囲への配慮が疎かになる。

魔法の先生であったリニスからも常々指摘されている点だった。

もし、網が張られていることに気付いていたら、強力だが隙が多く、直線的で見切りやすいなのはの砲撃をまともに受けることにはならなかった。

「？切り札を出した瞬間が、一番勝率は高く、同時に敗北する可能性も高くなる？」

勇夜の持論が現実となったのだ。

「ごめんね…大丈夫？」

自分を見つめるフェイトに謝罪の言葉を言った直後。

それは起きた。

パソコン！

そんな擬音と同時に、痛みがなのはの頭に響く。

「イタ！…いきなり何？光兄、勇夜さん」

「やり過ぎだ（です）」

なのはにゲンコツを見舞った張本人である勇夜と光と、リンクはほぼ同時にはもって突っ込む。

相手は一応………小5…の女の子なので手加減はしている。

「まったく…バインドかけられた一人相手に何ぶっ放してんだか…
…キ ガイ鬼畜過ぎるだろ…」

「結界内で非殺傷とは言え、明らかに過剰暴力ですよ」

『集束の詰めが甘いですね、その結果被害がここまで拡大したものと……はつきり申しますと、？下手っぴ？……です』

「確か『スターライトブレイカー』とか言ったか？意味は星の光なんだろうけど、むしろ『星を軽くぶっ壊す殲滅砲』って言った方が
だいたい合ってるような…」

「言い得て妙ですね、僕もあれは、魔法と言うより魔の砲撃と書いて魔砲と呼んだ方が正確だと思います」

「その表現に違和感を感じないのが怖いわ………そんであんな天使みたいな姿で、あんな『魔砲』使っただ、天使は天使でも、告死天使

か……墮天使……」

「いいえ、墮天使という表現では生ぬるい、もう悪魔と呼ぶのが相応しいです、最悪……『魔王』に昇華するかもしれない……」

『今の魔法の破壊力を計算してみました、地球で現存する大量破壊兵器と、過去地球で起きた自然災害を上回る数値結果が導き出されました』

「やべえんじゃねーか……このままじゃ妹さん、光の国からもヤプールかJUDAかエンペラ星人か、ダークザギ級の脅威だとレッテルを張られるんじゃ……」

『将来本人の意思に関係なく、周囲から？管理局の白い悪魔？？白い魔王？？冥王？？霸王？？と言った異名を付けられるかもしれません』

「不味いですね、僕がその前になんとか、教育しておかなければ……」

「あ……あの、勇夜、リンク……あと……リヒト……さん……でしたよね……」

「……何だ（何ですか）？」

加減？何それおいしいの？的な、ボロクソに言いまくる3人にフイトが恐る恐る尋ねる。

「それ以上言わない方が……」

「何言つてんだ？一番の被害者はフェイトだろ……………正直まだ言い足りねえぞ」

『悪魔を誕生させないためには、これくらいの荒療治は必要です』

二人はドヤ顔で即答した。

「でも……………もういい……………もういいから……………気持ちは十分受け取ったから……………やめてあげて……………でないと……………」

指さしながら答えるフェイト。

その方向に目を向けると。

「見ないで……………光兄……………フェイトちゃん……………勇夜さん……………こんな醜いわたしの姿を……………見ないで……………」

『墮天使』やら『悪魔』やら、おまけに放送禁止用語も付けられ、言いたい放題ボロクソ言われたご本人は、かの義兄の引きこもりモードを彷彿とさせる体育座りで、どんよりとしたオーラと黒い縦線を漂わせる状態になっていた。

「なのは？一体どうしたの!？」

「ユーノ君も見ないで……………わたしは歪んだ『魔砲少女』……………なんだから……………」

「な…何を言ってるの？」
遅れてやってきたユーノが駆け寄り。

「勇夜、光…これはどういう騒ぎだい？」
アルフもこの惨状を前に尋ねてくる。

「アルフ…これも世の為人の為、世界を守る為だ」
真剣なのかコミカルなのか判別しかねる表情で勇夜は答える。

「あ…そう…なんだ」
アルフもこの惨状に思うところがあるのか、それ以上何も言わなかった。

「なのは…」

「光兄…いいんだよ慰め無くて…どうせわたしなんて」

「さっきは流石に言い過ぎました…でも…力を持つと言うことは、自分がどう思っようと関係無く、誰かから、『悪魔』と呼ばれる覚悟を持たなければならいんですよ…確かになのはのフェイトを助きたい気持ちは本物でしょう、しかしフェイトから見れば、目的を邪魔するなのは、悪魔に見えたはずです、僕たちは神様にはなれませんが…悪魔にはなれてしまう人間いまのですから…」

「……………光兄…」

「それに魔法には、非殺傷というストッパーがありますが、本当にストッパーを掛けなければならぬのは、それを使う人間自身、自分の『心』なんです」

「それって…どういうこと？」

「今はまだ無理に理解しなくてもいいですが、今言ったことは絶対に覚えておいて下さい、そして…どんな力を得ようと自分は『一人の人間』でしかないことも、なのはが…これからも魔法使いを続けていくのなら尚更です、いいですね？」

「……………うん…分かった…」

兄の言葉の意味をきちんと理解するのはまだ先になってしまっただろうけど。

自分の為に言ってる、ということとはちゃんと分かるし、これがその時まで兄がストッパーを務めるって宣言だったことも…

そう思うと…一応怒られてはいるのに、どこか嬉しかった。

「アルフ……………」

数日振りの姉妹とも言える、主と使い魔の再会。

でも…まるで長い間、会ってなかったような錯覚さえ覚える。

何て言ったら良いんだろう？

アルフが、母さんの仕打ちに我慢できなくて反抗したけど、返り討ちにあって、勇夜を頼って今ここに居ることは自分でも理解できし…

頑固な私を思うあまり、ずっと辛かったことも…………。

なのに…私…

「えっ？」

突然、アルフはフェイトを抱き締めた。

「ごめんね…傍に居るって言ったのに…あたし…」

今はアルフの顔が見えない恰好だが、泣いていることは明白だった。

た。

「これであたしたち御用だつてことは分かつてるさ、でももう、母さんのためだからって、罪人紛いのことなんか、しなくていいんだよ……」

「アルフ……」

「おとりこみ中のところ悪いが……」

わたしたちは彼の方を見る。

わたしたちのやってきたことは危険で違法だと言いながらも、本当に危ない時はいつでも助けてくれた。

諸星勇夜…ウルトラマンゼロ。

そしてその横には……

「フェイトちゃん」

何度も戦いながらも、

「ごめん…やり過ぎちゃったよね……」

いつでも私と、向き合おうとした。

白い魔道師…高町なのは。

「約束は約束だ…ジュエルシードを……」

「うん……」

彼はいつでも『危ない時は助ける』という約束を守り続けた。

なら、自分も守らなきゃいけない。

そついつ約束でここに来たのだから。

『PUT OUT』

保管しているジュエルシードを取り出し。

それを今果たそうとした時だった。

「きやがったな…」

空を見た勇夜がそう呟き、自分も空を見上げると…

青い色に染まっていた空が雷鳴を轟かせながら蠢く雲に覆われた。

『高次魔力確認！ 魔力波長は、プレシア・テストロッサ！ 戦闘空域に次元跳躍攻撃…勇夜くん！みんな！』

「ああ…さん」

雷雲から、凶太い魔力の雷が一同に降り注ぐ寸前。

「デュア！」

「ミラー！スパーク！」

二人は変身、なのは、フェイトたちを連れてその場から光となって消えた。

アースラでは、降り注いでくる魔力の稲妻を、艦に搭載された魔力シールドで防ぎながら。

「魔力発射次元特定！ 空間座標確認！」

「転送座標セット！」

クル たちが時の庭園の居所を突き止める。

そして、予め突入に備えて、艦内の転送ポートで待機していた武装隊の魔導師たちは。

「突入部隊、転送ポートから出動！任務はプレシア・テストロッサの身柄確保です」

リンディの指示とともに庭園内へと転移した。

丁度そのタイミングで艦橋室に入る者たちがいた。

「お疲れ様」

「すまねえ、フェイトが持ってた分は捕られちゃった」

まさかあの状況下で、ちゃっかり転移魔法で持ち去るなんて…
大魔導師と自称するだけのことはある。

「全員無事で戻ってこられただけでも良かったわ、後はわたしたちに任せて」

先程の戦闘空間から帰還した一同だった。

「それからフェイトさん、初めまして」

リンディは今は拘束服を着て、愛機を握りしめているフェイトに自己紹介をする。

「が、彼女は俯いたまま答えない。

無理も無い、先程振りそそいだ雷撃は海上での一件以上の威力で、
勇夜たち諸共巻き添えにするつもりで撃ってきた上に、念話でプレ
シアから『もういいわ』と言われたのである。

両腕につけられた手錠も、その痛々しさに拍車をかけていた。

『プレシア・テストロッサ！ 時空管理法違反、及び管理局艦船への
攻撃容疑であなたを逮捕します！』

マイク越しから罪状を述べる局員の一人の声が響き、勇夜たちは
モニターへと目を向ける。

画面には局員たちに囲まれながらも、悠然と玉座に座るプレシア
が映っていた。

最初こそ不敵に笑みを浮かべてはいたが、局員たちが『彼女』が
眠る部屋に繋がる扉を見つけた瞬間、形相が鬼のように豹変した。

『何だこれは！？』

そして、例の部屋に入った局員たちによって『彼女』が明るみに
なった。

言葉を無くす一同。

「（勇夜さん…あれが…）」

「（そうだ…）」

既に真実は知ってはいた。

知っていた…知ってはいたんだ。

勇夜に至っては一度直に目に行っている。

だが分かっていても、理屈では理解していても…それでもやはり…
…実際目になると、瞳にそれが映ると、心に重くのしかかってくる。
モニターに映っている、生命維持カプセル内の液体の中を浮いている彼女と自分の容姿が瓜二つなフェイトなら尚更。

『わたしのアリシアに近づかないで！！』

なのはたちと同様に呆然自失していた局員たちにプレシアはうち一人を、片手で、病人とは思えない力で投げ飛ばし…

自らの雷撃を彼らにお見舞いした。

突入から数十秒…

武装局員は全員戦闘不能になってしまう。

「武装局員を艦内に転移」

光は咄嗟に転移魔法で局員たちを連れ戻した。

「ありがとう、光くん」

「いいえ、それよりも」

「アリ…シア…」

先程の戦闘でフェイトの記憶に紛れ込んだ、真実であるが、彼女にとっては異物な存在である単語。

『たった九つのジュエルシードで辿り着けるかは分からないけど…
もういいわ、全て終わりにする…アリシアを失ってから暗鬱な時間も、身代わりの？人形？を娘扱いすることも…』

頭にハンマーを叩きつけられたような、精神的一撃がフェイトを

突き落とした。

『聞いていてフェイト？あなたのことよ…』

勇夜は、罰の悪い表情を見せながらも口を開いた。

「フェイト…実はな、今まで黙ってたことがある…」

「フェイトちゃん…実はね、フェイトちゃんが生まれる前に、プレシアさんにはもう一人娘さんがいたの…」

論より証拠、ここまで直に見せられてしまったら、本当のことを話すしかない。

「20年前に起きたプレシアが開発主任として進めていた、魔導炉実験の暴走事故、その時にね、画面に映ってるその子、アリシアはそれに巻き込まれて…」

「その後あなたのお母さんは、もう一度娘に会いたいが為に、アリシアの遺伝子を使って、そっくりの女の子を生み出し、その子に…彼女の生前の記憶も植え付けたんです…」『アリシア』として…」

「フェイトちゃんの名前は…その…死者蘇生技術の、開発コードからとったの…」

光とエイミィは、重い声色で二人の言葉を補足する。

「記憶転写型クローン技術…そいつの名前は…PROJECT
……………」

一度はためらいながらも、体の中に重りがあると錯覚するしてし

まっほど、心に重荷を感じながらも勇夜はその名を口にした。

「……………フェイト
FATE」

目を見開いたまま固まるフェイト。

「黙ってて…ごめんな…でも…でも言ったらさ…そんな顔をすると思っ…言えなかった……………」

今のフェイトに自分の言葉に耳を傾ける余力はないとは分かっていたが、それでも詫びる勇夜。

フェイトの心は既にズタズタに切り裂かれていた。

それなのに…追い打ちは止まらない。

『その人たちの言う通りよ…でも駄目だった…せつかくアリシアの記憶をあげたのに……似ているのは見た目だけ…』

「やめる…」

『作り物の命は所詮作り物、失ったものの代わりにはならないわ』

「やめてよ…それ以上言わないで」

『アリシアはもつと優しく笑ってくれたわ、アリシアは時々我が儘も言ったけど、私の言うことをとてもよく聞いてくれた、アリシアは、いつでも私に優しくかった』

「エイミィ！直ぐにモニターを切ってください！」

「駄目！あちら側にモニターの操作が乗っ取られてる、こっちからじゃ時間が…」

『フェイト……あなたは私の娘じゃない。ただの失敗作………だから、あなたはもういらぬわ。どこへなりと消えなさい!』

「やめて下さい!!!」

「黙れって言うてんだろ!!!」

呪詛を振りまく母に、^{プレシア}勇夜となのはの叫びが木霊する。

もう良い。

もう良いだろ。

もう十分、手痛い真実をフェイトは知って味わった。

自分がクローンだってことも。

それでもアリシアとは別人であったことも。

その事実がプレシアを狂わせたことも。

今まで自分が、アリシアを蘇らせるための都合の良い道具としてしか見られていなかったことも。

何もかも。

だけど…

「それでも…この子はあんたが生んだ子だろうが!!」

どうしても、それだけは言いたかった。

血の繋がりだけが家族を作るものじゃない。

その持論は曲げるつもりはない。

けれど、確かにフェイトは、プレシアが生んだ女の子。

それもまた、たった一つの真実であるのだから…

だが…

『そうね…確かに私が生んだわ…でもね、良いことを教えてあげる

……… フェイト……… 私は…あなたを生み出したときからずっと

』

それは、長い詠唱からくる呪いだつた。

一人の女の子を奈落に落とすための…

そしてその呪いを完遂するための最後の言葉が…

『大嫌いだったのよ』

紡がれてしまった…

彼女の心を壊す、最悪の一撃が…

宣告をされたフェイトはその場に崩れ落ち、掌に持っていたバル
デッシュも床に落ち、彼女の今の心を表すように砕け散った。

「フェイトちゃん!」

「フェイト!」

勇夜となのは抱きかかえるが、その眼は虚ろで光が失われ、生
気が感じられない。

「ちょ、大変！ 見て下さい！ 屋敷内に魔力反応多数！」

「魔力反応……いずれもAクラス！」

「総数60、80……まだ増えます！」

「例の機械人形と思われませう！」

アルフからの情報の通り、プレシアは庭園に保管していたこの艦の戦力を上回る数のロボット兵を一気に起動させた。

「っ……プレシア・テストロツサ……やはりあなたは……」

勇夜くんが言っていた通り、彼女の目的は……

『私たちは旅立つの……。永遠の都、アルハザードへ！ この力で旅立つて、取り戻すのよ！』

そして自分が今持っている9個のジュエルシードを取り出し、菱形の宝石は彼女の周りを浮遊し回り始めた。

時の庭園から、物凄まじい揺れが起きる。

ジュエルシードの輝きが増せば増すほど、振動は比例して増していく。

「次元振です、中規模以上」

「振動係数拡大！ このままだと次元断層が！」

「ディストーションシールドで防衛」

大地が揺れる普通の地震と違い、次元振は空間そのものが揺れを起こす災害。

そして断層は、地面と地面が割れて大きくずれる現象。

それが空間レベルで起きたら、最悪その空間は消滅する。

「震度、徐々に増加しています！！」

「この速度で震度が増加していくと、次元断層の発生予測値まで、あと30分足らずです！！」

「あの庭園の駆動炉も、ジュエルシードもロストロギアです。それ

を暴走覚悟で発動させて、足りないエネルギーを補っているんです」
「…始めから、片道の予定ってことね」

艦内は警報とアナウンスでごったがえしている。

このまま放っておけば、地球も、地球が存在する世界も巻き添えを受けて消えてなくなる。

なのに、俺たちは、本当の人形のように、動かなくなってしまうたフェイトから、目が離せなかった。

その時。

「(ウルトラマン…ゼロ…)」

俺を呼ぶ声がした。

思わず怒りで拳に力が入る。

「(この子に…フェイトにこんなことをしておいて…今更俺に)」

何のようだ？

と言うつもりで俺はモニターを見上げた。

そこに映っている彼女にガン飛ばしてやろうと。

しかし…

…

激情で歪んだ自分の貌がその言葉を前に、呆然となった。

声に出さずに、口だけを動かして彼女はそう告げた。

だけど、何を言おうとしたのか、俺は分かってしまった。

そして…彼女の意図も…

それを最後にプレシアとアリシアを映した映像が、途切れた。

「我ながら、非道いものね」

アリシアの抜け殻に乗せたカプセルとともに宙を移動しながら一人自嘲するプレシア。

最後にフェイトに掛けてしまった言葉。

以前は混じり気の無い本音であった。

アリシアとして生まれられなかったあの子に…

あの子をアリシアとして生んでくれなかった運命に…

そしてアリシアを奪った過去に…

気づけば…自分はこの世の全てに憎悪を抱いていた。

私はフェイトをずっと人形だと思っていた。

だけど、自分は人形よりも、ずっと酷い存在だ。

一日たりとも、アリシアを、アリシアとの思い出も、忘れたことは無い、忘れる筈が無い。

筈だったのに…

肝心のあの子と交わした大事な約束をわたしは忘れてしまっていた。

そう…いつだってわたしは…気づくのが…遅すぎる。

何もかもだ。

あの約束も…あの時彼に殺されそうになって…初めて思い出した。

彼は踏み止まれたけど…わたしは踏み外したまま、戻ろうともせず、聞く耳も持たず、ここまで来てしまった。

彼の言う通り、わたしは？娘たち？を弄んでいた。

フェイトを色眼鏡越しで見ようとせず、都合の良い時だけ母親を騙って縛り付け。

アリシアを生きたことも死ぬこともできない地獄を味あわせてきた。

自分の愚かしいエゴの為に。

でも……せめてあの子には自分の汚れを背負って生きてほしくない。

自分が今まで掛けてきた呪縛を解くには、こうするしかなかった。いや……こうするしかなかった……と言うのは身勝手な言い分ね。

あの子がまた笑える時が来るまで、時間は掛かるだろうけど。

でも一人じゃない。

モニター越しにでも分かった。

ちゃんとあの子には、支えになってくれる人たちがいる。

何もしてやれず、何も残っていないわたしとは違う。

だから、わたしの存在がフェイトの人生の足枷にさせない為に。

最後の道化を演じよう。

アラートとアナウンスが響く、アースラの中を勇夜たちは走っていた。

その途中。

「クロノ」

年相応より見た目が幼い執務官と鉢合わせになる。

「クロノ君どこへ？」

「プレシアを止める…」

いつもは小柄で童顔な容姿とは不釣り合いな落ち着きがある鉄頭だが、今のクロノの目には隠しても隠しきれない熱気がある。

その熱気の心当たりはある。

こいつも、プレシアと同じ痛みと悲しみを、小さい時に味あわされている。

同族嫌悪とまではいかないが、彼女がこれからやるうとしていことに少なからず怒りがあり、断固阻止したいんだ。

「同行する意志があるなら、止めはしないが、どうする？」

「わたし、行きます！」

「僕も一緒に！」

なのはとユーノが即座に名乗り出た。

「光、なのはたちと先に行ってくれ」

「勇夜は？」

本当なら、俺も直ぐに行くべきなのかもしれない。

この船にいる武装局員がほとんど戦闘不能な今、時の庭園に殴りこめるのはここにいる者たちだけだからだ。

庭園にいるガラクタどもに負けるほど、ここにいるやつらはやわじゃないが、一人でも戦力は多い方が良い。

でも、どうしても今自分が抱えてるこの子から聞いておきたいことがある。

それが望めるかどうかは…怪しいけれど。

あの言葉に嘘偽りが無いとしたら、今のあの人は…

「フェイトを医務室に連れて行ったら直ぐに行くさ」

「分かりました、行って下さい」

「ああ、アルフ！」

転送ポートに向かう仲間たちを背に、俺はアルフを連れて、医務室に急いだ。

アースラから転移されたなのはたちは、時の庭園敷地内に立ち、虫食いのように穴だらけな床を進んで行く。

様々な色が混ざらずに渦巻いているマルチバースと次元世界の間
に存在する『次元の狭間』には、宇宙と同じく空気が無い。

ウルトラマンのような空気が無くとも生きられる超人でも無い限り、生存はできないが、時の庭園の周りには見えないフィールドを張り。

その中を人工生成された空気と重力で満たしている。

さらにバリアジャケットが、宇宙服の代わりに果たす生命維持機能を持つので活動はできた。

もっとも重力なら、この庭園の直ぐ下にもあるのだが。

「ユーノは知っていると思うけど、この下の空間には気をつけて」
クロノが忠告をする。穴の下には底が見えない暗闇が広がっていた。

「ユーノ君……あの黒い渦って…」

「虚数空間、そこは魔力素が分解される空間で、一切魔法が使えなくなる、飛行魔法も同じ、もし落ちたら重力の井戸に捕まって二度と戻れなくなる、気をつけて、なのは、光さん！」

「了解」

細心の注意を払いながら前に進むと、扉が見え、クロノが魔法で破壊。

中に入ると…

案の定、先が見えなくなるほどの夥しいロボット兵が盛大に待ち構えていた。

「ここからは二手に分かれよう、なのはとユーノは最上階の駆動炉を叩いてくれ」

「クロノ君は？」

「最下層にいるプレシアを止めに行く、手伝ってくれるか？光」

「了解しました」

「もし、なのはたちに何かあれば、僕に構わず、S2U^{あい}の鏡面^きを使つて行つてくれ」

「お気遣い感謝します、ですが今は…」

「ああ、二人の道を開ける」

光とクロノは魔法陣を展開。

『Blaze Cannon』

『Silver cross』

S2Uから、水色の魔力弾が

「シルバアアア クロス！」

x字に構えたシルバーライトから、魔力刃バージョンのシルバークロスが放たれ、ロボット兵の数を一気にスクラップにして、相手方の態勢を崩した。

「二人とも、今の内に！」

「光兄、クロノ君！気をつけて！」

その隙を突いて、なのはたちは上に繋がる階段へと飛んで行った。兵たちは直ぐに態勢を立て直して、残った二人に襲いかかるが。

『Stinger Sniper』

クロノは複数の魔力光弾、ステインガレーイを複数生成して一斉射撃する魔法、ステインガースナイプで打ち貫き。

「悪いがここは、押し通る！」

『Beam Saber mode / SETUP』

光は愛機の二振りの小太刀形態を変え、片刃が実体剣から黄緑色の魔力刃となる。

消費量は上がるが、単純な切れ味なら、基本形態の『ショートセイバーモード』を上回る『ビームセイバーモード』だ。

「はあああああー！！！！」

そして果敢にもロボット兵の群れに、身体強化の魔法を頼らずに相手方が視認はおろか、反応できないスピードで一気に踏み込み、御神の剣で優雅に舞うような太刀捌きで、一気に敵を切り裂き攪乱。さらに自らを高速回転してロボット兵を切り刻む。

『Mirror lancer』

そして光の周囲に、魔力を集中させて作り上げた眩く光を反射するクリスタル状の突起が複数出現。

「貫け！！」

室内ということもあり、一斉に掃射された全弾が、ロボット兵た

ちに突き刺さった。

相手が全員Aクラスだ？

それぐらいの脅威で引き下がる二人ではない。
むしろ圧倒する側だった。

戦闘が始まった頃、アースラの医務室では丁度勇夜がフェイトを
ベットに寝かせていた。

魔力が消費されている以外は体に異常は無い。

やはり問題は彼女の心だった。

アルフは瞳の光が消えたままの主を案じながらも、室内に置かれ
たモニターに目を向けた。

画面にはロボット兵相手に奮闘し、自分が今為すべきことを為す
なのはたちの姿があった。

「勇夜……」

「分かってる……行ってやってくれ、直ぐ追いかける」

「ありがとう……」

アルフは彼に感謝しつつ、フェイトに近づき。

「みんなのことが心配だから……あたしも……あたしができること
をしてくるね」

彼女の髪を、母性さえ感じさせる優しさで、ゆっくりなでながら……
その眼を潤わせながら……

「これからは、フェイトの時間は全部、フェイトが使っていていいんだ
からね……あたし、待ってるから……何年かかっても、待ってるから
ね」

静かに囁き、勇夜を一瞥すると医務室を後にした。
残った勇夜はフェイトの横に立ち。

「付き合ってくれるか？相棒」

時間的には現実では10秒も掛からないだろう。

だが、この一日の中では確実に一番長い10秒だった。

「はい、マスターがまだ希望があると信じているなら、わたしもその可能性に賭けて、全力でサポートします」

「ああ……お前も……まだ諦めてないよな？」

そして右手には彼女の愛機。

「Yes . s i r」

バルディッシュが。

「よし、行くぞ」

「Yes , m y m a s t e r」

勇夜はリンクが嵌められた左手を、フェイトの額に翳す。

自分の手は、確かにこの世界たちに存在するどの生きとし生ける者たちより、破壊的な力を持つてる。

だけど、この手に持つてるのはそれだけじゃない。

勇夜の左手が光を発し、そこから光の粒子が彼女に降り注いだ。

メデイカルパワーを照射しながら、彼はテレパシーで、彼女の意識の奥底に入っていた。

Episode 23 - 切り札の光、絶望の闇（後書き）

三人の言葉攻めの方がやり過ぎだった？

『これは暴走を止める為の暴走じゃよ』（ガンダムWの科学者たち
風）

オリ技集 part 2 (前書き)

ほぼミラーナイトの独壇場ですがWWW

オリ技集 part 2

【オリジナル魔法/技】

? 高町光

・シルバークロス（魔法版）

魔力で作り上げたシルバークロス、シルバーライトの刀身を×字に重ねて発射する。

・シルバーウエイト

重力波を発生させて相手の動きを封じるミラーウエイトの魔法版。ぶつちやけ言々と遊戯王の『光の護封剣』。

・ミラーズリング（魔法版）

ミラーナイト版八つ裂き光輪の魔法バージョン。複数に分裂できる。

・バレットナイフ

リングエッジモードの刀身から弾丸のように連射して放つ三角状の刃。

主に牽制に使用。

・ミラーランサー

ダイヤモンド状の突起を宙に形成して発射する射撃魔法。スペースゴジラのクリスタルミサイルをイメージ。

・流閃ノ舞りゅうせん の まい

体を高速回転させて切りつける遠心力を応用した斬撃技。

Episode 24 - 運命の零(前書き)

『もう何も怖くない、怖くはない』 『FINAL MISSION
QUANTUM BURST』を聞きながらの読書を提案 (A_EN
D_IA風)

10/1:12話でのベリアルの件が投げっぱなしだったので、そ
の辺りの話も加えました。

そこは…無だった。

夜にしても、宇宙にしても、光はある。

だがここには本当に何も無い。

あるのはどこまでも広がる暗闇と…

そこに俯く少女だけ…

果ての無い闇で、彼女の心は地に堕ちていた。

母さんは…：わたしのことなんか…：一度もわたしとして見てはくれなかった…

彼女の脳裏には何度も母から宣告された呪いが渦巻いている。

母さんが会いたかったのはアリシアで…：わたしはアリシアになれなかった出来損ないの失敗作。

「わたし…：生まれてきちゃ…：いけなかったのかな…：」

誰にも聞こえない闇の中で一人呟く。

自分が知らなかった真実に打つひしがれて…

ふと彼女は引っかかりを感じた……

見てくれなかった？

知らなかった？

母は最後まで自分を知らうとしなかった……

アリシアというフィルターを掛けて、目を逸らして…

でも……でも……でも……

何も分からないまま戦うのは、嫌なの！

あの子の言葉を思い出す。

そうだよ……わたしだって……わたしだって同じだ……

アリシアの記憶の中の母に縋るばかりで、今の母さんを一度たりとも知らうとはしなかった。

その苦しみも悲しみも、憎悪も、何もかも……

思い出に走って、現在から逃げていたのは……自分も同じじゃないか……

母さんを墮ちるところまで突き落として、見ない振りをして、止めを刺したのは……自分じゃないか……

「最低だ……わたし……」

涙が流れてくる。

後悔の涙が…

止めどなく…

その時…

わたしは涙で濡れた顔を上げた。

光が近付いてくる。

自分へと…

余りの眩さに反射的に目を覆った。

気がつくと、私は半球型の透明のケースにいた。

何故か、体が勝手に動き、視線も周りを見渡している。

広い部屋だ。

それこそ、ゼロくらいの巨人のサイズに合わせて作ったような。壁と床は黒味がかつた赤と黒で覆われ、怪しげなモニターがいくつも飾られて、一方向にだけ窓があり、緑と海に覆われた惑星が眼前にあった。

宇宙船の中なの？

「ナオ…エメラナ…」

視線の主が誰かの名を呼んだ。

ここまで来れば自分でも分かる。

これは……誰かの記憶…

『やっと会えたな』

低く、怪しげなエコーが掛かった不気味な声が響いた。

主が声のした方に目を向ける。

『ダークロプスを送り込んだ甲斐があったぜ』

階段の上にある玉座に座っている声の主は、部屋と同じ怪しい赤に染められたマントを着て、黒いボディに赤いライン。

鋭利で堅そうな爪。

『疼く…疼くぜこの傷が…』

サメのようなするどい顔つきに片方には亀裂が付いたオレンジ色の発光する瞳。

そして、胸には紫色に光ドーム状の発光体が…

あれは…まさか…カラータイマー？

てことは…

巨人は一気に目の前へと近づく。

「ベリアル……」

『見る…これはお前が付けられた傷だ…ウルトラマンゼロ』

やっぱり、これは勇夜…ウルトラマンゼロの記憶なんだ。

そしてこの巨人が、あの悪に堕ちてしまったウルトラマン。

カイザーベリアル。

「俺と戦え！」

ゼロは人と昆虫並の体格差にも動じずベリアルに意気揚々と叫ぶが。

『ふっハアハアハアハアハアハアハア！何言つてやがる？そんな虫けらみてえにちっぽけになっちまって』

ベリアルはゼロへの禍々しい憎悪と、優位な状況にいるという優越感が混じった邪悪な笑みで返す。

『こいつが欲しいか?』

ベリアルに指に特殊なフィールドで浮かしていた物体は紛れも無く。

ゼロがウルトラマンに戻る為のアイテム。
ウルトラゼロアイが握られていた。

『お前はそこで見物している...』

「何をする気だ!？」

『見る...』

ベリアルは数あるモニターの一つを指さした。

『今ので丁度100万団体目だ、光の国をぶっ潰してやるぜ』

その一つには、ゼロにそっくりな姿をした一つ目の巨人が、輸送機らしき物体に収納され、緑色のエネルギーを纏って飛ばされる様子が映っていた。

「やめろ!てめえ!!」

『挨拶状はとづくに送ってやったぜ』

「だがあつちは親父がいる、仲間もいる、お前の軍隊に負けはしない!」

『どんだけダークロプス軍団を作ったと思ってるんだ?...これからが見ものだぜ』

ゼロも私もその場に固まってしまった。

『いくらウルトラ戦士でもこの数は無理だな』

モニターには、何千、何万ものダーククロスが輸送船に収納され、一斉にゼロの故郷へとワープしていったのである。

もう100万體も送られているのに…これ以上あんな数を相手にされたら、それが際限なく続くとしたら、それだけで戦意喪失してしまう。

奴の言う通り、ウルトラ戦士でもこれだけの物量を相手に消耗戦を強いられたら、敗北は必至だった。

「やめるオオオオオオ！」

『お前にはもう何も無い…絶望の恐怖を味わうが良い』

同じだ…

さっきの自分と同じだ…

無力さを思い知らされながら、絶望に追い落とされる現実

もうやめて…

これ以上ゼロを…

そんなに痛めつけて何が楽しいの？

どうしてそんなに笑っていられるの？

どうして…

「カイザーベリアル陛下」

そんな時、ベリアル部下らしき異形の怪物が現れた。

『ああ？』

「あれを…」

部下が指したモニターには、鳥のような形状をした赤と白に彩られた船が現れ、光の国に送られようとするダーククロスの輸送船を破壊していた。

「ジャンバード！みんな無事だったのか！？」

「我々の侵略部隊の邪魔をしています」

『ふん…撃ち落とせ』

「逃げろ！逃げるんだ！バラージの盾はまだ見つかってないんだぞ！」

バラージの盾…

確か、リンクは自分のことをそうとも言っていた。それはともかく、ゼロの気持ちも分かる。明らかに多勢に無勢、圧倒的に不利だ。

感情を挟まずに考えれば、彼らの行為は無謀と言っても差し支えが無かった。

「兄貴！聞こえる！？ベリアルの思い通りにはさせないよ！今助けるからね！」

「ゼロ！気をしっかり、必ず助けますから！」

ジャンバードからわたしと同じくらいの男子の声と、少し年上の女の子の声が聞こえた。

何故か、その声の主の名前と顔が浮かんだ。

男の子はナオ。

惑星アヌーの開拓民族の子。

女の子はエメラナ。

惑星エスメラルダの王族の第二王女。

「ナオ… エメラナ…」

そして声の主はラン。

ナオの兄で、ベリアルルの侵略に立ち向かって大ケガをして、ゼロが救う為に一体化した青年。

感じる…

助けて上げられない今の自分の無力さを、かみしめる一方で…
命がけで助けに来てくれたことに嬉しいと感じるゼロの気持ちに…

「必ず助けるからね！」

「助けますから！」

そして、一筋のしずくが流れ落ちた。

その雫は、光を発してドームのガラスを破り、光から今はゼロのかけがえの無い中まであり、友達と彼が言った。

ミラーナイトが彼を救いだす。

「ミラーナイト」

「随分探しましたよ…」

「兄貴ーーーーー！」

「ゼローーーーー！」

互いの名を、思いのたけをこめて叫ぶ。

「ナオ！ エメラナ！」

そしてジャンバードはベリアルルの右手を攻撃。
ウルトラゼロアイは宙に飛ばされる。

「ミラーナイト！ 俺を投げしてくれ！」

ゼロの希望に応え、ミラーナイトはゼロアイに向けて投げた。
その勢いのまま、ゼロアイを手に取り、目に翳し、眩い光となっ
て彼………

ウルトラマンゼロに変身。

そしてゼロとその仲間。

ベリアルとその部下たちの死闘が始まる。
激戦の末。

ミラーナイトと、ジャンバードが人型ロボットに変形したジャン
ボットは幹部である部下を倒すが…ベリアルは想像以上の強さでゼ
ロを圧倒…

さらに内部に保管された膨大なエネルギーを含んだ鉱石の山から
エネルギーを吸い取り。

怪獣の呼べるほどのおぞましい姿にパワーアップ。
そこにもう一人仲間の巨人。

グレンファイヤーと対ベリアル軍連合艦隊がかけつける。

だがベリアルはエスメラルダごと破壊しようと口から光線を放ち。
ゼロとミラーナイトは海でみせたのと同じバリアを張って、グレ
ンとジャンのサポートも借りて防ごうとするが…

その前の戦闘でベリアルにエネルギーを吸い取られ。ゼロには余
力が無かった。

ジュエルシードを封じようとした時よりもさらに早くカラータイ
マーの点滅が早まっていく。

対ベリアル艦隊もベリアル軍に阻まれ、彼らを援護できない。

でもここでバリアを止めてしまったら、エスメラルダも…この世
界も…

わたしは見るこしかできない…

たとえこれが過去のものであっても…

そして…

「俺たちは…絶対イ…負け…ない…」

ゼロの目から、光が消えた…

もう…終わりだ…

世界はあの悪魔の手に堕ちる。

あの世界だけじゃない、存在する全ての次元世界は奴に食いつぶされ…

絶望の奈落の底に…

そう俯いた時…

「ゼロが『夢も希望』もあるって教えてくれたんだ！負けられねえんだよ！」

「これ以上奪わせない！エスメラルダも鏡の星もこの宇宙も！仲間も『希望』も！」

「ゼロもナオも姫様も、微かな『光』を頼りにここまで来た！わたしだけが、引く訳にはいかない！」

「負けないよ！絶対負けない！負けるもんかアアアアア！」

それでもここにいる人たちは希望を捨てずに、諦めずに立ち向かう。

滅びが秒読みに入り、それを享受するしかなかった世界に…差し込んだ光明によって…

ゼロも光を失っても尚、まるで死後も主を守り続けた弁慶の如くバリアを張って佇み続けている。

「兄貴、聞こえる？ …… 僕にはあの時間こえたんだ… 僕らみんなが、バラージの欠片なんだって… 僕らみんなが助け合って、支え合って、バラージの盾は生まれるんだ」

助け合って… 支え合って…

ナオの言葉を反芻しているフェイトに、彼が『彼』からのメッセージを受け取った、その時のビジョンが脳裏に浮かぶ。

「僕らみんなの心に光はあるんだ、ねえ？ そうだよね…」

「父さん！！！！」

この場に臨む者たちの想いが、最高潮に達した瞬間…

光が彼らの体から溢れた。

ナオ、ジャンボット、グレンファイヤー、ミラーナイト、立場の

垣根を越えて…宇宙海賊、二次元人、エスメラルダ人、様々な人たちの思いが…

光になっていく…

なんて……………眩くて……………綺麗で…

温かいんだろう…

眩さも温もりも直に…体にも…心にも感じる。

これが…人の心の光？

涙が止まらない…

悲しいからじゃない。

光が、ずっと凍てついていたフェイト心に沁み込んで行く。

その光の群れは一つとなり、ゼロに降り注いだ。

どこかの空間で目を覚ますゼロとフェイト。

最初は何も無い『無』だった。

死んだのか？俺…

だが、ここが『あの世』だって実感が沸かない。

それなのに、自分の魂は、まだ体に宿っている実感だけはあった。
「ゼロ……」

現状と距離感が掴めない静寂さと闇が広がる空間に声が響き、ゼロは響いた方に目を向け、フェイトも視線を移すとそこには…。

「ウルトラマン……なのか？」

そこには……

「？元？な……」

「え？」

どうして……だって……その姿は……

途端、相手が『元』を付け加えた理由を知ってしまった。

シルバー族特有の、銀色のボディに彩る赤色のライン、それは確かに……紛れもなく……

「ベリ……アル……？」

「ああ……正確には『奴』に残された……闇に墮ちる前の自分の欠片……残留思念ってとこだ……」

「それがどうして俺を……っ！……っ！……」

助けたって言おうとした時だ……突然頭に頭痛が響く。

「少し手荒だが、この方が伝えやすいと思って……」
「荒っぽ過ぎるだろ…俺も人のこと言えねえけど……」

ベリアルはテレパシーで自分の記憶を、直接ゼロに送り込んだのである。

ウルトラ戦士のゼロには頭痛程度に済んだが、人間なら、シヨック死確実な荒技だった。

「とりあえず、俺はあなたのお陰で……まだ生きてるってことが……」
ゼロの脳内には時間的には一瞬だが、ベリアルが闇に墮ちる過程を追体験させられた。

かつて光の国を震撼させたエンペラ星人の恐怖と、幼馴染で親友であったウルトラの父…母との愛憎混じった感情に揺れ、プラズマスパークの光に手を出し、いもずる式に暗黒に染まっていった記憶。

この人は俺と同じだ……がむしやらに力ばかり追いかけたせい
で……

「ご到着のようだな」
「あっ？」

何が？と疑問をよぎったが

彼らのの前に…一筋の光が向かってくる。

「受け取ってやれ……『バラージの盾』を」
「ベリアル……あなたはどうするんだ？」

「どつするって、お前たちに倒されるまでさ……」

「それで良いのかよ！……！」

知ってしまった……この人となりを知ってしまった今……このまま……『悪魔』と呼ばれたまま……彼を殺さなきゃならないなんて……

納得いかない……いけるわけない……同じ罪を犯したのに……自分だけ……ウルトラマンとして生きて……この人は憎まれ役になって死ぬことが……

どうにかして救えないのか……助けやれないのか……

ゼロのやるせない気持ちがフェイトにも伝わってくる。

「俺にはもう……あの光の向こうには戻れない……いったら……今の俺は残留思念……過去の遺物だ」

これじゃ……浮かばれねえじゃねえか……

ゼロの金色の目から、涙が流れる。

罪は消えないことは分かってる。

ずっと背負って生きていかなきゃいけないことだって……

でも……死んだら……それまでじゃねえか……償うこともできないじゃいか……

そんなの……不条理だ……こんな……理不尽だ……

「ありがとう……」

「え？」

「こんな俺を、悲しんでくれてな……」

彼の体は半透明になり、見えかかっていた。

「掴んでくれ……俺には掴めなかった」

ゼロに語りかける声もくぐもっていく。

「待ってくれ……!」

「未来を……」

「ベリアル……!」

手を伸ばそうとした瞬間ベリアルは消え去った。

? ありがとう??

本当なら、その言葉は、俺が……彼に言ってあげなきゃならなかったのに……結局俺は……告げることが……伝えることが……

できなかった。

代わりにそこには…

背中に突起を生やし、白銀の体躯、胸に一際目立つ発光体を持つ。
銀色の巨人。

「ウルトラマン…ノア…」

が姿を現す。

彼は光の雫を集めると、

? 光は…絆だ?

そう一言発しながら…光をゼロに差しのべた。

? 修行の日々を思い出せ!?

? 信じるよ、僕も信じる?

? 仲間ってのは…良いもんだよな?

? 別の宇宙から来たゼロが、命がけで戦っているのです?

?共に戦おう?

?もう大丈夫、彼のお陰です?

?本当の戦いはここからだぜ!?

?君はこんなところで負けちゃいけない?

?諦めるな!ゼロ!?

?行け!ウルトラマンゼロ?

?忘れるな...わたしもみんなも、いつでもお前のことを思っている?

そしてゼロの脳裏に彼が今まで巡り合った人たちの言葉が流れていく。

?お前は、一人じゃない?

その光を受けて、ゼロに新たな力が湧き上がっていった。

『何!?!』

怪獣化したベリアルは、自ら発射した光線が、自分に跳ね返され

たことに驚愕した。

直撃は避けられたが、爆煙と爆風が吹き荒れる中、ゼロたちがいる方を見上げる。

その光線を反射させた金色の光の中からは……

鳥が翼を広げたような形状、背中から二つ突起が見受けられ、中央にはカラータイマーに酷似した光沢が見受けられる白銀の鎧を身に付けた。

ウルトラマン……いや……ウルトラマンを超越した戦士。

ウルティメイトゼロが……そこにいた。

『ふん！どんな手品か知らねえが……なぶり殺しに変更だ……』

ベリアルの手を模した巨大要塞から、彼が作り上げた侵略ロボット。

レギオノイド。

ゼロの姿と能力を模したマシン。

ダークロプス。

ベリアル軍の戦艦。

ブリガンデ。

が一斉にゼロたちに襲いかかる。

「まだあんだけいたのかよ」

「だがなゼロ、むしろ暴れがいがあるぜ」

「ここで引くわけにはいきませんからね」

「みんなも必死に戦っている、私たちも共に戦おう！」

今ここに集った巨人たちは、その数でも怖気づいていない。

「よし、お前ら、行こうぜ……！」

「ああ！」

「はい！」

「おう！」

圧倒的な物量を向かって、4人は宙を舞った。

グレンは首元をマッチに火を付けるように擦った。

「焼き鳥どころの火力じゃね！黒こげにしてやるよ！」

その所作を発火点に、グレンの体が真っ赤に燃え上がる。

「ファイヤアアアアアアアアアア……！！！！！」

空気のない真空内で熱を感じられると錯覚するほどの炎を身にまとい。

「行くぜえええええええええ……！！！！！！！！！！！」

ベリアル軍に高速で突貫。

流星を纏う炎を受けたベリアル軍は、一斉に火柱を上げた。

その余波さえ、必殺の一撃。

「バアアアアア   ニング！」

グレンは静止し、身にまとっていた炎を火球を作り上げ。

「ボンバアアアアアア   !!!!!」

発射。

大型の火球が、着弾と同時に拡散し、次々と相手を呑みこんだ。

「ミラーエッジ」

ミラーナイトは手甲から、光の剣を作り出し、ベリアル軍に切り込む。

流麗な太刀捌きで、次々とレギオノイドとダーククロスを切り刻む。

「ミラーセイバー」

光刃から、直角状の刃がいくつも放たれる。

ミラーナイトはそれを正確にコントロールしながら、同時にミラーエッジで切り込む、二つの行動を同時進行で行う匠技で圧倒。

さらにミラーナイトは、ミラーエッジを持ちながら、自らを高速回転。

「トルネードセイバークロス!!!!」

回転しながらのシルバークロスの乱れ撃ち。

放たれた刃は、ほぼ全て相手に直撃した。

したバリア。

『ウルティメイトディフェンサー』
で全て受け止めた。

「何！」

さらに受けたエネルギーを吸収。

敵と自分のエネルギーを相乗、右腕のウルティメイトソードに上段に構えながら集中させると、惑星の直径を超える長さの光の刃が出現。

「ウルティメイトシュトローム

ソオオオオオオオ

ト！！！！！！！！！」

振り下ろされた巨大な光刃は、残りの艦隊を全て飲み込み、要塞ごと切裂く。

「おのれ……ふざけやがって！！」

爆発の余波を受けたベリアルは毒づく。

「今度こそ！ケリを着けてやるぜ！！！！！！」

ゼロは身に着けていたバラージの盾を一度バラバラに切り離し、弓状の形態に合体させた。

ウルティメイトゼロ最大の技を使うための超弓最終形態。

『ファイナルウルティメイトゼロモード』

それを手に取り、光でできた弓の弦を引きながら、チャージを開始するゼロ。

ベリアルも片のクリスタルを点滅させエネルギーを口内に集める。

バラージの盾に埋め込まれた光沢の一つが光る。

それらが全て発光し、チャージ完了とならないと、今から放つ大技は使えない。

そのため…

「まずい！」

「先に撃たれる！」

このままでは先手を撃たれると悟ったグレンとジャンはベリアルに向かって飛んだ。

「燃えるマグマのファイヤー

フラッアアアアアシュ！

！！」

「どこを見ている！こっちだ！！」

2人はベリアルを八エみたいに飛びまわりながら、ベリアルを牽制し発射を阻止しつつ、ゼロがチャージを完了させるまでの時間を稼ごうとする。

「邪魔だあああ!!」

が、ベリアルは身長300Mもある体軀から繰り出す剛腕を二人に叩きつけた。

態勢を崩し、要塞の表面に叩きつけられるグレンとジャン。

邪魔者は消えたとばかり、口から真紅の熱光線。

『アーケデスシウム光線』

を発射。

まだ光点が二つしか点灯せず、チャージが完了していないゼロに正確に命中。

その高熱にゼロは跡かたも無く蒸発すると思われたが。

「何だと?」

ベリアルが破壊したのは。

「鏡を作るのは得意でね」

ミラーナイトが自分、味方の姿を映して周囲に擬態した鏡おとじで敵を惑わす技。

『ミラーデコイ』だった。

「知らなかったかい?」

「引っかかりやがった！」

「攪乱成功！」

全てはこの三人の陽動作戦だった。

誰が言い出したわけでもない。

それぞれの能力を生かしたプレーが生んだコンビネーションだった。

「ベリアル！！受けてみる！！！！！」

そして本物は既に、集束を済ませ、発射態勢をとっていた。
射線上から退避するグレンとジャン。

準備は全て整った。

「これが　　俺たちの！！！！！」

全体像が見えなくなるほどの光に包まれた超弓から……
ウルティメイトイージス

「絆^{ひかり}だ！！！！」

邪悪を滅^{めつ}する光矢^{ひかりや}   ファイナルウルティメイトゼロが解き放
たれた。

光矢は巨大化、怪獣化してもなお残っていたベリアルのカラータ
イマーに突き刺さり、痛み^{いたみ}に呻^{うな}くベリアルをよそに高速回転しながら、指^{さし}し貫^{くわん}いた。

砕^{くだ}け散^{さん}るカラータイマー。
そこから青い光に侵食^{しんじく}されるベリアルは…

「ゼエエエエエエエ口オオオオオオオオオオオオ
！！！！」

断末魔をあげながら、要塞ごと爆発し、光となって跡形もなく消えた。

『バラージの盾』は、一度光ったかと思うと、予備エネルギーを使い果たして光が消えていたウルトラブレスレットに集束し。

後に自我が目覚め、リンクと命名される『ウルティメイトブレスレット』とに変貌。

「みんな……」

彼には言えなかった……告げやれなかった……ならせめて……

？光は……絆……？

それを教えてくれた人たちに……

「ありがとう……」

暖かく……慈しみ溢れる音色で、ゼロはそう想いを口にするのであった。

この記憶を見て…分かったことがある。

ゼロが…彼があんなに強いのは…

ただ力があっただけじゃない…

色んな人から助けられ、支えられて生まれた…

光があつたからなんだ…

だから、まったく別の次元世界に迷い込んでも、挫けずに戦ってこられたんだ。

わたしにも…あつたのかな…

ゼロが、みんなから授けられたような…光が…

今を生きる力になってくれる思い出が…

紛い物コピーでしかない自分にも…

？あるさ？

「え？」

あたしは顔を上げた。

最初の暗闇から戻ったと思うと、目の前から光が溢れ…それはゆっくりと巨大な人を形作った。

「ゼロ……」

ウルトラマンゼロ。

今気づいた。

世界にはあんなにたくさんの人がいるのに……
なんで……自分と母しかいないって思ったんだろ……

自分とゼロの横に、彼女たちの雄姿が映る。

ゼロの言う通り、自分にもちゃんといたじゃないか……

『フェイト』と言う、一人の人間として……

自分がどう生まれたのかを、知ってしまったって、それでも自分を『
フェイト』だと、そう名前を呼んでくれた人たちが。

アルフ……

何度もわがままを通して、悲しませたのに……

それでも傍にいてくれて……

白い子……なのは……

敵だったのに……何度も戦って……傷つけて……酷いことをしたのに……
友達になりたいっていつてくれた。

そして目の前にいる勇夜……ゼロ……

わたしがいけないことを……してるのに……しなきゃいけなかったこ

とをしてこなかったのに…

それでも…手を繋いでくれて…

心配してくれて…笑ってくれて…

何度も何度も…守ってくれた…

「わたし…わたしの全ては、まだ始まっていない…」

ゼロがなのはに言ったという言葉が…口にする。

彼は答えない。

ただ真っ直ぐ…逸らさずに…フェイトを見つめている。

「そうなのかな…わたし…まだ始まってもしなかったのかな…ゼ

ロ…」

答える代わりにゼロは両手で輪を形作ると、金色の球体を生み出した。

その光球はフェイトの元に降り注ぐ。

それを手に取った。

光が収まると、手に乗っていたのは…

「バル…ディッシュ…」

ポロポロになりながらも、それでも輝きを止めず、ゆっくりと斧

を動かし柄ら……

寡黙だけど大事な愛機……

彼は光点を光らせながら……

『Get set』

と一言だけ言った。

その行為に思わず彼を抱きしめた。

この子も、あの人たちと同じ、まだ諦めてないし……ずっと……ずっと私を……

「そっだよね……バルディツシュも……ずっと一緒にいてくれたんだよね……」

涙が彼に降り注ぐ。

「ごめんね、気づいてあげられなくて……ホントにごめんね」

それを合図に、バルディツシュは再び光を発し……

ゼロからも手を差し伸べると、そこから発された光が私へと流れていく。

私は手を伸ばすと、その光に包まれていった。

光でホワイトアウトした後……

次に私が見たのは……

艦内の医務室の天井と…

「フェイト…」

ゼロが地球人の姿になった。

諸星勇夜がそこにいた。

さっきまで消えていた瞳の光も、光沢を取り戻している。

「忘れもんだ」

彼は起き上がったフェイトに掌にバルディツシュを置いた。

「リニスが精魂込めて作ってくれた、大事な相棒だろ？」

現実でもあちこちに罅は入ってるけど、夢で見たように輝きを止めていない。

フェイトは相棒の作り主を思い出す。

先生でもあり、家族でもあった彼女のことを……

そうだよ、リニスも……ずっと傍にいられないことを分かったのに、それでも…私のことを…

「勇夜……」

夢の中でも流れていたのに…また瞼に熱いものが込め上げて、瞼が赤くなるのも構わずに、フェイトは勇夜の見据えると、自然と…彼の腕の中へ身を預けて。

「……ごめん…なあさい…」

今まで堪えてきた分を一気に解き放つように、フェイト運命のしずくを様々な思いと一緒にあらいざらい流していった。

勇夜は黙って…「泣いたっていいだよ」と、言葉にする代わりに優しく包みながら、彼女の溢れる想いを受け止める。

みんな…ずっとずっと…わたしをわたしとして、助けようとして、呼び掛けて、向き合ってくれたのに…

それを…拒み続けて…自分には何も無いと…一人だと思い続けて…

知らなかったとはいえ、地球を…世界を消してしまうこんな事態を引き起こして…

ごめんなさい…ごめんなさい…

フェイトは愛機を握りしめ、光を力にする巨人に相応しい彼の暖かな体温を感じる腕の中で雫を流せるだけ、流し続けた。

ロストロギアなんか頼らなくても良いんだ。

光はわたしにも、あるんだ。

ずっと直ぐ傍にいたんだ。

なら…もう怖くない…

私も一人じゃないんだ。

一人だったけど、独りじゃ無かったんだ。

「ありがとう…もう、大丈夫だから…」

勇夜はフェイトから腕を離し。

「フェイト……」

真っ直ぐフェイトを見つめ、名前を呼ぶと。

「これから……殴りこみに行くんだけど……付き合ってくれるか？」

「勇夜……」

『みんなは今、あなたの母を止める為に戦い、私たちも地球とこの次元世界を守る為に庭園へと乗りこむつもりです、ですが、わたしたちにはそれしかできないのです、世界を守ることと、プレシアを止めることしか……』

「それしか……できない……」

今まで血縁に甘んじ、過去の記憶に縋ったまま、背を向け会って向き合えなかった。

わたしと母さん。

そうだ……今度こそ……わたしがちゃんと向き合って、呼び掛けて、助けてあげなきゃいけないんだ。

このままベリアルのように、母さんを憎まれ役にさせて良いわけが無い。

ずっと過去の牢獄に囚われたままの母さんを……このまま見捨てて良いわけがない。

たとえ、一度で果たせなくても……

挫けずに、呼び掛けてくれた勇夜たちみたいにな…
わたしが…わたしとして！

「私も…行きます！」

涙を拭ってフェイトは、自分の決意を述べ。

「そう言うのと、思ってた」

彼女の決意に彼は笑顔で応えた。

「バルディッシュ」

『Yes, sir.』

デバースフォームになる愛機。

でも…あちこち損傷が酷くて、とても戦える状態じゃない。

なのはとの戦闘もあるが、ダメージが重なっていたあの宣告の時に
落し、傷を深くしてしまったのだ。

勇夜のメディカルパワーで体力も魔力も回復しているが、リカバ
リーできるか、かなり難しい。

そんな時、勇夜がバルディッシュに触れた。

「あ…」

「俺も手伝うぜ」

でも、勇夜と一緒になら。

一度は緩んだ顔を引き締めながら、フェイトは勇夜と自分たちの
魔力を、バルディッシュに注ぎ込む。

その魔力を糧に、フェイトの愛機は自己修復を進めていき…

『Recovery complete!』

力強い響きと閃光ともに、愛機も復活を遂げた。

わたしたちの全ては…まだ始まってもない。

フェイトは白衣からバリアジャケットを着込む。

ずっと、遠回りしてきたけど、色んな人たちのお陰でやっと今、
自分はスタートラインに立っている。

マントを羽織った。

だから…フェイト・テストロッサとして…自分の意志で、自分の
翼で……スタートを切って、飛び立つ為に…

思い出に囚われた日々を………終わらせよう。

「行くぞ、フェイト」

私は強く頷き…

差しのべてきた彼の左手をしっかりと握った。

そして勇夜はゼロアイを構えて。

「掴まってるよ！デュア！」

光が溢れだす。

あの温かい…人の心の光が…

キズナの光が…

二人を包んだ。

駆動炉を指すなのはとユーノと助太刀に来たアルフは、ロボット兵を倒しながら、最上階を指している。

今彼女たちはそこへと繋がるオペラハウスを彷彿とさせる螺旋階段にいます。

だが、目の前にゴールがあるにも拘らず、多数のロボット兵に道を阻まれ、立ち往生を余儀なくされていた。

「！……たく次から次へと……数が多すぎる！」

この三人にかかれば、一体程度どつってことはない。

とは言え、それも群れば厄介だ。

「多いだけなら良いんだけど…この！」

ユーノはバインドで動きを封じ、それをなのはの砲撃とアルフの

バルディツシユの黒い刃からサンダーレイジが。

「切り裂けええええええええええー！」

ゼロツインソードから光の衝撃波。

『プラズマスパークウェーブ』が放たれた。

光線と雷撃が残ったロボット兵を襲い、螺旋階段にいたものは全て閃光を放って爆発四散した。

それを見止めた後、ゼロとフェイトはなのはたちの許へ飛び寄る。

「フェイトちゃん……」

「……………」

お互い、言葉にしたいことが多くて言葉にできない。静寂が続き、なのはとフェイトは暫く互いを見つめ合っていた。しかし、それを破る闖入者がいた。

「あれは!?!」

階段と壁を破って、そいつは現れた。

「ぜ…ゼロさんが、もう一人？」

見間違いが無い。

以前リンクから聞いて、さっきのゼロの記憶でも直に見た。
一つ目の人型マシン。

「ダークロプス…」

「フェイトちゃん…知ってるの？」

「ベリアルって言う悪党になっちまったウルトラ戦士が、ゼロへの
逆恨みから作った侵略ロボットさ…」

フェイトが名前を呼び、アルフが補足する。

今はゼロと同じ人間サイズのダークロプスが手を顔面に翳すと、
光が集まり。

「来るぞ！」

モノアイから、真紅のレーザー。

『ダークロプスメイザー』が発射。

全員何とか回避するが、ビームが当たった内壁は大きく抉られて
いた。

さらに、ダークロプスは頭に手を翳し、ゼロスラッガーに酷似す
る宇宙ブーメラン、ダークロプススラッガーを飛ばす。

「シエア！」

ゼロも通常形態に戻したゼロスラッガーを投げ迎撃、刃はなのは
たちには視認できないほどのスピードで打ち合い。

ほぼ同じタイミングで頭部に戻すゼロとダークロプス。

「こいつは俺が食い止める、みんなは駆動炉に！」

「ゼロさん……」

「ゼロ……でも」

『地球が消える瀬戸際なんです！早く行って下さい！』

普段は冷静なリンクも声を荒げる。

彼女の言う通り、これ以上、道草をくってる時間は無い。

それでも……特にフェイトの表情が曇る。

相手をするダークロプスは、大きさこそそこのロボット兵より小型だが、少なくとも目の前の相手は、今までの比ではない強敵であることは明らかだったから

「行ってくれ……頼む」

ゼロは表情こそ変えずとも、フェイトたちに微笑んだ。心配してくれるのは嬉しい、でも行ってくれと。

「フェイトちゃん、行こう！」

大丈夫……ゼロなら……

ゼロも私たちなら、駆動炉を止めてくれると信じてるんだ。なら、私も信じるんだ。

「気をつけてね……」

「……………ああ……」

ゼロを残し、なのはたちは駆動炉へと繋がるエレベーターへと飛んで行く。

それを阻止するとはかり、ダークロプスは彼女たちに照準を向け

るか。

「させるかよ！」

ゼロが立ちはだかり、手から発射する稲妻状のビーム、シューティングゼロでダークロプスメイザーを相殺。
さらに音速を超えたスピードで急接近し。

「デエア！」

その勢いを付けた上段回し蹴りを叩きつける。
ダークロプスはとっさに両腕でガードするが、その衝撃に20Mほど吹っ飛ばされる。

「お前の相手は……」
ゼロは鼻をこすりながら写し身を見据え、裂帛の気迫を発すると同時に構えて。

「この俺だ！」

啖呵を切った。

Episode 24 - 運命の零（後書き）

あれ？いくらFINAL MISSION〜QUANTUM BU
RSTを聞きながら書いていたとは言え、どうしてこうなった？

特にUFZ4人の戦闘シーンとか。

まんまガンダムマイスターだwww

いくら4人の無双を見たかったからって、想像ダダ漏れ過ぎる。

すみません…作者の趣味嗜好欲望全力全開な回になりました。

次回は最初から最後まで戦闘シーンです。

お楽しみに。

Episode 25 - SETTLE へ決着へ（前書き）

実は電撃ホビーにウルトラマンの小説が連載されてまして。

タイトルが『ANOTHER GENESIS』

恐らく映画よりチートなベリアルによって光の国が消滅するという
衝撃の物語なのですが。

今月はセブンが出てきました。

ごっつい…

私の初見の一言です。

言われないとセブンだと気付かない人もいるかも…

ゼロ「何言ってたんだよ作者！カッコイイじゃねえか！さすが親父だ
よな、甲冑とマント着てても大鎧持っても様になるぜ」

作者「このファザコン（笑）」

プレシアのいる最下層へと進む光とクロノ。

眼前には、無限にいるのかと考えたくなるほど、多数のロボット兵が待ち構えている。

「ライト！リングエッジモード！」
『御意』

光のシルバーライトは刃が魔力でできた小太刀、ビームセイバーモードから半円型な独特の形状をした実体剣になった。

剣とは言ったが、実質拳銃として使用するシルバーライト唯一の遠距離戦専用のモードだ。

『バレット ナイフ
Bullet knife』

刀身が発光し、そこから、光でできた手裏剣状が弾丸を連射。
ロボット兵を牽制し、距離をとらせる。

「光！回避しろ！」

『ブレイズ キャノン
Blaze Cannon』

光の時間稼ぎで、難なくチャージを完了させたクロノのS2Uから、魔力の弾丸が目標を捉える。

火器なら、バズーカやグレネードランチャーに匹敵する魔力弾をクロノは苦も無く操りながら、相手を屠っていく。

そこに追い打ちと光の御神流の剣技が轟く。

「徹」が斬る衝撃を相手に通し内部破壊。

「神速！」

光の視界がモノクロになり、勇夜たちの強さで忘れがちだが、一般人には脅威以上なロボット兵の機動が、人間未満になる。

そのモノクロな世界からの虎切で、一気に数十体を切り刻んだ。

「（影すら…見えなかった…）」

彼からは、光が踏み込んだ次の瞬間には、敵は残骸の山と化していた。

クロノは戦闘中であることを心がけながら、神速で消耗している光を援護しつつも、光の剣技と彼が会得している剣術の流派に改めて舌を巻く。

特にあの神速…その御神流を極めれば誰でも使えるという。

消耗が激しいことに目に瞑れば、魔法の補助を借りずに、体が無意識にはっているリミッターを外すだけで、魔法以上のスピードを実現する。

勇夜の言う通り、魔法だけが全てでは無いんだな……

二人はロボット兵を蹴散らしながら着実に進軍していたが。

なのはたちと同じく、次から次へと新手が現れていく。

いくら若年ながらも執務官という高官についた魔道師の少年と、圧倒的に不利な物量差がある状況下の中で、王宮を最後まで守り抜いた鏡の騎士でも、この数の多さには手を焼かされた。

一気にプレシアがいる部屋まで向かいたいが、ミラーナイトのレポートは、鏡面が無ければ意味が無い。

今行く先に鏡面があるとは限らないし、一応鏡に頼らずに転移はできるが体力の消費量が多いので、迂闊に使えない。

かといってこのままでは、持久戦に持ち込まれる。

ふと、壁を見ると、微かに鏡面となっていることに光は気づく。そして、もうひとつ気付いた。

出口となる鏡面があるあの宝石の存在を。

「よし、これなら」

「光？」

「ミラー！スパーク！」

光はミラーアイズの前で手をクロスさせ、ミラーナイトに変身。

「クロノ！僕の手を握って！」

「あ、ああ」

要望通りクロノは彼の手を握ると。

「ミラームーバー！」

その叫び声と同時にミラーナイトの体が光り出し、壁へと消えていった。

プレシア製のダークロプスをゼロに任せ、駆動炉に繋がるエレベーターに乗ったなのは、フェイト、ユーノ、アルフ一行。

「駆動炉にも見張りがいるはずだから、気をつけて」
「うん」

ドアが開いた。

円錐状の巨大な部屋は薄暗く、上部に赤い光点が見える柱のような円錐がそびえたつ空間が広がっており。

そしてフェイトの忠告通り、駆動炉の前には…

「大型だ…面倒なやつがいやがる」
今までのロボット兵よりも巨大で大型の砲台を肩に抱えていた。

もうすぐ四十郎になる凄腕の浪人の表現を借りれば、さっきまで戦っていた相手は、数は多いがなのはたちから見れば一体一体は『猫』だった。

だが、さっきのダークロプスとこの眼前の敵は、一体ではあるが『虎』だ。

怪しく光る眼がなのはたちを捉えると、肩の砲台から光線が発射される。

飛んで回避する4人。

『デバイン
Devine シューター
Shooter
フォトン
Photon ランサー
Lancer』

「シューター…」

「ファイア！」

なのはとフェイトは反撃の魔力弾を放出するが、ロボット兵に着弾する直前。

半透明の障壁が阻んだ。

「バリアが強い……」

フェイトが毒づく、しかも巨体の割りに、機動性も反応速度も恐ろしく速かった。

螺旋階段はもう先程のオペラハウスのような様相では無くなっていた。

ものの数十秒でこの空間は、あちらこちらに罅、亀裂、傷口のような破壊の跡でボロボロとなっていた。

超音速で飛ぶ、光点と光点が何度も何度も交差、激突している。

片や、光の国のウルトラ戦士。
ウルトラマンゼロ。

片やゼロの容姿と能力を模した一つ目のマシン。
ダークロプス。

によって。

今二人は、互いの宇宙ブーメランを逆手二刀流で打ち合っていた。20合ほど打ち合った後、一旦離れて距離をとり、出方を窺う態

勢となる。

どっかで見た動きだな…

ゼロは内心呟く。

今までのダーククロプスの戦い振りに、ゼロは見覚えがあった。

ふと、自分の構えと相手の構えを見比べてみる。

鏡で写したかの如く、そっくりだった。

まさか…俺？

『（何者かがダーククロプスの設計データと、マスターの戦闘データをプレシアに渡したのでしょうか）』

リンクが補足説明してくれた。

で、そのデータを元にこの『もどきのもどき』を作ったと…

ベリアルの仕事…では100%無い。

奴が悪に身を落としたままの姿で、この次元世界でくすぶっているのなら、ナオやエメラたちがいた世界の時と同じく、圧倒的な物量を持って、あちらこちらを破壊している筈だ。

こんな回りくどい真似は、どっちのベリアルでも絶対しない。

いずれにしろ…

「（ふっ……今度そいつに会ったら締めてやる）」

と、やや物騒な表現を心の中で発言した時だった。

ダークロプスが、スラッガーを投げつける。

独立した軌道で襲い来る刃を、持ち前の研ぎ澄まされた反射神経と先読みでゼロスラッガーを振るい、弾き返すゼロ。

その刃の動きも、自分のと同じものだった。

次はどう出てくる？

そう思案していると。

ダークロプスは、バラバラに動いていた二振りのスラッガーを一か所に纏め、ヘリのプロペラのように回転させて飛ばして来た。

あの、ゼロとウルトラセブン親子の宇宙ブーメランを使った連携技。

『コンビネーション・ゼロ』

それを一人で再現したのである。

「ちっ！」

ゼロはゼロスラッガーを持ったまま腕をクロス。急接近してくる刃を、ゼロの防御技。

『クロスゼロバリアー』
で防ぐが…

「おわっ！」

その衝撃を受けて、ゼロは既に傷だらけの螺旋階段へと飛ばされ、内壁に叩きつけられてしまった。

駆動炉でのなのはたちも、一体のロボット兵相手に攻めあぐねていた。

砲台からは、ガトリングガン並の連射力で魔力弾が彼女たちを襲い。

その隙を突いて…

『アーク Arc セイバー Saber
ディバイン Divine ショット Shot』

攻撃を加えても防御され、駆動炉に仕掛けてもその巨体に似合わない速さで反応し、阻まれ、大技の魔法を打とうとしても先手を撃つてきて、足を止める時間を与えてもくれない。

アルフは苛立ちでささくれそうな心を静める。

落ちつくんだ…

勇夜だって稽古付けてくれた時に言っただじゃないか…

こういう状況だからこそ、冷静に対処しないとど坪に嵌って突破口が開けなくなるって…

現にわたしは頭に血がのぼって、勇夜に打ち負かされたんだから…

こんな時こそ平常心、平常心。

深呼吸をする…

問題はやっぱ、あの半円錐状のバリア。

どこから撃つても反応する。
時間差を置いて連続で、多方向から撃つても切り込んで、防がれてしまう。

ん？まてよ…

バリアの出力装置は頭部にあることは分かった。
問題はそこから…
思い出せ、ロボット兵に攻撃が防御された瞬間を…
そのパターンを…

……

……

……

……

よし…

できるかどうかは、分からないけど。

時間が無いんだ。

賭けるしかない！

「フェイト！なのは！」

「「アルフ（さん）！？」「」

「何でも良いから、あいつの『真正面』に向かって撃って！」

「何か策があるの？」

「それがあるから言ってるんだ、早く！」

アルフの熱意に押され、二人は頷くと。

ロボット兵から見て、正面の位置に立ち。

アルフは急上昇する。

そして二人から。

『フォトン
Photon Lancer
デイベイン
Divine Shot
ショット』

各々の魔法が発射される。

例の如く、バリアを貼るロボット兵。

タイミングはシビア…だが…

彼女は使い魔として、優れた動体視力と集中力で、相手を見据え、着弾する微妙なその瞬間。

そこだ！

なのはたちの攻撃が防がれたその一瞬。

「どおおおおりやあああああああああ————」

「——！」

その僅かな隙に、バリアの死角へと急降下。

何の因果か、その様相はウルトラ兄弟三兄がバリアを持つ怪獣に

対抗するために編み出した。
『流星キック』とよく似ていた。

魔力を纏った右足で、オレンジ色の流星となったアルフは頭部の発生装置を破壊。

衝撃でスパークと煙を上げるロボット兵。

「やった！」

「アルフ、凄い！」

「どうよ！」

感嘆を上げる一同にアルフはVサインで返した。

特に彼女の主は、その成長ぶりに驚嘆した。

その空中飛び蹴りだけを見ても、飛行スピード、魔力解放などの技量が格段に上昇していることで、威力も比例してアップしていた。アルフは以前、勇夜^{セロ}から、組み手を主体にした厳しい筋トレを受けていた。

使い魔な上、狼が素体なので身体能力が高いこともあるが、この短期集中的な修練が功を奏した。

だがこれは人間でもいえる。

魔力の元になる魔力素は空気中にはいくらでもあるが、それを魔力に変えるのは自分の体だ。

体調管理がなっていないと血の巡りが悪くなることと同様、魔力運用も術者のコンディションによって支障をきたす。

逆に日頃からきっちり管理をこなしつつ、トレーニングを欠かさずに肉体を鍛えあげれば、身体そのものを武器にできるし、魔法も

鬼の金棒以上の戦力となるのだ。
体もれっきとした資本なのである。

「バリアは破れた！二人とも、今の内に」

「うん、行くうなのは！」

「え？……………フェイト……ちゃん」

今……何て言ったの？
私の……名前。

「私たちなら、できるよ」

その本人は彼女に顔を向け、頷きつつ、今まで自分には見せなかつた温かさで微笑んだ。
名前を……呼んでくれた。
ちゃんと、なのはって……呼んでくれた。
なのはも満面の笑みになる。

「はぁ……………うん！うん！うん！」

たったそれだけのことで、心に熱いものを感じられる。
その言葉だけで、こんなにも嬉しい気持ちになる。

「行くよ！バルディッシュ！！！」

『Glave Form / GET SET』

「こつちもだよ！レイジングハート！！！」

『ALL RIGHT / Cannon mode』

二人の熱意に彼女たちの相棒も強く応じた。

螺旋階段に叩きつけられたまま、動きを見せなくなったゼロ。

噴煙で見えない穴をダークロプスは腕をL字に構え、ダーク
ロプスショットを発射、閃光と噴煙が舞い上がった。

ベリアルが作ったオリジナルは、プロトタイプも量産型もインテ
リジェントデバイスと同じく、AIが搭載され、会話も可能な思考
能力が備わっていた。

だがこのプレシア製は、火力、機動性、格闘能力などの性能は他
のロボット兵よりも上だが、判断能力は他のタイプと同じく、淡泊。
命令の内容も。

?近づいてくる侵入者を撃退せよ?

それだけだ。

だから気づけなかった。

ゼロがまだ健在なことも。

煙の中から、飛びだした稲妻の光球。

『ビームゼロスパイク』

には反応し、回避したが…

別方向から、壁を突き破って現れた。

体を回転させて突っ込むゼロへの対応が遅れた。

かろうじて受け流す、ダークロプス。

そこに何かは奴に当たったことも気づけなかった。

それは避けた筈のビームゼロスパイク。

ゼロは魔法を学んだ経験を生かし、ビームゼロスパイクに誘導性能を付加し、本命をフェイントと思わせる二重フェイントでダメージを当てたのだ。

反撃させまいと、ゼロの容赦ない拳と蹴りと手刀が奴を襲う。

ゼロ譲りの防御の型で、防ぎ、躲すダークロプス。

しかしゼロは、その防御の隙間から正拳を相手の左側の鎖骨に命中させた。

亀裂が入るダークロプスのプロテクター。

ここに来てゼロが圧倒し始めた。

「意外に脆いんだな」

確かに、こいつは俺の動きを上手くコピーしている。攻撃もキレがあるし、防御でも即対応する。

感情に左右されずに戦闘ができる。

それは、心を持たないマシンの利点。

マッドサイエンティストに言わせれば、感情なんてのは不要な要素って言うんだろうな。

まあ感情がその度を超えれば、ムラができて隙も大きくなるから、正論ではある。

だが、ゼロに言わせれば、マシンの無感情さは長所であり、同時に致命的な弱点であった。

無駄が無さ過ぎる余り、逆に動きが、どんな状況下でも正確に、セオリー通りに動き過ぎる。

その動作パターンを一度覚えてしまえば、見切ってしまうのもお手の物。

ゼロが一度は苦杯を舐めたダークロプスゼロに、リターンマッチで勝利できたのは、奴が自立機能を持ちながらも、そのマシンとしての長所兼短所が仇になったこと。

何よりゼロ自身が、「儂いもの」とダークロプスゼロが蔑んだ、命と心ある存在であったことだった。

心と命がある無いの差、その溝は想像以上に大きいのである。

勿論、こんな芸当が可能なのは、ゼロの戦闘センス、経験、日頃の心身の鍛錬が実を結び、命ある者の弱点を知り、その強みを確固たるものになっているからである。

堂々と言っつてやる。

？過去きのうに負けるほど…柔じゃない？

てな！

ゼロは相手の右手を左手で掴んで引つ張り、同時に右手から連続で、重い拳をぶつけた。

父ウルトラセブンから受け継いだ喧嘩屋パンチ。

そして駄目押しにダークロプスの顎を蹴り上げた。

相手が生命体なら、最低でも脳震盪は確実。

ウルトラ戦士の一撃をに耐えられるなら、と付け加えたうえでだが。

淡白な思考なりに、不味いと判断したのか、相手は後退し、ダークロプススラッガーを手に持ち、それを変形。

ゼロスラッガーが三日月状の剣になった、ゼロツインソードそっくりな大剣へと変わった。

？負けはしない！貴様などに…負けはしない？

少しシチュエーションが違うが、プロトタイプがその言葉を自分にぶつけた瞬間とダブった。

「やっと本気ってどこか？」

なら…見せなきゃな…

こっちの本気を！

ゼロもゼロスラッガーを手に持つと、それを合わせ変形。

刃の無い鍔無しの剣の柄へと変わる。

その柄の鍔がある部分に手を置き、ゆっくりなぞると。

ゼロスラッガーに込められたエネルギーが実体剣に近い、青く輝くエネルギーの刃となり、一振りの刀、ブレイドスラッガーとなった。

なのはとフェイトは大技を使うための準備に入る。

☞ デイベイン Divine バスター Buster
☞ サンダー Thunder スマッシャー Smasher

それぞれの砲撃魔法のエネルギーがデバイスに集中する。

が、相手のロボット兵は、バリアを失いながらも二人の射程圏内に立ちはだかり、両肩の砲台にエネルギーを蓄積させる。

ユーノとアルフは同時に同様の結論に達する。

このままじゃ先に撃たれる　と。

「二人をやらせは…」

アルフは周辺に彼女の髪と同じ色の魔力弾　フォトンランサーをいくつも作り。

「しないよ!」

一斉掃射。

ロボット兵を牽制、さらに相手の周辺を飛びまわり攪乱させる。そして、アルフに気を取られている隙にユーノは

「チェーンバインド!」

鎖型のバインド、チェーンバインドと　輪状のリングバインドを同時行使して砲台を縛り上げる。

抵抗して振りほどこうとするのを、必死で押さえながら…

「僕も、僕なりのやり方で…」

先程危うくなのはを落とすそうになってしまった自分に歯がゆさを感じながらも。

同時にあの二人の力になってくれたヒーローたちの雄姿が浮かぶ。

「なのはたちを守るって…決めただ!」

バインドの捕縛力を一気に上げ。

「バインドには、こつという使い方もあるんだ！」

砲台は極端に圧迫されたことで押し潰され、煙をあげてその機能を失った。

そして準備は整った。

『「チャージ完了」』

「サンダアアアア　スマツシャアアア

！！！！！！」

「デイバアアアインバスタアアアアア

！！！！」

桜色と金色の魔力の奔流が駆動炉へと一気に解放される。

満身創痍のロボット兵は身を呈して盾となるが、魔力流が直撃すると、その役目すら果たせずに貫通され、駆動炉に、それも障壁を貼って阻んだ。

だが、その程度でへこたれる二人では無い。

さらに魔力光の威力を上げ…

「「せええええのおお！！！！！！！！！！」」

同時にかけて声も威力の増幅させるタイミングも重なり。

二つの極太の魔力流が障壁を突き破って、駆動炉を呑みこんでいった。

それぞれの得物を持って対峙するゼロとダークロプス。

互いの距離は80M。

ダークロプスは弓状の大剣。

対してウルトラマンゼロは、ディファレーターエネルギーを凝縮し刀身に固めた鏢無しの日本刀『ブレイドスラッガー』を持ち、居合の要領で構えていた。

言葉通りの、鞘無しでの居合。

先程までの超高速の『動』の戦いから、『静』の領域へとシフトされ、張りつめた空気が、その場を支配する。

どちらも頑として微動だにしない。

片方はロボットではあるが、ゼロは生命体、生身の生き物、そんな彼が山のように動かずに静止している。それだけでもかなりの神技。

ゼロはひたすらその時を待っている。

そのための準備も怠らずに…

どこまでも続きそうなの…静寂。

実際よりもゆっくりと時間が遅く流れているとさえ錯覚する。

永遠を思わせる刹那…

そして…その静謐な空気が…破られた。

先に動いたのはダークロプス。

やつはゼロがツインソードで両断する必殺技。

『プラスマスパークスラッシュ』

それを連想させる構えで急接近。

対してゼロはまだ動かない。

着実に近づいてくるダークロプスを、逸らさずに視線を固めたまま。

居合の態勢のまま。

ひたすら溜める。

何を溜めるか？

ある意味何もかも。

この一撃に、全てを賭けて…

60 M。

まだ動かない。

30 M。

微動だにしない。

20 M。

その様相、動かざること山の如し。

そして10M…5間ほどの距離を切った瞬間。
ゼロは動いた。

それまでパワーを溜めに溜めこんだトリコロールの剣客は、その
全てを解放。

ダークロプスを上回る、風の如き速さで踏み込み。

鞘に入っていたが如く、刃を走らせ抜刀し。

一閃した。

互いの一撃が同時に炸裂し、切り抜けた写し鏡の二人。
切り抜け、静止する。

ダークロプスが踏み込んでから、二人が切り抜けるまで、僅か数
秒の出来事だった。

「勝敗はどちらに上がったか？」

「まだはっきりとしない。」

どちらも先程の静寂の続きをしているかのようにまた動かなく

なっただと思われた瞬間。

カキン…

冷たく重く響く金属音が、螺旋階段内に残響した。

ダークロプスの胴体が、両腕が、ツインソードが、同時に真っ二つに両断された。

そして切断面が、青く光を発し、バラバラになったダークロプスの肉体を侵食して行く。

マシンであるにも拘らず、その現象に暴れ狂い、悲鳴を上げる。

『死』の間に自我にでも目覚めたのだろうか？

そして死に対して恐怖が芽生えたと…

だがもうどちらにしろ、それは後の祭りだ。

ただの無慈悲な機械で、ゼロを敵に回したのがそもそも間違っていたのだから。

光が全て、ダークロプスを覆った瞬間。

断末魔と同時期に、青い粒子となって消滅した。

ゼロがやったことはシンプルだ。

渾身の居合から来る横薙ぎの一閃をかました。

ブレイドスラッガーの刀身にはディファレーターエネルギーが高密度に圧縮され、反りの入った片刃を形作っている。

さらにゼロに限らずウルトラマンは、体から反重力エネルギーを

放出しコントロールすることで、空を自在に飛行できる。

そして彼は構えをとりながら、刀身に、分子分解効果のあるエネルギーを込め、反重力エネルギーも、空気を押さえつける要領で、より高密度に溜めこみ。

抜刀と同時にそれらを一気に解放、その一撃で写し身を両断して、葬ったのである。

彼の心技体が為せる、必殺の居合だった。

ゼロは剣術の残心を心がけながら、血を振り払う所作で刀を振り、刀をゼロスラッガーに戻すと、頭部に納めた。

「ふ〜」

張りつめた空気を発散し、リラックスするためか、息を吐くゼロ。庭園内で突然大きな振動が起きる。

一瞬次元振が強まったのかと思われたが、むしろそれを強めていたロストロギアの波動が弱まっていくのを感じた。

『駆動炉の制圧に成功したようです』

「そうだな…」

当初の目的の一つは達された。

しかし、まだ残っていることがある。

光達もフェイト達も今頃向かっているだろう。

プレシアのところに…

『急ぎましょう』

「ああ！シユア！」

ゼロは最下層に向かって飛行、その場を後にした。

駆動炉の封印を完了され。

なのはたちの愛機は、排気筒から、余熱を排出した。

床に降り立つなのはたち。

どこかバツの悪い様子だったさつきとは違い。

二人とも笑顔だ。

「フェイト！フェイト！」

そこにアルフが、涙を浮かばせながら喜びに尻尾を振りながら、眩しい笑顔でフェイトに抱きついた。

「アルフ、心配掛けてごめんね」

優しく燈色の髪をなでるフェイト。

「なのは……」

「ユーノ君、さつきは凄かったよ、いつあんな使い方を？」

「一応理論上は可能だったんだけど……ほぼぶっつけ本番だったね……」

「そうなの？大丈夫？」

「ちよつと体に響いたけど、もう大丈夫……なのはと光さんと勇夜さんの熱さが乗り移ったのかもね」

え……わたしと光兄って、そんなに熱いのかな？

勇夜さんの方が、熱血漢

！って言えるけど。

でも、駆動炉は止めたけど…

「フェイトちゃん」

まだフェイトちゃんには、やり残していることがある。

「行くんだよね？お母さんのところに」

フェイトは頷いた。

「わたしは……見ることもぐらいしか、できないけど……」

自分はまだ小さいが、これはフェイトちゃん自身が解決しなければいけないことであるのは理解できる。

だからせめて…

なのはフェイトの手を握り。

「でも……一緒に……行ってあげるから……」

「……ありがとう」

フェイトも笑顔で返した。

「勇夜たちもあの人のところに向かっているはずだ、急ごう！」

「それじゃ行こう、なのは、フェイト」

「うん」「」

なのはたちもその足でプレシアの許に急いだ。

Episode 25 - SETTLE へ決着へ（後書き）

今回は作者はお勧めするとあるウルトラマンの二次小説を紹介します。

ウルトラマンティガ Legacy of mythology

映画で実はかつてダークサイドに堕ちたウルトラマンであることが判明したティガですが、この作品ではいかに光の巨人に戻っていく過程が丁寧に描かれています。

ティガ本人が主人公つても新鮮ですね。

カミイラ三人組も、ユザレも、あとティガ一話で破壊されたティガと並んで封印された巨人たちも出てきます。

おまけに兄弟！？

にじファン内にある作品なので、気になった方はGO！

そっぴや私の作品、無意識の内にティガ本編を意識させる場面が盛り込ませていることに気がついた。

特にゼロとフェイトの絡み。フェイトの目の前で変身とか。

そりゃ、平成三部作直撃世代なんですけどね。

Episode 26 - END / BEGINNING (前書き)

誰かが言った。

ウルトラマンの無言の頷きは究極に安心させると。

洞窟のような黒い岩肌の瓦礫の地面と壁面と、様々な暗い色々が混在する空がある庭園内のとある空間。

その空間の中央ジュエルシード9個が円を描きながら漂っているアリシアを乗せたカプセルと、それに寄りそるプレシア。

「あと…もう少し…」

と一言発した直後だった。

庭園を揺らしていた次元振が一気にその勢いを弱めたのである。

「(プレシア・テストロッサ)」

自分と呼ぶ声がして、反射的に振り向くプレシア。

だが誰もいない。

なぜなら、呼び掛けた本人はこことは違う場所から呼び掛けていたのだから。

「(終わりですよ、次元振は私が抑えています、駆動炉も既に封印済み、あなたの許には執務官が向かっています)」

念話の主はリンディだった。

次元振の進行を抑制させるために、自身も庭園に乗りこみ、ディスト ションフィールドを張っていたのである。

「(忘却の都、『アルハザード』…かの地に眠る秘術…そんなもの

は、もうとつくの昔に失われているはずよ)」

「違うわ…アルハザードは今もある…失われた道も、次元の狭間に存在する」

自分が狂っていたことを、今は自覚しているがアルハザードに関しては、ちゃんとした根拠から、実在していると踏んでいた。

「（仮にその道があったとして…あなたはそこに行って何をするの？）」

「取り返すわ…わたしたちの過去と未来を…取り戻すの…」

プレシアは、かつての狂気に堕ちた己の原動力となった呪詛を。

「こんなはずじゃなかった　　世界の全てを！」
口に出した。

その叫びと同じ時…

宙を漂うジュエルシードの一個が、突然光を発し、あの『紋章』が現れるとともに、光から人が二人飛び出した。

二次元人のワープ能力でここまで転移した、ミラーナイトとクロノだった。

同時に瓦礫の一つから、光線の粒子が飛びだし、そこから『ワイドゼロショット』で道を開けたウルトラマンゼロも現れる。

「世界はいつも、こんなはずじゃないことばかりだ！いつの時代で

も！誰だつて！」

「誰もがみんな…描いてた未来と現実の狭間で、もがきながら今を生きてるんです、あなただけが特別なんかじゃない！」

それぞれの想いの丈をぶつけるミラーナイトとクロノ。

そしてゼロも、かつて彼女に見せた憎悪と殺意、それとは違う想いで…啖呵を切る。

「あんたが一番良く知ってるだろ？…過去は未来に進むやつには背中を押してエールをくれる、だが縋ってくる野郎にはどこまでも無慈悲に切り捨てるってな！」

思い出は、その人の心次第で、様々な一面を見せる。

菩薩のように暖かく振る舞う時もあるれば、死神のように冷酷にもなる。

自分で切り開くか…他力本願になるか…どう向き合うかによって…

そしてプレシアの過去は…

「あんたの『子どもたち』は…それを身を以て教えてくれただろ！
！！」

何十年の容器の中で漂い続けるアリシア。

彼女と同じ容姿と記憶を受け継ぎながらも、まったく別人として生まれてきたフェイト。

プレシアの過去は、確かにどこまでも彼女に無慈悲であった。
対峙する三人の戦士と、プレシア。

俺が…俺たちができるのはここまでだ。

ゼロの視線には、プレシアへと走る彼女たちの姿を捉えていた。

母のところには既にウルトラマンゼロとミラーナイトとクロノと
言った黒い執務官が来ていた。

ゼロに目を向けるフェイト…

ゼロもフェイトに視線を写し…ゆっくりと、優しく頷いた。

表情は変わらないのに、それだけで心がどこか安らぐ。

ウルトラマンが持つてる魔法なのかな？これって…

そしてその顔から…

？言ってみてやれ、自分の想い？

と言ってるような気がした。

「(フェイトちゃん…)」

なのはも、そっと彼女の背中を押す。

その温かみを感じながら、フェイトは母へと真っ直ぐ見据えた。
そして歩もうとするが…

プレシアを蝕む病魔が、咳と吐血と言う形で牙を向く。

「母さん！」

「何を…しに来たの？」

思わず駆け寄ろうとするフェイトだが…拒絶の視線を向けたプレ

シアの言葉に立ち止まってしまっ

「消えなさい…
もうあなたに用は無いわ…」
それでも…

「あなたに…言いたいことがあつて来ました…」

ここで止まってはいけない。

諦めてはいけない…

ここに居るみんなは、それでもと、わたしと向き合つて、呼び掛けて、想いを伝えて、助けようとしてくれたんだから…

「私は…ただの失敗作で、アリシアになれなかった…偽物です…彼女になれなくて…期待に応えられなくて…いなくなれって言うなら…遠くに行きます……だけど、産み出してもらってから今までずっと、今も、母さんに笑っていて欲しい、幸せになって欲しい、そう思ってます」

偽物として生まれた自分にも、確かな真実と、自分として見てくれた、接してくれた光があるから…

「私の…フェイト・テストロッサの本当の気持ちです」

諸星勇夜　　ウルトラマンゼロが、夢でも現実でもしてくれ
たように、フェイトは母に手を差し伸べた。

一瞬、プレシアは安心した表情を見せたが…

「……………くだらないわ」

黒い嘲笑でフェイトの手を振り払い、杖を地面に突いた。
魔法陣が敷かれ、ジュエルシードの輝きが一気に激しくなる
同時に、一度はなりを潜めていた、揺れがまた強くなった。
地割れと崩壊を起こす庭園。

フィールドを張っていたリンディも、地割れから逃れるために、
魔法の持続をストップしてしまう。

『だめです艦長！ 庭園が崩れます！！ クロノ君達も脱出して！
崩壊まで、もう時間が無いよ！！』

切羽詰まった声で状況を報告するエイミー。

「了解した、フェイト・テストロツサ……フェイト！！」

クロノがフェイトを呼び掛けるが、母から目が離せない彼女には
届いていない。

「わたしは行くわ…フェイト…」

「母さん…」

プレシアとアリシアの足元が崩壊。

「母さん！アリシア！」

フェイトはひび割れた地面を走り抜け、落ちていく自分の肉親た
ちに駆け寄ろうとするが、魔導師の翼を剥がす空間の前にはどうに
もならなかった。

そんな、立ち止まる彼女を横目に空間に飛び降りる光が、一つ。

「ゼロ…」

ウルトラマンゼロ。

「ゼロさんは魔法使いじゃない！ウルトラマンなんだよ！」

そのなのはの一言ではっとした…炎が一気に鎮火された。

そつだ……ゼロは、魔法と違う力を持ったウルトラ戦士。

魔法が使えなくなることを除けば、虚数空間の重力は大したものじゃない。

ウルトラマンなら問題無く活動できる。

「信じて上げて…」

だから今は待つてあげよう。

ゼロが…母さんと姉さんを連れて、帰ってくるって……

「脱出する！エイミー、ルートを！」

『了解』

エイミーの手ほどきで、なのはたちは庭園から脱出した。

ギリギリのタイミングで、庭園は閃光を眩かせながら、崩壊していった。

これでいいの……

家族を失い、過去を取り戻そうとする余り、狂いに狂って、子を道具として弄んでしまった次元犯罪者として、この上ない相応しい

最後だから。

魔法使いの翼を、容赦無く奪う漆黒の空間へと落ちながら…

プレシアは一人独白した。

本当は分かっていたはずだった。

必死にアリシア生前の姿を保たせようと、躍起になってきたけれど、もうそこにはアリシアがいないことを……

本当は嬉しかった。

自分の言葉で、^{のこい}どん底に落とされながらも、それでも、立ちあがって、這い上がって、自分を見捨てずに……

自分を母だと言ってくれた。

でも…もう駄目なの……母さん……フェイトの足枷にしかなれないから、フェイトを不幸にしかできない身だから。

最後まで……微笑んであげなくて……

目の前に光が迫ってくる。

天からのお出迎えかしらね。

現実主義の科学者にしては、らしくない表現だった。

でも不思議と怖くは無い。

でも……最後にもう一度『彼』に伝えたい言葉がある。

異世界からの来訪者。

あの子の光となってくれた……ウルトラマンゼロ光の巨人に……

フェイトを……お願い……

光がプレシアを捉える直前、彼女の意識は虚無の彼方へと落ちていった。

『クロノ執務官始め魔道師の帰還を確認
艦内の転送ポートに戻った一同。
ゼロがまだプレシアを救出するために、まだ外にいるが。』

「ゼロ……」

大切な人の無事を祈り、目を閉じ、手を合わせて、無事を祈るフェイト。

『前方に、特殊なエネルギー波を感知……』
『確認しました、ウルトラマンゼロです！』

笑顔が一同に戻った。

「(ゼロ、母さんとアリシアは?)」

『(今は私の中で眠っています)』

リンクが無事であること伝えた。

ほっとしたその時…

『大変です、虚数空間内に、次元振動増大』

エイミイが異常事態を告げた。

一同は何事かと、ブリッジに急いだ。

ただ一人、その場に残った光。

彼は、服の下にしまったミラーアイズを取り出す。

まだ僕たちの力が必要なようですね。

願いを叶えると囁く、天使に化けた悪魔の為に、これ以上この世界を、惑わせは…滅ぼさせはしない!

「ミラー!スパーク!」

艦橋のに着いたのはたち。

モニターには、ウルトラマンゼロと稲妻と揺れを轟かしている虚数空間。

「何があった?エイミイ」

「ジュエルシールドが庭園の動力エネルギーを吸収したせいで次元振が強まって

いるの、このままじゃ、虚数空間で次元断層が…」

しかも最悪なことに、この艦にはこの状況に対応できる装備が無い。

魔法では……どうしようもない状況だった。

管理世界のシステムが、ここにきて仇となるとは、何たる皮肉か…

「光兄は？」

なのはは今になって兄がいないことに気づく。

「（ここです）」

テレパシーが聞こえ、モニターを見るとゼロの横にミラーナイトがいた。

画面越しになのはたちに目を向ける巨人たち。

でも、まだ希望はある。

「お願いします、ジュエルシールドの破壊、ユーノ君もよろしいですね」

押しつけがましいのえお承知で、彼女は二人に託した。

「はい…僕からも頼みます」

「光兄！」

「ゼロ！」

応えるゼロとミラーナイト。

今までは封印する必要があったので、迂闊に魔法以外の力は使えなかった。

が、壊すとなれば話は別。

「合体光線、できるか？」

「もちろん」

「よし……行くぞ！」

「はい！」

二人は、手を握りこぶしにして両腕をクロス。

エネルギーを腕に溜めると、横に広げながら、縦に並び、互いの掌を挟み込む。

重ねた二人の手に互いのエネルギーが相乗され…

「ダブル

」

ゼロの師匠、ウルトラマンレオと弟のアストラから受け継いだ合体技。

フェイトたちの向かいから、人間態に戻った光と、まだウルトラマンの姿の

ままプレシアを抱えるゼロが歩いていた。

「クロノ…プレシアを医務室に」

「分かった、医療班」

気を失っているプレシアはストレッチャーに移され、メディカルルームに運ばれていった。

ふとフェイトは一人足りないことに気づく。

「ゼロ…アリシアは？姉さんは？」

母と一緒に落ちていったアリシアがいない。

もう死んでいると言っても、あの空間に落したままにするのは嫌だった。

「待て、驚くだろうからさ…落ちついてくれよ…」

ゼロはそう前置きをして、光り出した。

眩しさに目を覆うフェイトたち。

光が収まると…

「勇夜さ…え？」

そこには、諸星勇夜では無く、勇夜のバリアジャケットによく似た。

こげ茶色のジャケットと黒のインナー、半ズボンのジーンズを着て、金色の

その絶叫から数時間後：

「いや〜大声大会とかあつたら、絶対優勝できる絶叫だったね、なのはちゃん」

アースラの食堂で、なのはたちは食事をとっていた。

なのはの横に、ユーノと光が、向かいにクロノとエイミイが座っている格好となっっている。

「だつて、ゼロさんたちウルトラマンにそんな能力もあるなんて知らなかったんですよ」

ウルトラ戦士が、地球などの外惑星に長期間滞在する場合には、二つの選択

肢がある。

一つは勇夜や、父ウルトラセブンの人間態、モロボシ・ダンのように、自ら

の肉体構造を変える変身体。

もう一つは、互いに了承の上、地元の人間に憑依して、一心同体となる憑依態だ。

何気に、不慮の死を遂げた人間に憑依して、最終的に心身ともに完全に一体

化して、後者から前者になってしまったパターンもある。

今、ブレスレットが本体と言われ、いくつも名前がある四兄とか、くびれが無い、光線・切断の鬼である五兄が、冷やっとした表情を見せた気がするが、
気にするな。

そしてゼロがなぜ、一時的にアリシアと一体化したのは…

あの生命維持カプセルは駆動炉とロストロギアのエネルギーを動力にしていた。

だがゼロが救出した頃にはその供給が途切れていたのである。

魂の無い抜け殻であったとは言え、ゼロはせっかく見つけたあの『光明』を
消したくは無かった。

よって不躰がましいのを承知で彼女に憑依したのである。
なおゼロから変身解除した時に、彼女が着ていたのは、リンクが彼女のサイズに合わせて生成したバリアジャケットである。

なんだ！今舌打ちした奴は！表に出てこい！

貴様は歪んでいる！

その汚れた魂、俺が叩き潰す！

ゲフンゲフン！

とまあ…それは置いておこう。

白い壁面に、医療機器の電子音が響く一室。

ゼロに救出されたプレシアはメディカルルームでの緊急治療のあと、個室に移され、ベッドで横たわって眠っていた。ふと彼女の瞼が揺れ…瞳がゆっくりと開かれる。

「生きてるの？まだ……」

プレシアはまだ自分が生きていることにまた実感できなかった。

「気が付いたか？」

声のした方に目を向けると。

「あなた……」

声の主は諸星勇夜だった。

既にアリシアとは肉体を分離し、彼女の体は艦内の生命維持カプセルに保管されている。

「そう言えば、虚数空間でも活動できたわね、ウルトラマンゼロ」
どうして自分がある場から生還できたのか疑問がよぎったが、直ぐに解答に行きついた。

あの光は、ゼロの光だったのだ。

「今の俺は諸星勇夜だ」

「そうだったわね」

初めて会った時に見られた、あの狂気の眼差しは、今の彼女にはもう微塵も無い。

勇夜も、もう憎悪というフィルターを取り、曇りを取り払った眼で彼女を見ていた。

「用件は事情聴取かしら」

「それもある、一応捜査官の資格は持つてるからな」

その聴取を彼にやらせるのは英断とプレシアは思った。

理由は聞かれても分からないとしか言えないし、論理的とは言えないが、この人なら信頼でき、正直に経緯を話せるという確信があったから。

「いいわ…全て話します」

「クロノ君…フェイトちゃんたちは、これからどうなるの？」

「ロストロギアの不法所持に、次元干渉という重罪行為もあるからね、厳罰に処せられるのは確実だ」

「そんな…」

地球も太陽系も、それらがある宇宙　次元世界そのものが、消えてしまう結果になりかねなかったことは、なのはでも理解でき

る。

だけど…

「でも、今回は状況が特殊だし、フェイトも自らの意志で犯罪に負担していなかったこともはっきりしている、言い方は悪いが、彼女は道具として利用されていただけだ」

さらに、プレシア・テストロツサがかつて技術主任を務めていたアレクトロ社には、あの魔導炉事故を中心に、様々な問題点が浮上している。

「これらのことを裁判で立証できれば、無罪とまでは行かなくても、執行猶予は着いてくる」

「執行猶予って?」

「定められた期間内で犯罪を犯さずに過ごせば、刑罰を受けずにすむという措置です」

「でも…こつという裁判は結構長引くんだよ、フェイトちゃんのだけでも最低で半年、長いと2、3年はかかるし…」

「でも、その辺は自信がある、勇夜も色々と捜査資料を集めて尽力してくれたからね」

「クロノ君…」

少なくとも、フェイト達が、これからもこの社会を生きていけるよう力を尽くす人たちがいる。

それがとても嬉しい。

「何も知らされず、ただ母親の願いを叶える為に一生懸命なだけだった子を罪に問うほど、時空管理局は冷徹な集団じゃない……………」と
言いたいが…それは欺瞞か…」

「クロノ？」

クロノは自嘲気味に呟く。

だって、管理局に入って思い知らされた。

全ての世界の平和を守る名目を持ちながら、どうしようも無く存在する組織の矛盾と闇。

それを感じ取っているが上に、？彼？は今の立場のまま孤高を貫きつつ、それでもこの世界の人々を守ろうと……戦い続けている。

だからせめて、彼にも見せてあげなきゃいけない。

自分たちの世界にも、光はあるって、闇と戦っていける意志があるって。

「でも……なるべく早く、君とフェイトと一緒にいられるように頑張るから……安心して」

「ありがとう、クロノ君」

プレシアは勇夜にこの一件に関わることを洗いざらい彼に話していた。

大方の粗筋は、知ってはいる。

だが、失ったものを取り戻そうとするあまり、底なし沼に嵌ったかのように、どんどん狂気に落ちていくその過程は、とても生々しい。

しかも、彼女がその狂気に落ちなければ、自分となのはは、フェイトと会うことは無かった。

なんて、運命の皮肉だろう。

「あんたは今でも、アリシアに会いたいか？」

「そうね…今はちゃんと、フェイトを娘だとは思えるけど、あなたの言う通り、私は娘たちを、生み出しておきながら、今まで弄んできた、命だつてそうだし、その心も…でもどうしても、アリシアに会いたいって気持ちは、まだ残ってるわ、この手も罪に汚れて、先も短いのに…なんて身勝手な母親でしょうね」

そんな母に、彼は一つの光を提示する。

「けど、アルハザードなんかに行かなくても、フェイトの姉さんを、あの体に戻してあげることが可能かもしれない」

「！っ……どういふこと？」

「ところで、プレシアが探し求めていたという、アルハザード、本当に今でも実在しているのでしょうか？」

「それは…難しい質問ね光君…」

艦長が会話の輪に入ってくる。

「リンディさん」

あらゆる魔法がその究極の姿にたどり着き、その力を持つてすれば、叶わぬ望みはないとさえ言われた、アルハザードの秘術。

「時間と空間を遡り、過去さえ書き換えることが出来る魔法…。失われた命をもう一度蘇らせる魔法…。彼女はそれを求めたのね…」

最近の管理世界の研究で、その秘術が眠る都が、次元の狭間のどこかに存在するとの説が、ある程度の証拠とともに存在はしている。

「でも、魔法を学ぶ者なら誰だって知ってる。過去を遡ることも、死者を蘇らせることも、決して出来やしない…。だから彼女は、そんなお伽話に等しい伝承に縋るしかなかった…」

だが、その場所を特定し、辿りつけるとなると、まだ現在の技術では夢物語の域を出てはいない。

「けれど過去を取り戻せないのはどこも一緒だけれど、勇夜君の故郷では、少し事情が違ってみたいね」

「リンディさん…それっていったい？」

なのはたちは、リンディの発言に目が点になった。

プレシアの病室の前で、娘のフェイトとアルフはお目付けの局員を横に待っていた。

今この部屋で、彼女にとって大切な人たちが対面している。

どんな話をしているんだろう？

一度は殺し合いに発展したとアルフから聞いている。

もうそんなことは起きないと信じているが、それでもどこか心に不安が芽生えて拭えない。

それに私も、あの時は、はっきりと自分の気持ちを言えたのに、今会えると言われても、どう言葉をかけたらいいのは思いつかない。

どうしよう、せっかく勇夜が取り計らってくれているのに。

それだけじゃない、なのはやアルフ、それにアースラの人たちもそうだけど、わたし、あんなに自分を助けようと尽くしてきたあの人に何も返せてない。

自動ドアの開閉音がした。

勇夜が病室から出てくる。

「御苦労さまです」

私のお目付けの局員が敬礼をし、勇夜もそれで返す。

「プレシアの聴取が入った音声データだ」

そして懐からサウンドレコーダーを取り出して局員に渡した。

「ご厚意ありがとうございます、モロボシ囑託魔導師どの」

「礼には及ばねえよ、俺はこの子を助けになれるなら、それで良い」

「／／／／／／／／／／／／／／／／」

微笑みながら答える勇夜の言葉がにスイッチが入ったのか、フェイトの顔がどんどん火照っていく。

頬が熱い。

今まで感じたことのない熱さ。

それに、胸の鼓動がいきなり速くなって…苦しい…

どうしよう…止まってほしいのにどんどん速くなる。

さっきも虚数空間に落ちる勇夜^{セロ}を見た時、わけが分からなくなっ
て…我慢できなくなっ…自分を抑えられなくなっ…止められなくなっ…

何なんだろう？この感じ…この気持ち…

心当たりの無い体調の異変と、湧きあがる未知の感情に、思考が平常から程遠くなり、とろけていく。

他人から見れば、フェイトが煩っているものなんて直ぐに行き当

たるが、余り人と接することが無く、その数少ない人たちにさえ遠慮して生きてきた彼女に、それを理解することは難しい話で……

そして、そんな落ち着かない彼女を……

「フェイト？」

「ひゃあ！」

呼び掛ける勇夜。

その瞬間、フェイトは以前街中で不良から助けてくれた彼に無意識にしがみついた時の再来とばかり、また変てこで素っ頓狂な声を上げてしまった。

「どうしたんだい？」

アルフも主の慌てぶりに？顔だ。

「あ、あああああああああ、あの……！そ、その、えーと

」

しかも、勇夜の顔を見ると、さらに顔が真っ赤になり、パニックになる。

心を落ち着かせようとしても、空回りしてドツボに嵌るイタチごっこな状態になる始末。

絶対変な子だって思われる。

恥ずかしさでさらに頬が紅潮し、涙目になっていた。

「大丈夫か？まだ心の準備ができてないなら後にも」

「大丈夫…大丈夫だから…」

何度か深呼吸をして、ようやく鼓動が正常に戻る。

その様子にアルフは、微笑ましい気分になった。

やっぱりあたしのご主人は…彼のこと…

そりゃそうだよな…初めて直に会った異性に、ここまでされたら…無理無いか…

「よし、じゃあ行って来い」

「ガンバ、フェイト」

「うん」

私は何度でも、向き合うつて決めたんだ。

本当の親子になるために。

勇夜　ウルトラマンゼロと父のウルトラセブンがそうなれたように。

私は母さんのいる病室へと入った。

ベッドで仰向けに横たわっている母さん。

私を見ると、ゆっくりと起き上がって、私の方を見る。もう会う度に感じていた威圧感を感じられず、恐怖も湧きあがってこない。

アリシアの記憶にいた、あの優しい母そのものだった。

ずっと欲しかったものなのに……
望んでた現実なのに。

「あ、あの……」

やっぱり中々言葉にできない。

「まずは座りなさい、フェイト」

「は……はい……」

ベッドの横にあった椅子に座る。

「あんな酷いこと言っておいて、言つのもなんでしょうけど、もう大丈夫なの？」

「はい……あの人たちのお陰で、立ち直れました」

「そう……」

最初は、笑顔を見せていた母さん。
でもその表情に陰りが現れる。

「フェイト……あなたに……伝えなきゃいけないことがあるの……」
「母さん？」

「良い報せと…悪い報せなんだけど、どっちから聞きたい？」
「じゃあ…悪い報せから」

どうせ悪い報せがあるなら、先に聞いてしまおうと思った。

「よく聞いてね…実は母さん……………病気なの……」
「えっ？」

以前から咳籠る機会が多く、さっきも血を吐いて苦しそうな顔をしていたから、もしかして、とは思ってたけど。

「あなたのお姉さんを生き返らせたいと思って、母さん、体に鞭打って無茶をしてきたから……もう、そんなに長くないの」

もう長くない、死ぬまで残された時間が……

「あとどれくらいなの？」

「長くて…2、3年……………短くて一年ちょっと……」

「そんな……………直すことは？」

「延命治療である程度、フェイトと一緒にいられる時間は伸ばせられるけど、長くないことに変わり無いわ」

私も母さんも、思い出の呪縛から解放されて、やっと…やっと…親子として向き合えたのに……。

もう残された時間が少ないなんて……

「それとね…良い報せの方なんだけど」

「何？」

「お姉さん…アリシアに……………会えるかもしれない」

「アリシアに？」

フェイトは驚いた。
ずっと昔に死んだ人に会えると言われればそうだろう。
それが自分の元になった人となれば。

「実はね…勇夜君の故郷がある世界が、最近見つかったそうなの」

「本当なんですか？」

「ええ、次元を超える技術は、管理世界ほどじゃないけど、医療技術に関しては、あちらの方が上らしくて、アリシアさんを生き返らせられるかもしれないって、勇夜君が言ってたわ…」

「…え！？」「」

現にその故郷に足を踏み入れ、前からそのことを知っていた光を除いた全員が驚きの声を上げた。

「本当なんですか？艦長」

あえて言うが、勇夜はその技術が『命を固形化』するものであることを伏せている。

これは以前、一度その技術を巡って、戦争が起きてしまったこともあるからだ。

さらに、遺体の状態によっては、体が拒絶反応を起こす症例もあったこと、寿命での死亡では100%蘇生できないこと、それらを踏まえて、光の国が、他の世界よりも多少、殉職や不慮の事故な

どで死ぬことが極端に少なくなっただけということ伝えていた。

「でもアリシアちゃんって死んでから何十年も経ってるんですよ…その拒絶反応が起きるんじゃないんですか？」

「私も彼にそのことを聞いたわ」

アリシアはプレシアが身を削って、その肉体は今でも綺麗なまま、生前の姿を保っている。

さらに一時的にゼロと一体化したことで、ほぼ体が、今でも生きていると思っ込んでいる状態らしいのだ。

勿論このことは、自分の正体を含め、内密にとリンディに釘を刺さしていた。

「で、勇夜君、一度故郷に里帰りしようと考えてるらしくて、アリシアも一緒に連れていけないか、と聞いてきたの」

病室でも、プレシアが食堂で話されていた話の内容をフェイトに話していた。

「姉さんが…」

あんなに母さんと幸せな時間を過ごしていたのに、突然それを奪われてしまった。

確かに、もう一度、母さんと生きられるチャンスがあるなら、私もそれに賭けたい。

母さんと姉さんと三人で一緒に生きたい。

だって…それがアリシアの夢なんだから。

今まで封じられていた、自分の中にあるアリシアの記憶。

その中にはこんなことがあった。

ある時、母さんがアリシアに欲しいものはと尋ねると。

アリシアは妹が欲しいと言ってきた。

当然母さんは困った顔をした。

漠然とした知識しかないが、父と母、両方いないと子は生まれな
いことはフェイトでも知ってるし、その父親はアリシアが物心つく
前に、母と別れてそれっきりだった。

単なる子どもも一時の戯言と断じることもできた。

それでもプレシアは、簡単に果たせるものではないと分かってた
上で、約束をしたのである。

アリシアだって、クローンである自分の存在を受け入れてはくれ
る。

だって、私はアリシアの夢…そのものなんだから…

でも…

「でも…母さんの体はもうボロボロで、彼の国でも治せないって、
言ってたわ」

やはり現実残酷。

神様にも思えてしまう超人的な力を持った人たちでも、母さんの

病気は治らない、治せない。

いいのかな…

もうそう遠くない未来に、別れが待ってるのに…

そんな辛い思いを、姉さんにまで味あわせて良いのかな…

「上手くいけば半年で、元気なアリシアを連れてこっちに戻れると言ってた、条件も付けられちゃったけどね」

「何を言われたの？」

「アリシアが帰ってくるまでに、私たちが…本当の親子になること」

？血を繋がってるだけじゃ、親子って言わねえんだよ？

勇夜は前にわたしにそう言った。

ジュエルシードを集めるよりもしなければいけないことがあるとも。

あの時の私は、それを受け入れられず、自分を攻めながら、拒絶するしかなかった。

今なら分かる。

その言葉の意味。

ようやく私たちは、親子としてスタートを切る為に、そのラインに立っている。

「本当のことを言っとね…あの時あなたに言ったことは、少し前までは、母さんの本音だった」

？私は…あなたを生み出したときからずっと
たのよ？

大嫌いだったよ？

一度はフェイトをどん底に突き落とした宣告。

「でも、勇夜君に刃を突きつけられた時、思い出したの…アリシアとの約束、そして気づいたの…わたしが欲しかった幸せは、あなたと一緒にいないと…意味が無いって…でも、色々と酷いことをしてきたから、母さん…もうあなたに母親を名乗る資格は無いと思っ…無理やりにも、私に依存しているあなたを、母さんは引き離すしかなかった」

二度に渡って死の淵に追いやられて気づいた真実。

「本当に私は、大事な娘たちを不幸にしただけできなかった、最低の母親…それはもう絶対に消えない、母さんの罪」

「母さん…」

「でも…でも…それでも…私…こんな私でも…あなたのお母さんで…いてあげても良い？」

ずっと…

ずっと聞きたかった…

過去に囚われたままでは、絶対に聞けなかった。

その言葉…

真っ直ぐ向き合えなかったら、絶対に届かなかった。

その願い…

さつきもあんなに涙を流したのに…

「もちろんだよ…わたしだって生きたい…母さんの娘として、もう一度……一緒に生きたい…」

その言葉がきつけどなって、雫が止めどなく流れた。

「母さん！」

もう我慢できなかった。

溜めこむ必要も無かった。

その心のまま母の胸に飛びこむ。

プレシアも彼女を受け止めながら、涙を流す。

幼子のように泣きじゃくりながら…母の温もりを絶対に忘れぬよ
うかみ締めた。

「ありがとう…フエイト」

本当に夢のような。

眩しく小さな奇跡が現実としてそこにはあった。

「防音くらい…きかせるよな…」

『泣いているのですか？マスター』

「そうだよ…悪いかな？」

鼻をこすりながら強がる勇夜。

『いいえ、涙を流せることは、素晴らしいことなのですから』

フェイトの泣きじゃくる声は壁越し自分にも聞こえてしまっていた。

おまけに、初めて父と親子として抱きあつたあの瞬間を思い出して、気がつけば眼が真っ赤になっていた。

同様にアルフも、感涙の余り、号泣の号泣。

お目付けの局員さんも、最初は泣いている二人に首を傾げていたが、病室から聞こえるフェイトの泣き声に、「今度休みをとって、故郷の母に会いに行こう」と言いながら涙腺を結界させていた。

でも…たまには眼が真っ赤になるほど泣くのも悪くは無いとも思った。

だって、あの二人が仮初のものではない、ちゃんとした家族になれたことが、こんなにも嬉しいと、感じるのだから…

良かったな、フェイト。

親子としてスタートを切った彼女たちに、彼は心から祝福をするのであった。

悩みました…プレシアをどうするか…
最近改心&生存エンドの二次創作を見てきたことも追い打ちになっ
て…

よって、苦味もある結末に落ち着きました。

ウルトラ一族とて万能じゃありません。

キング、ノアなどのチートラマンも然り、彼らにいたってはむしろ
強すぎて下手に行使できないし。

補足として、「命を固形化」する技術はウルトラマンヒカリの発明
ですが、それを巡ってバット星人（来年の映画で再登場）と戦争
になった経緯があります。

ヒカリすげえ…

あと、なのはに出てきたのと、「vsダークロプスゼロ」に出てき
た次元の狭間は同じ空間と解釈してください。

後に『PT事件』と呼称される地球で起きたこの事件は一応の解決となった。

が、次元断層を起こす寸前になったジュエルシードが原因で、周囲の空間が不安定になり、アースラは次元の狭間で立ち往生、なのはたちは暫く艦内で缶詰となる状態を余儀なくされた。

ただ一人、そんな状態でもリンクの恩恵で問題無く次元を超えられる、勇夜＝ウルトラマンゼロは、裁判の為の資料収集との名目が出ていった。

無論それも理由ではあるし、お世話になっっているナカジマ家に里帰りの旨を報告するという理由もあるのだが。

「アルフさん」

「なんだいなのは？」

「さつき勇夜さんが目を真っ赤にしているのを見たんですけど…心当たりありますか？」

「あゝそれはね…まあ…勇夜は意外に涙もろいといしか言えないな」

「そう…なんですか…」

先程なのはは光にも聞いたのだが、彼も「ああいう人ほど、シャイで涙もろいのですよ」としか言わなかった。

アルフさんも同じくらい、目が真っ赤なので、何か知ってるのではと思ったのだが…

でも、よく考えてみれば、理由は直ぐに分かった。

誰よりも彼女に笑ってほしいと、願っていた光の巨人。

はっきり言って、照れくさかったのだ。

それから数日の間のこと…

アースラ艦内のたる一室。

「ユーノ、データのまとめはできたか？」

「できてます…ところでクロノ執務官」

「何だ？」

「僕は一応民間人であって、ここまで協力する義務はないはずなんだけど…」

ユーノはほぼ使いつ走りのポジションで、事件の後処理を手伝わされていた。

「義務を押しつけた覚えはない、提案をしただけだ……違法スレスレの探索行をした上に、君は管理外世界の少女と少年に魔法を教えただぞ…」

その結果、事件の収束に一役買ったのだが…やはり…違法スレスレすれはスレスレなわけで。

「勇夜は今でもフェイトたちの裁判を有利にするために尽力し、アルフも現地調査に積極的に参加している、君だけがそこまで関わる義務は無いと言い張るのか？」

つまり、それらをキャラにしたければ、手伝えという意味だった。

「そ…そんなことないです…」
「なら作業を続けてくれ…」

いつも以上の素っ気ない態度で、執務官はユーノのクレームに応じていた、と言つかねじ伏せた。

「（悪いねユーノ君）」
「（ランディさん）」

ユーノと資料整理をしているアースラクルーのランディが念話で話しかけてきた。

「（事件を未然に防げず、自分たちでは関係者を救えなかったかもしれないことに心中複雑なんだ…でも珍しいだよ、クロノ執務官が）」

「ランディさん」

「は、はい！」

てつきり、こっそり念話をしていたのがばれたと思ってるランディ。

「計測データ、未記録のデータがあるようですが」

「ホントだ、ログを拾い直してきます」

「お願いします」

「（それからね、クロノ執務官がエイミィ主任以外にまとめ系の仕事を頼むの珍しいんだ）」

「（そうなんですか？）」

「（ユーノ君の作業能力を頼ってるってことだ思うから、悪いけど頑張ってる）」

無愛想な執務官のフォローを入れながら、ランディは退室した。

「僕も少し出てくる、引き続き整理を頼む」

ユーノも心中複雑な気分を押し込めて…

「……了解」

と応じた。

「クロノ君」

「エイミー」

アースラ艦内の銀色に彩られた無機質な廊下で、鉢合わせになる執務官と副官。

「そっちはどう?」

「捜査資料はもうすぐ纏まるよ」

「そりゃよかった…それよりクロノ君、表情気をつけてる?」

「何がだ?」

「怖い顔しているとみんなが緊張しているんだから、勇夜君も『仕事
中にまで、自分は今不機嫌です、と顔に出すな』って前に言った
でしょ」

った」

「まあわたしで良いなら、いくらでも当たっていいんだけどね…それが副官の仕事なんだし…」

ロストロギアも一部破壊を余儀なくされたが、それでも次元災害は回避。

事件の最重要人物であるテストロツサ親子も、事件の根底にあった互いのわだかまりを解いて、本当の家族として再スタートを切ろうとしている。

「結局僕たちは、彼らの力を借りなければ、その最高の形で解決することができなかった……」

発見者のユーノ・スクライア、彼をきっかけに魔導師に目覚めた高町なのは、彼女の義兄である二次元世界の騎士。高町光ことミラーナイト。

そして小学校以来の友人で囑託魔導師兼M78星雲光の国から来たウルトラ戦士。

諸星勇夜ことウルトラマンゼロ。

昔から管理世界の在り方を疑問視していた彼に、僕は「あの時」むきになって、自分が全ての管理世界を守ると宣言した。

それからもう5年経ち、執務官にまで登ったが…あの時の自分が納得できるような成果は出せていない。

寧ろ彼の方が、その『守る』ことを着実に実践して積み重ねている。

今回の件だって、本人は『自分にできることをやってるだけ』

自分だけの力じゃない』と言っただろうが…

彼が『あの時』言った持論、「完璧に安全な力もエネルギーも存在しない、使い手がその危険性ってやつと自分自身を戒めながら、気をつけて使うしかないんだよ」

今回の一件も含めて、彼は自らの持論を証明し続けようとしている。

彼だって…個人で戦い続けることに、いつか限界が来ることは重々承知してるはず。

でも今は、個人の限界よりも、組織の限界の方が先に、立ちどころなのが現状。

やはり、管理局は、魔法に頼り過ぎる実態と、行き詰まった社会システムによって、手遅れな状況を起こしてばかりだ。

確かに自業自得。

組織内でも、色々と解決しなければならぬ淀みも歪みもたくさんある。

これじゃ彼に顔向けできない。

時空管理局と、彼の故郷の星で組織されている宇宙警備隊。

自分以外の世界をも護ろうとする理念など、似ているようで、どうしてここまで決定的に違うのだろう。

せめて、あの子たちが未来に向かっていけるよう……力の限りを尽くさないと……。

誰に言うでも無く、彼はそう独白した。

数日後…

「今回の事件解決について、大きな功績があつたものとして、ここに略式ではありますが、その功績を讃え、表彰致します」

アースラの会議室では、事件解決に貢献した者たちへの表彰が行われていた。

「高町なのはさん、高町光君、ユーノ・スクライア君、ありがとうございます」
「ありがとうございます」

代表として表彰状を受け取るなのは。

ちなみにこの中に、勇夜がないのは、彼も囑託魔導師という立場で厳密には民間人ではないこと。

それを考慮した上でリンディは彼にも表彰しようとしたのだが、本人から辞退されてしまった。

理由は…

「紙切れがもらいたくて、頑張ってたわけじゃねえ」

であった。

それを後から聞いた、なのはと光たちは。

「やっぱり、あの人（彼）らしい」

と同じことを思ったとのことだ。

それから次元振の影響がようやく弱まり、なのはたちは海鳴に帰れることになった。

一方でその影響はマルチバースにまで及び、ミットチルダ方面への航路はまだ不安定で、安全に航行できるようになるまでもう少し時間がかかり。

ユーノも、なのはの薦めでもう暫く、海鳴で生活することになった。

無論フェレットとしてかつ…シスコン兄貴に釘を刺されたりはしたが…

「それじゃ、今回は本当にありがとう」

「協力に感謝する」

見送られながら転送ポートに立つなのはたち。

「なのはちゃん、光君、ここにはいつでも遊びに来ていいからね」

「はい」

「ありがとうございます」

「エイミィ、アースラは遊び場じゃないんだぞ…」

エイミィの発言に溜め息をつけながら突っ込むクロノ。

「まあ、いいじゃない。どうせ巡航任務中は暇を持て余してるんだし」

「そうですね…たるみ過ぎては元も子ありませんが、あなた方が

暇であることは、決して悪いことでは無い筈ですよ」

「艦長と光まで……」

お堅い鉄頭には、少し緩すぎる空気であった。

「フェイトの処遇は、決まり次第連絡する。大丈夫、決して悪いようにはしない」

「うん、ありがと」

時の庭園が崩壊してから、規則ということもあって、ここ数日なのははフェ

イトと話す機会が無かった。

それがルールであることは分かっているのだが、色々お話をすることも、母とよりを戻したことを祝福する事も、お別れすら言えないまま、家に帰ることになるのは、やっぱり寂しい。

「（勇夜さん……）」

「（心配すんな、一回ぐらいは、フェイトと会える機会を作ってるからさ）」

「（ホント！？ありがとう！）」

「（僕からも礼を言います勇夜、良かったねなのは）」

「（うん！）」

満面の笑みで勇夜、感謝を送るなのは。

思わず照れくさくなり、鼻を擦るいつもの癖をとった。

まったく……お礼が言いたいの、むしろこっちだぜ。

フェイトの出生を知って、それでも彼女の…初めての友達になる
って言ってくれたんだから…

俺だけじゃ…あの子を救えなかったからな…

「（こっちからも礼を言っぜ、ありがとう、なのは）」

「（はい!）」

転送ポートの魔法陣が光を発し始める。

「それじゃ、またいつか」

「うん、またね、勇夜さん、クロノ君、エイミィさん、リンディさ
ん」

光がポート内を埋め尽くし、三人はアースラを後にした。

なのはたちが海鳴に戻ってから数日が経った。

~~~~~

あの始まりの日のように、ベッドの中で目覚まし代わりに携帯を
漁り、一度は床に落とすつつも、アラームを解除するなのは。

とは言え、本日は休日なので、寝ぼすけなのはは、また布団に
潜り込んでしまった。

平日は起こしに来る光もユーノも、無理に起こすのは野暮だと思

ってるのか、半ば諦めているのか、実質休日での寝坊は容認されている。

あれから私は日常に戻りました。今まで通りだけど、いろんなことがあったから、今までとは少しだけ違う日常。

夢中だった時のことは、いざ終わってしまつと、なんだかあつという間のことのように。だけど、心の中にはちゃんと残ってる。

出会ったこと、必死だったこと、いろんなこと。

帰って来てから、ここ数週間に魔法に関わっていたことを、わたしは、家族や親友に内緒にしてもらつよう計らいつつ、話しました。

後から、実は光兄が予め、お父さんたちに話していたことが分かって。

それでまともなわけも話せなかったのに、学校も休んで家を開けることを許してくれたんだ…と納得。

やっぱり光兄にはかなわないな…

で、アリサちゃんにもすずかちゃんにも、このことを話して。

一応、信じてはくれたんだけど、特にアリサちゃんから…

「魔法が普及してる世界に喋る魔法の杖にパラレルワールドを渡る戦艦！何そのファンタジーとSFがごっちゃになった世界観！」

と突っ込まれました。
確かに、わたしたちのイメージする魔法とはかけ離れています。

光兄ことミラーナイトとウルトラマンゼロの使う能力の数々の方が、遥かに魔法っぽいとさえ思う今日この頃。

そんなことを考えながら、また夢の中に入ろうとした時でした。

~~~~~

「にああ!？」

いきなり携帯からメロディーが流れて、一気に現実に引き戻されました。

アラームを設定した覚えは無いから…まさか…

あわてて誰からの着信かを確認すると。

「勇夜さん!？」

画面には諸星勇夜と文字が出ていました。

アースラにいる間に、いつでもフェイトちゃんのことと連絡がとれるよう、アドレスと番号を交換していたのです。

「はい!なのはです」

慌てて電話に出ます。

『もしもしなのは、ひょっとしてまだ寝てたか?』

ドキ…ずばり凶星でした。

「いえ、そんなこと無いです！」

気がつけば正座をしながら語気を強めて否定していました。
本当のことなのに。

『ならいいけどさ………実はフェイトのことで話があったな』
「フェイトちゃんのこと？」

そっ…

自分が日常に戻ってからも、ただ一つの気がかりであった。

前は寂しい目をしていただけ、今は綺麗で眩しい目をした、あの
子。

フェイトちゃんのこと。

『フェイトたちの身柄は、これから管理局の本部に移されて、それ
から裁判さ』

「えっ？」

『大丈夫だよ、フェイトが早く社会復帰して、なのはとも会えるよ
うに手を尽くしてるからさ』

「はあ…ありがとう勇夜さん！」

「こっちからも礼を言う………ありがとう……」ってあの時言ってく
れたけど、やっぱり感謝するのは私の方。

だって勇夜さん、光兄がいたから、私はフェイトちゃんと友達になりたい気持ちに気づけたんだから。

『でさ、一度裁判が始まるとその間、同員以外の人とは会えなくなるきまりなんだけど…』

「そう…なんですか…」

『フェイトがその前に、なのはに会いたいんだってさ』

「ええっ!?!」

フェイトちゃんが、私に!

『今日は学校も休みで時間もあるだろ?、今から臨海公園に来てくれ、そこで待ってる』

「はい!直ぐ行きます」

わたしは直ぐにこのことを光兄とユーノ君に知らせて、準備に取り掛かった。

そして、あの人たちは、本人たちは『そんな大層な存在じゃない』と言うかもしれないけど、私たちにとって…かけがえの無いヒーローたちなんだから。

電話越しにでも分かるなのはの喜びを感じつつ、勇夜は携帯端末

を切った。

「勇夜…」

「どうしたフェイト？」

今丁度待ち合わせ場所の臨海公園に、勇夜たちはいる。

気温も丁度いい暖かさで、海から吹く潮風も適度に涼しく心地いい。

「なのは…どうだった？」

「大喜びしてたぞ、今全速力でこっちに向かっている」

「そうなんだ」

少し頬を赤らめながら、微笑むフェイト。

やっぱりフェイトは笑っていた方が良い。

打算の無い正直な気持ちだ。

そう考えながら…

「で、まだ俺に何か？」

「あ…その…あのね…」

まだ何か聞きたいことがあるようなので、こっちから聞いてみた。

「私…今まで、友達って言える子と、触れ合ったことが無かったから…その…どうやったら…友達になれるか」

上目遣いで、もじもじときこちなく言ってくるフェイト。

男にしる、特殊な嗜好を持った同性にしる、人によってはその仕事だけでノックアウトされるだろう。

だが俺は敢えて…

「知らん」

「えっ……！？」

言い終える前にぱつぱつと切り捨てた。

まったく…何を言いたいのかと思えば。

「友達だろうと家族だろうと恋人だろうとな…絆を育むことに、これと言った正解は無いんだよ………いつの間にか…なってるもんなのさ」

「そうなの？……でも…」

どうにも腑に落ちないのか、顔をしょんぼりとさせるフエイト。その仕草も可愛いと言えば可愛いが……

「しん」

ピロン。

「ひゃあー！」

勇夜はあの時のように彼女にデコピンをした。

「あ~~~~」

でこを撫でるフェイト。

明らかにフェイトは以前と比べて、ずっと表情豊かになっている。寧ろ今の彼女が、フェイトの素そのものなんだよな。

「そうしょんぼりするなよ……時にはな、自分で見つけなきゃいけない答えだってあるんだぜ……………まあ……今の正直な気持ちを、なのはにも伝えてやれ、俺が言えるのはそれだけ」

普段のツンケンどんな雰囲気は鳴りを潜め、優しく微笑む勇夜。

「勇夜……………うん……」

フェイトも微笑みながら、頷いた。

「フェイト……勇夜君……お取り込みのところ悪いけど」

「あ、母さん」

今はシンプルな私服を着て、微笑ましい顔で俺たちを見るプレシア。

彼女を蝕む病魔は消えてはいないが、定期的に勇夜がメディカルパワーをかけていたこともあり、一応歩けるまでの体力は戻っている。

そして、何かニヤニヤしているエイミィとアルフに罰の悪そうな鉄頭。

「こら！今僕だけ、名前で呼ばなかつたる勇夜！」

「はて……何のことやら？」

本当のことなので、はぐらかした。
地の文を、読み上げるとは中々やるじゃねえか。

「で…そこのお二人さん、何がおかしい？」

ジト目で睨む勇夜。

「いや〜お熱いな〜と思って…なのはちゃんともちゃっかりアドレ
ス交換して、中々の策士だよな〜」

「本当の恋人みたいじゃないか〜フェイトも勇夜も〜いくらでも応
援するよ」

「ば！莫迦！そんなんじゃねーよ！」

思わずツンデレ全開な返事をしてしまう勇夜。

くそ…今日はなんて日だ。

「こ…恋…人／／／／／／／／／／」

フェイトもフェイトで、今にも湯気が出てきそうな勢いで、ほっ
ぺたが真っ赤かにし、両手を頬に張りつかせていた。

実のところ…フェイトが俺のことどう思ってるか、薄々察しは

ついている。

でも…フェイトも……そして俺自身も色々整理する時間が、必要だと思う。

越えなきゃいけないハードルもたくさんある。

だって…俺は……地球人の血も混じっているけど……ウルトラマンである俺は…フェイトとは違う時間を過ごしてる。

出会ったことも、助けようと力を尽くしたことにも後悔は無い。

でも…彼女が初めて本格的に触れ合った異性が、本当に俺で良かったのか？

俺にとっては、ほんの少しの寄り道でも…フェイトにとっては…

地球人の姿になっても、それは覆らない。

余りに途方も無い時を生きる俺が……遥かに短い時を生きる女の子の一生を縛り付けて良いのか？

せつなくなり…息なんて滅多に乱れないのに息苦しくなって……胸が締めつけられるほどに…痛感させられる…

覆しようの無い真実。

ホント…血は争えねえよな………親っ………

いや………父さん………母さん………

種族の壁も、時間の壁も覚悟の上で、俺を生んでくれた人たち。

だから…今は…

高すぎる障害の存在と、ともに歩むことが叶わない可能性を承知の上で、一緒に走ることができるその日まで…

今は…待つてあげることにした。

「フェイトちゃ〜ん！みんな〜ん！」

「あ、来た来た」

フェイトを呼ぶ声がして、目を向けると、なのはとユーノを乗せた光が走ってきた。

ちなみに今、周辺には人除けの結界を張っているので、うっかり通行人に見られる心配は無い。

「お待たせしました」

「さて、門外漢の俺たちは、退散と」

「そうだね…」

「時間が来たら呼ぶから」

「なのは、しつかりね」

「ちゃんと伝えるのよ、フェイト」

「うん」

勇夜たちは、誰が言い始めたわけでもなく、各々の言葉を置きながら、二人を残して遠くのベンチに移動して行った。

勇夜たちによって、築き上げた二人だけの時間。

なのはとフェイトは、しばし笑い合っただけのまま、静寂を保っていた。

やがて…

「にやはは…なんだか話したいこといっぱいあったのに…変だね、フェイトちゃんの顔見たら、忘れちゃった」

「私は……………そうだね…私も上手く言葉に出来ないや……………」

二人にとって、こうして目の前にいるという事実だけで、十分に事足りていたのだ。
着繕った言葉なんていらなくらいに。

「だけど嬉しかった」

「え？」

「真っ直ぐ向き合ってくれて……………何度も手を伸ばしてくれて……………嬉しかった」

「わ、私はただ友達になれたらいいなって思っただけで……………その気持ちだって……………光兄や勇夜さんがいなかったら……………気づけなかったし、フェイトちゃんのお母さんを助けたのも……………地球を守ったのだったって勇夜さんたちだし……………私なんて……………いくら真剣勝負だったからって……………その……………やり過ぎちゃったし……………にやはは……………」

なのにも、手を差し伸べて、助けになっってくれる人がいた。
だから最後まで…重い足枷と十字架を背負わされたフェイトとも
向き合うことができた。

「謙遜することないよ、なのは」

「……………フェイトちゃん」

そして今は、ちゃんと自分のことを…

「ありがとう……………でも…今日はもう…出かけちゃうんだよね」

「うん……………少し長い旅になる」

自分がこれまで背負ってしまった罪。

これから…それを少しずつ清算する、贖罪の旅が始まる。

過去に縋りついてばかりだった自分に、過去から課せられた罰。

「また……………会えるんだよね？」

不安な顔でフェイトを見つめるのは。

会いたいと思うほど、会えると信じようとするほど、積もる不安。

「少し悲しいけど……………みんなのお陰でやっと、本当の自分としてス
タートを切れるから……………来てもらったのは、返事をする為」

「え…………？」

だから…

「君が言ってくれた言葉……………友達になりたいんだって言葉」

だから、離れる前になのはは聞きたかった。
彼女の答え。
彼女の想い。

「っ…うん！…うん！」

「私も友達になりたい…私にできるなら…私でいいなら…私の初
めての…友達になってほしい」

彼がアドバイスしてくれたように…

「でも…どうしたらいいのか…分からないの…今まで友達と呼
べる子はいなかったし…」

自分の想いを、率直に、真っ直ぐに、なのはに伝えた。

「勇夜さんは？」

「……………ちょっと違うかな…勇夜のことは…大好きだし、
大切な人だけど…まだどう言う…？好き？…なのか…」

？時にはな、自分で見つけなきゃいけない答えだってあるんだぜ？

頬を紅く染め、自然とはにかみ緩ませながら、彼の言葉を反芻しな
がら。

「それを見つuckerまでは…時間がかかると思う」

「そっか…」

なのは内心、きつとそれを見つけれられるのは、そんなに遠くないよ、フェイトちゃん、と語りかけた。

「だから…せめて知りたいの…どうやってならなのはと、友達になれる?」

フェイトは…自分の答えを、自分の気持ちを正直になのはの目を見て打ち明ける。

そして……

「……もう…友達だよ」

「え?」

「私たちはもう…ちゃんと友達になってるよ」

「なのは?」

友達になることは……難しい気がして、実は意外にシンプルだ。

「そう…もう一度名前を呼んで……」

「な…なまえ…?」

「うん、そうだよ、最初はそれだけでいいの、君とかあなたとか、そういうのじゃなくて…ちゃんと相手の目を見て…はっきり名前を呼ぶの、あの時みたいに、今言ってくれたみたいに」

それは…何よりも代えがたい……魔法の言葉。

「…なのは……」

「うん！そう！」

もう何度も呼んでるはずなのに、いざ意識して呼び出すと、
気恥ずかしさで、中々言葉にできない。

「なのは……」

それでも次ははつきりと…

「うん！」

「なのは……！」

そして次は力強く。

日差しが暖かさと、潮風の香りを肌で感じながら…

なのはの手に触れながら。

なのはの名前を呼んだ。

「うん！うん！」

名前を呼ばれる。

ただそれだけで…

「ありがとう……なのは」

名前を呼んであげる…
たったそれだけのことで…

こんなにも嬉しい。
こんなに暖かな気持ちになる。

「なのはの手も…こんなに…暖かいだね」

それだけに…

離れなければならぬことに…

こんなに胸が苦しくなる。

「今気づいた…友達が悲しんでいると…自分も悲しいんだって…嬉しいと思うと…本当に嬉しいんだって」

嬉しさとせつなさが入り混じって、二人から自然と流れる光。

「フェイトちゃん！」

その想いのまま、なのははフェイトの胸に飛び込んだ。

フェイトは勇夜が…母が…想いが溢れた自分にしてくれたように、優しく受け止めた。

「今は離れてしまっけど、きっとまた会えるから…絶対会いに行くから…そしたらまた、君の名前を呼ぶから…」

「うん…うん…」

「会いたくなったら、必ず？なのは？って呼ぶ…だからなのはも私を呼んで…なのはにもし、困ったことがあったら……今度はきつと、

私がなのはを助けるから…光さん…ミラーナイトがなのはにそうしたように…勇夜…ウルトラマンゼロが私にそうしてくれたように…なのはが…私にしてくれたように…」

別れなければならぬのは、本当に辛い。

でもだからこそ、互いを想っていることが手に取るように分かる。

「うん！……フェイトちゃん」

それを忘れないように…

確かめるように…

噛みしめるように…

二人は抱き合っていた。

その様子をまじまじと見ていた勇夜たち。

「勇夜…光…ユーノ…」

ふとアルフが自分たちを呼んだ。

「あの子も…なのはもさ…ほんといい子だよ…フェイトがあんなに幸せような顔をしてる…」

感極まったアルフに、ユーノとプレシアがそっと彼女の肩に手を置いた。

「やっと…これでリニスに顔向けできるかな？」

「そうね…きつとりニスも、祝福してくれているわ、アルフ」

これもまた……少し前までは考えられなかった光景……

フェイトと同じく、アルフもまた『鬼婆』表して反発していたプレシアと和解できた。

プレシアもかつては、彼女を『フェイトの使い魔』としか呼ばなかったのだが、今はちゃんとアルフと呼んでいる。

これもまた……小さいが……とても尊い奇跡。

そして……抱き合ったまま、互いに芽生えた絆を確かめる。なのはとフェイト。

「もう少し……二人をあのままにしておきたいのですね」

光は目を潤わせながら、そんなことを口にした。

「奇遇だな……俺も同じ気持ち……」

できれば……ほんの少し……ほんの少しだけでも……。

二人だって、まだ話し足りないと思ってるだろうし。

けど……そうもいかない。

「時間だ……」

「クロノ君……こういう時、地球では何言われるか知ってる？」

「エイミィ……」

「はい、勇夜君に言われたんじゃ、仕方ないね」

今回ばかりは、クロノの真面目さに同感する。

こうして、会える時間ができただけでも、儂いけど……凄いことな

のだから。

「フェイト！なのは！」

クロノの声に気づいた二人はこちらに目を向ける。
勇夜たちはベンチから離れ、二人の許へ歩む。

「ごめんな…本当はもっと、時間を作っておきたかったんだけどさ…」

「謝らないで勇夜さん」

「そうだよ…もうこうして会えただけで充分だから」

二人の顔を見て、なんか安心した。

その笑みを見ただけでも、この世界で、ここまで走ってきた甲斐はある。

「フェイトちゃん、行っちゃう前に…その…」

なのははそう言つと、自分の髪を縛っていた真っ白いリボンをは
どき。

「今…思い出にできるもの、これしか無いんだけど…」

それをフェイトに差し出す。

「じゃあ…私も…」

フェイトも髪を下ろし、ほどいた黒いリボンを手にとつて。
潮風がゆったりと吹きぬける中…

「…ありがとう、なのは」
二人が、絆を結んだ記念として…

「…うん…フエイトちゃん」

もう一度会えると…祈りと想いを込めて…

「きつと…また」

「うん…きつとまた」

お互いのリボンを交換した。

「ほら、預かりもん」

アルフの声がしたと同時に、なのはの肩に軽く重みがかかる。
今はフェレット姿のユーノだ。

「ありがとう、アルフさんプレシアさんも、クロノ君もエイミィさん、元気だね」

「お達者で…」

「ああ、色々ありがとうね、なのは、光、ユーノ」

「私も礼を言っわ…ありがとう、なのはちゃん」

そして光は勇夜に目を向け。

「勇夜…ゼロ…」

「…リヒト…」

名前だけを呼び、微笑みながら、互いの拳を打ち付ける二人の巨人。

余計な言葉はいらない。

時が経つても色あせなかった、この時空を超えた友情には…

「勇夜さん…」

そしてなのはは、若きウルトラ戦士に。

「フェイトちゃんたちを…お願いします」

と頭を下げた。

「なのは」

「…はい？」

頭を上げると…右手を差しのべた勇夜が…

その意図を理解したなのはも差しのべて、笑顔でかわしながら、互いの手を握り合う。

「いつでも、地球に遊びに来て下さい」

「ああ…」

勇夜たちが、なのはたちと距離をとると、転移の魔法陣が現れた。

「バイバイ…またね…」

クロノ君。

エイミィさん。

アルフさん。

プレシアさん。

勇夜さん……ウルトラマンゼロ……

そして…

フェイトちゃん…

光に包まれる中…フェイトは手を振った。

なのも大きく放物線を描きながら、手を振って応える

涙を浮かべながらも…笑顔で…

別れは辛いけど…笑顔でさよならって…

光が…お互いを別つまで…

二人はずっと…手を振り続けていた。

L a s t e p i n 1 s t t a l e - T o t h e f u t u r e

本話限定イメージED:GOOD LUCK MY WAY/1
a r c) e n) c i e l

フェイトたちの身柄がマルチバーズ内で建設された時空管理局本局に移され、本格的に裁判が始まってから約一カ月が経過した。

最初こそ、罪状が罪状なだけに、きつく問いただされてはいたが、凜と落ちついた姿勢で被告席に臨むフェイトたちと……勇夜やクノたちが、必死に集めた事件関連も資料の存在。

そして…全ての発端となったアレクト口社の不正疑惑や安全管理の問題などが明るみになり、魔導炉の暴走事故によって死亡となった被害者がアリシアしかないという事実もあつて…無罪とまではいなくても、執行猶予がつけられる希望が段々と見えてきた。

無論裁判は長期戦、骨が折れるほど時間がかかるし、何が起きるか分からない。

状況が不利になる可能性もまだ消えていない。

それでも、家族と穏やかに過ごせる日々と親友と再会する未来を掴みとる為にフェイトはひた向きに走り、関わった人たちは全力でサポートを続けていった。

そんなフェイトの原動力は、無論家族や親友の存在もあるが、やはり、アクシデントで異世界から迷い込みながらも、今も尚この次元世界に降りかかる火の粉から人々を守り続け、自分を光ある場所に導いてくれた、一人のウルトラ戦士の存在が最も大きかった。

ある日のアースラでの一幕。

フェイトとアルフが、艦内を自由に移動できるまでになっていた頃のこと。

アルフに至っては、勇夜に手ほどきを受けた影響か、艦内をジヨギングコース代わりにして、走るのが日課になっていた。

「リンディ提督、失礼します」

その日のフェイトは、艦長室にいるリンディのもとに赴いていた。

「あら、ごめんなさいね、お茶を持って来てくれたの？」

「はい」

因みにそのお茶は、なのはから贈られた翠屋特製のもので、当然、甘党のリンディに合わせて砂糖も甘味料も多めに着いている。

フェイトもさすがに当初は、リンディの甘党趣味には引き気味だったが、好みは人それぞれでことで自分に言い聞かせ、この頃にはもう耐性が着き慣れっこになっていた。

逆にそれだけ糖分接種して体を壊さない、提督の鋼の肉体に内心羨望と感心を抱いていたりする。

「さて、色々と忙しくてごめんなさいね、事件以来、余り話もできなくて」

「いえ……忙しいのも、事件の後処理でしょう」

「そうね…それから…勇夜君ともなのはさんと、リアルタイムで

お話できなくて……………っ……………なんだか謝ってばかりね…」

「きまりはきまりですから、ちゃんと守ります、なのはとビデオメールでのやり取りができるだけでも、十分ですから…」

できれば…彼が一時的ではあるが、この次元世界から行ってしまいう前、なのはの時と同じく、もう一度話をしたい、だが今の扱いだけでも十分警沢な立場なので、強くは言えないのが実状。

「お母さんの容態はどう？」

「前より環境が良くなったおかげで、元気にしています」
「そう、それは良かったわ」

事件の中心人物であるプレシアは、病で余命わずか数年な状態のため、専ら裁判にメインで出頭するのはフェイトが行っていた。

「で…リンディ提督…お話と言うのは？」

「そうだったわね…勇夜君のことなんだけど…」

「はい…」

事件が終わってからも、彼は囑託魔導師の立場で、『魔導殺し』の異名を存分に轟かせる活躍を続けていた。

先の約束通り、勇夜の正体が管理局では『マウンテンガリバー』と呼称されている光の巨人、ウルトラマンゼロであることは内密にされている。

現状このことを知ってるのは、ナカジマ家の面々と、アースラクルを含めた事件の関係者のみ。

表立った破壊行為をせず、大規模な次元災害やロストログアなどで凶暴化した魔法生物の暴走などの事態に突然現れ、事態を収束させては去っていく不言実行を地で行くゼロに対し、局内での評価は危険視する者、彼と平和的に接触を試みるべきだと言う者、中立立場の者で、平行線な状態は続いている。

それでも市民、特に子どもたちの間で、何の因果か偶然か、最近では憧憬と尊敬の意を込めて、

『ULTRAMAN』

と呼ばれるようになるなど、決して悪い方向に行っているわけではない。

そんな、どちらの姿でも『人としてできること』を続けている彼にフェイトは胸躍らせている一方…

「明日…あなたのお姉さんを連れて、故郷に帰ることになったの」

「……………そうですね……………」

彼がふるさとの医療技術で、アリシアを蘇らせるために帰省する。

それは前から、決まっていたこと…

せっかく故郷の場所が分かったのだから、今でも帰りを待っている彼の先輩や仲間、そして父ウルトラセブンのためにも、帰ってあげた方がいいとはフェイトだって思っている。

でもやっぱり、別れも言えない今の立場が、恨めしいとまではいかないが、残念でならなかった。

「フェイトさん？」

沈み気味になっていたフェイトにリンディは表情を曇らせながら尋ねた。

「分かってます…私が今、どんな立場なことくらい…」

胸を握りしめ、鼓動を感じながら答えるフェイト。

今でも…彼のことを考えると、慕情が溢れて、今までの彼との思い出が鮮烈に浮かび、嬉しくなると同時に、目が潤むほどせつなくなる。

「で、明日は丁度、フェイトさんを案内役として、アウトセイムを現地調査する日だったでしょ」

「は…はい」

それと彼のことかどうい関係があるのか…次にリンディが発したことにフェイトは驚きを隠せなかった。

「あ〜このそよ風と緑の草原、久しいね〜」

「そうだね、アルフ」

「久しぶりの故郷なのは分かるが、遊びに来たわけじゃないんだぞ」

「分かりましよ…鉄頭さん」

「君までその名前で呼ぶのか…」

「まあまあ…クロノ」

一見すると、まるで家族のピクニックの風景にも見えなくはないが、クロノの言う通り、ここにいる一同は遊びに来たわけではない。

今フェイトたちが、調査の名目で来ているこの地はアルトセイム。

時の庭園がかつて停泊していた地。

フェイトたちにとって、生まれ育った故郷だ。

かれこれ一年ぶりの里帰り。

やっぱりいざ戻ってくると、脳裏に蘇ってくる。

すれ違っただけだった母と自分。

後にアルフとなる瀕死の狼の子との出会い。

リニスの魔法の課外授業。

アルフと一緒に飛んだ空。

とある雪の日の、リニスとの別れ。

辛い思い出もあるけれど。

自分がフェイト・テストロッサである、確かな足跡がちゃんとこ

ここにもあつたんだ。

「アルフ、あれ…」

「ん？」

フェイトが草原のとある方向を指さし、アルフはその先に視線を移すと。

「あつ…」

狼形態のアルフによく似た、狼たちの群れがフェイトたちを見つめている。

紛れも無く、アルフの素体元になった種類の狼たちであった。

「……元気だったかい……」

「アルフ、ひよつとして……」

あの狼の子がいた群れなのか、と聞こうとしたが

「いや…なんとなくそう思っただけ……あつ……」

狼たちは視線を外し、地平線の向こうに消えていった。

まだ自分たちは、生まれて、そんなに経っていない。

だからこんなことを言うと、年寄りから、まだ若いのにとかわれるかもしれないけど、どうしてもこう言いたかった。

人生には、思わぬ巡りあわせがあると……

「フェイトさん」

「はい？」

「勇夜君、この先にある岩場に待ってるそうよ」

「はい…じゃあ行ってきます」

思い出に浸ることも悪くは無い。

でも、自分はそのだけのためにここに来たわけじゃないのだ。
表向きは現地調査だけだ。

思い出と絆を力にしながら、自分の手で未来を掴むことを、教えてくれたあの人へ。

フェイトは走っていった。

考えてみれば、こんなに走ったのは久しぶりかもしれない。

走るより、飛ぶことの方がずっと多かったから。

「あつ…」

草原の真ん中に、ぽつりと一人佇む、岩場。

その上を、見覚えのある黒髪のポニーテールが印象的な、後ろ姿が見えた。

風で髪が揺れ、こっちに目を向ける鋭い吊り目ながら、凜とした顔立ちの少年。

諸星勇夜。

「勇夜！」

そのまま全速力で、彼の許へ一気に駆け寄った。

「よっ、元気そうだな」

彼は、相変わらず、ぶっきらぼうだけど、暖かい口調でフェイトを出迎えた。

「うん…」

どうしよう…また心臓がドキドキしてきた。
顔もまた熱を帯びて紅くなる。
思考もその熱でおかしくなりそうだ。

「どうした？座れよ」

「あ……そうだね」

彼の言う通りに、フェイトは勇夜の隣に座る。
何とか……心は沈められた。
でもまだ心臓は手を置かなくても感じるほど鼓動が速い。

そう言えば、会うのも久しぶりだけど、二人きりなのは、もっと
久しかった。

「綺麗なことだよな」

「うん…」

「エスメラルダの草原も、こんな感じだったな」

「エメラナ…さんの星のことだよな」

「ああ」

ミラーナイトがかつて騎士を務めていた王制国家の星。
その星の王女さまである、エメラナ。

「どうしてるかな、そのランさんも、ナオ君も、エメラナさんも」

かつてゼロと一心同体となった少年ラン、その弟のナオ。

彼にとって、今を生きる力の源の一つでもある、大切な人たち。

「こつちと同じくらい時間が経ってんなら、もうみんな大人になっ
てるよな……俺は一度…子どもに逆戻りをしたってのに…」

「勇夜？」

彼に目を向けると、自分の手を憂いを秘めた目で見ている勇夜が
そこにいた。

「いや…なんでもないさ」

が、直ぐに笑顔へと変わった。

さっきまでの勇夜の横顔が気になりつつも、フェイトは目の前に
広がる緑と青空を見上げた。

「この前ね、リニスが私宛に書いた手紙、読んだんだ」

「なんて書いてあったんだ？」

「色々…私がどう生まれて、母さんが何をしようとしていたことを
知って」

使い魔として生まれた当初から、フェイトを愛情込めて、しっかりと育てつつも、疎遠な二人の仲をなんとか仲介役として取り持とうとしたリニス。

しかしある時知ってしまった。

『フェイトの出生』も『プレシアの心の闇』も…

プレシアの病魔にも…

それを知ったりリニスがその真実と自分たち親子の狭間で苦悩と葛藤を繰り返したことも…

「ありがとうね」

「いきなり何だ？」

「リニスの願い…：勇夜とみんなのお陰で、叶えられたから…」

そして…

フェイトが…

どんな絶望にも。

悲しみにも。

苦しみにも。

立ち向かえる強さを…

フェイトとプレシアが本当の親子になれること。

同じ速度で一緒に歩み。

真っ直ぐ向き合ってくれる友達ができること。

そして笑顔を忘れずに生きていけることを…

そんな祈りと願いが綴られていた。

「だから俺…一度ここに来たのかもな」

「え？」

「なぜかさ、あても無いのに、何かあると思って前にも来てみたんだよ、そしたら…あの日記と手紙を見つけた………ひよつとしたらさ、リニスが俺に見つけてほしいって…願ったからかもしれないな」

「うん………そうだね」

非科学的な話かもしれない。

でも無性にそうだと信じられた。

この次元世界意外にも世界が無数あつて。

ゼロみたいな巨人だつて存在してるんだから…

巨人……ウルトラマン…

ふといきなり…前に母が自分に話したことが頭をよぎった。

プレシアは…前に…二人の科学者から、ある技術を提供されたという。

一つは、プロジェクトFATEの基礎理論。

もう一つは…

ウルトラマンゼロの戦闘データと…

ベリアルがゼロを模して作り上げたロボット。

ダークロプスの設計データ。

そして、ウルトラマンと同等、或いは上回る巨体を持つ怪獣を操るためのアイテム…バトルナイザーに関するデータだった。

どちらもメールでのやり取りで顔を合わすことは無かったこのこ

と。

前者はその理論を独自に発展させフェイトが生み出され。

後者は、まずゼロのデータを組み込んだダークロプスを作成。

そのデータを元に、通常の傀儡兵より機敏に動くロボット兵を開発（もっともAIなどの自立稼働で課題が残り、結局なのはたちには一部を除きやらねばなしかったが）。

さらに、バトルナイザーのシステムを解析し、多数のロボット兵を格納、召喚、操作し、同時に庭園の駆動炉のエネルギーをプレシアに供給させ、一時的にSSクラスの魔力運用を可能にする特殊補助デバイス『サポーターティングデバイス』を開発。

それらの成果の一部のデータと、F計画のデータをその科学者に渡したそうなのだ。

最初からそういう取引だったらしい。

次元跳躍攻撃も、そのサポーターティングデバイスの賜物だった。

もっとも、これだけの未知の技術をここまで扱えたのは、プレシア自身の技術者、魔導師としての力量の賜物でもある。

さらに、母によれば、あの夜現れた怪獣たちも、あの科学者の差し金ではないかと推測していた。

どうやら、あの時は自分がどこまで怪獣を操れるか、勇夜たちを使って確かめるために寄越したらしい。

でも現状では、あくまでこれはプレシアの推測、その域を超えていない。

だが…ただ一つ言えることは……
ゼロ以外にも彼がいた世界から、何者かがこちらに来て、潜んで
いること。

そしてその何者かが、良からぬことを考えているということ。
もし、その良からぬことが現実になっても、勇夜　ウルトラマ
ンゼロは毅然と立ち向かう、と断言できることだった。

「勇夜…一つ…聞いていいかな？」

「どうした？」

「この次元世界のこと……どう思ってる？」

「……………」

「やっぱり……嫌い？」

「……なんでそんなこと聞くんだけ？」

「……そ…その……………」

彼が今の管理世界のシステムに、疑念と不信を抱いていることは
知ってる。

魔法に必要以上に固執することも含めて…

私も今回のことだと思い知らされた。

魔法も万能じゃないって…

勇夜や光は、魔法を使わずに自分を打ち負かしたし…

魔道師の私では、虚数空間に落ちていく母と姉を、ただ泣きながら、見ることもしかできなかつたし…

アースラの装備では、暴走するジュエルシードを止められず、地球がある次元世界が、地図から消えていたかもしれない。

そしてなまじ外の世界に触れた自分は知ってしまった…

世界には、眩しい光もあるけれど…：暗く淀んだ闇も一緒にあることを…

「まあ…色々爆弾を抱えてる世界だとは…思ってるけどさ…」

時空管理局が、設立されてから百年ほど…

日に日に、文明を持った世界の存在が次々確認され…

場合によっては、管理世界の仲間入りを果たすか、管理外として放任されたりしている。

同時に次元犯罪も日に日に悪化し、増加の一途を辿っている。

一部を除き、魔法以外の力の保有は禁止、特に管理世界では質量兵器と称される火薬などを使った兵器群は、異常ともとれる嫌悪で排除されていった。

ともすれば他人の家に土足で踏み込む態度で他の次元世界を自らの管理下に置き、自分色に染めていく局の行為は、反発を招き、あちこちの世界で火種は起きていく。

そのくせ、実質使える戦力を限定させているのが仇となり、後手後手に回ってしまう状況を頻発。

世界はどんどん広がっているのに…管理局は自ら撒いた火種の始末に右往左往するという悪循環を繰り返して、行き詰まった状態に追

い込まれている。

フェイトはリンディヤクロノなどの局員の存在のおかげで、勇夜ほど不信は抱いてはいないが……

「今のこの次元世界のシステムじゃ、ガタがとうにきてんだよ……」

フェイト自身、彼のこの言葉には、賛同している。

社会の仕組みをちよつとずつでも変えていかなければならない必要性を……

でなければ……

「どこかで見えない時限爆弾が、少しずつだけど……確実にカウントダウンを刻んでんのさ……」

「じゃあ……このまま放っておいたらどうなっちゃうの？」

「……………今の世界の枠組みをぶっ壊そうとする連中が、管理局に喧嘩を吹っ掛けるだろうな……………」

勇夜の言う爆弾が爆発する時……………それは……………つまり……

「革命と……………戦争？」

「そう……………おまけにその相手は馬鹿にデカイ組織だからな……………それいっつらに対抗する組織もどでかくなって……………下手するとロストロギアを躊躇わずに使われて、泥沼に落ちねえとも限らないしな……………」

「そんな……………」

下手をすれば、地球で起きた二度に渡る世界大戦と、古代ベルカ

の戦乱以上の惨劇が起きる可能性があるということだった。

「でも…本当に恐いのはその後…」

「どういうこと？」

「それまでの社会のシステムを壊して、新しく作られた社会ってのは……自分たちの正しさを証明させる為に、過去を徹底的に否定する……いわゆるこっちじゃ質量兵器と呼ばれてる武器が使用を禁じられてるのは、昔の戦乱で大量に使用されて、大勢の人が惨い死に方をしたってこともあるんだが……」

「正しさを示し続ける為の……生贄にされてるってこと……」

「……当たり」

それまでの仕組みを、悪と断じ、足蹴にして嘲笑いながら、今の社会を正しいと主張し続け、間違いを一切認めない。

「己を顧みれないまま……そんな状態が……何十年…何百年も続けばどうなると思っ？」

「歴史が……繰り返されちゃう」

何と言っことだろう。

自分のいるこの世界が、危ういバランスで、その平穩を辛うじて保っているが、遅かれ早かれ……いつそれが崩壊して爆発してもおかしくない状態なのだ。

そして仮に多大な犠牲を果てに、勝者たちが新たな枠組みを作っても、一歩間違えば、敗者と同じ末路を迎える。

そんな惨劇の歴史が……いつまでも続くことになる。

「ごめん……何か……偉く物騒な課外授業になっちまったな……」
「謝らなくていいよ……怖いことだけど、無関係にすむ話じゃないことは……私にも分かるから……」

「……………じゃあ……さっきの質問の答えだけどね……」

「……………うん」

「……………嫌いに……なれるわけねえよ……」

「勇夜……」

「こっちにだって……家族も……友達と呼べるやつだっている………
して何より………フェイトだっている」

フェイトを見つめ、微笑みながら答える勇夜にフェイトは一度頭
が真っ白になった。

「え?」

「だから嫌いじゃないよ……むしろ大がつくほど、この世界のこと
は好きさ……だからこそ……みんなに気づいてほしいんだよ……手
遅れになる前に……」

どこかせつなさや寂しさが感じられる笑みで、彼は答えた。

自分たちの住むこの世界を……同胞と殺し合いながら……壊してしま
う前に……

過ちを犯してしまう前に……

それを何度も繰り返す、無間地獄に嵌る前に……

自分たちの闇と向き合いながら、少しずつ、良い方向に変えてい
けるように。

805

彼は今でも、諦めずに走ってる。
たとえ……一人孤独な漂流者でも……

突然、胸に引っかかりを感じた。

孤独……？

一人……？

今季節は春で、周りの空気はこんなに暖かいのに、悪寒さえ感じ

る。

どうして……どうして今気づいてしまったの……？

なんで今気づかなきゃならなかったの？

これから……せつかくこれから……笑って勇夜を、見送りたかったのに……

どうして？どうして？

ある一つの現実。

それに気づいてしまったことで芽生えた不安が、暗雲のように心を埋め尽くし、冷たい風が吹き荒れているさえ錯覚させられてしま

う。
「フェイト？」

勇夜からは、フェイトの顔は前髪に隠れて見えていない。

駄目……

駄目……駄目……駄目……駄目……

駄目駄目駄目駄目駄目駄目駄目駄目駄目駄目駄目駄目駄目駄目駄目
目駄目駄目駄目駄目駄目駄目駄目駄目駄目……

今勇夜の顔を見たら、自分を抑えられない。

見ちゃ駄目…

見てしまったら…

そうしたら…私…

顔も体も、震えながら、必死に俯かせながら…

何度もそう言い聞かせるのに…

体が言うことを聞いてくれずに…

自分を心配する目で見つめる勇夜を見てしまった。

何かが、自分の中で弾けた。

「……っ！………フェイト!?!」

勇夜が戸惑うのも無理は無い。

いきなりフェイトが、彼の胸に飛び込み、抱きついてきたからである。

「お……おい………どうした?」

小さな体で力の限り彼を抱き締める彼女。

そして…

「ど……………しい……………て」

腕の力がより強まる

嗚咽と滴る水滴の中から発せられる。

「え？」

「どうしてなの？」

悲痛な想い。

「フエイト？」

「どして一人なの？……………どうしてゼロが、一人だけで戦い続けなきゃいけないの？……………どうして？」

彼にとって、不慮の事態で迷い込んだ以外は、まったく縁もゆかりも無かったこの次元世界。

それどころか、ウルトラマンの有り余る力と巨体の前に、人々が恐怖でおののき、その存在を抹殺するかもしれないのに…

それに脅えて、自分の正体を隠しながら、生きていかなきゃいけなかったのに……

自分を孤独から救ってくれたこの人は、『諸星勇夜』としては一人じゃないけど、『ウルトラマンゼロ』
ゼロ＝ユウヤ・ヴェア

リイスター』としては、この世界では、誰よりも孤独なのに……一人なのに……

なのに……なのに……なのにそれでもゼロは……

この世界を……

わたしたちがいるこの世界を……大好きだって言うてくれて……

少しでも……滅びの運命を食い止めて、良い方向にもっていこうと、必死にもがいて、足掻いているのに……

「どうしてウルトラマンは……そこまでたった一人で……みんなを守り続けなくちゃならないの？」

本当は自分たちが抱える重しを、一人一人が自覚して……みんなで立ち向かわなきゃいけないのに……

わたしたちは、それを全部ゼロたちヒーローに押しつけて……のうのうと知らないふりをしてる。

そうやって一部の存在を踏み台にして、犠牲にしながら、それを憂おうともせず、歴史を繰り返して行く。

人間不信になってしまいそうな、残酷な人々が溢れる世界。

それでも彼は諦めない……

彼が……どんなにボロボロになっても……それこそ父のウルトラセブンみたいに……傷ついた体で故郷に帰らないといけないことになるまで、心身ともに追いつめられても……

「……………フェイト……………」

「私もなりたい……………ゼロの光になりたい……………」

涙で舌足らずになった声を精一杯絞りながら……………細く華奢な腕に力を込めながら……………彼の力になりたい己の心境を、彼に伝える。

「ゼロ一人だけで戦わせないから……………一人にはさせないから……………私が支えてあげるから……………お願い……………」

できるなら、ゼロが自分にくれたことを、私もしてあげたい。

世界に、ヒーローは必要なのかもしれぬ。

ヒーローたちに比べたら、私たちは無力なのかもしれない。

でも、彼らに頼ってばかりで、何もせず、都合が悪くなれば責任転嫁して、支えてすらあげないのは、一番冷酷で無慈悲で罪深いことだと……………思うから……………」

「フェイト……………分かったから……………フェイトの顔を見せてくれ……………」

「……………うん……………」

言われた通りに、フェイトはゆっくり、顔を彼の体から離す。

色んな想いが巡ってめっちゃめっちゃになり、混沌の渦を巻いていた思考が落ち着きを取り戻し、急に取り乱した自分が恥ずかしくなってきた。

今どんな顔をしているのか、嫌でも分かる。

雨に打たれた様に見えてしまうくらい、涙で濡れて、真っ赤に腫れて、ぐちゃぐちゃになった自分の顔…

「ごめん…わたし…いきなり取り乱して…」

なんて…ひどい顔…

そう思わず自嘲してしまう。

「はあ……」

そんなフェイトを、勇夜は自分の手を彼女の頭に置き、淑やかになでた。

「いいさ……ありがとな……フェイト……でも…今はそう思ってくれただけで……充分だぜ……今のフェイトには、越えなきゃいけないハードルが、たくさんあるだろ？」

フェイトは無言で頷く。

今の自分は本当に無力だ。

こんなに優しい人に何もしてあげられない。何も返してあげられない。

助けてあげることさえできない。

こんなに悔しいと思う気持ちは初めてだ。でも…いつまでもこうしてはいられない。

流しに流した雫を拭う。

今は見てあげることしかできない。
想ってあげることしかできない。

そして…

見送ってあげることしかできない。

だって今日は…そのために…ここにいるんだから。

「もう…行っても…いいか？」

「いいよ……もう大丈夫だから………姉さんを、よろしく願
いします」

私たち親子との約束を果たす為に、旅立つ彼を、フェイトは見送
りの言葉を送る。

その後。

彼は何か思い立った顔をする。

自分の髪を縛っていた髪留めを外した。

解かれて、下ろされた艶のある長髪が、そよ風になびく。

「……………」

口を開かせたまま、目が離せなくなるフェイト。

一度見たことがあるのに、髪を下ろしている時の勇夜は、この上
なく美しかった。

男だとか女だとか言った、性なんて概念を超越した美しさがそこにあった。

いつもの無愛想で吊りあがった目じりは平行に流れ、神秘性を感じさせる趣とオーラであふれ、への字な唇はアルカイクスマイルと呼ぶに相応しい、綺麗で柔らかな笑みをたたえ、天使の輪が見えるほど整われた黒く長い髪も見事に調和をとってアクセントの役目を果たし、群青色の瞳は海よりも見る人を吸い込ませる透明感を発しながら、宝石よりも眩く光を反射させている。

平常時は粗暴で棘のある佇まいと態度で隠れ、今はその様相を惜しげも無く晒されているその美しい容貌に、フェイトは思わず見惚れていた。

「手を…出して……」

「あっ……うん……」

勇夜の言葉に我に返ったフェイトは言われた通り、掌を差し出すと、今外したその髪留めを勇夜は彼女の手にした。

「これって……」

金色の縁で文字が彫られた黒い髪留め。

これを目にするのは二度目。

最初は、初めてフェイトの前でゼロに変身し、自分をかばって倒れたあの夜。

「何て書いてあるの？」

見たこと無い文字だから、ゼロの故郷の言葉であることはすぐ分

かった。

「光の国の言葉で、『ZERO』だ、こっちの世界の父さんと母さんが、誕生日プレゼントにして、オーダーメイドで作ってもらったもんさ」

「いいの？そんな大事な物……私が……」

「大事なもんだ……大事だからさ……？ここ？に帰ってきて、フェイトとまた会えるまで、預かってほしいんだよ」

「……………」

今自分にできるのは、彼が帰ってくるのを待つてあげること。今はそれしか……それしかできないのなら、待つてあげよう……

「うん……分かった」

そして彼は、優しく微笑みながら……

「じゃあ………行ってくる」

ゆっくりその場を立ち上がり。

フェイトと距離をとると。

リンクからウルトラゼロアイを取り出した。

それを手に取り。

「デエア！」

目に翳し、光が彼の体を包み込む。

その輝きはどんどん大きくなり。
光の中から、ウルトラマンゼロが姿を現した。
フェイトが立っている地面を見下ろすゼロ。
フェイトもゼロの顔を真っ直ぐ見つめている。
時間にして、数秒ほどの短さだったが、当人たちは、それよりも
っと長く感じていた。
そして最後に一言。
また…会えることを祈りにこめて…微笑みながら……

「行ってらっしゃい……ゼロ」

とゼロに伝える。

その彼女の想いを受け取り、静かに頷いたゼロは、

「シユア」

空に目を向け、腕を広げて飛んだ。

フェイトは、ゼロが飛びあがったことで、吹き荒れる風を身に受けながら…

初めての親友と、別れた時もそうしたように。
草原を駆け抜けながら、大きく手を振りながら、地平線の向こう
へと、段々小さくなっていく彼の雄姿を、笑顔で見送る。

やがて、ゼロの雄姿は空彼方へと吸い込まれ、消えていき、見えなくなった。

フェイトは、彼が飛び立っていった後も、しばしの間、ずっと……ずっと……ずっと、ゼロが飛び去っていった空を見上げていた。

「ゼロ………」

彼の髪留めを、大切に握りしめながら……

「………」
「ありがとう………」

再会の……未来を……願って……

第1話 Every day in a home country

宇宙に存在する星の中で、光を発する惑星と言われれば、誰もが恒星と答える。

だが中には、自ら光を放つ惑星が実は存在する。

諸星勇夜こと、ウルトラマンゼロ、ゼロ＝ユウヤ・ヴェアリス
ターの故郷。

とある次元宇宙のM78星雲と呼ばれる星系。

地球を含めた宇宙を、今もなお守護し続ける光の巨人たちの住む
星。

ウルトラの星。

惑星アルトラ、光の国。

その星の周辺に、光でなぞられた文字。
ウルトラサインが上げられた。

11年……振りか……

宇宙という海の中を、一つの流星が飛び、流星＝ウルトラマンゼ
ロは前述の言葉を独白していた。

今から11年前、彼はヤプールと呼ばれるウルトラ一族と因縁がある異次元人が生み出した、ゼロたちの世界ではどこの惑星、銀河でも生息している巨大生物、怪獣、その怪獣を超える怪獣。

『超獣』

その超獣の中でも最強と呼んでも過言ではないシキラーザウルスとの戦闘で別の世界に飛ばされてしまったのである。

ゼロには次元を超える為の能力は持っていたが、迷子の状態から故郷に帰還するのは至難の技で、おまけに幼児退行してウルトラマンへの変身ができなくなってしまった。

結果、こうして帰ってくるまで11年の歳月を要したのである。

実を言つと、ウルトラ一族にとって11年はそんなに長い年月ではない。

彼らは何万年もの時間を生きる種族なのである。

ゼロも若年ではあるが、それでも今の西暦より歳を重ねている。

とはいえこの11年は、人間として、子どもとして生きてきた。

下手をすると、磁気嵐が吹き荒れる辺境の星で修行していた頃より、一日を長く感じる日々だった。

でも、その世界で『諸星勇夜』として生きていくのも悪くないと思っただのは…

『マスター、間もなくM78星雲圏内に入ります』
「了解した」

あちらの世界に迷い込んだきつかけで、意志を持った相棒のリンク（ウルティメイトイージス）の言葉で思い出に浸っていたゼロは、意識を現実に戻した。

眼前には黄緑色に点灯する星。
光の国。

数週間後。

「ほら立ちあがれ！弛んでるぞ！」

ここは光の国にある、宇宙警備隊員の卵となる訓練生たちが日夜訓練に励む訓練場。

ウルトラコロセウム

「ゼロ教官…もう少しお手柔らかに…」

「バカヤロー！ジープで追いかけるよりましだ！！ちったあ根

性見せる！」

そんな訓練生を組み手と言う名の扱きで教導しているのは何を隠そう、ウルトラマンゼロだ。

光の国に帰ってからというもの、彼は午前中は臨時教官として後輩たちを扱き。

午後は宇宙パトロールを送る日々。

ちなみになぜゼロが、臨時で教官を務めているのは、本人直々の希望からであった。

理由は簡単、自分やベリアルのように力に溺れ、闇に堕ちてほしくない、どんな力を持つのが、自分たちは神では無い、自分以上にはなれない存在であることを示したかったからであった。

その教習はやはり師匠譲りで手厳しい。
少なくとも訓練中は一切の泣き言を許さない。

「よし、午前の教習はこれで終わりだ、解散！」

「はい！！！！」

ゼロの号令で整列していた訓練生は、各々バラバラに解散していった。

「今日も精が入った教導だったな、ゼロ」

そこにゼロを呼び掛ける巨人が一人。

声の主は、サイズこそウルトラマンと同クラスだが、胸部は白銀、四肢は赤いカラーリングで、メカニカルで洗練されながらも、メカ特有のごつく、屈強な容姿をし。

西洋甲冑を想わせる頭部と、ウルトラ一族より小さめで、カメラレンズが見える黄色い瞳が埋め込まれた顔つき。

だいたいの人は、一目で彼が実はロボットであることに気づくだろう。

「ジャンボット…まあ…前科者は俺とベリアルだけで充分だからさ…」

ジャンボット。

ウルティメイトフォースゼロのメンバーで。

ウルトラマンが存在する多次元宇宙マルチバースの一つに存在する、こことは違う次元世界のとある惑星エスメラルダ。

王制の国であるそのエスメラルダの王家に代々使えてきた。

スターコルベット
宇宙船に変形でき、『鋼鉄の武人』と異名をつけられた自立AI
搭載型巨大ロボだ。

ちなみに宇宙船の形態をとっている時は、ジャンバードと呼ばれる。

名前の通り、鳥に見える主翼と機首が特徴的で、とあるムードメイカーで三枚目なチームメイトからは『焼き鳥』とつけられてしまった。

学生なら学級委員長か風紀委員など立ち位置に分類できるほど、真面目―徹堅物なジャンは彼にそう言われる度、過剰に反応して突っ込み、地球の漫才的口論になることが、散り散りになるまでのチーム内での風物詩であった。

実はかの次元振の時、幸いなことにM78星雲の宙域に飛ばされたのである。

とは言え、ゼロとミラーナイトが幼児退行するほど消耗したように、彼の機体に多大なダメージを受け、光の国で修理を受けることになった。

その際、動力機関を中心に改修を受け、ジャンたちの世界にしか無いエメラナ鉱石以外のエネルギーで活動できるようになった。

「父上殿も誇りに思ってるはずだ……」

「うっ……あんま……父さんのことは話題にしないでくれ……若干……トラウマなんだ……アレ以来……そりゃ……嬉しかったんだけどさ」

「あ……それはすまなかった……あれは機械であるわたしから見ても、微笑ましいが、かなり気恥ずかしい光景だったからな」

ゼロの父の父で、伝説のウルトラ兄弟の三兄である戦士。

ウルトラセブン。

ダン・セプテム・ヴェアリイスター

彼は長いこと、ゼロに父自分がであることを隠し、陰から見ていくことしかできなかった。

その反動ゆえか、普段は絵に描いた好漢で、かつ戦闘時は勇ましく戦う戦士だが、ゼロの前ではかなり心配性で親馬鹿になってしまう性質になっていた。

数週間前。

ゼロが事前にウルトラサインで、己の安否と帰還の旨を伝えたため、光の国では、かつてゼロが初めて異世界に旅立つ日と同じく、ウルトラ兄弟、ウルトラの父、母、警備隊隊員ら、多くの国民が、遙か昔に消え去った恒星の代わりに光の国を照らす塔、プラズマスパークタワー前で待ちわびていた。

ゼロは驚いた。

一応連絡はしていたが、行方知れずだった自分を出迎えるのに、こんなに大掛かりなイベントになるなんて。

タワー前に降り立つゼロ。

そして、最初に目に入ったのは、ゆっくりとゼロのもとへと歩み寄る、愛する彼の父であるウルトラセブン。

ウルトラ兄弟の中でも、セブンを含めた6人が着ることを許されたブラザーズマントを羽織ったその姿は勇士としての貫禄に溢れる。

親子の距離が、手が届く範囲まで縮まる。

「おかえり…ゼロ」

やべ…先にただいまって言うておきたかったのに、先を越されちゃった。

くそ……やっぱり実際口にするのは恥ずかしい。

喉に詰め物が、詰まったみたいに声にならない。

「その………ただいま………」

でも…あの子たちに想いはちゃんと伝えろと偉そうな口を叩いた身だ。

自分もちゃんと伝えなきゃならない。

ウルトラ一族にとっては、それほど長くなくとも…

俺たちにとっては……

そして俺は…眼前の父に対し、初めて、今まで使ってきた呼び方……『親父』ではなく。

「とう……さん……」

と呼んだ。

ちきしょう、恥ずかしくて、ほっぺたが熱くなってきやがった。あ……体まで…熱が回ってきやがる……そのためセブンの異変に気付けなかった。

「うあっ！…！」

こうして抱きつかれるまで……は……

「ゼロ……」

しかもかなり強めで抱き締められる。

「よかった……よくぞ無事に戻ってきてくれた……ゼロ……」

「父さん……気持ちは分かんだけども……」

「さすが……俺の子だな……」

「みんな見て……があああっああああああー！…！」

『父さん』と呼ばれたことはよほど嬉しかったのか、公衆の面前でのセブンのハグは暫く続き。

ゼロにとってはこっ恥ずかしい思い出のページに認定されるの

であった。

「それでだがゼロ、朗報があつてきた」

「まさか…アリシアのことか？」

「ああ、ウルトラクリニック78本局からの連絡によれば、彼女の魂の完全定着が完了し、バイタルも安定期に入ったそうだ」

アリシア・テスタロッサ。

20年前、ウルトラマンが存在する世界とは違う次元世界群の一つの世界にある惑星、ミットチルダ。

魔力が主なエネルギー源としている世界で、ある駆動炉の起動実験の暴走事故で帰らぬ人となった女の子。

ゼロは、正確には違つのだが、向うの世界の地球で出会つた彼女の妹と言える少女との約束で、帰省の際、蘇生させるために彼女を同伴させたのである。

死んだ人間は生き返らない。

人に限らず、生物界での大前提とも言える常識。

だがウルトラ一族は、完全ではないにしろ、それを覆した技術を手に入れた。

『命を固形化する蘇生技術』

今はウルトラ兄弟の一因となってる科学者であったウルトラマンによって齎された。

この技術によって、宇宙警備隊員の殉職率は格段に下がった。

かのウルトラ兄弟たちもこの技術のお陰で、何度も死の淵から生還を果たしていた。

無論、100%蘇生が可能という訳ではないし、ウルトラ一族以外の種族、生命体にこの技術を使うのはアリシアが初めてであった。

「ただ……意識が覚醒するまではもう少しかかるそうだが、目覚めてからのリハビリも含めば……」

「そうとん拍子には行かねえよ……？ 生き返らせる方法？ があるだけでも、『奇跡』なんだからさ……」

実は以前のゼロにとって、『奇跡』とは呪いにも等しい言葉だった。

地球人である実の母の代わりに育ててくれたもう一人の母から、父は殉職したと聞かされ…その母も辺境の星系への調査とやらで消息不明になった。

そう……この時ゼロは幼いながらも、自分たち家族は『奇跡』を

受けるに値しない無価値な存在だと思い込んでしまった。

誰もそんなこと、彼に言ったわけではなかったのに……

せめて、自分たちが出来損ないな存在じゃない、両親の汚名を返上させたい……その為に……もっと力が欲しい……誰にも文句を言わせない力が欲しい。

それが、力と強さへの渴望となって、ゼロは光の国の中でも、稀代の反抗児へと歪んでいつてしまった。

その後彼が何をし、どうやって更生し、現在に至ったのかは、存じだろつ。

今振り返って見ると、よく更生できたよなと反芻してしまうほど、自分でもあの頃の自分はひどいもんだつたと言える。

けど過去に戻ってわざわざ訂正するなんて気は無い。

あの頃の先に現在と直線で繋がっているのだから。

そんな自分が……あの子……フェイトを……

正反対なようで過去の自分と似たもの同士であったフェイト。

誰とも本当の意味で心を開けず……閉ざしてばかりで、危うく闇の底に落ちそうな危うさを持った『寂しい目をした女の子』

初めて会った時から、彼女にシンパシーを感じると同時に、この子の力になりたい。

この子の笑顔が見たいって気持ちになった。

今でもあの子のことと思うと……自分の言葉では表現できない何か
が、自分の中でざわめいて、湧きあがってくる。

？私も……ゼロの光になりたい……？

別れ際に、泣きべそかいた彼女に抱きつかれて、あんなこと言わ
れて以来、特に……謙虚だ。

言うておくが……嫌な気はしない……むしろ安心して……暖かみ
があつて……心地良い。

それはひよつとしてあれではと知識では知っている……ある感情
を思い浮かべるが、生憎……今まで……グれているか、戦つてばか
りの人生だったので、経験なんか皆無な自分では、残念ながら断定
はできなかつた。

でもきつと……もつと『諸星勇夜』という人間として……生きて
いたい。

その原動力の源になっているのがこれなんだと……断言できるの
は確かだつた。

第1話 Every day in a home country

(後書き)

やっとジャンボット出せた……

例のごとく本作独自設定も多いです。

24話でのヘビーアームズな戦いぶりもそれに関連しています。

今回は顔見せ程度ですが、彼の過去もクローズアップさせていきます。

あとゼロはフェイトが自分に何かしら好意を持っていることは、感づいています。ゼロ自身は彼女への思いはまだ自覚ありません。

典型的な朴念仁にしくなかつた作者のわがままでこうなりました。

グレンはもう少しお待ちを。

第2話 学校の怪談？

朝焼けの光に照らされた、海と山に囲まれたとある地方都市。

海鳴市。

そこのとある住宅街では、このあたりに住むとある一家、高町一家の兄妹＋ が早朝ジョギングのコースとなっていた。

「光兄……もうちょっとペース落として……」

黒いリボンでツインテールで纏めた栗色の髪が虹の曲線を描き。学校から支給されている物であろう体操着を着て、ルビーの球体を携えたペンダントを首にかけ、息が荒れ気味な小5くらいの年齢の少女。

高町なのは。

高町家の末っ子で、私立聖称大付属小に通う小学生で、かつ小5に進級と同時に…… 『魔法使い』をデビューしてしまったちょっと前までは普通（？）の女の子だ。

なぜはてなを付けたかというと、彼女の精神ないめんと彼女の魔法使いとしての活躍を知ってしまえば、絶対普通じゃないと突っ込まれてしまうからだ。

「その言葉……これで何回目ですかなのは？、これ以上の譲歩はありませんよ」

「うっ……いじわる……」

アニメ声と表せる独特の高音な声色と、丁寧な口調で、なのはの要望を却下したのは高町 光^{ミチ}。聖称大付属中に通う、実は地球での普通から逸脱した存在である彼女の兄だ。

実は彼、地球人ではない。

一応地球人の血を受け継いでいるが、地球とは違う世界から来た、本来の姿は50m近くある異世界の巨人。ウルトラマンゼロが結成した警備チーム『ウルティメイトフォースゼロ』の一員。

『ミラーナイト』である。

「（ユーノ君も疲れてるでしょ？）」

「（僕はまだ大丈夫だけど）」

「（はぁ……はぁ……ユーノ君も凄いよね）」

なのは魔法で、俗に言うテレパシー（正式にはこれは念話と呼ぶのだが）を使って地面を駆けているフェレットに話かけた。

このフェレット君こそ、良く言うとなのはが魔法使いになった切欠、悪く言うと元凶な、魔法少女もので言えばマスコットキャラに当たる魔導師。

ユーノ・スクライア。

その正体は、遺跡発掘を生業とする部族の少年で、13歳の男子、列記とした人間だ。

それがどうしてこんなフェレットの姿になっているか気になる人は、本編を見てほしい。

遺跡発掘を行っているだけあって体力は有り、フェレットの姿でありながら息一つも乱さずに並走している。

『（マスター、ここは踏ん張りどころです、これも魔導師として必要な訓練ですから）』

「（うん……頑張る……）」

なのは首にぶら下がっているルビーの球体が点滅しながら声を発して、なのはを励ますのは、デバイスと呼称される魔法の杖。

レイジングハートだ。

彼らがどういう経緯で会って、今に至っているのか気になる方々には申し訳ないが、今ここは番外編。

本編を既に見ており、舞台となるこの世界の理を知識として持っていると踏んだ上で話を進める。

やはり、なのはを朝練につき合わせたのは正解でしたね。

なのはの要望を却下しながら、兄の光は独白した。

妹のなのはは、魔法使い　　魔導師としては有り余る才能の持ち主だ。

魔導師になってから、まだ二カ月しかたっていないが、あくまで非殺傷を前提とするが、戦闘面に関して言えば並ぶ者がそうそういないという成長振り。

おまけに魔法で作られた空間内とは言え、街一つを消し飛ばしてしまう鬼畜振り。

なんと恐ろしい妹でしょう。

けどこうして見れば分かるとおり、体力面で言えば、はっきり言って年相応未満、音痴レベルだ。

こうして三人で朝走る習慣になってから、そこそこの日が経つが、御覧の有様。

世の家電が、電気がなければ唯の箱なように、なのはも魔法が無ければ肉体面なら普通の女の子だ。

彼がこうして、妹を朝練につき合わせているのには訳がある。

それは『なのはが魔法の才能に溢れすぎている』からだ。

魔導師としてのなのはを、戦闘スタイルのカテゴリーに分類させる。

それは『砲撃魔導師』。

歩く砲台だと言ってもいい。

飛行などのスピードは、大したことは無いが、魔力量と防御力は桁違いに高い。

敵の攻撃を、持ち前の防御力で耐えきり、大火力の攻撃魔法で、完膚なきまでに相手を落とす。

可愛らしい外見に反して、漢（かんと書いて）の中の漢（おとこと呼ぶ）を正面突破して突き進む戦法であった。

が、これははっきり言って体に大きな負担をかける。

いくら魔法で身体を強化しても、多大な魔力を行使して敵の攻撃を受け止め、極太の魔力流を発射させる行為はそれだけ体にな？多大な負担？をかける。

そしてなのはは、まだ幼く、肉体も成長途中である。

非殺傷設定は、相手を傷つけにくくするだけであり、ダメージそのものを与えないわけではない。

BB弾だって、人 特に子供に向ければ、向けられた本人にとってそれは脅威であり、凶器だ。

魔法もその脅威となるエネルギーの一つでしかない。

なのはの『砲撃』もしかり。

そしてその砲撃は使用者にも反動という形で、襲ってくる。子供であろうと。

何が言いたいのかというのと、なのはの戦い方は、はっきり言ってるのは自身を蝕む諸刃の剣なのだ。

今はたいして問題なくても、なのはが今後も、今の戦闘スタイルで魔導師を続けていけば、確実に体に罅を入れることになる。

最悪……ウルトラマンゼロの父、ウルトラセブンがかつて経験したようなことが起こらないとも限らない。

自らの才能の為に、身を滅ぼすなんて本末転倒なことになるのは、血縁は無いとは言え、兄である光としては避けたかった。

その対策の一環がこの朝練。

なのはが、今後も魔法使いを続けるか……それ以外の道に選ぶのは分からないが、成長を阻害させないよう無理の無い程度で、かつ手厳しく、自身の戦闘スタイルと魔力に耐えられる体作りを今から行った方が得策であるのは確かだ。

しかし……こうして息を切らしながら妹を見ていると、やはりまだあどけない女の子ですね。

魔導師としては、もういくらか貫禄が着いてしまいましたが、なのはだって、まだ魔法使いとして駆け出しだった初々しい時期が、ちゃんとありはしましたが。

地面を駆けながら、光の意識は数か月前に遡った。

なのはが魔道師になりかけで、今では親友で当時はロストロギアを巡る競争相手だったフェイト・テスタロッサと、光の友、諸星勇夜ことウルトラマンゼロと邂逅する数日前。

その日の高町兄妹とフェレットは、夜の聖称大付属小学校の校門前にいた。

「ユーノ君……ホントにここなの？」

「間違いないよ……ジュエルシールドは、この学校の敷地内だ……」

「どうにかして結界内に取り込めませんか？校舎内にあるとしたら、とてもまともに戦えたものではありません」

「やってみます、封時結界！」

ユーノ足元に魔法陣が敷かれ、周囲の空間の色合いが変わっていき。

外にいながら、建物の中にいると感ずる独特の感覚で、結界の中にいることが直ぐに分かった。

「なんとか、ジュエルシールドも結界内に取り込めました」

「感謝します、これで心おきなく戦える……それよりは、いつまで僕にしがみついているおつもりですか？」

「だって……」

校門の前に来てからというもの、このメンツの中で確実にジュエルシードを封印できる高町なのは、木にしがみつくコアラみたいな様相で、体を震わせながら兄にべったりと張り付いていた。

理由は単純だ。

夜の学校が怖いのである。

日が上がっているか沈んでいるかの違い、すなわち……暗闇が蔓延んでいるだけで、いつもの馴染みある場所も、恐怖を湧きあがらせる異空間となる。

「まったく……ジュエルシードの異相体に毅然と立ち向かった魔法使いとは、到底思えませんね……」

「それとこれとは別だよ……あの時だって……光兄がいたからどうにかなったし……」

『マスター……もう覚悟を決めましょう、一人で行くわけでは無いのですから、バリアジャケットを展開して下さい』

「うん……」

レイジングハートからの励ましもあって、なのははようやく光から離れ。

愛機を手に取り。

「レイジングハート、SET・UP」

『Standby lady set up』

桜色の光に包まれたなのは、聖称の制服をモデルにレイジングハートが形成したバリアジャケットを身に纏い。

左手にはデバイスモードになったレイジングハートが握られる。

「さあ行きましょう！」

「はい！」

「光兄！ユーノ君！待つてよ！！」

光は校門を苦も無く飛び上がって入り、ユーノは門の隙間から校内に侵入。

『Flier, fin』

そのどちらの芸当もできないなのは、飛行魔法でどうにか付いていった。

どうにか勇気を振り絞って、校舎内に入ったたのはであったが、暗く細長い廊下、ドアのガラス越しに見える教室、不気味に照らしている非常灯を前に、表情を強張らせ、足が震えている辺り、相当無理をしているのが窺える。

ただ、恐怖を抱くこと自体は悪くない。

人として、生物として、それは普通で正しい反応。
だからこそ、危険を危険だと判断でき、そこから困難に立ち向かう勇気が生まれる。

光もユーノも、その恐怖を乗り越えた経験が生きてるからこそ、この場で冷静にいられるのだ。

光は騎士として何度も実戦を経験し、ユーノも落盤事故などの危険が多い発掘作業でメンタルが鍛えられている。

「光よ、床の闇を照らしたまえ、ライトボール」

対してまだ理性を保つのに手一杯な妹の現状を察した光は、呪文を唱え、掌から、魔力スフィアが出現、周囲を照らした。

その灯りは、廊下の最果ての壁まで届いていた。

「ありがとう、光兄」

ライトボールは、一種の人工太陽で暗闇を照らす魔法だ。

本来なら魔法で、視力の明度を上げることができのだが、生憎駆け出しのなのは、そこまでできない。

で、ブラコンな兄貴が妹のフォローのためだけに、独自にこの魔法を編み出してしまった。

妹愛、恐るべしである。

ちなみに二次元人の血を受け継ぐ光は、魔法に頼らずとも、暗闇でも見える。

その上、御神の剣士は、常人以上に気配で、人の存在を識別でき

対して異相体は天地を裂く唸り声で。

超人と怪人の肉体がぶつかり合い、組み合いになり、両者はそのままの体勢でフェンスに向かって走り、突き破って校庭に落下した。

突き破られたフェンスに駆け寄ったのはとユーノは、校庭で肉弾戦を展開しているミラーナイトと異相体。

「レイジングハートお願い!!」

『all right・Canon mode』

なのはの呼びかけに応じ、レイジングハートは、槍先が音叉に見える砲撃形態、キャノンモードに変形させた。

校庭で繰り広げられている演武は、一見すると互角だ。

一撃一撃が強力だが、荒くて大ぶりの異相体の体裁きにミラーナイトは空回りさせている。

だがミラーナイトには決定打となる大技が使えないハンデがある。

相手は大火力の爆弾を抱えているに等しいのだ。

そしてミラーナイトには、その爆弾の起爆装置を解除する手段を持っていない。

それができるのは、デバイスを持っているのはだけなのだ。

「僕がバインドで動きを封じるから、その時まで待つて!」

「うん」

ユーノの足元に魔法陣が敷かれる

「たえなる響き……光となりて……許されざるものを、封印の輪に
!」

地球人がイメージするのはかなりかけ離れた、ミットチルダの魔法だが、行使するのに呪文が必要なのは一緒だ。

ユーノの意図を理解したミラーナイトは、飛びあがりながら両足からの蹴りを連打。

蹴った勢いで距離をとりつつ。

「ミラーナイフ!」

指先から光の手裏剣ミラーナイフを異相体の足元に放つ。

「チェーンバインド!!」

それにより生じた隙を突き、ユーノ右手に翳された魔法陣から、魔力でできた鎖が解き放たれ、異相体を縛りつけ、体勢を崩させて仰向けに倒させた。

「ミラーウェイト!」

体勢を立て直そうとしつつ、バインドを解こうとする異相体は、光の十字剣ミラーウェイトから発せられる重力波で断念させられた。

二重の物理的な圧迫感にまともに身動きどころか立つこともでき

「はあ~~~~もうへとへと……」

なのははすっかり疲労困憊な様子でベンチにへばりついている。

光は飲料水を買って行ってる最中。

『以前より走破距離は長くなってます、成果は出ていますよ』

「でもみんなに比べたらまだまだだよ、ユーノ君だってフェレットの体なのに息乱してないんだよ」

「まあ発掘で、嫌でも鍛えられたからね……」

苦笑しつつ謙遜するユーノ。

以前から運動音痴は自覚していたが、魔法を得たせいで、あやうく感覚麻痺になりところだった。

超人とは言え魔法が無くても戦えるよう、修練を積んだ勇夜や兄の光のお陰でなのはは自分がいかに井の中の蛙だったか思い知らされた。

結局自分は、魔法が無ければ、電気が通ってない家電。

それに気づけただけでも良かったかな……慢心させないよう気遣ってくれる光兄には感謝しないとね

息を乱し、体操着の袖を腕まくりをして、チャックを下すなのは。

「//////////……………(ゴクっ)」

ユーノはその様を見て思わずドキっとしてしまった。

疲労で頬を火照らせて、息が荒れ気味なのは、まだ幼いのに妙に艶めかしい。

フェレット体型でのあおり視点が、それに補正と拍車をかける。

駄目だ！何考えてるんだ！

そりゃ……多少異性に気になるお年頃だけど……

でも……なのはにそんな嫌らしい目で見てどーする……

なんとか……心を落ち着かせて……精神統一……

「（ユーノ……）」

「（ビクっ！……な、なんでしょうか？光さん）」

しようとするときいきなり光から念話で話かけられた。

「（気のせいなら良いのですが……今なのは変な目で見ていますんでしたか？）」

ギクっ！……！

あながち間違っただけ無かった。

どう答えていいものか……

「（別にいいのですよ……ユーノも微妙なお年頃です、異性が気になるもの仕方ないでしょう）」

そうは言ってるが、声色は低めで淡々、なのに蛇に睨まれたようなプレッシャーを感じるのは何故でしょう？

「（ですが……もう少し上手く隠して下さいね……僕から見ればもるバレでしたので……）」

「（はい……善処します……）」

「（よろしい……）」

「ユーノ君大丈夫！？ひどい汗だけど……」

「あ……なんか……今頃になって疲れが出てきたみたい……」

苦笑するしかなかった。

高町家の末っ子には、普段は物腰穏やかな好漢だが、妹のためならヤンデレにもなるスーパーシスコンな騎士さんがいる。

彼女に惚れてしまった方々は要注意するように。

第2話 学校の怪談？（後書き）

「どこが怪談やねん！」って？
だから「？」をつけたんです。

気が付いた方もいると思いますが、冒頭の文はミラーマンの主題歌の歌詞から取りました。

ユ一ノ君だって思春期です。

淫獣どうのこうの以前、に気になっちゃうことは気になっちゃうお歳なんです。

第3話 フェイトの日常

暦は西暦なら6月の中頃。

L級巡航艦船。

アースラ。

その艦内のとある一室…いや…一郭か。

その一郭に、中高クラスの体育館並の広く、周りは白く無機質なスペースがある。

この艦に所属する魔道師たちが使う訓練スペースだ。

今ここでは、無骨な魔法の杖を持ち、漆黒のバリアジャケットを羽織っている共通項があり、白銀の空間を縦横無尽に飛び廻る魔道師の少女と少年が、模擬戦という名の演武を行っている。

少年の方はクロノ・ハラオウン。

アースラに所属する、齢15で執務官の座についた優秀な魔道師。

15にしては、顔つきも体つきも歳相応より幼く、ようやく最近変声期の兆候が出始めたばかりであることは、本人も気にしているのでこの辺りにしておく。

そして金髪赤眼の少女の名は、フェイト・テストロッサ。

約1か月前、危うく、太陽系第三惑星地球が存在する宇宙。

「今日はこのあたりにしておこう、しかし……これは直すのに時間がかかりそうだな……」

さつきまでシンプルで凹凸の少なかつた壁面には罅が入り、床は痛々しく抉られていた。

原因は無論、彼女のサンダースマツシャー。

「ごめんね……力入れすぎちゃった……」

「いや……僕が相殺しきれなかっただけだよ」

とクロノのブレイズキャノンがぶつかり合い、その際生じた衝撃で、結界で補強されていたにもかかわらずこの様になったわけで。

「でも……これを直すお金って税金から使われてるんでしょ、私……被告人だから荷が重くなるよ……」

「子どもがそこまで気を遣わなくてもいい」

「むう……クロノだってまだそんなに歳とってないじゃない」

『子ども』って単語に反応してふくれっ面になるフェイト……
かわいい……はあ!……いかん!……(せき)×10

「それを言われると元も子もないんだが……」

どちらも……まあ無理にでも精神を成長せざるを得なかつた境遇を考慮しても、正直に言つと言動が老けてる。

まあフェイトの方は、ここ最近は感情豊かな女の子になってきてはいる。

実際見惚れてたは……………本当だ。

「お疲れさん、差し入れだよ」

「アルフ、ありがとう」

そこにアルフが、差し入れこと飲料水を引っ提げて、入室してきた。

ともかく、これがPT事件以降のフェイトの日常の一端である。

今日もクロノとの模擬戦で、またまたシミレーションルームを盛大に壊してしまったわたし……………フェイト・テスタロッサ。

もうかれこれ6回中計6回、損壊させてます。

局長だったら始末書ものです。

せっかくクロノが多忙な執務官の仕事の合間をぬって付きあってくれているのに……………(ため息)……………

自分も……………裁判へ出頭する合間を縫って、アルフとトレーニングをやったりしてます。

え？女の子らしくないって？

女の子らしくなくて……………悪かったですね……………

どうして日頃からこんなことをこなしてるかと言つと……………

理由は……二つあって……

日に日に、自分でもはっきりと分かるんです……感じるんです。

前より……自分の魔力量が増えてること。

今でもAAAクラスの量があるのに……将来的には……Sクラス以上になると言われました。

はっきり言いますと、自分の内なかにある魔法ちからが……怖いんです。

もう……母さんからの『お願い』を言われるがままに行くことし
かできなかった頃みたいに、魔法を使えない。

だって……勇夜から教えられて……身をもって思い知ったから。

魔法だって……兵器で……武器で……人を殺せてしまう道具だか
ら……

実際、自分となのはが戦った結界内の街は、自分たちの一騎撃ち
で大規模災害が起きたかのように壊滅。

非殺傷設定にしておいてです。

勇夜が、どこがクリーンな力だって突っぱねるのも無理ないし、
結局安全装置も気休めにしかない。

自分も……あれだけの破壊ができるものが、体の中に巡っていると
思うと……

でも……こんなこと言うと矛盾してるとか、言われるかもしれないけど……それでも……あの人の力になりたいから。

自分が一人じゃないってことも、

なのはっていう、最初の？友達？ができたことも、

たとえば自分が誰かのコピーでも……自分は『フェイト・テストロツ
サ』だって胸を張って言えるも……

諸星勇夜……ゼロⅡユウヤ・ヴェアリストー。

光の戦士   ウルトラマンゼロ。

あの人に出会えたから……

だから守りたい……彼の背中を守ってあげたい。

孤独な戦いを続けてるゼロの、支えになりたい。

それが何より……以前は誰かの願いを叶えるだけの木偶の坊だった……自分自身に……芽生えた願い……

これが、二つ目の理由です。

あ……ごめんなさい！

暗い話ばかりしちゃって……わたしってば……（どよーん）

あ……そっか、これは私の近況報告が趣旨なんだよね。

なら、明るい話をすればいいんだ。

じゃあ行きます！ってあれあれ？……何を？（オロオロ）

私ってばまた……（カーーーーーーン）

とまあ空回りしているフェイトは置いて、彼女はトレーニングや模擬戦以外に日課としてしていることがある。

先ほどまで鉄頭と模擬戦をしていたフェイトは、アースラ内では支給されたホテルクラスの広さを持つ個室に真っ先に駆け込み、汗を流すためのシャワーを浴びた後、フェイト宛てに届けられた小包を開封。

中に入っていたディスクを、眩しいまでの笑顔、喜びを隠せない様子で手にとつて、さっそく再生機を作動させてディスクをセットさせた。

『こんにちはフェイトちゃん』

地球製より薄型で高性能、3D常備のテレビ画面に、栗色の髪の毛の子が映る。

「こんにちは、なのは…」

これは録画映像で意味がないことであるのは理解しているが、それでもフェイトは挨拶を返した。

高町なのは

P.T事件、ロストログアジュエルシードを巡って、当初は戦うことになりながらも、今はフェイトの最初の友達になった地球人の少女。

事件以来、二人はこうしたビデオメールで交流をとっている。一昔のもので例えれば、交換日記のようなものだろう。

裁判に出頭中の被告人であるフェイトは局員以外の人間と直に接触するのは、基本認められていない。

一応、しかるべき手続きを踏めれば、短時間ではあるが面談は可能なおだが、与えられた時間に反してその手続きの手順は非常に多く面倒で、実際やる人間は少ない。

ビデオメールはそんなフェイトの環境下でも、画面と時間越しにえも友達と面と向き合える手段だった。

ちなみにどうして地球の映像記録規格を再生できるのかと言うと、異世界間交流が盛んな管理世界では普通に常備されてる機能らしい。

二人が、ビデオメール越しで話題になるのはといとめのないことだ。

なのはの親友、アリサ、すずかのことか（時には三人一緒にメッセージを送ることもある）。

まあ端的に言つと、近況報告つてやつだ。

今日は日頃からなのはの兄、光の指導下で行っている朝練に関する話題だった。

なのはによると、普段は妹には甘いのが、トレーニングに関しては溺愛振り抑え目になるとのこと。

勇夜とは管理世界に来る前からの親友でもある光とは、余り話す機会は無かった。

でも、義妹いもうとのなのはをそれだけ愛してることはちゃんと分かる。

時にそれが行き過ぎて、暴走することもあるとのこと、主に被害者はユーノ、まあ愛する妹が異世界から来た人にいきなり呼び出されてロストロギアの異相体を戦つてと頼まれるようなことが起きれば……複雑な気持ちになるのは無理ない。

なんとなくそういうちょっと過保護なところはアルフと似ているとフェイトは思った。

自分の場合は、それだけ自身が無理をして、危なっかしかったつてこともあるのだが。

ともあれ、こうしてなのはと顔を合わせられるだけでも嬉しい。

本当になのはと……そして勇夜　　ゼロには感謝している。

ゼロと会っていないければ、自分はなのはの言葉の意味に気付けなかったし。

なのはと会えなければ、どうしてゼロがあそこまで自分を助けて、手を差し伸べてくれるのかずっと分からないまま。

多分……母とも分かりあえず……母の言葉に絶望し、自分の生まれ方を呪って生きていたかもしれない。

だから……怖いと思う魔法とも……贖罪も含めた……辛いことも悲しいことも待っている人生これからと向き合える。

力が沸いてくる。

ありがとうだけでは語りつくせない。

なのは声を聞きながら、自分の光になってくれた人たちに想いを馳せていたその時。

電子音が部屋に響く。

フェイトは一時停止を押して、机に供えられてるタッチパネルを押した。

「はい、フェイトです」

『フェイトちゃん』

通話の相手は、アースラクルーの一人でクロノの補佐官をしているエイミィだった。

「どづしたのエイミィ?」

『フェイトちゃんに面会希望する人が来てね』

「面会?」

前述の通り、管理世界では被告人との面会はかなり制限がつく。

そしてその面倒な手続きを経てアースラに訪問したのは意外な人物だった。

次回に続く

第4話 Motherhood

エイミーからの通信で、自分に面会希望する人が来ていると聞いて、アースラ艦内にある談話室に向かって廊下を歩くフェイトとアルフ。

「面会希望者って誰なんだろう？」

思わず口にするほど気になった。

実を言うと、知ってる人もいるだろうが、フェイトが今まで生きてきたこの5年（6年はアリシアの分の記憶なので）、まともな人と関わった経験が無い。

異性と初めてまともに会話したのも勇夜が最初だし、ようやく最近、知り合い以上の関係になった人の数が手で数えられる数以上になった。

というわけでフェイトには面会される人にまったく心遣いは無かった。

「アルフ、聞いている？」

「聞いているんだけど……エイミーから見てもお楽しみって、口止めされてるからダククメ」

「えくくく今聞かせてよ」

「もうすぐその人に会えんだからさ、いいだろ？」

「それは……そうだけど」

仲の良い、親友にも姉妹にも見える会話劇を繰り広げながら二人、アルフは嬉しかった。

主をこう笑いあいながら、他愛無い会話ができることに、リニスがいなくなってから、失って久しかったものが戻ってきたことに。

そして談話室のドアの前に着いた。

「失礼します」

自動ドアが開き、中に入る二人。

備え付けられているソファーには向かい合った形で座る女性二人と立っている少年一人。

少年は勿論鉄頭もといクロノで女性一人はアースラ艦長で提督のリンディ・ハラウン。

もう一人は……案の定フェイトにとって見知らぬ女性だった。

深い青色の髪と緑色の瞳。

見た目は20代半ばで、リンディに負けず劣らずの美人である。

私服を着ている辺り、局員じゃなさそうだ。

でも……初めて会うのに……なぜか……既知感と言つべきか……どこかで感じたことがあるようなオーラがその人から漂っていた。

「紹介するわフェイトさん、勇夜君がこちらの世界でお世話になった」

「勇夜、その単語を聞いてフェイトははっとした。じゃあ、この人が……」

「クイント・ナカジマです、はじめまして、フェイトちゃん」

いくらウルトラマンでも、予備知識の無い未知の世界で一人で暮らすことは簡単ではない。

ましてやゼロは、ウルトラ兄妹のように他の惑星で駐在する経験が無く、次元振の影響で変身能力を一時失い、人間の肉体も4歳児まで退行してしまえば尚のこと。

彼が11年間、無事に過ごせたのは、引き取り手になってくれたナカジマ夫妻の存在があればこそだ。

ゼロにとっても、その境遇ゆえに、心の奥底、潜在的な願望として抱えていた。

『家族と過ごす団欒』

それを実体験させてくれたひ人達には、実の家族のように慕っている。

そんな彼の、この世界での母が、クイント・ナカジマその人であった。
ミッシャルダ

リンディは面会時間終了時には知らせのために戻ると言って部屋を後にした。

「その……ふえ……ふえふえフェイトです、フェイト…テストロールサ……こ、こここの子は使い魔のアアアルフ」

「落ち着いてフェイトちゃん…そう固くならないで」

「そうだよフェイト……ちょっと気張りすぎだよ……」

「はう……すみません」

前回に引き続き、こんな醜態を晒してしまったフェイト。

恥ずかしさで涙目である

でも可愛いから許す、若干笑いのギャングなラジオの時の人っぽくなってる気がするが……まあいっか。

「改めてはじめまして……諸星勇夜の義母ははであります」

「あ……どうも……」

年上からかしまった態度で挨拶されたので少し戸惑いながら応じた。

「（若い……）」

フェイトもアルフも同じタイミングで内心呟く。

リンディも相当年齢不詳な若々しさだが、この人も負けず劣らずだ。

勇夜の愛慕であるウルティメイトブレスレットことリンクから、ナカジマ家のことは聞いており、勇夜の下に彼と同じく養子だが二い

人義妹がいることも聞いていた。

一応三人の子どもを持つ母親だと言うのに、この美貌と若さは何だ？

そのくせ、母親特有のオーラというか包容力が感じられる。

そう言えば、なのはと光のお母さんも二人に負けずに若い。

どうして……自分たちが会う母方はこんなに若い人ばかりなんだろう？

とも思ったが……なんとなく永遠の謎にした方が良い気がしたので考えるのをやめた。

「その……今日はどんな要件であたしらに？」

それより気になるのは、地球の国家群よりもハードルが高くめんどい被告人との面会をこの人がしに来たかだ。

「そうね」

最初の挨拶より砕けた声色でクイントは

「息子の将来のお嫁さんの視察かしらね」

さりげなくとんでもないことを口にした。

ブウウウウウウウウウー—————

—————！！！！！！

どっかのハードやハーフな探偵さんばりに、テーブルに予め出されていたお茶を飲んでいたフェイトは女の子にも拘わらず嘔き出した。

幸い二人にはかけられていない。

「@;.;&#(##&)(&#)?*
+Z(&#*(&#)··#/////
//////////!!!!!!」

「フェイト！落ち着いて！もう何がなんだか…」

耳までゆでダコな紅潮つふりなフェイトは、弁解しているつもり
のようだが、テンパって呂律が回らず意味不明の単語を連発してい
た。

様相で何を言いたいのかは把握はできても、言っている単語を訳
すのは至難の技レベル以上である。

多分、この場に勇夜は入れば、ほぼ同様のリアクションをとって
いることだろう。

「ごめんなさいね、フェイトちゃんには刺激が強すぎたわね」

「冗談きついよあなた……」

そう言いつつ、パニックってるフェイトを落ち着かせようとさす
るアルフは母親そのもの。

この二人を見ていると、たまにどっちが保護者か分からなくなる
時がある。

「まあ、ほんとはあの子があれ程あなた入れ込んでたから、どんな
子なのか気になったってところかしらね」

「はあ………」

こうは言ったが、実は二人が夫婦になることには満更ではなかつ
たりする。

血は繋がらないとは言え   あの息子にしてこの親あり
であった。

「しかし……よく面会の申請を許可しましたね艦長」

艦内の廊下を歩きながらクロノが切り出す。

くどいようだが、管理世界での面会は非常に面倒。

申請する方も申請される方も……どちらにとっても。

あれだけ苦労してこぎつけて最高1時間よりちょっと多いくらい
の実利とリスクの釣り合わなさに誰もやりたがらないのだ。

「まあ……クイントさんと意見が一致したって、ところかしらね」

この場が実現したのは、リンディとクイントが面識があったこと
が最大の要因。

息子たちが同じ学び舎で学生をし、同級生であったことと、「と
ある一件」を通じて二人は知り合った。

お互い管理局員で、務め先も本局と地上本部と部署も違うので、
そう滅多には会えなかったが、定期的にメールのやり取りをしたり、
息子の学校行事でとった休暇をとっては近況報告をしながら一種の
ご近所トークで盛り上がるのが通例になっていた。

勇夜が既にリンディに正体を明かしたことはクイントに報告して
いたので、その辺は問題ない。

強いて言うなら二人とも勇夜^{ゼロ}のことを秘匿^{せいろく}し、報告^{ほうこく}・連絡^{れんらく}・相談^{そうだん}を怠^{おそ}っていたことか……………

だがウルトラマンを兵器として利用させたくなければ、リスクを背負^せう覚悟でこうするしかなかった。

そういう邪な考えを持つ連中が、組織にも、世界にも存在していることは二人とも局員として痛感させられていたから……………

「その『意見』と言うのはやはり……………」

「フェイトさんの、養子のことだね」

「勇夜^{ゼロ}って、その子どもに戻^{かえ}ったばかりの頃はとうだったんですか？」

「そうねえ……………事情も事情だし……………反抗期もとつくの昔に過ぎてたから、手のかからない子だったわね」

それもそうだろう。

既に3000年前後は生きているゼロ。

地球人、ミットチルダ人に換算しても20歳前後つてとこだ。

昔は不良上等、その何が悪い、的な感じで周りに八つ当たり、やさぐれてはいたそうだが、こちら（ミットチルダ）に飛ばされる

頃にはかなり丸くなっていたのこと。

精神なかみがほぼ大人なので、風呂は一人で入り、一人で寝れて、当時
夫妻は共働きで家を空けることも多かったが、文句一つ言わず、む
しろ前からの日課である自主レンと、リンクが講師をする魔法授業
でやり過ごしていた。

それを遅しいと思う一方で、寂しさがナカジマ夫妻にはあった。

実はクイントは武装局員で、局内でも有数の武道派ではあったが、
体質的に子どもが生まれにくい体だった。

無論二人はそれを承知で結婚した。

夫で勇夜たちの義父ちちであるゲンヤも、管理世界では別段珍しく無
いが、魔力をまったく持たないので魔法は使えない。

それだけ二人は長短含めた、互いの人柄に惹かれ添い遂げた。
三人の子がいながら、今でもおしどり夫婦なのはその証拠だ。

だが承知していたと言っても、子宝に恵まれない現状が歯がゆく、
寂しいものだった。

そんな時、偶然二人の家に迷い込んだ勇夜セロは、正に天の恵みで、
コウノトリが運んできた子宝であった。

だからたとえ、彼が妙に大人びていようと、魔力とは違う力をク
イントが感じようとそれでも二人は彼の保護責任者となった。

「でもね……一度だけ……見た目相応な子どもっぼく、甘えてくれた
ことがあってね」

ゴクリ……

思わずこの主人と使い魔は即答で喰いつきそうになる。
気になる異性の幼少時代を聞けるとならば、反応しやくなるのは
……分からないわけではないけど。

「勇夜が、光の巨人だってことは知ってるわよね？」

「はい」

「その日、勇夜は私たちに自分の正体を明かしてくれたの」

ナカジマ家に引き取られた当初の勇夜は、日頃の威勢はどこ行った？と言いたくなるほどよそよそしかった。

自分に向けられる愛情に何も感じなかった訳ではない。
むしろ嬉しかった。

血縁は無いとしても、ゼロが内心ずっと求めてやまなかった

『家庭の温もり』

それを直に感じられる。
嬉しくないわけではない。
二人には感謝している。

だからこそ……

勇夜が『ウルトラマン』であることをナカジマ夫妻にカミングアウトしたその夜。

クイントは思い切って、勇夜に『一緒に寝ないか？と尋ねてみた。

というか無理やりにも彼を自分の寝床に引きいれた。まあこうでもしないと了承されなかつただろう。

クイント自身、男を惑わすには十分な美貌とスタイル持ちで、年頃の男性な勇夜には今まで戦った強敵より、精神を追い詰める難敵であるからにして。

「でも恥ずかしかったのか、背中を向けて寝てたわね」

そんな勇夜を、クイントは背中から抱きしめた。

抵抗されるかな？と思ったが、体温が上がる以外は、彼女の温もりを素直に受け入れたようだ。

しばらくすると、抱擁で心が解れたのか、彼は……

「怖いんだ……」

その一言を皮切りに切り出した。

「義母^{かあ}さんもおやつさんも……好きだよ……一緒に暮らせて……嬉しいよ……だから……」

怖い……ウルトラマンとしての自分が……ウルトラマンの力が……二人からもたらしてくれる家庭^{しあわせ}を壊してしまうのが怖い。

自分の存在が、二人に……最悪の仇で返すが怖い。

そして自分自身が………怖い。

身を震わせながらの……告白だった。

以前勇夜がギンガに言ったように。

彼の廻りは良くも悪くもスーパーマンだらけだった。

巨人と呼ばれる体躯も、空を飛べることも、光線を放つことも、当たり前なことだった。

だがウルトラマンの力を失い……人間としてミットチルダで暮らすことで思い知らされてしまった。

自分が……どれだけ破壊的な力を持っていたかを……

暖かさを感じるほどに……深さが増す不安。
故郷に帰れないのではと感じてしまう恐れ。

今いる次元世界群に故郷が存在しない事実が拍車をかける。
リンクが自我を持たなかったら、早くも心が折れていたかもしれない。

その彼の告白を受け止めなら、クイントは正面から勇夜を抱きしめた。

ただ……そつと……

「ここも……勇夜の故郷で……良いんだよ……」

それだけで充分だった。

最初こそ頬を真っ赤にして戸惑っていたが………そのまま眠りについてしまう以降の彼は、クイントに抱きついたまま離さなかった。

見た目の歳相応の、子どもっぽく。

この時リンクから『よく創作で、体が幼児化すると精神も幼くなる設定がありますが、それと似た現象です』とフォローを入れてくれた。

そしてただ……目に涙を溜めながら……一言……

「母さん……」

とても儚く……幼い……声だった。

「後にも先にも……あの子が甘えてくれたのはそれっきりだったけどね」

ただ、重荷になっていたものが取れたのか、それ以来夫妻に気兼ねなく接せるようになった。

中身が大人なゆえに、懸念された学校生活も友人ができて充実したものだっただ。

せっかく子どもに戻ったのなら、徹底的に楽しもうとクイントの

抱擁で思考がプラス向きになったのもある。

クロノと一悶着が……あるにはあったが、それがクイントとリン
デイの交流のきっかけになったのが疑いようがない。

それ+なのはたちからどん引きされた大甘緑茶を飲む習慣も確立
されてしまったが……それは置いてこよう。

「あの……クイントさんは怖くなかったんですか？……勇夜が、
ウルトラマンだって……」

「確かに彼が怖い力を持つてるのは事実よ、でもそれは魔導師も同
じだし、怖いものなんて世の中にいくらでもあるでしょ」

怖いという概念が世の中にあるから、人の感情の一つに恐怖があ
る。

ただ普段は誰もが気付かな振りをして平静をなんとか装うとする
だけ。

「でも……それをその人がどんな人か、知ろうとしない言い訳にして
はいけないわ……異世界と繋がりを持つとうとする管理わたしたち局の場合は尚
更……」
「……………」

胸にずしりと響いた………ついこの間まで、自分たち親子
はクイントさんの言う『言い訳』をして、逃げていたから。

『血を繋がっているだけじゃ家族って言わねえんだよ！』

フェイトは、かつて自分に語りかけた勇夜の言葉を思い出した。

血縁はある……

と言うのは聞こえはいいが、見方を変えればそれだけしかない。

端的に言えば、無色な事実で記号。

それだけでは結局それ以上の関係になれないのだ。

そして……勇夜　　ゼロ……ウルトラマンも……やっぱり人
なんだ。

そう思うと……どこか親近感が湧いてきた。

前々から、彼のことになると心身ともに火照って仕方ないのだが、
どこか……遠い人のような感覚があったから。

「ああそれとね……フェイトちゃんに会いに来たのは……もうひとつ理由があつてね」

「はい……」

クイントさんの目が真剣みを増した。

「ゼロ(あの)の……いせつと義妹になってみない」

「ふえ……」

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

一瞬思考が……………

『嫌いに……………なれるわけねえよ……………』

『フェイトだつて……………いる』

あの時の勇夜から言われたみたい……………真っ白になった。

パタリ……………

「フェイト!?!」

数分後……………

今度は思考停止していたフェイトは、ようやく平常時に戻った。よく数分で回復できたものである。

「どうにか落ち着いた？」
「はい…………どうにか…………」

まあ一応、以前からフェイト自身にとって避けられないものであったから。

本局の医療施設で入院しているプレシアからある日の通信越しの面会で、プレシアから養子に入ることを勧められた。

やはり、どう弁明しようと、プレシアは重罪に値する罪を負った。

まだ幼くても、虐待を受けていたとしても、フェイトはそんな母に手を貸した共犯者。

社会的に辛い立場だ。

さらにプレシアは、病魔で生い先が長くない身。

フェイトと、ゼロと一緒に帰ってくるであろうアリスアが、身寄りの無い二人ぼっちになる。

そんな彼女たちには、引き取り手になってくれる人たちが必要となる。

プレシアはそれを見越して娘のフェイトに提案した。

「それで…………その…………」

年相応より賢いフェイトには、理屈自体は理解している。

でも……………そう簡単に『テストアロッサ性』を捨てることはできな

かった。

ようやく『親子』になれたことが、彼女の迷いを加速させる。

「そう無理に結論を急がせることはないわ、今日は単にフェイトちゃんたちの里親立候補にただだから、フェイトちゃんにはまず乗り越えなきゃいけないものがあるでしょ」

今の……って……

確か、別れ際に勇夜から……

「……………」

「フェイト？」

「フェイトちゃん？」

「あ……いえ……なんか……勇夜に似たようなことを言われたことがあって」

「……………似ているか……………」

それを聞いたクイントは少し驚いた様子だったが、そこから神妙な面持ちになって、独白のように呟いた。

「クイントさん？」

「実わね……あの子によると、似ているらしいの……勇夜……ゼロを生んでくれた地球人のお母さんに」

さらにクイントの話では、勇夜と同じミドルネームを持っているとのこと

彼女の両親は名前をつける際、かなり白熱とした議論を重ね。
平行線のまま埒があかなかったため、両方つけてしまおうという
経緯から現在の形になったらしい。

そして……なんと運命のいたずらか……その名は……

「クイント……？ アンヌ？ ……ナカジマ」

そして生みの母の名は……

諸星アンヌ、旧姓……友里^{ゆり}アンヌ。

フェイトははっとした。

「ひょっとしたら、私とあちらのアンヌさんって、物語でよくある
平行世界の『同一だけど異なる』存在なのかもね」

クイントに会ってからずっと胸に引っかかりを感じていた既知感^{デジャヴ}
に……

別れ際に……自分に髪留めを渡してくれた……髪を下したあの時
の勇夜に……そっくりだった。

そして分かった。

クイントさんたちナカジマ家の人達も、ゼロの原動力になってい

るって。

だから…今でもゼロは、私たちのこと、信じられるんだ。

フェイトは、心の内に、温かいものがこみ上げてくるのを……ま
まま感じるのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0918w/>

ウルトラマンゼロ The Another Tale LYRICAL FORCE ZERO

2011年10月19日06時10分発行